

新版 沙漠の国

多田 利雄

とき 2000年（平成12年）7月25日（火）

ところ フジタ本社会議室

ききて 武石礼司、福田安志、水島多喜男

大使は中東での御経験が豊富でいらっしゃるので、アラビア石油の問題だけではなく、戦前戦後のいろいろな話を織り交ぜて話していただけるとありがたいです。

多田 私は外務省に、戦前外務省留学生制度というのがありまして、その制度で昭和15年(1940年)外務省に入り、同年エジプトのカイロ大学に留学したものです。

1940年のあのころは、飛行機による旅行というものはなかったものですから、船便により日本郵船の船で神戸をその年の4月に出帆し、エジプトまで1ヶ月近くかかる予定で出発したのですが、途中シンガポールに着きましたときに突然シンガポール総領事館の人がやってきました、「この船は、欧州の情勢がかなり緊迫化してきたので、地中海経由の航路を変更し、ケープタウン経由でイギリス行きとなった。あなたはボンベイで下船し、陸路カイロに赴くべし」との連絡があった次第です。私はインドへ行ってから船でイラクのバスラまで赴き、バスラ経由の陸路で、イラク、シリア、レバノンに出て、それからカイロに行くと、何とか行けるのではないかということで、ボンベイで下船したのです。

結局、陸路鉄道でカラチに赴き、それから先はカラチで選択することとなり、カラチに着いたら、カラチの総領事が東京に連絡してくれ、そしてカラチ・バスラ間をイギリスのインペリアル・エアウエイズ（後のBOACで、イギリスからシドニーまで、飛行艇による空路は5日間です。夜は、その頃の旅客機は一切飛びませんので、じっと宿屋に泊まっているというので5日間かかったものです）を利用することとなりました。

その飛行機に乗られて。

多田 カラチから、インペリアル・エアウエイズの飛行艇、フライング・ボートに乗りまして、イラクのバスラへ、バスラからバグダード鉄道に乗ってバグダードへ赴きました。またバグダードでも、シリア・レバノンの通過ビザはいつ出るか分かりはしないとの隅郭公使の判断で、バグダード・カイロ間も再びイギリスのフライング・ボートに乗って、日本を4月に出発して4ヶ月間かかり、8月1日にカイロにやっと着いたという長い旅でした。

それでカイロ大学に入られて……。

多田 そこで留学したわけです。その後ドンドンと戦争が激化してきました、北アフリカにドイツのロンメル元帥が率いる戦車団が入ってきて、リビアからエジプトのアレキサンドリアに迫り、エルアラメーンの戦いとなったものです。その間にエジプトの当時のファルク国王とドイツ側との間に秘密の取引が行われたものです。その間、当時の参謀総長であったアジズ・アル・マスリ・パシャルが、ひそかにロンメル元帥との連絡に国王専用機で飛ぼうとしたのですが、イギリス軍がそれをキャッチして、途中で不時着、参謀総長がひそかに帰国したような事件や、ドイツ軍のアラビア語ができる将校が、イギリス軍の服装で戦線を突破し、カイロに潜入したような経緯もあったわけです。

結局、ドイツのロンメルの戦車隊はアメリカ製のシャーマン戦車がエジプト戦場に登場することにより、敗退することとなったわけです。

その当時のエジプトには、日本人はどれくらい、何人くらい住んでいましたでしょう。

多田 わずかです。大使館員以外には商社の方が4社、日綿、東棉、それから三井物産、三菱商事ですね。それ以外に当時、今のJETROの前身で、商品館というのがありました。

大使館関係者以外にはアズハル回教大学に来ていた回教徒が3名いました。これら日本人回教徒の方々は陸軍からの支援を受けて来ていた人たちです。この点につきましては、ちょっと話が飛びます、私が『沙漠の国』という本を中東調査会から出しますので詳細はその本で御承知願います。

その当時の日本の商社の方で、エジプトに滞在されていた方というのはどういうものを扱っておられましたか。

多田 普通の繊維雑貨製品を日本から輸出するものでした。当時、日本はまだ機械や耐久消費財などを輸出する時代ではありませんでした。

その当時のエジプトの方の対日感情というのはどんなものだったのでしょうか。

多田 当時のエジプトの一般大衆は日本の実情を知るべくもない時代だったので、漠然たるアジアの先進国としての認識が対日感情だったものです。只イギリスの支配から脱して真の独立を達成したいとの意識が強く、前述のとおり当時のファルク国王はドイツのロンメル将軍と連絡をとり、一部の軍人を動かし工作した動きがみられたものです。

そうしますと、多田さんがカイロに滞在しているときには、やはりその後のナセル革命に将来つながっていくような動きみたいなものが感じられたのですか？

多田 そうですね。イギリスの事実上の支配下のままでは最早や収まらないという雰囲気はありました。

その後イスタンブールに行かれていましたね。

多田 戦争の終わりまでおりました。戦前の中東アラブ地域との関係は、1938年に代々木に回教寺院ができたわけですが、そのときイエメンやサウディ・アラビアからその回教寺院の開所式にそれぞれお祝いの使節が来たわけです。その一人としてサウディ・アラビアより国王の顧問であったハーフェツ・ワハバ氏(駐英大使)が来訪されました。同顧問より「サウディ・アラビアは日本に対して石油利権を与える用意がある」旨の内々の申し入れがあったものです。

然しながら、その真意がよく分からないものですから、直ちにカイロ駐在の横山公使に指示し、それから東京から当時の商工省の石油担当の三土技師をカ

イロに派遣し、横山公使、同技師、通訳として中野書記官が同行し、ひそかにサウディ・アラビアを訪問させて交渉をしたのですけれども、すでにアメリカ側などはその動きを察して、それを押さえにかかってきました。

その当時のことを書いたあるイギリスの石油雑誌がありますけれども、「枢軸国が石油にまで動き出した」という見出しで、「枢軸国が中東石油利権を侵略せんと工作したので、それを押さえ込んだ」と書いてありました。従ってこの一連の動きは話だけで終わってしまったものです。

それから20年たってからアラビア石油の利権交渉がほぼ同じ場所、二つの利権区域、リヤドの郊外と、中立地帯沖を対象として行われたものです。

その1938年のときに、すでにリヤド近くと中立地帯の鉱区があるという話が出てきたわけですか。

多田 もうすでに当時、特に米国石油会社はサウディ・アラビア周辺の資源調査をほぼ完了していたと推察されます。

そのときのサウディ・アラビア側で、日本にそういう話を持ってきたということの背景のようなもの、サウディ側の考えのようなものというのを、多田さんはどのようにご覧になられるでしょうか。

多田 いや、どうもそのへんはよく分からないのですけれども、アジアの先進工業国である日本と、何らかの形で結びたいという希望があったのだろうと思います。

戦後の中東諸国との関係についてはいかがですか？

多田 戦後の話はご承知のように、1952年5月にサンフランシスコ講話条約が結ばれまして、日本は再び独立国として各国とノーマルな関係を持つこととなった。その年の暮れ、12月に中東地域のエジプトに最初の日本の公館が設置されることとなった。戦後初代の公使として与謝野公使が赴任された。そして、翌1953年1月に日本政府の経済使節団が戦後初めて、日本郵船の浅尾社長を団長とし、JETROの顧問をやっていた駒村さんを副団長とし、通産から新井綿業課長、大蔵省からは堀課長、それから外務省から経済6課、後のイギリス大使になった当時の平原課長、それに私も中東地域を担当していましたので参加し、商社代表3社、日本輸出入銀行の調査役で構成された、政府のミッションです。

結構大きなミッションですね。

多田　そうです。それに新聞記者が二人ほど随行し、10人ちょっとのミッションでしたカイロを皮きりに戦後のいわゆる経済関係の正常化というか、ノーマリゼーション、それから戦争中にあった差別関税の撤廃、当該地域各国との経済関係の強化を図る、地ならし的なミッションでして、先ずエジプトを訪問し、続いてレバノン、シリア、イラク、イラン、トルコ、6カ国を訪問したものです。具体的には、シリア、レバノン両国はフランスの委任統治時代以来かけられていた対日差別関税を直ちに撤廃することに応じ、エジプトも永年一部日本製品にかけていた差別関税を快く撤廃する態度を示す等、非常に温かくわれわれを迎え入れてくれたものです。

そのようにして約1ヶ月かかってこれらの国を回ってきたわけですが、突然奇妙な事件が起きました。その事件の一つは、サウディ・アラビアが突如として日本の輸入を停止し、停止した理由が分からないこと。それからもう一つは、これは事件といえば事件ですが、イランのモサディック政権が行ったアングロ・イラニアン・オイル・カンパニーの国有化措置に関連して、出光興産がひそかにその原油買い付け交渉を始めたわけです。イギリス側はこのイラン側の措置を国際司法裁判所に提訴していましたから、日本政府は表向きは、出光の買い付け問題には関知しない姿勢をとっていたものですが、我々使節団がイランを訪問したときは、そのような状況下で大変な歓迎を受けたわけです。

我々のミッションがテヘランを去るときに、日章丸がたまたま入港してきて、石油を持ち帰ったものです。従って、ミッションが次ぎの訪問先たるトルコのイスタンブールに着いたときは、飛行場に外国の新聞記者が押しかけてきて、「使節団が交渉して決めたんだらう」と、そうではないと一番困ったのは団長の浅尾さんです。「いや、われわれは何もそのようなことをやっていない。通常の貿易、経済関係のノーマリゼーションのためにやってきたミッションだ」と応答されたのですが、「裏で交渉したのではないか」というようなロイターその他、外人記者に多数囲まれて大変だったもので、そんな事件がありました。

もう一つのサウディ・アラビアの事件の後始末は、なぜ日本からの輸入を止めたのかという理由が、誰に聞いてもよく分からないので、ミッションが一応

解散しまして、平原課長と私2人だけが残り、与謝野公使に随行してサウディ・アラビアを訪問することとなった次第です。当時のサウディ・アラビアは銀貨を通貨とし紙幣のない国でして、色々と問題がありました。

そうですね。

多田 与謝野公使一行は大歓迎を受け、大蔵大臣より、「日本に対する輸入停止は本日を持って解除する」と言われたが、理由がよく分からない。回答を待った。大蔵次官の説明では「日本の経済ミッションが回っているという新聞報道があった。その報道に対し、国王が『日本のミッションは、わが国にはいつ来るんだ』との御下問があった。『わが国には来る予定はありません』と返答申し上げたら、国王より『それはおかしい』と御不満の意向が示されたので、国王のご意向を解して、日本に対する意志表示をするために輸入停止を行ったものであるが、貴公使がわざわざ来てくださったので一件落着ということです」とのことであった。

日本に対する期待の表明ですか。

多田 「せめて自国にはちゃんと来るだろう」と思ったときに、来なかったという期待感でしょう。

当時日本は戦争に負けて、まだその復興の途上にあっただけだったと思うんですけども、そのサウディ・アラビアとか、イラン、エジプトの人々の当時の日本に対する見方というのは、どのようなものだったのでしょうか。いまでも非常に工業の発展した国というイメージだと思います。

多田 日本は大国と戦って、負けたにしろ、アジアの解放、インドネシアとか、そのような欧米の植民地の解放に貢献したというのは、アラブ人も理解しており、「よくやったではないか、それでちゃんと戦後復興しており、われわれもこれから共々にいろいろなことをやろうではないか」という気持ちがあったということで、シリア、レバノン、イラクのどこの国でも、いたるところで非常に日本に対し期待感を持っている印象でした。

このような事件があっただけでも、日本との関係強化ということについては、どこの国でもある程度の期待を持っていたものですから、いわゆる50年代の中東と日本との関係というのは、まさに日本は輸出ドライブをかけて、ありとあらゆる輸出振興を図った時代でした。カイロには直ちにトレード・セ

ンターが設けられ、ダマスカスの国際見本市にも参加し、見本市船をペルシャ湾に送り込むとか、ありとあらゆる貿易振興のための努力をしたわけです。

しかし50年の全般、ほとんど50年はやはり日本の対中東輸出というものはまだだまでして、年間中東地域全体で2億ドル程度の輸出でしたのですが、ドンドン急速に増えていって、もう70年代になると、100億ドル近い輸出規模になって来たわけです。それは60年代の日本の輸出総額の70%は湾岸地域に対するものでした。湾岸の石油の輸出が増えるに連れて日本からの輸入も増えてきた格好です。その頃にアラビア石油の話が出てきたのです。

お願いいたします。

多田 戦前エジプトのアレキサンドリア商品館、いまのJETROですか、の館長をしておりました深水さんという人が使っていたエジプト人がいたわけです。産油国でドンドン人材が必要なものですから、エジプト、シリア、レバノン人が産油国に雇われていったものです。アレキサンドリアの深水さんの商品館の使用人もその一人であったわけです。深水さんという方は商品館を辞めた後、奥さんがイタリー人であったものですから、ローマに永住することとなったものです。かつての使用人であったエジプト人の男が、サウディ・アラビアで石油の利権を日本に与えたいという話があるがどうだろうか、ということをしてローマにもって来たわけです。この石油利権の話が、たまたまイタリア旅行中であった山下さんの息子さんの耳に入ったわけです。

水野惣平さんですね。

多田 水野惣平さんを通じて日本へ持ち込まれてきたのです。それから話が始まったわけです。

一番最初に話を持ってきたアラブの方は、サウディの何れかの意向を受けて伝えて来たのですか？ それは何年頃の話ですか？

多田 1956年の12月です。この石油利権の話は、当時エジプト大使であった土田大使が兼任大使として翌57年1月サウディに信任状を国王に奉呈した際、国王より「ぜひ交渉をしたい」と確認をいただいた次第です。その後2月に山下社長が元の外務大臣の岡崎さんと一緒にサウディ・アラビアを訪問し国王と会談し、直ちに交渉に入る準備がなされたものです。

私は、このときにアラビア石油が成功したのは、当時サウディ・アラビアに

は石油省というものがなく、財政経済省が石油問題を扱っていたわけですが、大臣の下にその後のサウディの初代石油大臣になったアブドッラ・タリキ石油局長が責任的地位にあり、同局長が大臣に就任した際、西側の石油業界が「赤い石油大臣」と呼んだ如くナショナリスト的な人物でしたが、私は、彼が非常に日本に好意的だったからだと判断しています。タリキ局長は、そのとき「リヤド周辺の利権を取っても、パイプ・ラインを引っ張って、それは大変お金のかかる話である。それよりは中立地帯の沖合いの海底油田のほうがはるかに可能性が高い」と、それとなくアドバイスしたのではないかと推測するものです。

中立地帯はサウディ・アラビアとクウェイト両国が平等な権利を有する地域ですから、両国と交渉しなければなりません。厄介な問題はクウェイト側にありました。当時クウェイトは未だ独立国ではなく、イギリスの保護国としての地位にありました。従って、クウェイトと交渉する以前にイギリスと話し合いをする必要がありました。

サウディ側との交渉は、57年6月よりスルル・サッバーン財政経済大臣並びにアブドッラ・タリキ石油局長との間に行われ、57年12月に妥結し、利権供与にサウディ側は合意したため、引き続きクウェイトとの交渉に入ったものです。

クウェイトとの交渉は何月からでしょうか。

多田 いま申し上げましたように、サウディとの交渉が57年12月にまとまったので、クウェイトとの交渉は、翌58年2月より、先ず英国側を代表するケント代表との交渉に入り、次の通り幾多の紆余曲折を経て5ヶ月後の7月にクウェイト側とも利権協定の合意をみたものです。

その頃は、多田さんは中東のほうに勤務されて、クウェイトとだいぶ関係が深かったというふうに話を伺っておりますが……。

多田 クウェイトとの交渉に当たって非常に日本側に対して好意的な役割を果たしてくれた方は、クウェイト首長の弟であり、クウェイト開発庁長官、クウェイト・オイル・タンカー・カンパニー社長で、クウェイトの経済界の実力者であるファハド殿下で、この方が非常に貢献してくれたことは、山下社長自身も、その後私にも、「あの人のお陰です」といろいろ述べておられました。この間のいきさつについては、すでにお会いになる約束の林元アラビア石油常務にお尋ねになるのが適切かと考えられます。

多田さんがそのファハド殿下に最初にお会いになったのは何年のことですか？

多田 1955年です。私は当時在シリア公使館の一等書記官をしていました。その頃東京の本省から「このごろペルシャ湾岸地域に日本の輸出が非常に伸びているが、実情が分からないから、現地に出張して、実情を調査しろ」という指令が来たのです。

クウェイトに行かれて、どのようでしたか？

多田 本省からの現地出張の指示は7月頃来ましたから、7月頃に行ったら現地はもう50度の温度で、クウェイトの役人の多くは夏休みで不在の可能性が高いと判断した。従って、東京には秋になってから出張しますと返事をしたのです。10月に2週間クウェイトに初めて出張しました。まずシリアの飛行場を出発したときに、飛行機に乗りましたら、大部分の荷物は全部野菜果物の食い物らしく、その匂いが客室いっぱいに充満し、お客さんがその片すみに乗っているという状態でした。

ダマスカスからクウェイト行きの飛行機ですか？

多田 クウェイトへ行く飛行機です。乗客は僅か3、4名でした。飛行機の中で会ったイギリス人は「タクシーもないから、自分の会社の車が迎えに来るからホテルまで送ってあげる」というのです。非常に親切な人だった。かろうじてホテルまでなんとかたどり着いたわけです。ホテルのマネージャーのレバノン人に、この国で貿易、経済関係を調べるのに誰が一番適当であるか、と尋ねてみたところ、首長の弟で経済企画庁長官であるファハド殿下以外にはない、とのことであった。

偶然にもファハド殿下が直接合ってくれるとのことであったので、経済企画庁に同殿下を訪問することとなった。殿下はちょうど会議中だったのですが、立ちあがって、「日本人が始めて来た。第2次大戦中に連合国を相手にして戦った日本人の見本だ」と、ユーモアを交えて同席者に紹介するところがあった。ファハド殿下は、貴方は幸いアラビア語を解するから、ゆっくりと晩飯を食べながら話したい、とのことで、早速同夜殿下のサルシアのパレスに招待され懇談する機会を得た。その時わが国が領事館を作る交渉をして、その可能性を打診しました。殿下は、アメリカは石油利権を持っているので、在留アメリカ人

を保護するという事で領事館の設置を認めているが、石油利権を持たない日本に認めることとなれば、近隣のアラブ諸国の申し入れを拒否することは出来ない。いわんやイラクが領事館を作るといったらば、「ノー」と言えない、と応答し、将来日本が石油の利権でも得るようなときが来たら、その時にはそれで、アラビア語で言ういわゆる「インシャラー」という「神の思し召し」があったら、というところで話が終わってしまった。

その時にファハド殿下は「自分は、今年、アメリカの石油会社の招待でアメリカに行くので、帰りにはぜひ日本を見たいし、われわれ王族は誰も日本に行ったことがない。だからぜひ日本訪問は実現したい。そのときはよろしくね」とのことであった。

当時は、クウェイトもすでに石油が出るようになって、ずいぶん町が賑わっているというような様子だったのでしょうか？

多田 52年からすでに経済開発7ヵ年計画というのが実施に入っていて、その当時年間予算が3億ドルで、経済開発庁の長官であるファハド殿下が国造りを始めていたものです。

私がクウェイトを訪問後1ヶ月半ぐらい経ってから使いの者が旅券を持ってビザ取得のため現れました。当時日本の制度によれば、クウェイトはイギリスの保護領であるため、クウェイト人にビザを与えるのは、本省の許可なくしては与えられないことになっていたものです。この規則に反し、ビザを出してしまったので、一応領事部からきついお叱りを受けた顛末もありました。

11月に入って突如として、サンフランシスコから電報が来まして、「私はプレジデント、ウエルソン号に乗って、本日日本に向けてサンフランシスコを発った」との連絡があったわけです。直ちにその旨ホノルルの総領事に連絡して、総領事にその船へ行ってもらって、日程などを聞いたりした次第です。

船がホノルルに立ち寄ったときに会って、ということですね。

多田 ええ、そうです。当時日本の外務省には、中近東局や、中近東課というのはまだ何もできていなくて、中近東書記官室というものが、欧亜局の中に設けられ、上川さんが、初代の中近東書記官になっていたわけです。上川さんが横浜の港に殿下を出迎えてくれましたが、そこでまた一事件が起きました。ファハド殿下はアメリカで買ってきた車をそのまま乗って東京へ行きたいと

いったのです。(笑い)「それはできないんです」といったけれども、「なぜ」というわけ、「いや、そうおっしゃらずに、滞在中は車を提供しますから、どうぞこの車を使ってください」といってようやく納得させて東京へお連れしたという話です。

クウェイトとアラビア石油の利権交渉が始まったときには、多田さんがかなり大きな役割を果たすことになったと伺っておりますが.....。

多田 サウディ・アラビアとの交渉がまとまり、クウェイトとの交渉が始まった。私が当時アラビア石油交渉の通訳を引き受けていた林さんより仄聞したところによれば、山下社長一行が交渉のためクウェイトの飛行場に到着した際、空港には一行のためキャデラックが10台位並び、すべてVIP扱いであった趣で、ファハド殿下は訪日の際東京での厚遇に感謝していた。山下社長はよく私(林)にファハド殿下がいなかったら、交渉はこんなに順調に進展しなかったろうと常に強調しておられた趣である。

当時のクウェイトはまだイギリスの支配下にありましたね。

多田 独立は62年で、独立前ですから。

アラビア石油がクウェイトで利権を交渉する過程で、イギリス側の意向というのは、どれくらい作用したのでしょうか。

多田 もしイギリス側が全くやる気がなかったならば、検討中との態度をとり、少なくとも引き伸ばし邪魔をすることは可能であったと判断されます。

ということは、日本のアラビア石油に中立地帯の利権を与えるということに関しては、イギリスも内々認めていたというようなことになるのでしょうか。

多田 サウディ・アラビア側の意向が明らかとなり、ファハド殿下等のクウェイト側の意向も次第に判然としてきたので、イギリス側もゴー・サインを出したわけです。その結果、58年7月に合意したわけです。

当時のペルシャ湾とか、サウディ・アラビアの石油開発というのは、たとえばアメリカ系の石油会社がやっていたり、イギリス系の石油会社がやっていたりしますけれども、当時の日本というのは、戦争に負けて、今日のように復興しておらず、強い経済力を持っているわけではありません。当時の場合、アメリカにしてもイギリスにしても、世界のスーパー・パワーで非常に強大な

存在であったわけですが、そこに日本が進出し、特に日本の石油会社が利権を手に入れることができたという背景を、どのようにお考えになりますか？

多田 1960年OPECが設置される2年前の58年にアラビア石油の中立地帯進出が実現したのは、当時の国際情勢の変革に大きく影響されたことがあります。具体的には産油国における資源ナショナリズムの高揚に因り、欧米のメジャー石油会社ばかりに利権を与えるべきではないとの意向が強くなり、特にメジャー石油会社が「赤い石油大臣」と呼ぶようになった、後のサウディ・アラビアのアブドゥラ・タリキ石油大臣(アラビア石油との交渉当時は石油局長)や前述のとおりクウェイトのファハド殿下の登場もあり、アラビア石油はチャンスに恵まれたものです。

なるほど。

多田 ファハド殿下は、アラビア石油の話が出る以前、前述のとおり1956年訪日され、その後すぐ日本の佐世保重工業に石油タンカーを発注され、引き続きタンカー会社の発注の大部分、計21隻も日本より買い付けたとのこと。結論としましては、産油国も教育水準が上がったり、近代的な政治組織とか、行政組織も出来上がってきたでしょうけれども、いまだに、人とのつながりというものを大事にしなければいけないと思います。

話が前後しますが、アラビア石油が中東に進出した60年代より中東諸国、特にペルシャ湾岸産油国を中心とする、これら地域諸国と日本との経済、貿易関係は急速に拡大し、わが国の輸出商品構成も軽工業品輸出よりプラント、鉄鋼、セメント等の重化学工業品に比重が移り、70年代にはわが国のプラント輸出総額の20%台を中東市場が占めるに至った。

発電所、製油所、海水蒸留プラント等ですね。

多田 その頃から、同時にわが国との経済協力関係の強化ということに対し、産油国を中心に熱心に動いてきたものです。60年にサウディ・アラビアのスルタン交通大臣が、第2回アジア鉄道会議に出席するために来日されましたが、突如として日本と経済技術協力協定を結びたいとの申し出がありました。結局小坂外務大臣とスルタン殿下との交換公文で一件落着となった次第です。その交換公文に従って、日本から、石油化学と自動電話網計画、それから鉄鉱

資源の開発の夫々の調査団が派遣され、石油化学分野では、ジェッダとリヤドの、二つの製油所がわが国のものになり、自動電話網、衛星通信地上局の建設計画も、それなりにちゃんと実ったものです。ただ、調査団派遣の過程で先方より鉄道の改善計画に対する申し出もありました。

リヤド、タンマン間の鉄道ですね。

多田 この鉄道の改善計画は、国鉄より技術者を派遣することで協力した。1971年ファイサル国王が初めて訪日され、正式に経済技術協力協定の締結の申し入れがありました。しかし、協定が実現したのは5年後、私は公使として在サウディ大使館に在勤した1975年でした。

確か公使になって行かれたのが1975年でした。

多田 この協定交渉のため赴任したものです。交渉の相手は後に石油大臣に就任されたナーゼル経済企画大臣でした。ナーゼル大臣は開口一番「日本側は5年前に経済技術協力協定の締結を申し入れても今日まで実現しておらない。実は、ファイサル国王訪日後、日本より主として資料集めのため数々の調査チームが来られたが、協定の裏付けとなる協力の具体的プロポーザルは一向に出されておらない。欧米はさすがわが国の事情をよく知っているためか、プロポーザルを次々に出している。何等具体性のない協力関係を協定として紙に書いてどうなる」と強い不満の意向を示された。

私より「そう言わないで下さい。欧米と日本とは夫々アプローチの仕方の違いもあり、大臣が言われるようなことで結論を出しては何事も進まないでしょう」と反論したところ、大臣より「日本が今迄計画し若干の話し合いを行っていることは断片的に自分の耳にも入っているが、現段階でのプロジェクトの話し合いの進展状況を一覧表的なものにして早急に提示願いたい」との提案があった。大臣の提案を受けて案件の現状調査が実施され、通産省より経済協力部長以下数名の方がサウディ・アラビアにも来訪され、約3ヶ月を経て現状をとりまとめた一覧表的なレポートを作成し、大臣に提示した。このわが方提案の内容は、製造工業分野では石油化学、メタノール、スパイラル・パイプ製造工業等で、次いで建設事業の合弁事業10社(王宮、リヤド大学のキャンパス建設等が具体化した)の設置、技術協力分野でもリヤド電子高校、職業訓練センター、電気通信、地図作成等専門家派遣を中心とする具体的プロジェクト約30

件より成るものでした。

ナーゼル大臣も満足され、協定締結に合意されるに至り、翌76年1月河本通産大臣を迎え第1回の閣僚レベルの会議が開催されるに至ったものです。

ちょっと話が飛んでしまうのですが、50年代に日本がプラント輸出などができなかった時代に、最初の資金協力がエジプトに対し行われ、当時の日本の弱体なプラント輸出を促進する上で非常に大きな効果を上げたいわゆる「高碕借款」と呼ばれる3,000万ドルの借款があげられます。

円借款ということになるわけですか？

多田 いや、円借款ではないけれども、いわゆる開発プロジェクトに対する延払い枠の供与で、わが国が中東地域に許与した信用供与の第1号で、これによりエジプトに対する日本の紡績、砂糖等のプラント輸出が具体化したものです。

この延払い枠の設定は55年インドネシアのバンドンで開催された非同盟諸国会議に出席していた高崎経済企画庁長官がエジプトのナセル大統領と会ったことが機縁となり、エジプトの開発計画を支援するため1957年供出した資金協力であった。次いで56年スエズ運河の拡張工事に進出し、イランの電気通信プロジェクトにも進出する等、中東地域との経済関係の強化が次第に実現したものです。

最近のアラビア石油との交渉を有利に進めようということで、わが国の中東地域の経済協力がサウディ・アラビアに偏っていた、ということがあったのではないかと見受けられますけれども、アラビア石油の交渉がうまく行かなかったことでサウディとの関係が、むしろ逆に正常に向くというか、投資に向けたプロジェクトがあればやりましょうということで、かなり自由に話ができる関係ができたのではないかと考えられます。交渉がうまく行かなかったことは、残念は残念ですけれども、それによってこの先サウディとの関係を考えたとき、かなりいろいろな分野で話が自由にできる関係が生まれると思うのですが、いかがでしょうか。

多田 アラビア石油の問題、特に交渉の経緯については私は何も聞いていないので、コメントできないですけれども、「会社の後には日本政府が付いているんだ、従ってアラビア石油は特別な会社なんだ」という印象を必要以上に

植え付けたとすれば、それを裏づけすることがちゃんとあれば、それなりにいいのですけれども、そうじゃなかったら結局相互の信頼関係を失ってしまいます。その結果、話し合いは進展しないことになります。

それよりは、むしろ、アラビア石油の実情と立場を率直に話しながら、サウディ側の意向を打診しつつトータルに結論を見い出してゆくことが大事であると判断されます。

前述のとおり、1973年10月の第4次中東戦争を契機に発生した第1次石油危機によって、産油国と石油会社の力関係は大きな変革をもたらしており、サウディ・アラビアにおいても、アメリカ系4社の子会社であるARAMCOとの関係についてもサウディ政府に74年100%事業参加について基本的な合意に達している。

この基本的な合意の成立は米国側石油会社のサウディ・アラビアでの操業を全面的に否定するものではなく、引き続き政府所有の原油生産施設の管理、運営を米国側石油会社に手数料を支払い任せるものである。従って技術、経営の面では事実上米国側石油会社との関係の継続を意味するものである。

このようなサウディ側と米国ARAMCO側との関係の変革よりみても、当然のことながらアラビア石油が旧利権協定をそのまま延長することは明らかに望むべくもないものです。サウディ政府側と米国ARAMCO側の実利を探索しての交渉の背景をみれば、アラビア石油問題も結論が出たとみるのは早計に失するものと判断されます。

先刻お話のあった通り、アラビア石油の存在というのは、日本とサウディ、日本と湾岸との外交関係を考えるときにずいぶん大きかったのだという気がいたしますけれども。

多田 前述の通り、1950年代後半の日本と中東諸国との関係に画期的な進展をもたらしたのが、正にアラビア石油の油田開発事業であり、特に戦後復興途上にあつたわが国が官民をあげて支援し成功した事業であつたものです。従ってまだ結末になつたわけではないにしろ、その方向に近づいているということは残念ですね。

多田さんは、一番最初のアラビア石油の交渉の頃からずっとクウェイト、サウディもご存知で、それからクウェイトに大使館の開設準備のよう

なことで行かれて、それからサウディ・アラビアにも勤務されておられます。この間のずうっと向こうの方の日本に対する見方というものを肌で感じられる機会も多かったのではないかと思うのですが、向こうの人が日本を見る目というのは、1950年代、1960年代、1970年代から現在にかけて変わってきているでしょうか、それとも共通するようなものがあるのでしょうか。

多田 50年代はわが国にとって戦後復興の時代であり、なりふり構わず輸出振興のため努力していた時代であった。従ってアラビア湾岸諸国に対する関心も未だ遠い存在の感があった。

日本と湾岸産油諸国との本格的な関係は、前述のとおり58年のアラビア石油の油田開発事業に始まり、68年にアブダビ石油と中東石油、69年にカタール石油、70年には合同石油等湾岸地域の油田開発分野での進出の時代であった。このことは56年のスエズ戦争などで石油安定確保の必要性からの動きでもあったことは申すまでもない。

60年代の湾岸産油首長諸国の中で経済発展の先頭を切ったのは、62年に真先に独立したクウェイトで、アラビア湾岸建設ブームの中心となり、次いでアブダビ、カタール、オマーンが産油国の仲間入りをし、60年代後半に所謂石油開発ブームが地域全般に拡大するに至ったもので、次第に政府、民間広範囲に亘る協力関係が要望される段階となったものです。

中東諸国、特に湾岸産油国の政府は、国造りが異常なスピードで進められてきた関係もあり、色々な分野での投資や技術協力の話し合いを進める段階で、当然わが方の民間企業と話し合いを進めるべき交渉内容のものであっても、政府側を巻き込み、国対国で交渉しようとする傾向があり、政府ベース、民間ベース云々の問題はわが国の実情を理解しないことからくる公私混同の場合も多く、先方に理解させる話し合いの努力が求められる場合にしばしば直面するケースもありました。政府、民間何れのベースの交渉にしる、今日でも先方を納得させるような配慮が望まれるものです。

サウディ・アラビアのナーゼル大臣との交渉を例にあげられ、これらの地域との交渉には人的交流、人とのつながりを重視し、且つ、具体的プロポーザルを叩き台にして話し合いを進める重要性を強調されましたが、今日この二つの面を同時並行的に進め実りある結果を出すことは、なかなか至難な業

ではないかと考えられますが、私たちが今後これをうまくやってゆくためには交渉の技術の問題ではなく、中東のかなり文化的な背景を持った交渉のやり方が、それともこれは欧米ふうに端的に交渉されるのが適当なのでしょうか。

多田 サウディ・アラビアを中心とする湾岸アラブ産油諸国は、イスラム教を国教として、シャリア(イスラム法)を国家の基本法としている国々である。今日に至っても、これらの国々ではあらゆる文化の面で宗教は基本的な原動力となり、事実上生活のあらゆる行為と時点に発言力を持っているのが実情である。従って、交渉する際にも配慮すべき点であることは申すまでもないが、欧米ふうに端的に交渉することで差し支えない。

サウディ・アラビアは1970年以降、一部触れておいた通り、約20年間に亘りインフラを整備し、石油、石油化学等の資本集約型の大型産業を設置し、製造工業の民営化をスタートさせる等、産業構造の多様化をはかることに成功しているものである。

このような新たな開発戦略を具体的に展開するため、わが国を含む欧米政府並びに民間企業に経済の相互依存関係の強化を働きかけてきたもので、前記ナーゼル大臣のわが方に対する強い要請は、裏を返してみれば、わが方に対する熱い期待の表現ととるべきものであろう。ナーゼル大臣がわが方の遅れ馳せながらの行動(石油化学、スパイラル鋼管製造、メタノール合弁事業等)に対し、一応好意的な反応を示したが、95年現在(サウディ工業電力省)生産に入っている欧米諸国(わが国、韓国、台湾を含む)の合弁製造工業は145社で、その国別内訳は米国の50社、英国の16社、スイスの15社、ドイツの14社、イタリアの6社、日本の5社、韓国の4社の順位となっており、サウディ側はわが方の態度に少なくとも満足をしているが、私個人としては疑念を抱かざるを得ない。

従って、サウディ・アラビアにおける財政金融通の旧知の方は、日本とサウディ・アラビアを中心とする湾岸産油諸国との今後の経済の相互依存関係の強化につき次のとおり述べている。

「日本の海外直接投資総額は近年着実に伸びているが、先進工業国向けと途上諸国向けとでは対照的な傾向がみられ、前者は増加しましたが、後者はアジアのNICs諸国以外は停滞しており、特に中東諸国に対する投資は減少しており、最近年の日本の製造部門の投資の1%にも満たないものですが、湾岸6カ

国の対日投資額は約15%を占めています。従って両者間の経済関係はバランスを欠いているわけで、日本は湾岸諸国との間に合弁事業を設立することを検討し、工業化のための協力を促進すべきである。」

<了>

筆者紹介



多田 利雄（ただ としお）

1940年 外務省留学生試験合格。カイロ大学留学。

戦後、エジプト、シリア、クウェイト及びサウディ・アラビア各大使館勤務。

1975年 外務省欧亜局調査官を経て在サウディ・アラビア大使館公使。

1976年10月 駐カタール特命全権大使。

1981年1月 駐シリア特命全権大使。

1984年 退官。

1990年10月 湾岸戦争にともなう「湾岸平和基金」の運営委員会の事務局長に就任。

アラビア語による 戦後のアラビア市場開拓史のひと齣

林 昂

とき 2000年（平成12年）7月28日（金）

ところ 如水会館会議室

ききて 冨塚利夫、高橋和夫、武石礼司、福田安志、
中村覚、水島多喜男

（1） 灰燼に帰した本邦初のアラビア語辞典原稿

総べての混乱は1945年3月13日夜の、あの大阪大空襲から始まった。それも知らず、私はすし詰め夜行列車で東京へ向っていた。目的は、外務省の助成金を得て、ここ一年余り、アラビア語部の沖正弘君(のち、ヨガで名をなす)その他有志学生の協力により深夜まで研究室に居残って作った、本邦初のアラビア語日本語辞典用の語彙5万語のカード。そして鉛さへ流し込めば直ぐに活字ができるアラビア字母。さらに読本に予定したエジプト文部省初等教科書の復刻も出来上り、あとは印刷、出版を待つばかりとなった。そこで、これまでの物心両面の後援者、外務省欧亜局第三課長太田三郎氏(のちビルマ大使)と打ち合わせの為、すし詰め夜行列車に乗った。

太田課長は机一杯に地圖を広げて何やら忙し気であったが私を見るなり、「おお！ 外語はどこ？」「上本町八丁目」と答えるや「わあ！ やられてる」。この席で東京も10日夜大空襲を受け、江東、京浜地区の大被害を知り、また前夜、頻繁にあった車窓のブラインドを下ろすようにとのアナウンス、黙々と誰一人、口もきかない乗客に混じって列車を降りた瞬間、鼻をついたきな臭さの理由も分かった次第で、こと程、左様に情報はコントロールされていた。

いずれにせよ最早、辞典、助成金手続きの話どころでなく、急ぎ引き返した大阪は一面、焼野原、外語は本館が全焼、私の研究室のあった西南アジア語研究所は形だけが焼け残っていた。不思議なことに、心をこめて日夜記入した5万語のカードは、そっくりそのままの形で白い灰。復刻版の教科書も、箱詰めされた時のまま整然と白い灰。あまりのいとおしさに立ちすくんで暫し。息を殺してよく見ると、白い灰の上に黒々とアラビア文字が浮いている。焼夷弾の直撃もなく、爆風も受けず、無人ゆえに消火活動にあらされることもなく、炎は静かにカード、教科書を包み込んでいったのであろう。悄然と立ち去る私に用務員さんが、「先生、倉庫は無事でした」と元気づけてくれた。急ぎ開けてもらおうと、あった、まばゆい金色の真鍮の字母。ぎっしりと箱に詰まっている。有難や、これさえあればアラビア活字ができる、と大いに元気づけられた。しかし、これも数日後、倉庫破りにごっそり箱ごと盗まれてしまった。

(2) 週20時間の授業。大阪終戦連絡事務局。高槻兵舎。京大蜷川教授の悲憤。

授業は上本町の焼け残りの教室で再開されたが、職員、生徒も忽ち困ってしまった。余りにも手狭、直ぐ天王寺中学の間借りが手配されたが午前右往の上本町、午後左往の天王寺、先生も生徒も不便この上もない。

戦争末期からアラビア語部応援の山本健太郎教授(ペルシャ語、インド語)が四国へ疎開されたまま戻らず、また講師を頼んでいた中央アジア出身のタシカンディ氏も神戸からの出勤ままならずの状態となり、結局、私一人、週20時間の授業を受け持つ重労働となってしまった。

そうこうするうち、外務省の出先である大阪終戦連絡事務局長小瀧彬氏（のち 1957 年防衛庁長官）より、大手町の府庁内にオフィスを開いたが、忽ち進駐軍（第 25 師団）から家屋、用地の接収その他、雑多な要件を次々と持ちこまれ、英語のできる人手不足でとても手が廻らない、是非手伝ってくれ、とのこと。私自信、体を酷使しながらの授業の実情を話し、その方は勘弁してもらったが、では米軍の日常的な要望に答えるため、通訳を学生のボランティアから募れないか、とのこと。

その頃、横山俊平校長は退官されていたので、尾崎卓郎校長に相談、学内募集のところ、内本平八郎君（アラビア語）はじめ数名が応募。これは日米双方の当局から喜ばれたが、それにも増して学生たち自身が喜んだ。アメリカの将校と一緒に、憧れのジープを乗り廻し、アメリカ英語を実習できた上、帰りには、当時珍しいチョコレート、クッキー等のおみやげがあったからである。

戦争が激化する以前、私は先輩の故中野英治郎教授の指導を受けた藤岡公男君、竜野道夫君等に、卒業前に、語学の実習を兼ねて、アラビア人との交わりの雰囲気なりとも経験させたいと思い、神戸在住のレバノン人貿易商スブラ氏宅の茶会へ何度か案内したこともあったが、今回の米軍将兵との交流も亦、学生達にとって貴重な異文化体験となったようである。

このような或る日のこと、呼ばれて校長室に入ると、本田要太郎会計課長と深刻な表情で鳩首協議。私に対する話は高槻市の工兵隊兵舎に駐屯していたアメリカの部隊が引き揚げるので、その跡を狙って、高槻医専、阪大医学部等が動いているらしい。ついてはこれをなんとかならないだろうか、との相談。大変難しい注文であったが、御堂筋の日生ビルにオフィスのある第 25 師団接收部長エトキンズ大佐に直接会っているいろいろ話をしているうちに、同大佐が日本文化に大変関心を持っていることが判った。そこで帝塚山に住む親戚の家が幸い戦火を免れ、典雅な庭も池もそのまま残っていることを思い出し、そこへ案内した。食料難の時代ではあったが、あり合わせのものをかき集めて天ぷら料理でもてなした。同大佐は公務で招かれる料亭とは異なる、昔ながらの風情を湛えた、しもたやの家庭の味を満喫したようで大変喜ばれた。

幸い工兵隊兵舎の跡には外語が入ることになり、翌 1946 年 2 月、校舎の高槻移転が行われ、漸く一つ屋根の下で学ぶ夢が実現した。しかし、これとて

間もなく、当時の交通難から通学が不便との不満が出はじめた。戦後入学した学生が同窓会支部への便りに「あまりに見ずばらしいのでがっかりした」とあるのを読み、私はさもありなんとする反面、それでもこれは焦土と化した阪神地区で僅かに残った格好の物件で、複数の学校が狙っていたのだよ！と誰にでもなく独り言をつぶやいた。

私は近鉄、奈良線沿線の瓢箪山に住んでいたが、ひと駅、大阪寄りの花園のラグビー場は外語の食料庫となり、戦闘帽にゲートル巻きの先生方と一緒に、当番の日はサツマイモの栽培に汗を流し、葉、つるまでも大事に大事に頂いた。これに関連して私が実業界へ転身する大きな動機をご披露したい。週一回、文学部講師として京大に通い、宮崎市定教授の研究室に席をおいた。教室もそうだが暖房も全くない京大の教官食堂でのこと。当時、経済学部長の蜷川教授(のち京都府知事)が或る日、薄いみそ汁を啜りながら、「ああ情けない、何だねこれは。私の郷里、和歌山のイモ粥の方が遥かにうまい。とに角、今やるべきことは一日も早い工業の復活、経済の再建、そして輸出だよ」、と悲憤慷慨。同席していた若輩講師の私は、すきっ腹を抱えながら考え込んでしまった。「象牙の塔にこもっていても食べられない」と。

(3) 実業界への転身

大阪、八尾の病床を見舞い、アラビアへの熱き想いを語り合った中野先輩の『アラビア紀行』が1941年出版され(事務局 注1)、現地へ向けて私の心中はなんとなく落ち着かなかった。その頃大阪駅で全く偶然に、留学生として中東各地の歴訪時、バグダードでお世話になった三菱商事、金子支店長から声をかけられた。氏は、マッカーサー指令により財閥系会社は解体、小さくなったが、われわれが貿易の第一線で働かなければ日本経済は立行かない。特に中東、アフリカはこれからの市場、国の為ぜひ協力を、と熱心に口説かれた。拳句のはては心を残しながら外語の後事を田中四郎君、伴康哉君に託しての転身となった。

敗戦と占領、異常な時代であったが、個人的には心血を注いだ、ア語辞典の原稿、ア語の字母と教科書、私の学徒としての夢は焼夷弾により校舎と共に

灰燼に帰してしまっただのである。しかし今、想えばこの無念、やりきれなさに突き動かされて、下記のような我が国初の中東アフリカ向け大口契約を懸命にまとめ、各界の目を同地域に向けさせ、同時に各社がアラビア語研修生をカイロ、ベイルート、ダマスク、バグダード等の大学に派遣する機運を醸成することができたことは望外の幸いであった。しかしこれは、我が国、官民のマネジメントが、中東に植民地支配の汚点を残していない日本によせる中東の官民の心情を理解し、彼等の経済開発計画に積極的な物心両面の協力を惜しまなかった賜と、今日、尚、信じている。

- (一) 1954年、ナイル川上流エドフに、砂糖黍を原料とする製糖プラント(849万米ドル、新三菱重工)。
- (二) 当時エジプトの風土病、ビルハルシア撲滅の一環として、カイロ水道局向け鑄鉄管(久保田鉄工)。
- (三) 1954年、スーダン政府の脱裸足政策に対応。キャンバス靴500万足(6億円、九州日華ゴム)。
- (四) 1957年、クウェイト・オイル・タンカー会社へ納入された同国初のマンモス・タンカー(46,000トン、佐世保船舶工業)。なお、この代金32億円は全く異例であったが全額即金払いされ、会社更生法下にあった同社復活の志気をたかめた。また検収に来日した英コンサルタント、コモン・ブラザーズは「職務上、各国の造船所で船の仕上りを見てきたが、これほど、丁寧によく出来た船は見たことがない」との報告書を提出、これを喜んだクウェイト・タンカー会社は以後、計9隻を同社に発注。
- (五) もはや戦後ではない、と謳った経済白書。我が国は神武景気、資金需要は極めて旺盛であったが供給の追いつかない1958年、私はクウェイトのジャービル大蔵大臣殿下(現首長)に我が国の実情を説明、我が国の公定歩合5.5%を以って三菱、富士両行へそれぞれ500万米ドルのインパクト・ローン調達、三菱造船へ500万米ドルの借款供与。更に翌1959年、両行へそれぞれ200万英ポンドの自由預金を設定した。しかし、いつしか我が国の金融ブローカーの知るところとなり、クウェイト大蔵省詣でが始まり、熾烈な金利つり上

げ競争となって、当初、まさに干天の慈雨で国益に資したオイル・マネーの導入も、いつしか沙汰止みとなってしまった。

(六) 1950年代の終り頃より60年代にかけて産油国に下流操業参入の気運が高まりつつあるのを見て、私はヤマーニ石油大臣、ターヘル・ペトロミン総裁に直接、我が国エンジニアリング会社の能力と特質を説明。そして1962年、千代田化工、玉置社長を団長とする調査団にリヤドへ来てもらい、さきの両首脳に紹介。曲折を経て同国初の精油所(処理能力、1日当り12,000バレル)がジッダに建設された。この時の納期の早さ、技術力が高く評価され、同社はその後リヤド、そしてイラン、クウェイトその他の産油各国から陸続と受註。そしてこの事実は、私が玉置社長に呈した最初のアドバイスを実証する結果となった。それは、「アラブの噂は千里を走る。工事の遅れは日常茶飯事。それだけに納期通りに完成させれば、プラント建設を急ぐ各国よりの受註は必定」の一言。

この際、銘記さるべきは、日サ投資案件の成功例の一つとなっている(株)サウディ石油化学(1981年設立)は、さきの1962年精油所の件と併せ行われた天然ガス利用事業の経済性調査が起点となったものであるが、この20年間、我が国官民の粘り強い努力とサウディ当局の協力により、ナショナル・プロジェクトとして推進できたことの意義は誠に大きい。

(七) 産油量増加に伴い1966年頃より70年に向け、主としてアラビア湾岸諸国の油送管需要が旺盛となり、日本鋼管、八幡鋼管の二社だけでも毎年5,000から15,000トンの未曾有の輸出が行われた。

石油関連について事実を明かすと、1957年のアラビア石油利権交渉以前、即ち1956年に私は、エジプトのナセル大統領著“革命の哲理”(事務局 注2)を原典から訳していたこともあって、現地の官民から、我々の痛む心の判る者として、信頼されていたと、今でも思っている。

利権交渉の始まった年の夏、私は、のちに初代石油鉱物資源大臣となった、シェイク・タリキ宅で相対で雑談していた。その日は金曜の休日、寛いでいると突然、氏は国際石油会社(メジャー)の横暴を詰り始めた。曰く「彼等は我々に何等の相談もなく一方的にポストエド・プライス(公示価格)を下げた販売

している。産油国の予算はこの石油価格を基に算出しているのだから、これでは予算の建てようがないではないか。ヴェネズエラの大臣と相談してきたオペック（石油輸出国機構）の創設を急がなくては」と。また地質を専攻した氏から、アラビア湾の地下資源分布、背斜構造の全体像を勉強させてもらったが、利権区域設定申請の際に大変、参考になった。

難問は更にあった。利権会社の法人格である。タリキ大臣は、「サウディ国内で操業するメジャーはアメリカ法人であることを理由に、地下から出る石油の一滴にもサウディの主権があるにも拘わらず、利益を我が国庫に入れていない」、と新規に参入しようとする会社に厳しく現地（サウディ）法人とするよう主張するのであった。

私はふっと思いついて、これまで交渉の席に顔を見せなかったが、法律顧問、のちの石油大臣、ヤマニ弁護士を訪ねようと思い、山下社長、岡崎元外相を案内した。そして会社設立発起人の名簿を示し、我が国産業界の重鎮である石坂、石橋、桜田、杉、太田垣、諸氏の重要な役割を、また石油の安定供給、原油購入に要する外貨の節約により産業の一層の振興が促進され、更に日サの貿易の増進、友好関係の深まりに寄与するところ大なるものありとする閣議了解による行政指導の意義等を縷々説明したが、これで駄目なら、万事休す、と覚悟をきめてホテルへ帰った。何故なら打ち明けた話、山下社長は或る暮夜、私の部屋で、意気消沈の態で、「もう帰ろうよ」と言ってきたのを、敢えて「未だ早い。心当りがあるから」、と引留め、今回の訪問となったからである。後日、幸いにして、日本法人として調印。直ちに探鉱開始、日サの技術陣の非常な努力により、1960年1月、カフジ油田第1号井の試掘が成功、以来、我が国最大の自主開発石油となっている。

その後、1973年春、かねてよりサウディ政府部内で練られていたDD（消費国精製会社との国策的な直接取引）の実行が間近いことを知り、私は急遽、通産省エネルギー庁石油部監修『石油資料』（石油通信社版）を基に民族系各社の精製能力その他の業態を一覧表にして、石油大臣、ペトロミン総裁へ提出したが、大臣は一読、率直に、日本にこれ程の能力があるとは思わなかった、と驚きをかくさなかった。総裁は、表に併記した各社の電略に基づき、リヤド

にての原油商談への招電を發した。これが、今日も尚、紙上に散見される DD の嚆矢となった。

この際、特筆すべきは、その後の第 1 次、二次の石油危機に際しても、ペトロミンのみは、契約量の削減、値上げ、仕向地の変更等の要求を出さず、当初の契約条件を最後まで遵守し、我が国官民の信頼に応えたのであった。当時、国際石油市場では、ブローカーの暗躍、原油供給の約束を条件に、ボンド・マナーの積立を求められ、結局これを詐取される不祥事が相次いだ。

第 2 次石油危機に際し、世界の各国からリヤドへ殺到、ペトロミンに蝟集する公私の石油人との対応、各社との商談、契約手続きに日夜忙殺されて疲労困憊の極にあった幹部連中に喜ばれたことがあった。それは、日本の各社を代表するチャンピオンとして、対日取引の核を、和製メジャーたらんとする共同石油にすれば……と示唆したことで、これは間もなく巷間“大堀原油”と呼ばれ我が国の急場を凌ぐことになった。

以上の例でお気づきのよう、石油大臣、ペトロミン総裁と要談中、瞬間、不思議に閃くものがあり、これを危機打開策の一つとして東京に献言し、それなりの効果をあげてきたが、これも常日頃、サウディの石油政策関係者が、ブローカーの介入を極端に嫌っていることを肌で感じ、しかもこの DD こそ日サ両国の国益に直結する、と確信していたからかもしれない。アメリカに次いで、当時世界第二の石油消費国でありながら、メジャーにさえ頼んでおれば、いくらでも入る、と暢気に構えている日本は、もし私が現地で、いち早くこの動向を察知していなかったらと思うとぞっとする、と同時に、このような滅多にない時に廻り合い、場をお與え下さった神の恩寵を思うと、有難さに、自ずと首こゝべがたれてくるのである。

尚、第 1 次石油危機を契機として我が国のエネルギー源の分散、多様化が進められ、それなりに結構なことで、今日に至っているが、この際、1974 年 1 月に体験したこと、それは、エネルギー消費という問題一つとっても、日欧政府の考え方、国民の心構えがこうも違うのか、と深刻に考えさせられた町の光景である。

東京からリヤドの私に、ヤマー二大臣の訪日、行事日程もほぼ案ができており、大臣の確認をとりたいが、在外公館のあらゆるルートを通じて連絡が

とれない。通産省も非常に困っているのです。至急、同大臣の確認をとって頂きたい、とのこと。

早速、見当をつけた私はヨーロッパへ飛び、御本人に会って直接、日程の確認をとり、一足先に北回りで羽田に着いたが、官民一体のエネルギー・マインドに徹しているヨーロッパの、走る車も疎らな、そして光度を落とした街燈の暗い町並と閑散とした空港を見慣れた目には、群れをなす車の赤赤と輝くテール・ランプの光の海に浮かぶ、あまりに明るい夜の羽田空港。このなんというコントラスト。前年師走の日本を駆けめぐったトイレット・ペーパー騒ぎをニュースで知っておられる大臣が、この光景を見たら、どう思うだろうか、と考えさせられてしまった。同大臣はかねがね、座談または講演の折、いつかは到来する　それは神のみぞ知る　飢餓の時代に備え、石油蛋白その他、石油を原材料とする食料のことも考え、私達は極力、燃料の節約をしなければならない。厳冬、暖房をきかして、Y シャツ一枚で仕事をしている姿を見かけるが、勿体ない話である、と言われたことを思い出したからである。

後記

近年、アラビア石油その他、数社の社史を読み、つくづく徒然草の一文を思い出します。

「まことはあいなきや。……まして年月過ぎ、境もへだたりぬれば、やがてまた定まりぬ」

つまり「本当の話は面白くないのであろうか。……作り話をして文字にしてしまうと、月日がたち遠いところのことは、それがそのまま定着してしまうのに」と嘆いています。

これは例えば、社史などの編纂に携わる人たちが、ある種の思惑からか、または紙数の制限からか、ありがちなことでしょうか、これでは、のちのち、その会社が似たような難問に直面した場合、先人が苦労した問題解決の糸口の掴み方、または人脈のつながり等の記述が省かれた為、現に直面する問題解決の参考には全くならないことを諭す兼好法師の頂門の一針であり、特に彼の時代は崩壊した王朝文化に代わる新しい文化が未だ生まれていない混迷の時代

であったことを思えば、グローバルという現代を生きる我々にとっても、兼好は人生の師であると思うのであります。

<了>

なお、本稿はインタビュー原稿をご本人がまとめられたものです。

(事務局 注1) 中野 英治郎『アラビア紀行』(明治書房、1941年)。

(事務局 注2) “革命の哲理”は、外務省欧米局中近東書記官により、執務参考用として昭和31年9月20日付けで印刷に附された。のち、ナーセル「革命の哲理」林昂訳、中野好夫、吉川幸次郎、桑原武夫共編『世界ノンフィクション全集 第17』(筑摩書房、1961年)所収として出版された。

筆者紹介



林 昂(はやし たかし)

元京都大学文学部講師、大阪外語教授。

のち、三菱商事、業務部次長、中東アフリカ課長兼務。元アラビア石油専務、サウディアラビア王国駐在代表。元富士石油副社長。

現、日本サウディアラビア協会、日本クウェイト協会、各副会長。宗教法人 日本ムスリム協会最高顧問。財団法人 中東協力センター理事。

地図作成技術移転援助を通してみた

サウジアラビアと日本

毛利 彰介

とき 第1回 2001年（平成13年）4月22日（日）
第2回 同 6月24日（日）

ところ 東京大学文学部アネックス2階小会議室

ききて 牛木久雄、武石礼司、福田安志、黒澤晃、中村
覚、水島多喜男

（第1回インタビューでは、事務局から事前の質問項目の連絡は行わず、自由に話していただき、第2回インタビューでは、その内容をふまえて、以下の質問点を事前に連絡させていただきました。なお、以下のインタビュー本文は、第2回目の内容に、第1回目の関連部分を事務局が追加し、まとめたものです。）

《第2回インタビュー質問項目》

(1) アラビア語をどのように学ばれたのでしょうか。クルアーン解釈をめぐる議論や、ムタワの説得で必要な宗教上の知識をどのように学ばれたのでしょうか。

(2) 日サ協会報に載せられた手記には、子供たちに対する教育への批判があります。子供たちの教育において、サウジ人の親達は何が重要と考えているのでしょうか。あるいは、

サウジ人にとって、理想的な、あるいは尊敬に値する人間像とは、どのような資質を持った人間なのでしょうか。

(3)また、ルベイシー次官についての部分を読ませていただくと、思考における原則的なものをしっかりと持った「硬骨の士」、という印象を受けますが、次官はどのような教育を受け、どのようなことに価値を見いだす方だったのでしょうか。また、サウジの高級官僚と、そうではない官僚・役人との間には、資質の上で何か違いがあったのでしょうか。

(4)アラ石の利権について。資源保有国における「資源ナショナリズム」（天然資源に対する国家主権）という考えが国際的な認知を受けています。サウジ側は当初継続するつもりでいた、とする見方がある一方、他方では、利権交渉の失敗の原因には、利権延長の交渉上の行き違いだけでなく、サウジがカフジ油田を「アラ石利権」以後どのように管理するのかをめぐって、「利権継続派」と「接収＝操業委託派」の対立が政府・王族内部であり、最終的に「接収＝操業委託派」が勝利した事情があったのではないかと、とも考えられますが、いかがでしょうか。

(5)サウジ側の王族・政府内部において、世代間の発想の相違をお感じになったことがありますか。

(6)石油省での職場について。サウジとの合弁企業で働く日本人ビジネス・マンの方々の場合と比べ、職場としてどのような点が同じでどのような点が違っているのか、何かお気づきになられたことがありますか。政府機関の場合と民間合弁企業の場合とでは、御苦勞なされる内容にちがいがあるのでしょうか。

(7)日本と欧米の援助方法で、両者それぞれの優れている点、好ましくない点について、お気づきの点があれば御指摘下さい。

(8)サウジ側（王族・政府・国民）は「日本」に対してこれまでどのような印象を持っていたのでしょうか。また、今後、それはどのようなものによって変わってゆくとお考えですか。

(9) 今後、サウジアラビアが直面すると考えられる問題について、何かお考えがあればお聞かせ下さい。

どのように進めさせていただきでしょうか。

毛利 若干変更があるかも知れませんが、基本的にはこの質問に沿って回答しましょうか。

1番から入るわけですが、1番には二つの問題があります。全体の流れからいくと、どうして僕がアラビア語を習得したかという問題がありますね。これは派遣前に3週間、アラビア語の研修を受けまして、それで現地に向かったわけです。1日5時間程の学習で、どうにか辞書の引き方や読み方を理解した程度で研修は終了しましたが、アラビア語というのは、その学習したときが初めて見る文字、言葉でして、わかるわけではない。単に毎日ものすごいスピードでページをめくるような感じで。3週間であらう覚えて覚えることはできないです。赴任直後は研修で得たアラビア語会話は全く活用できなかった。理由は、相手の話はやや理解するが、返事をしようと研修で受けた文法を頭で整理しているうちに話題は先へ進み、会話にならず、心身ともに疲れを感じ、よし文法は後にし、口語会話に精進しようと切り替えました。アルファベットぐらいはわかりますので、食材購入のため現地のスーク、市場へ行っている話をして、この野菜は、果物の名前はと聞き、それを用意してきた紙にアラビア語で書いて、これでいいかと、そこで修正してもらい、言葉のニュアンスやなんか雰囲気をつかむ。この実践会話練習は会話の雰囲気習得には役立ち、役所では役所で同様なことをして、緩やかではあるが会話術が進行した。

リヤド大学で夜間、外人向けのアラビア語の教室がありましたので、それに行こうと思ったんです。ところがその時期はたまたま忙しい時期でして、忙しいといっても15年ぐらい忙しかったわけですが、ときおり夜も役所に出るわけです。そうすると、業務に支障がある。サウジのカウンター・パート曰く、「大学に行けば1人の先生だが、役所には400人の先生がいつもお前のそばにいる。やる気があれば皆協力するだろう」と。

それもそうだろうということでアラビア語の練習に入ったわけですが、先ほど言いましたように、語源の歴史からやられますと、1時間、2時間すぐたってしまうわけです。彼らも話し好きですし、また話をしていると仕事をしないですむわけですから。それで業務進行に支障をきたすため、数日の実施でそれもやめまして、当時、カウンター・パートの各家庭を訪問していましたので、

家族との会話の中で言葉の使い方・方言・習慣・教典などいろいろ教わった。実地トレーニングですね。そういう按配で時間をかけてやりました。

ただ欠点は、最初2年だったわけですが、2年で帰るのだから、勉強しなくてもいいやという気持ちもありました。それから以後も1年1年の延長ですから、勉強しようという気持ちが起きないわけです。ただ、覚えたのは口語体で、会話はなんとかできる。読み書きはなんとかと言うけれども、なんとかのうちに入らないですね。そういう状況で、日常生活においてアラビア語での言葉の障害がなくなってきた。だいたいこれが5、6年でしょうか。そのへんあたりからなんとか円滑に、どこに行ってもなんとか会話ができ、相手の心も見え、目的が達せられる。そういうアラビア語の習得状況でした。

1番の中に、ムタワの問題が出ていますが、これは後回しにします。

その次に、石油鉱物資源省次官ルベイシー（Dr. Solemman Robaishi）の問題です。これは実際、正確ではありませんが、あるときルベイシーと会話をしているときに、彼がハーバードという言葉を使ったので、向こうの地質学の学位を持っていると認識しています。JICAのほうにも、彼はハーバード出身というかたちで報告はしていますが、これは100%定かではありません。でも、間違いのないと思います。

質問の中で、彼の人間的な問題、人格の問題が出ております。彼は思慮深いですね。だから、相手を思いやる気持ちは十分に持っています。会話の中で相手がどういう人間か、自分にとって利益になる人間か、不利益になる人間かというのを、動物的に感覚が鋭く、相手を短時間で観察する。交渉事においても、将来起こりうるだろうという問題点を先取りするだけの知識を持っており、打開法など矢継ぎ早に質問し、相手を困惑させるなど、俗に言う、頭が切れまです。石油省内でも、一応頭が切れるということで通っております。

彼は、石油省が国益にかなうための諸事項について、過去・現在・未来にかけて考え、立案し、検証する、という多忙な日々を連日送り、努力をしています。次官退官の後、石油大臣顧問の重責を負い、以前より更に多忙を極めていきます。アラビア石油に対する鉄道建設の要望の実施計画担当で、地図上に鉄道路線の計画線の線引きを行うなどの資料作成に私も参加しました。また、ルベイシーは日本の鉄道計画調査団に最大の協力をしました。しかし、結果、双

方の合意には至らなかった。彼は、このことと同時に、長年に亙り日本の石油資源供給に関わった石油採掘権をも日本が失ったことを極めて残念、と思っています。

赴任して1～2年後、地図作製が軌道に乗り多忙な頃、ルベイシーが次官であり局長の頃ですが、外国企業、測量関係団、事前調査団などが頻繁に次官面談を求め、訪問来客が列をなしたことがありました。面談のために数日間も次官秘書室で待機し、やっと会えたと思ったら面談は数分で終了。再三の面談訪問者が別れ際に、「ホテルに帰り、また明日お目にかかります」と言うと、「お前の帰る道はここから空港への道だ」と。面談のための待機時間も営業マンの仕事のうち、と言われた時代です。このころの次官は決定者、独裁者、わがまま、高慢なところがあって、外来者には好まれない人物でもあったが、情を汲み取るところもあり、嫌われ者ではなかった。省内でも、支配者であり、彼の鶴の一声ですべてのものが活動し始めた時代もあったが、時の流れと共に、彼の人間性も徐々に温和となり、思いやり深く、時には相手方に解決のための良策などを伝授したりと、変貌しました。

彼の生活観ですが、彼はその目的、与えられた仕事、任務に対してはすべての努力を払って遂行する、という人間です。もちろんその中には人情的な配慮も含んでいて、部下に対して100%命令に従わせるようなことを彼は強要しておりません。それぞれ人間にはいろいろな事情がありますから、その事情を聞いて、いいか悪いか彼が判断をし、その場で臨機応変に対処しますが、目的達成のための努力をするよう指示は忘れません。したがって、周辺の人からは慕われている。また職員のほうから見ますと、神様みたいな感じの方です。

ルベイシーが、サウジ職員の手で、自助努力し、自立した地図作製が可能となるよう、日本へ地図作製技術移転指導の要請をしたことから（私がサウジと関わるようになったわけですが）、私と職員間でトラブルが発生したことがあります。その一つの例をお話しします。

アラブはだいたい頭は下げないです。謝るということをしないです。また、こちらに力がなければ、彼らは従わない。あるとき職員の仕事上のミスを指摘して言い争いが生じました。彼は自分の犯した間違いを認めず、原因は私の指示が悪かったと主張する。僕は自分では正しいと思っている。彼はどう思って

いるかわかりませんが、謝ろうとしない。彼はじかにルベイシーに、自分が有利になるようなことを話してみたいです。翌日、ルベイシーが本人を連れてきて、職員の前で、僕に対して謝罪しています。次官とその当事者ですね。深々と頭を下げませんが、軽く会釈をしながら、彼が悪かったと。そういう行動をとりますと、周辺で見ている人間は、僕の立場がルベイシーと対等またはそれに準ずるような立場、という理解を持ちますね。空手や柔道の試合開始の時でも頭を下げての挨拶はしない程だが、ルベイシーは地図作成協力者が指導し易い状況をつくるために古い習慣に拘ることなく改革をしてくれた。

それ以外でも、例えば、赴任後しばらくは仕事上必要なコピーを1枚取るにも許可が必要だった。担当者が不在の場合、複写ができない。そういう制度であれば業務は遂行しない、ということもルベイシーに話しました。それから、仕事上で自分の部署だけ工程管理しても、前後の作業の流れというものをコントロールしないと自分には職責が守れないわけです。そこで自分の守る部署以外の部署、部外者に対する作業進行計画管理上の指示というものをした。それでまた問題が起きて、若干もめました。体験、苦情話を交えてルベイシーと制度改善について話し合いました。その直後、彼は受話器を取り各部長全員を集めまして、各部署の状況を聞いた後で、アラブ調の歯の浮くような言葉で、「この省内においてモウリのやることについては、なんら妨害する壁はない」ということをひとこと言ってくれまして、それからもうこちらの思うツボで、やりたいようにやっちゃった。またある時、「モウリの言うことは私の言葉だ」と強い発言をしてくれました。お陰で、それまでの、関連部署へ要望を行った場合、異口同音に「ルベイシーに言われていない、指示がない」と反論されて生じた激論トラブルに終止符が打たれ、私の業務計画は順調に進行していきました。それくらい彼はある仕事に対して、それを達成するためには一番いい条件、コントロールする人間がやりやすいような条件を作ってくれています。

省内統一そして地図作成技術移転プロジェクトが成功したのは、彼がいたなければこそで、もし彼でなくほかの人間であれば、成功したかどうかはわかりません。そういう男です。年齢は確か現在は63、4だと思います。

階級によっての立場はどうかという質問がありました。3番の下から2行目です。高官同士はごく自然な友人関係で、厚い友情で結ばれております。それ

から、ルベイシーに限って言いますと、下の者に対しても他の人に対しても、傲慢ではないです。威圧的な感じもなく、対等に会話ができる人、これが石油省の次官かと思えるほどです。下の者は、先ほど言いましたように、ルベイシー次官は神様に近いわけですから、下はそのように高い位置で見るけれども、本人自身は誰もが平等という感じで生活しております。したがって、階級的な意識は下の者が持つのであって、本人は持ってありません。

ただ、自分にすべての責任があるわけですから、職責上の決断に際しては強い言葉が出ることもあります。けれども、言葉の端々には人間的な温かさというものを感じております。

日本の商社の方が、納品後、契約条項上のことでトラブルまして、協議が延々と数ヶ月続きました。解決の糸口が見つからず、最後には、商社の人はもう彼を「殺したくなるほどに」憎んでいます。けれども最後に、別れるときには憎しみが解け、「イエス・サー。ありがとうございました」と喜び希望を持って帰る。帰途、どうしてこうなったのかを聞いたところ、「ルベイシーに、甘く希望がもてる言葉に乗せられた」とその人は私に笑いながら話してくれました。そのくらい人間の心情を読み、和らげ、操り上手に機嫌よく別れる術を知っているのですね。こういうのをどういう人間と言うのでしょうか。

とにかく仕事中でも、「この野郎」と思っている、最後はコロッと同情するという。会話が上手なんですか。会話の中で、相手の心理をよく読みますよね。憎みっぱなしで別れることになるアラブもいますから、全ての人がルベイシーのようだとは言えません。ルベイシーはアラブとしては珍しいと思います。……よろしいでしょうか、いまのところは。

アラビアの方は英語をよくしゃべりますから、役所の中では、英語でしゃべってしまうとアラビア語を使わないということもありえるんじゃないでしょうか。

毛利 それは100%じゃないですね。話す人、対外的に接する人は英語が堪能です。

最近であれば、全員英語をしゃべる？

毛利 全員じゃないです。

石油省なんかですと、外のことを知っている人が多いかなと思った

んですが。

毛利 いや。

階級の上の人はだいたい。

毛利 例えば課長クラス以上の方であれば流暢な英会話が話せます。というのも、外国企業との取引や打ち合わせ等もありますし、学校での教育もあり、欧米留学経験者もいますので、自然と上手になっていきます。それ以下の一般職の中にも英会話の上手な方は勿論いますが、中には英会話ができない方もいます。日本でも同じようなことあるじゃないですか。それから、努めて役所内ではアラビア語を話すようにしました。というのは、やっぱり相手国の言葉で会話をするのが一番心の通じ方も違いますから。アラビア語を日本語に訳すと、ともすると角張った表現になるときもありますし、アラビア語はアラビア語で解釈した会話のほうが円滑にいくと思います。パーセンテージからいったらどうなんでしょうね、40%ぐらいがアラビア語だけということになるんじゃないかと思いますが。

英語をしゃべる人の比率は上がってきているんですか？

毛利 上がってます。というのは、現在、高校から英語が入ります。このカリキュラムの最後の、高校の中に語学が入ってきます。ただ、少ないですよ。私立では小学校から英語を教えています。

(添付の資料を見ながら) 公立はこのカリキュラムですか？

毛利 そうです。

これは現在でも？

毛利 そうです。これに沿っております。

石油省内で尊敬されている人という意味では、例えば石油大臣の顧問とか.....ああいう人たちは対外的にもずいぶん活躍しているし、やっぱり尊敬を集めるんですか？

毛利 そうです。それは石油省のため、ひいては国のために、彼らは毎日苦勞しているわけですから。

やっぱり、それなりの人がなっているんでしょうか。

毛利 職場においては、今はだいたい落ち着きかけていますが、実力主義の戦国時代ですから。実力というのは技能と、それから人間関係が主ではない

でしょうか。もちろん、イスラムの上に立ったうえで、ですね。

次官はサウジの中でもかなり珍しい方だという話だったんですけども、普通、多くの場合はどういう感じなんですか。

毛利 普通は高慢なところがあります。一見して、自分は地位が高いということを広張するような態度が見られます。外人が来ると、「何を要求しに来たのか。場合によっては与えよう」という、そういうような意識がありますね。俗に高慢さ。

与えよう...ですか。

毛利 「何にしにあんたは来たの。ものによっては話は聞こう。でなければ会う必要はない」と。その前に、だいたい秘書室でランクをつけます。最近はそのでもないですが、少なくとも10年くらい前までは、数日間、次官に会うのに待機する、これが商社の方の一つの仕事とされていました。実際、僕も見えますが、約5日目になりましてやっと会えた。でも1分か2分で終わりです。「お前には会いたくない」とか、「この問題に関しては、もっといろいろ討議した上で、返事しよう」と。高慢です。

やっぱり一つのジェスチャー、言葉のジェスチャーもありますけれども、ものをはっきりさせます。それを聞いて感情的になりますかね。けれども、そういう言葉の遊びというか、幅がありますよね。

彼らと交渉をやる場合は、そのあたりはかなり割り切って、言葉だけだということたちで理解した方がよいのでしょうか？

毛利 もうそれを読み取るのが人間関係ですよ。だから、アラブと交渉をしようというときには、まず挨拶をし、お互いの家族の話をし、昨日今日の出来事の話をする。その中で相手の人間性を読み取る。例えば1時間のうち40分ぐらいはもうその話なんです。もちろん下ネタも入りますし、それでお互いが話し合っ、最後の5分、10分に仕事をかけるわけです。ところが日本から来る方の100%近くの方はそうですが、握手をして挨拶をしてすぐ本題に入るわけですね。それで、滞在期間も2日、3日と短期間で、現場を視察することもない。彼らがそれでわかるわけではない。その上、日本の方は80%ぐらいそうだと思いますけれども、本題の結論は、決まって「この問題については日本に帰りまして、本社の役員会や上司と相談の上で、早急にご返事いたします」と

くる。これは交渉ではないですよ。ただ単なるお話です。

来る前に、交渉人は案件の目的を知り、多角的に協議をした上で出された結論を持って会談に入るべきなのに、これでは全権を持った者との交渉なのか、これから考えるための話し合いなのか、その辺が(サウジ側に)理解できない。「これは時間と経費のロスではないか?」、といった言葉が私の耳に入る。会談は数時間で終わる。「(日本から交渉に来た)彼らはそんなに忙しいのか? それにしては話が終わった翌日、何をしているんだろう?」と彼等は不思議がる。

アラブの交渉は、挨拶、そしてお互いの健康についての話、家族の、友人の話や、自国の状況や、役所や会社の組織・運営などを話しながら、時には下ネタなど軟らかい話も加え、人間関係の疎通を計って、融和を演じながら、自分の目的がいかにお互いに有利なのかを、相手に理解されるようにする。当方の人間性や立場を汲み取り理解させた後、最後のわずかな時間で本題に入る。もしも相手が受け入れられないとき、彼等はお互いにとって最善の妥協案や方法をアドバイスしてくれ、会談は円滑に握手で終わると思います。そして次回会う時は、往年の友人を迎えるような握手になると思います、これがアラブ流です。

アラブとの交渉は一般的に難しい、先が見えない、先方が非協力的だと言う話は良く聞きますが、その方はアラブ気質を理解しないで、日本風の交渉法を用いた結果、不快感を持つことになったのではないのでしょうか。それはこちらが悪いと思います。アラブ気質については牛木さんも十分に熟知していますので、そのへんは僕が言うまでもない。

また会議では、一つの議題をめぐって延々と論争が続いて、一つの結論に至るまでに時間がかかる。それは意識的な反対者が出るためです。

あるA点に行きたい場合、それを話しますと、アラブですから必ず反対者が出るんです。わけがわからないけれども、反対が出るんです。出さなければいけないわけ。自分の立場もあるし、素直にそれを通してしまえば、彼(提案者)が、これからさらに議題の進行上の主導権を握ることになってしまう、という考えがあるからだろうと思うんです。それで必ず反対が入ります。反対者自身の存在を高めることで、提案者と同格の立役者の位置を確保するため、何の

ことはない、「ゴネている」「屁理屈を言っている」だけのことですが、これがアラブです。すべて満場一致ということはありませんよ。円滑に行ったためしがない。アラブ人は話し好き、論戦好きと言われるが、その根源をこの点に感じました。

僕はそれにある程度慣れまして、A点からB点に達する工程を得たい場合、素直にAB間を話さず、遠回りしてB点に最も近いC点に達する工程の話をすることにしています。すると必ず数名の反対者が「屁理屈」で私はこう思うと発言する。その反対者の意見の中に自分の思惑に近い道順を示す反対者が必ず出るんです。それに同調させる。これを自分の味方に入れる。無駄な議論を楽しみ、最終的にB点に達する、こういう手法を使わないと、円満、円滑にいかないんです。これはいい悪いではなくて、そういう性格を持っているんですね、アラブは。だから、相手のいいなりにならないというところがあるんでしょうかね。自我が強いというか、ひとことも申させてやらないと、彼らは納得しない。なんとなくおわかりでしょうか。

難しいですね。

毛利 例えば、話し過ぎて、自分がお茶を飲みたい。ここで「お茶」と言うと、だれかが、「いや、この話が終わってからにしよう」と。それと同じですよ。そこでポーズとして時計を見るとか、何か欲しそうなしぐさをする。誰かが、「何をやっているんだ」と。いや、自分はこうしたい。お茶を飲みたいなという気持ちを持っていると言うと、「それもそうだ」と。そういうふうに誘導しなければいけないわけです。それが難しい。

要は、いかにして自分の目的を達するか、というためのテクニックですよ。これは交渉のときには絶対に必要です。日本的な方法でアラブと対等に交渉して、勝てないと僕は思いますね。アラブにはやはりアラブの方式を持って交渉しないと。そのほうが結果的には早く結論が見いだせると思います。いかがでしょうか。

そういう交渉のやり方、話の持っていき方については、向こうに行かれる前に何か学ばれたのですか？

毛利 まったくそういう資料はないです。というのも、「どういところなのか」「砂漠の中に家があるよ」という話で、「道路に面して家はあるけれど

も、その裏は全部砂漠だよ」という話で行ったわけですから。アラブについての何の資料・知識もなく赴任し、困惑の連続の中から、生活体験から得た一例です。

教育についてはいかがでしたか？

毛利 赴任当時は学校が少しありまして、学校に来れば、アメがあります、パンがあります、ということで人を集めていたぐらいですから。

あれは確か義務教育じゃないですよ。完全に行かなければいけないという義務制はないと思ったな。というのは、働いている人もいますね、それから遊牧的な人もいますから、そういう関係もあるんでしょう。

現在は日本と同じ6・3・3・制と大学4年制を採用しており、公立の小・中・高および大学・大学院や短大・専門学校などがあり、教育費用は全て無償です。ただし、小・中学校は義務教育ではありません。

無償教育というのでしょうか、お金は取らないということですか？

毛利 ええ、無料です。大学も専科になりますと、手当金が受けられます。大学の専門課程の学生は医・理工で異なりますが月600～1,200SR（1ドル3.75SR）程の手当を受けていると聞きました。これはサウジだからではなくて、日本もやっています。防衛大学でね。私の友人の子供、小・中学生は、使用した教科書は学年末学校に返却するとも聞いています。

また、イスラームの教義に基づいて男女別学です。通学バスがありますが、男女別車両となっていますが、大半の場合、父親か、雇われた運転手が子供たちの送迎をしています。

質の高いサウジ人育成の大学、技能を養成する工業高校や技術短大など、卒業者のレベルが一般的に低いと囁かれているのが問題ですね。（別紙学校教育カリキュラムを参照）

先ほどは、円滑に交渉を進める上での留意点をお話し頂きましたが、友好的な人間関係を維持したいと思っても、いったん話がこじれると、日本に比べて修復しがたい、というようなことはありませんか？

毛利 あります。まずどうやれば信頼関係を作り上げることができるか、から私の経験をお話しします。

赴任時の私の部署はまさに多国籍技術者の集まりに等しかった。皆、異口同

音に、サウジ職員には地図作製の教育・技術移転は無理だという。私も数名のカウンター・パートを受け持ち、教育を開始しました。やはり皆の言うのが正しいのか、と力抜けして、望郷の念にかられましたが、毎夜のごとく数名のサウジ・カウンター・パートが、我が家へ、夕食材料持参で遊びに来て夕食を作り、世間話や今日の出来事など、分かりやすいアラビア語会話講習を兼ねての楽しい夜を過ごすことによって、大学卒・高校卒の個々の知識知能レベルを知ることができたと同時に、自分の赴任した目的が鮮明になりました。

私を含む多国籍軍の持つ知識と、サウジの知識レベルの格差が当然にあること、従って我々が教育指導に来ていること、もし彼らの知識が我々と同格であれば我々の存在は不要となることに、遅ればせながら気付いた。

それからは自分が彼らの位置に一旦降り、同レベルの立場から、一緒に階段を1～2段上に登る。私は、彼らとともにもう一度勉強するつもりで再出発しました。

カウンター・パートも何時しか増え、任務は順調に進んだ。半年も過ぎたころ、ルベイシー次官が私の部屋に来て、気候や習慣に少しは慣れたか等、話している中で、ヨーロッパ人はサウジ職員に地図に関する教育をしてくれないが、「モウリは皆に善く教えてくれるので楽しい」と皆が言っていた、有り難う、とお礼を言われ、暗雲の毎日の生活の中に一筋の光が射すのを感じ、喜びを感じました。相手の生活、背景、立場を理解した上で最善の努力をすることが信頼につながることを、教わった気がしました。

われわれ派遣専門家6人が石油省に赴任しましたが、その中で嫌われた専門家が2人いました。その人達は、やっぱりアラブというのを前提に、(先入観として)念頭に、持っていたわけです。そのせいだろうと思います。ですが、(私の場合は)要は信用されまして、ある時期に信用されているというのがわかります。そうすると、信用された人間と嫌われた人間が作業で同じミスをする、先ほど言いました「お前の帰る道は空港だよ」という表現が出ますけれども、信用されないと、「人間にはだれしもミスがある」、こういう表現に変わります(笑)。それほどはっきりしている。

僕がある時期、毎週のように印刷後の6,000枚の完成図を2センチごとに断裁して捨てたんですが、1ヶ月ちょっとしたら、6週間ぐらいかな、次官から

呼び出しがかかりまして、「完成品をなぜ廃棄したのか、莫大な損害だ、いったいどうしてくれるんだ」と激怒されました。刷った地図を最終段階で断裁して捨てるわけですから、怒るのも無理ない。私は、「あれは地図としてはいいものではない。だから廃棄した。あなたは悪いものを欲しいのか。わたしにはそうは思えない。わたしは自分が納得できるいいものをつくるために努力している。役所はこれから100年も続くわけでしょうから、1年、5年、10年先のロスのない作業を進めるため、現在のひと月のミスやロスは、作業者の意識向上などを考慮すると、決して無駄にはならない。今回の原因はわたしの意思じゃない。印刷の品質管理がないためで、改善を要する。これはあなたの問題だ」と言う。言うこともだんだん歯の浮くような表現になるわけですが、そういう返事をしますと、納得します。

私の仕事は地図の企画計画と編集で、印刷部門は直接の業務ではないが、後日局全体の業務体制の改革について次官と協議をおこない、その後部長会議で次官より改革の趣旨説明と実行の通達が出されることになりました。そのため私は局の各部全体に手と目を走らせることとなり、椅子に座ることがなくなりました。こうなったのは、信頼が深まるとともに、「地図作製はおまえに任せる」と次官に言われたためで、多国籍軍は徐々に帰国の途につきました。

そうして体制は何とか整ったものの、次の問題は作業工程の厳守と調整方法です。

いま人生の上で5分、10分、1時間がどれほどの価値があるか。あるときはものすごい価値があります。けれども人生の上で、いまのこの1時間は問題ない。陰暦が一番いい例です。月を見て、1日の誤差はどうということはないんです。遊牧にとっては1日2日の違いは問題にしていません。月の欠け具合で日にちを定め、日没が0時であることを知らずに、友人と2時に会う約束をしました。約束の場所で半時間ほど待っても友は現れず、腹を立てて帰宅しました。翌日友人が私の傍らに来て「約束の場所で、1時間おまえの来るのを待った」と。彼も私も昨日の件で機嫌が悪いので、語調が荒い。私は午後の2時、彼は午後の8時であることが、言い合っているうちに判ったこともありました。

こんな具合ですから、作業期間の管理でも難しい面があります。

作業を開始して数ヶ月、ある工程をやります。ずっと円滑に進んでいます。

終盤に近づいて、どう見てもあと1週間で完了かと思い、本人に「あと何日で完了か」と聞くと、「1週間後かな」と返事が返ってくる。5日後、作業内容を見たところあまり進行していないので「あと何日必要か」と聞く。すると「あと10日ほど」と、計算の合わない返事が平然と返ってくる。日程が狂うと、次の写真処理部の作業予定に影響を与えるとともに、更に次の印刷部署にまで影響が尾を引く。だから各部署ともに素直に了解しない。この時とばかりに喚き、遅れの責任は我々がない、と主張する。

そのとき初めてどうしたらいいか(が、問題として表面化する)。「いや、それにはこういう問題がある」。この問題はやった本人の問題、こちらの問題、時間の問題というのに分類します。「これは自分のところで解消できる。しかし、あなたのところで最終的に、こういう問題を解消しなければいけない(と、仕事が進んでゆくことになります)。

例えば、印刷の場合ですと、「インクの購入が遅れた。また、地図をつくるためのすべての材料購入にあなたは決裁が遅れた。そのために遅れたのであって、自分の責任でない。これはあなたの問題だろう」というふうに責任転嫁をすることができますし、また相手はそれを理解します。したがって、問題は事務系統の問題だろう。そこで、ではどうしたらいいかという問題が初めて起きるんですね。1週間遅れて、さらに1週間遅れたら、管理職の意識、責任感がでたらめですよ、工程(管理)が。だから、理由をはっきりさせる。だから、彼らは口数が多いんですよ、言い訳が。

このような時の調整交渉は非常に疲れるが、不思議と友好が深まる。また、言い訳や責任転嫁、弁解が上手に訓練され、時には楽しい会話の類ではないかと感じながら彼らは喚いたのではなからうか、と思い直すこともありました。ともあれ、彼らには責任感が乏しく、自己の非を認めない、そして反撃が上手です。

作業期間の管理の問題も、各部署の連結の問題も、そのような状態でいい方向にもっていくという手法をとっていました。これもある程度年数がたってから、そういう交渉事がわかるようになったのです。

日本的に考えると、何が何でも自分が決めた日に終わらせる。そのためには、いかなる努力もしなければいけないということになります。でも、明確な理由

があれば、相手は（作業の遅れを）を容易に理解します。

就業時間は午前8時から午後2時30分までで、午後3時までには全員が門外に帰宅のため出なければならない。あるとき、次官の依頼で緊急の夜間業務があったんですよ。その夜、私が一番に役所に着いたが、門は閉ざされていた。門番に開門を要求したのですがドアを開けないんです。次官が、私のほかサウジ職員が来るから開門するようにと門番に伝達するのを忘れていたために、私が何と言おうと、彼は門番としての自分の義務を果たそうとすのでしょ、開けない。少し、サウジ職員の来るのを待つか、と考えましたが、「私は約束を実行したが、門番が入れてくれない。これは私の責任ではない。次官の責任問題だ」と考え、帰宅しようかと思いましたが、今夜の緊急業務は明日の午前中に王様側近に届けなければならない大切な書類であることを知っていたので、あとで誰かが我が家に迎えに来るだろうと思い、大事な最後の1日だったんですけれども、敢えて僕は帰っちゃった。そのあとサウジが来た。「仕事をしようって待ってる。けれども、（モウリは）来ない」と。僕は家にも帰らずに友人宅かなんかで深夜まで過ごしていたわけです。

翌日、次官が部屋に来まして、開口一番「自分のミスで昨晩は失礼した。あなたが腹を立てて帰ったことは、門番から聞いた。その後連絡が取れなかったのも、書類の提出は午後引き延ばしたので、頼む」と。

このことがあって以来、約束は果たすし、約束の時間は5分ほどの誤差で実行されるようになった。大変な進歩の一夜でした。

湾岸戦争のときに、ある地域の地図を王様の側近に送る際の様子をお話ししますと、飛行機はもう待たせているんです、役所の裏が飛行場ですから。特別に記入した地図一式の用意ができた頃、外務省から人が来る。それから、石油省から次官が来るわけです。地図を確認するわけです。「これです」。2人が地図を確認したところで私の役目は終わりのはずなのですが、次官が「それをしまってくれ。それは誰かにやらせなさい」と。僕は信用できる。しょうがない、僕が入れるわけです。封筒に入れて、封印をして渡す。渡すと、目の前で、次官が外務省の人間に渡して完了。次官が自分で梱包して封筒に入れて、間違ったら大変です、彼の責任です。こうすれば万一間違いがあっても、次官の責任ではない。それは外務省の役人が証人になる。責任の所在が自分からなるべく

ほかの人間に移すようにする。人間ですから、間違いがあった場合には言い逃れできる態勢にする。これほど緻密に計算していますよ。卑怯なのか保身主義なのか、一事が万事こうで、身を守るための手段には、我々には想像もできないほど神経を使っています。

外務省の人間から見ると、次官が僕に言って、僕がそれを入れることによって、彼の地位は保たれるわけです。万が一間違っても、彼（次官）は証人ですから、彼（毛利）が間違えてる、ということが明確になります。一事が万事そういうたぐいのもの、そういう精神は持っています。これがアラブです。

アラブの恐いのは、表面的な優しい友好的会話や交友関係も、裏面では正反対の場合があり、何を考えているのかを受け止め、判断するのが本当に難しい点です。後ろで何をやるかわからないですよ。信用できないのだから。けれども、いったん信用されちゃったら、またこれ大変。親切心というか、小姑というか、気配りなのか、すごいですよ。進言、提言が多いです。

そういうメンタリティというのはどこから出てきたんですか。何か遊牧民的なものなのでしょうか？

毛利 いや、そうじゃないと思う。彼らも自覚した上でだろうと思うんですよ。自分たちが物事を知らない。自分達のためサウジのために彼ら（毛利たち）は日本のJICAから派遣され、次官も信用してすべてを任せている。（すると）その人間の役所内での地位の位置づけというものは、彼らが盛り上げてくれるわけです。自分がつくらないでも、彼らがつくってくれる。その人間が、外部の人間が来ても恥ずかしくないようにしようという意見もあります。例えば、暑いですから、役所にポロシャツを着ていったことがあります。先にもお話ししましたが、局内には多国籍の技術者が大勢いますが、彼らはみんなポロシャツで来ています。だから僕も（着て）行ったら、数名の職員が来て言われました。「お前はほかの外人とは違う。ポロシャツを着るな。なぜかと言うと、ポロシャツはお雇い外人である。お前はそうじゃない。したがって、身だしなみはきちんとしてほしい。そのへんをわきまえてほしい」と好意的な注意を受けました。確かにほかのお雇い外人、フランスとかアメリカとか、とは接し方が違うのに気付きました。

外国人技術者には、プロジェクト契約上に技術者派遣が記載されているため

派遣される無償派遣の場合と、有償政府派遣の2種類があります。日本の場合は無償政府派遣です。そのためか、次官は私に「(有償派遣の)彼らには、お金を払っている。勤務時間中は休ませる必要はない」、目一杯使え、と過激なことを言いました。だから、過激であり柔軟であり、そのへんがよくわからない。

また、僕はたばこを吸っているでしょう。「たばこは体によくないよ。家族のためにやめるべきだ」と言います。それから日本大使館のパーティや他のパーティでは、妻と共謀して「タバコは止めるべきだ」と笑いながらよく言います。ほかの外人がたばこを吸って休憩していたら大変ですよ。「お前にはお金を払っている」と。

相手の立場によって言動の気遣いや処遇の異なるのを見ると、僕には理解というかよく整理できない、難しいところです。

信用度からいくと、役所ではなく個人的なお付き合いでもそうです。だいたい10日から2週間会わない、会話がないと、相手から「如何した、元気か、最近顔を見せないが我々に何か不始末があったのか」と心配して、連絡があります。したがって、努めて2週間以内に家庭訪問をし、親兄弟の男子家族とアラビア・コーヒーとお茶を飲み、食事をし、友好を厚くしています。やっぱり老人にとってはそういう付き合いが大切ですね。

カウンター・パートとは毎日会いますからいいんですが、父親とかおじいさんとかが、特にそういうふうに家族を思いやるというのが強いですね。したがって、自分の息子であり孫である人間と近い人間が、週をまたいで来ないのは、何か彼らの関係に問題があったのではないかと、それを心配するんでしょうね。

僕は年寄り好きですし、年寄りからいろいろな昔話を聞いて、現在のサウジと比較できるので、特に好んで年寄りに会うようにしていますが、年寄りがそういう家族の心配をしますね。それは僕を心配するのではない。自分の家族を心配した言葉だろうと思います。羨ましい家族愛です。かつて日本もそういうのがありましたよね。いまは如何でしょうか。

お付き合いの場では、毛利さんも相手の方の家族の心配をしないといけないということですね。

毛利 それは言葉を会話の中に当然入れます。一般的な挨拶でも、毎日会っている者同士でも、「お前は元気か。お前の家族は元気か、問題はないか、幸せか」というのは必ず挨拶言葉の中に、当初に入ります。最初会いますね。「こんにちは」とやって、お互いに「元気か」と言う。と同時に、あんたの家族はどうなのか、みんな幸せか、何か問題ないか、もしあればお手伝いするけれども、と言う。これが挨拶であり、会話の始まりです。それなしに次の話には行けない。考えられない。

毎日の仕事でも、毛利さんはまず30分話し込んでから仕事を始めるとのことですが、これを他の日本人の方たちは実践していないのですね。

毛利 こういうやり方が嫌だったら日本に帰ればよいのです。サウジにいるのであれば、相手が理解できる仕事のやり方をすべきでしょう。このところの意味の重要性を、日本側は理解していない。このほかにもたとえば、彼らは手ぬぐいを使わないので、挨拶でムタワとキスすると臭い。キスは20から30人が限度です。でも、信頼を得るためにはこのようなことに費やす時間が必要ですし、また、イスラムを理解する必要があると思います。

向こうが偉い方の場合、日本から行った場合には、そういう話はしてはいけない、すると失礼だというふうに私達は感じてしまうんですが。

毛利 そのとおりだと思います。例えば、言葉の内容を変えればよいと思います。「両国の気候は異なっていますが、その気候のもとでの貴方の健康維持法なり、意識や留意点は？」とか、言葉の内容を変えればいいだけです。これだけで十分にお互いが時間を掛け、うち解け合うことができます。その後、「あなたと自分の国はどのような関係であり、どのような協力関係にあり、おかげで日本は助かっている。逆に、あなたのほうにもうちのほうがこれだけ協力している。それについて何か問題ないか」などと、それぞれの立場から議題に入る。もし会談前に雨が降れば「私がこの国に雨を運んできた」の一声で、両者は和やかに急接近間違いなしと言ったところです。

お互いが幸せかどうか、そこに問題がないか。もしあれば考えましょう。家族であり国であり、役所であり、場を変えればいいわけですからね。そのあとで、立場、立場で、家族の話に落としてもいいわけです。もし家族の話や愚痴話に落として会話が成立すれば、その人はいい方向です。CからBクラスに行

っていると。あといかにしてAに入るかです。次回は予約なしにおいで下さい、で別れる、気さくな関係になります。

この間、東京の麻布にイスラームの学校ができましたね。開校式典があり、サウジから、宗教省から大勢の人が参列しました。僕は都合で欠席しましたが、夜のオープニング・パーティに参加し、久しくサウジの人と話をしました。たまたまその中に2人、リヤドの我が家と同じ町内の人、道の反対側に住んでいる人がいて、大笑いしました。また、髯の具合からムタワらしいのと両国の若者の変貌について語り合ったんですが、話の途中で彼は「どこの会社で働いていたのか」「JICAで、石油省で云々……」と話し、「貴方は何処で何をしているのか」と聞くと、彼は「宗教省で局長をしている」とのこと。世辞で「今度私がリヤドに行ったら貴方の所を訪ねるよ」と言ったら、「喜んで我が家へ案内しカブサ(羊料理)を食べよう」で別れました。そんなもんですよ。気楽に話すことですよ。

外交上であれば、外交上の挨拶が終われば、家族の話をしたほうがいいです。彼らにとって家族は大事ですから、家族の話をすると和みますよ。そんな堅い話ばかり出してやってもなかなか進まないですよ。

だからアラブ圏では、表現はよくないですが、誰かが「犠牲者」となって、最小限の人間の長期滞在というのが必要なんです。2年、3年でころころ人事異動で人が替わったのでは、相手を信用できるかどうかわからないですよ。次官も含めて全員が喜んだのは、僕が単身赴任の時ウィフを長期滞在で呼び寄せた。これがものすごく効果がありました。

ルベイシーの言葉に代えますと、「やっとお前、自分のウィフを呼べる態勢になった」と。僕は最後の1年だからと思って呼んだんですが、やっとな彼も安心して奥さんと呼んだんだ、という錯覚ですよ。

ちょっと戻りたいんですが、ルベイシーという方はもともとどういう出身の方ですか？

毛利 彼はウネイザの出身でして、リヤドから北へ300km、ウネイザ、ブライダという都市がありますね。カシーム地方です。サウジの中央の出身で、だいたい偉いのはカシームが多いです。それから、たまにメディナあたり人間が入っていますね。偉いのはだいたいそのへんでまとまっているんです。

名家の出身ということになるのでしょうか。

毛利 そうですね。彼は若いころにハーバードに行ったくらいですから、かなり資産家でもあり、地域の名家なんでしょうね。そのころ外国留学なんて考えられないですよ。

建国期に、初代国王をかなり援助したというような歴史を持った家系なんでしょう。

毛利 そういう話はしてません。ほかの人間とはしていますが、ルベイシーとはそういう話はしないですね。ルベイシーとは仕事の問題、それから歴史の問題が主です。

私は本で学んだだけですが、彼らは最初に会ったとき、まず、お互いにどこの出身だとか、いろいろ確認しあうそうですね。

毛利 やっぱり名前で見分かりますから、どこ出身というのは、……民族分布図をお持ちではないですか。

部族のですね。

毛利 あれを見るとだいたいわかりますよ。それから、方言がありますから、どの地域かというのがわかります。

コミュニケーションの取り方についてはそのくらいで。

毛利 次がアラ石問題ですね。交渉において日本政府の要人が登場した。サウジ側も、当初、なぜ民間の問題に官が入るのか不思議に思っていました。8年ほど前ですか、当時は、アラ石の問題について、サウジ側の態度がはっきりしなかった。あちこち聞きまして、石油省としては延長の方向でものを見ていることがわかりました。

その後、1、2年してから村山総理が来まして、「アラ石の件をよろしく」と王様に言ったわけです。総理が何を言っても、アラ石の利権に関して、王様はそんな“こまい”ことを知るわけがない。でも、一国の総理が王様に「よろしく」と言う。何が「よろしく」か分からないけれども、「いいですよ」という返事をするのは当たり前。閣議にかけて、「日本がこういうことを言っている。この際、もし各省庁で欲しいものがあつたら、日本に要求したらどう？」となるのは、これはアラブですよ。だれでもわかる。代償を求めよと。そういう方向になることは目に見えていました。

それから、数年後、アラ石も延長できるという方向で漠然とした返事は受けたはずで、その上で、機材を、ガス田をさらに拡大し整備するために、機材を投入しようと準備したわけです。あるとき、急に大臣のほうからストップがかかった。なぜストップなのか理由は言わない。数ヶ月後、また同じ返事なので調べたら、サウジとクウェートの領海域の国境問題がからんでいたらしい。しかしその確定作業も、その後4ヶ月以内には終わるはずでした。

ところが国境問題は、それから数年たって、やっと去年の7月2日にサインしたわけです。けれども、その前に鉄道問題でアラ石の利権更新は破棄されたわけです。国境とアラ石との関係はこれで終わりです。

あるとき、ルベイシーとお茶を飲みながら話していたわけです。そのときに、「今度日本で鉄道をやるようだ」と。「鉄道はどういう種類の鉄道だ」と聞いたら、「貨物だ」と。「それはルベイシー、おかしい。日本がもし鉄道に手を出すのであれば、高速ね。新幹線、モノレール、その他のものであればよし。けれども貨物に手を出すというのは考えられない」と言いましたら、ルベイシーは「お前はそう言うけれども、お前のところの偉いのが来て『やりましょう』」と。僕は信じられない。それで笑いながらお茶を飲んで終わったわけですよ。

数日してからルベイシーから呼び出しがありまして、そのとき彼はもう大臣顧問ですから、本省にいるわけです。僕も本省の彼の部屋に行きましたら、「日本はやっぱりやる」と言われた。

日本側はサウジ側の案を検討し、日本側の案を持ってサウジに来る。サウジ側と交渉に入る前に僕と話し合いをしました。「日本側で変更したい路線の位置が何箇所かあるが、これについてはどうだ」とか。でも根本的に考えが違うわけです。日本は盛土形式、僕はカット方式なんです。そのほうが土壌的にも安定度がありますし、工費的にもカットが安上がり。ところが日本の案は構造物の問題、それからサウジ側が認められない路線の位置の問題、を抱えていた。

サウジに見せる前に、「これを変更しないとサウジ側は悪い印象を持つから、この路線を変えなさい」と。構造物においては、例えば砂漠の上、当初の案では25メートルの橋梁をつくるというわけです。なんで25メートルか。「砂漠は動いてます」と。動くというのはどういう意味かわからない。僕が前々から言う「砂漠は移動しない」という方向に対して、真っ向からの反対ですから。ま

してや25メートルの高さ、そんな危険なこと、経費がかかる、危険度は高い、何を考えているのだと。日本の新幹線をいろいろ考えているわけですね。工費は3,000億。これも一番高いわけです。日本の高速道路のOB関連がやっている会社があるわけです、見積も高い。だから僕は、「少なくとも素人でも半分の値段でできる。1,500億」と。

ところが、日本が最後に出したのは、ペイできないという結論でした。サウジが言うとおりのレールを作った。作ったけれども、はたして運ぶものがあるのかなのか。サウジはレールを引かせてそれで終わりではないか。そういう心配が日本側にあったわけです。それで、ルベイシーとの話で、最後にそれをちらっと出しましたら、「お前、それは心配するな。逆におれは日本がちゃんとやってくれるのかどうか心配している。」「それはあんたがいつも言うことじゃないか。その論法でやっているんじゃないか。」「見てくれ」と。これくらいの厚みの資料がありました。全部、鉱物資源を掘削し、それを工場に運び、選別する、そういう計画です。計画図がもう作られているわけです。ここまでできているんだから、レールを引けば、全部運び出せる、と。

それはわかった。けれども、日本側で問題にしているのはレールを引いてもペイできないという点だと。なぜ燐鉱石にこだわっているのか、よくわからないのですが、この途中においては、ボーキサイトもあり、鉄もある。価値のあるものがあるじゃないか。こういうものを燐鉱石と同時に並行して運搬すればペイできるではないか。日本ではもちろん鉄鉱石は必要です。鉄鉱石は質がいい。含有量73%なんです。かなり効率のいい鉄鉱石です。こういうのを全部運べば、なんとかペイできる方法もあるんじゃないか。だから燐鉱石こだわるのは考え直したら、ということも話したことがあります。

日本側にもそれは話しました。ペイできないというのは、一つの燐鉱石だけにこだわっているからであって、その燐鉱石に関しては、誰が、いったいどう言い出したのか、は分からないけれども、中間の資源を全部集めればペイできるではないか。例えばボーキサイトの場合は、まず水の問題がありますよね。アルミをつくらなくてはいけない。この水の問題も解消しなければいけない。いろいろ問題があるではないか。ペイできる可能性はある、と話しまして終わったわけです。

クウェートにはいいガス田があるわけです。あれをちょっとのお金をかけてやれば、数十年もちますよ。50年の埋蔵がありますから。

アラブ協会にもこの間、ひとこと、ということでアラ石の問題を依頼されたんですが、僕も鉄道関係に携わった一員として、こうなったのは残念という言葉で結んでいますが、この明細については触れておりませんので、あれを見てください。

やはり見積りが高すぎたというのが、そもそもの原因ですか？

毛利 高いからペイできないのは当たり前よ。彼らとも日本側とも話したんですよ。日本側では砂漠は動く、だから、危険なんだと。僕はそのミッションに対して、「現地も指摘しています。この場所に行ってご覧なさい。カットするだけでいいんだ」と。「100メートル砂漠の部分を平らにすれば、それで十分だ。砂漠は移動していない」と。

僕は2年かけて砂の移動を調べました。その結果、それが言えるわけです。現に高速道路をつくって、砂漠の中をもう8年ぐらい通過していますから。それで問題が起きてないという現場も指摘しました。レールを通すのと同じような立地状況だからそこへ行ってご覧なさい、と言ったけれども、日本側はヘリで通っただけで、行ってないです。

砂丘は動くんですね？

毛利 砂丘は100年で崩れるのではない。継続するということで、移動はするんじゃないですか。生きていることは生きているんです。というのは、一つの砂丘の位置があります。この位置は瞬間的には数ミリ、数センチ移動するかもわからないけれども、1年を通して見た場合は、このトップはあまり変わってないんです。推定で100年で10メートルと言われていています。というのは、砂は飛んでいくんですよ。飛ぶということは、そのトップの砂の粒子が飛んだあとから補給されています。生きているか死んでいるかというのは、僕は砂漠の末端の2メートルくらいの高さのところ、ブルで砂丘を削ったことがあるんです。3年間で復元してます。生きているんです。砂丘のできる、発達というか、そういうのも一つのパターンがあります。

(しかし、砂漠は動かない。)砂漠の、ナフード^{*}砂漠に25メートルの鉄橋をつくって危険がないと思っているところが、僕は異常だと思っている。

それで僕は条件を出した。作るなら5メートルで結構、5メートル以上はいらない。なぜならば砂が、一つの粒子が風で飛ぶ。ぶつかりますよね。自分より大きいものにぶつかる。また飛躍しますよね。1メートルを越すのはまれなんです。砂の移動する高さは20センチから40センチ、これが一番多いんです。さらに安全を考えて、最大5メートルあれば十分なんです。それも、できればカット面でいくと。その5メートルをどうしてもとらなければいけないというのは大変なんですよね。それぐらいは平らにすればいいんです。十分にそれで通る。

それで、鉄道をつくったら、工事用の道路ができます。工事用の道路だけに使わずに、その下にパイプ・ラインを通したらどうなのか。コストは3分の1になるではないか。いろいろな条件を話しました。けれども、日本側はそんなことを考えていない。もう、鉄道は鉄道、ですから。そういう総合計画がないというのも一つの欠点ですよね。

これはサウジも悪いけれども、日本も悪いんです。日本が少し戒めればよかった。こういう問題はこうすれば高いから、こうすれば総合的に安くなって、お互いが利益あるじゃないか。なぜそういうことを先進国の人間が言えなかったのか、不思議でしょうがない。というのがアラ石の問題です。

やはり、こちらは彼らのためにやっている、という誠意を示さないといけない。こちらに御礼を言わないのは、彼らにとって当たり前のことです。……これに対して、東南アジアは指導に来た日本人を喜ばせて帰すことになりましたが、

あと4番に書きました利権継続派と接収・操業委託派の対立ですが、これは推測だけです。実際どうだったのでしょうか。

毛利 対立ではないですよ。対立という表現は違うと思うな。アラ石という折衝したのは、大勢います。大勢の方は一応賛成で、サウジとしては全体的に、先ほど言いました賛成の方向、延長でいこう、という気持ちがあった。そしてその上で、このルール問題が出た。周辺みんながルールを日本がやってくれると思ったわけです。どうして思ったかということ、日本に原因があるんですよね。

日本側が、アブダラー皇太子に、それから、別の日に石油大臣に、「任せておけ」という印象を強く与えてしまった。だから、アブダラー皇太子は日本に

来て、「あれをよろしく」で終わっちゃった。ところが、その結果がおかしくなってきた。

だから、日本が、特にアラ石が石油省に行ってもだれも相手にしないし、アポイントは100%まずだめです。もちろん廊下ですれ違って、何か話そうとねらっても、100%会ってくれないですよ。サウジ側のメンツを潰しちゃった。だから、いざこざがあったというのではなく、そういう経緯があったのです。日本側にはどういう具合に伝わったかわかりませんが。

与謝野大臣から替わって深谷大臣は交渉に行くためにサウジに向かったわけです、リヤドに。しかし、出発前に結論が日本で報道されているわけです。「この問題は受理できない」。確か、破棄するようなね、日本はこの問題に手を出さない、という。サウジ側が怒っているのは、「彼は交渉に来るんであって、その前になぜ結論を日本で発表しているのか、来る必要はないじゃないか」ということなんです。結論が日本では報道されて、その2日後、交渉に入っているわけです。だから、彼らが怒るのも無理はないよね。

その前に、(サウジ国内では秘密とされていた鉄道建設問題について、その)秘密が日本で守られなかった、(という問題もありました)。サウジ国内では秘密なんですよ、あのときは。ところが、日本でバーツと新聞が出しちゃった。日経かなにかで出した。情報がぼっと日本からサウジにいっちゃったんです。

サウジ側では秘密を守る必要があったんですか？

毛利 (日本から鉄道建設の情報がもれた後、サウジ側では路線となる土地を買い占めようという動きも起きました。サウジ国内では、サウジの間では、秘密は非常に洩れやすいので、情報はきわめて慎重に扱われることになります。)

(国境問題については、まず) イランとの問題、湾岸戦争が終わって2年目にして、アブ・ムーサが攻略されましたね。あのときもイランからサウジの外務省に公電が入りました。イランの領域にしたい、認証しろ、とかね。それで外務省の人間と石油省の人間と僕との3人で、たまたま僕はアラビア海の線引きをやっていましたので、アラ石の問題で。これはどういう意図があるか、どういう結果、サウジに不利益になるのか。イランがなぜアブ・ムーサを攻略したのか、その真意はなんだろうかと解析してくれというので。これはアラビア

湾を閉鎖するためであって、その証拠として、僕のほうではもうすでにその時点では別な情報を入れます。イランはアラビア湾を使用せずにインド洋に直接達するパイプ・ライン計画を持っています。したがって、サウジも早急にそれに対応する計画が必要であろう。そのためには国境、この何十年来、問題が起きているオマーン、それからイエメン、これを早期に解決しなければいけない。これは海を含めて陸も、大陸協定はありますけれども、もう25年前ですから、無視されていますよね。

第一、標石が遊牧民のために破壊されてないわけです。そのときの文章は座標形でなく、言葉で表現しています。あるところに立って、東に何が見えて、西に何が見えて、座標はないですから、それで座標を、位置を落とすための位置づけ、それを両国でやりまして、その前に線引きをし、十数本つくりました。それが政治のテーブルでだんだんいくわけですが、最後に一応合意しました。合意して、両国が立ち会いのもとで、一応仮標石をつくったわけです。これも一部壊されていますが、一応つくったわけです。これが第二の大陸協定で、確定と思った矢先に、いろいろ問題が起きました。地下資源の問題、これでゴタゴタやって、これも去年の6月26日にイエメンと調印しております。

イエメンも、約10年ぐらいかかるわけですがけれども、いつまでも国境をあいまいにしていけない状況に入っているわけです、経済的に。イエメンの低迷する経済を立て直すためには、国境を設定し、明確にしてから、現在の石油資源開発をしなければ、経済が立て直しできないので、そういう理由で国境が早まったと思います。

サウジがイエメンに対して相当に譲歩したと。もっと強く出ればもっと取れたということですか？

毛利 でも、結果的には取っても意味ないことで、将来大事なところさえ侵略されなければ、少々のは問題ないし、またイエメンが経済的に立ち直ってくれないと、また摩擦が起きますから、平均年4人ぐらい殺されていますから、サウジ人も。前線基地というか、国境の近くには陸軍が駐屯しているわけです。これも1週間いたことがあるんですが、こんなんじゃサウジの兵隊はだめだと思ったのは、朝からフル・コースですから。住む場所も完備、娯楽施設もありますし、給料は5割増しと言ったかな。「お前、なんでこんなところ

に来ている」と言ったら、「いや、給料がよくなる。手当がね。だから、来たんだ」と言っています。

小競り合いはあるわけですか。

毛利 小競り合いはあります。だから、基地も司令部も三重のフェンスで囲っています。それでもまた問題が起きる。それから、兵士に国境守備の意識が少ない。

アラ石の問題（に戻りますが、あれ）は、決して摩擦ではなく、対立ではなく、サウジ側関係者のメンツをつぶしたため、結果失敗と。

それからこれに関連して、鉄道がいまアメリカ、フランス、ドイツなんかでいろいろ基礎計画を出しています。けれども、鉄道が完備されるとは思えない。というのは、鉄道が完備されて、一時に大勢の人間を移動することが可能になれば、国内では飛行機がいらなくなる。そうすると、王族が持っている利権が失われるわけです。するとその子分連中一族を守るためのお金が、実入りがなくなります。だから、僕は鉄道が思いどおりに完成するとは思えないですよ。自分の首を締めるのと同じですから。

人口も、一応公表は1,234万なにがしかなんです。そのうち外人が400万入っている。僕は1,100万にはなっているだろうという気はしているんですが、実際のところ800か900ぐらいかなという気がしています。人口調査はかなり正確にやったんです。国別、年齢、単身か家族か全部やっています。というのは、これは大蔵省が管轄なんです。石油省もわれわれも大蔵省を手助けして、遊牧民のテントの位置を座標形で落として、そのあとヘリで大蔵省が行って調べたんです。市内では全数調査をやったので、本当に正確に数字が出ているはずなんです。

僕がアトラスをつくったときに、総合的に計算したら合わないんですよ。

いま800万か900万とおっしゃったのは外国人の数ですか。

毛利 全部サウジ人です。あと問題は教育問題ですよ。それに絡んで、出生率が、自然増加率3.8%あります。人口はどんどん増える一方です。当然、現在もそうですが、これから先においても失業率も高くなるわけです。帰国前に外務省の人と大使と夕食会がありました。そのときにいろいろな話から、サウジの将来の安定性ということで話がありまして、僕は、5年以内になんらか

の問題が生じなければおかしい、と言った。そのなんらかというのは二つあって、一つは教育問題、もう一つは国境問題。これは自分がやったからよくわかるんです。国境問題は先ほど言いましたように、去年終わっちゃったんですが、幸いにして去年の11月、僕の思惑だった教育問題でハイジャックがありました。ご存じと思いますが、サウジの2人がハイジャックをやっちゃったわけです。うまい具合にやれば、もっと大きな力で成功の確率はあったんでしょうが、思いつきで2人でやっちゃったから、すぐ投降したんでしょうけれども、目的は、僕の思惑が当たっていたというのでうれしかったわけです。不見識な話で申し訳ありません。

学生の数と、これを受け入れる教室の数の問題、これが合わないんですよね。近いうちに、自分の子どもが公立の学校にも行けない、という問題が生じる。これはもう目に見えてわかるわけです。国の平均からいきますと、1クラスが22人、女性の場合は23人という数字が出ています。けれども、これは都市集中型のサウジでの全国平均値ですから、リヤド市など大きな都市、十大都市においては1クラスが40人ぐらいになっています。金持ちの人は私立に行っています。18歳以下で44.6%の人口を占めるんです。言ってみればモニュメント・スタイルなんです。年寄りも少なく若いの、20歳以下がワットと広がっている。

学校は約20年の間にやっとあちこちに建ちましたけれども、それだけ収容する能力がないですよ。去年あたりから学校建設がはやっているんですが、間に合うはずがない。これはアトラスをつくった各省庁で将来の不安が芽生えたんです。でも、建設しだしたのが去年からですよ。

義務教育というか、小学校、中学校、高校までの人員が、男が182万9,000です。学生です。女が164万8,000です。合計が347万7,000。正確には347万7,419名。これは95年調べです。学校数は男のほうが9,399、女子学校が9,643校あります。

先ほど言いました都市集中型というのは、結婚のあり方にも問題があるだろうということで、結婚のあり方の分布も調べてみました。やはり都市部、といっても貿易のための海岸都市は同族結婚が少ないですね。内陸部に入れば入るほど同族結婚がある。知的障害者の数は正確にはわかりませんが、かなりの数

字があると思います。

例えば、僕の知り合いの家族80人くらいのうち、平均して4人から5人の数の知的障害者がいます。病院を調べましたら、知的障害者のベッドはだいたい半年から1年待ち。推測数值は出せないんですが、この数值だろうと思うんです。

障害のある人用の養護学校みたいなのはあるんですか？

毛利 まず病院ですね。病院の中で養護的手段を採っていると思いますとにかく病院。

毛利 専門の病院があるんです。リヤド市の中心部にも。それで半年から1年待ちなんです。同族結婚が多いでしょう。どうしても知的障害者が出るんです。それも子どものうちがいいですよ。僕の友達なんか、彼よりも子どものほうが大きくなって車イスに移すのに、腰を痛めて、しばしば役所を休んでますからね。家庭内介護はフィリピンとかインドネシアとか、東南アジアの人間を使って介護させているんですよね。だから、外人の労働人口という、数值の上ではかなりの大きな数值ですけども、その内容というのは、むしろホーム・ワークで多いのではなかろうかと思うんです。ほとんどが家庭内に入っている。

というのは、湾岸戦争のときにイエメンがイラクに共鳴しましたね。それで50万のイエメン人を帰国させて、いま一部は入れています。その50万の穴埋めとして東南アジアの人間を受け入れていますし、一昨年、アブダラー皇太子が日本に来る前に中国に寄りまして、中国と約束したのは、去年度、昨年、おとしです、10万人引き受けるということでした。だから、レストランとかサービス業に中国人の姿が目立っています。と同時に、家庭のメイドさん。これも中国人が、フィリピンよりは少ないですけども、目立ってますね。だから、正確な外人の労働者というのは公表していないと思います。推定もできない。

ルベイシーの話ではないけれども、「あんたの帰り道は空港だ」というのに近いような感情を持っているのがアラブだ、とわかるのは、彼ら外国人の労働者は雇用されて3ヶ月はテスト期間だという点なんですよ。3ヶ月、自分の体がもたない、帰りたいとなれば、自費で帰らなければいけない。ところが、彼らは来るときに借金をして来ているということを、サウジ人はよく知ってい

ます。というのは、ビザを取るのでもお金がかかります。どうしても自前でできないので、借金して来るわけです。だから、彼らは嫌でもなかなか帰れない。必ずエージェントを仲介にして来ていますが、そのエージェントも、なにがなんでも3ヶ月を1日オーバーするまで我慢しろ、ということを行っています。3ヶ月を過ぎれば、具合が悪い、いやだと言って帰っても、雇い主の負担なんです。それはエージェントが知っていますので、入れる前に、「お前、3ヶ月と1日がんばれ」とやっています。お互いに公募制。

それくらいアラブは人使いが荒い。24時間態勢ですから。ましてやラマダンがあったら余計です。彼らが寝る時間、彼女たちは働かなければいけないし、彼らが起きているあいだは起きているし、大変。それで3ヶ月間、もうさんざん使って、ボロみたいにしている、ダメならば自分のお金で帰れ、ですから、それはかわいそう。だから逃亡者がいるんです。逃亡しても、あちこち行けないから大使館に来ます。大使館だってそれだけの予算を持っていませんから大変です。フィリピンなどは大使館だけで200人ぐらいいます。彼らをかかまっている。途中で路上で捕まって監獄に入っているのももちろんいる。大使曰く、「予算がないから大変なんだ」と。「じゃそれを養うのはどうするの」と言ったら、彼らはボランティアで、フィリピン人同士が助け合おうということで、お金を出したり食糧を出したりモノで出したりしてやっているらしいですよ。

うちのワイフなんかも彼女たちのグループから頼まれて、古くなった洋服だとか、使わない洋服を寄付してくれ、ということをやっていますよ。

フィリピンだけでなく、ネパールもそうだし、インドもそうだし、悲惨だよ。中にお腹が大きい娘もいるし。報道なんかとかで、サウジに犯されてうんぬんというのがありますよね。彼女たちにも原因はあると思います。うまくいけば楽しくお金をたくさんもらえるとというのが根底に、そう言ってはいけなけれど、ありますよ。その結果が、思惑が外れたから、彼女たちも文句を言うわけでしょう。どっちにも問題があると思うね。

5番の王族の中の世代間の発想の問題、これは現実にあると思います。若いプリンスはかなり先進的というか、彼らはもう外へちょいちょい出てますから、アラブのイスラムの戒律の厳しいのは当然重荷になっているわけです。何とかしたいと思うけれども、宗教省があり、イスラムをやっぱり守っていくという

上においては、守らなければいけない。そのへんの摩擦があります。けれども、それも少しずつ緩和されています。

例えば6年前にブライダー事件というのがありました。このブライダー事件とは何かと言いますと、サウジ国民が円滑に豊かな生活ができないのは王族、政府が近隣諸国に援助のためのお金を使いすぎているからだ、政府はより国民の生活を見るべきだ、ということでブライダー地域でデモがありまして、一部のムタワを先頭にしてやったわけです。

これを解消しようとして内務大臣ナイーフが中に入りまして収拾にあたったんですが、結果的には失敗している。ムタワは正論を出しているわけです。国民のためにまずお金を使いなさい、その上で周辺国を助けなさいと。これはムタワが言っているわけです。

こういう集会はよくないから中止しなさい。これはナイーフの言い分です。ムタワは、「ではわれわれはデモをやめよう。その代わり申し出の、政府は国民により目を向ける、ということ約束してくれるか、それを署名で返答をし」と。それができる、できない、でもめまして、結果的にはなし崩しになった。その上でナイーフは、金曜日の礼拝のときに拡声器を使って路上で大きな声でワーワーやるのは慎みなさい、ということで決着がついたわけです。それほど内務省も力がちょっと弱くなってしまった。トーンを落としちゃった。それが影響して、いまナイーフは力がないんですよ。その隙間に乗じて頭角を現したのがリヤド州知事、シャルマン。ナイーフが落ちると同時に、このシャルマンが、ちょうどアブドゥル・アジーズのリヤド奪回100年祭を期して催しをやったわけです。

僕も手助けしたのですが、アブドゥル・アジーズの歴史のアトラスをつくらうということで急遽やったわけです。ここでもってワーツと名前をあげるというか、力を出して、それでいまはシャルマンなしに進まないくらいです。そのくらいシャルマンは力がついています。(鉄道問題で)失敗したのが次男、アブドゥル・アジーズが失敗した。しかし長男は色男で、宇宙にも行きましたしね。だから、いま王室の中はそういう諸問題がごちゃごちゃとしています。言ってみれば戦後時代かな。

これからどうなるか見極めるのが大使館の仕事でしょうけれども、大使館の

能力に疑問があります。前の丹波、いまロシア大使、だったらそのへんの見極めができます。あの人は政府内に入り込みましたから。それ以外の大使は入れない。ということで5番の王族の問題は終わり。

今度は戻ってムタワの問題です。そもそも『コーラン』には絶対この時間にお祈りしなさいという規制はないわけです。1日5回、日の出前、日没、それから日没後、(それから)その中間、ちょうど真ん中の、お昼過ぎにあるのと、お昼と日没の間にあるのと、合計5回です。そうなっているわけですが、これも一応地域的に時間は分単位まで出ています、暦の上で。けれどもリヤドとマッカ、マジーナでは30分ぐらい違います。ではイスラムとしてなんでその時間にやらなければいけないのか。やるのはしょうがないですけども、すべて(その時間に)するというのはおかしいじゃないか、と日ごろから話しているわけです。

サウジの欠陥は、政教分離されていない点である。お祈りは、社会のこれからの国の発展に妨げがある。これに同意するのがサウジには何人かいるんです。「そうだそうだ」というのが。以前はそういう話は個人同士でなければできなかったのが、いまは大勢でお茶を飲みながら、そういう会話ができるようになった。王様の悪口も前は言えなかった。ところが今は、あのファハドは良くないとか、みんなの前で言えるようになりました。それほど情勢が変わっているんですね。

あるとき、僕の専門の分野ではないですが、印刷物の研修をしなければいけない。そのときに途中でやめちゃうんですね。なんでやめるのかと言ったら、「お祈りが入るから」。あと30分継続すれば終わるのに、なぜいまここでやめるのか。これはルベイシーとは関係なく、ムタワの問題ですから、それで一度ムタワに許しを得ないで継続させた。そうしたらムタワが怒ってきまして、「なぜお祈りさせない。問題だ」、「そういうお前が問題だ。『コーラン』のどの章に『この時間を守れ。一切を中止しろ』とどこに書いてあるんだ。1分1秒も間違いなく全員がやらなければいけないというのは、社会の発展のためにもよくない。今回の場合は、あともうちょっとで終わるじゃないか。いまやめて、次にやると、半日おかしくなるんだよ。文句があるならルベイシーに言え」。

それを何度かやっているうちに、「そもそもお前が安心できる方法は何かと

いうのをおれが考えてみる。一つの工程上で何時間かかるという目論見があるだろう。それを逆算して、お祈りの時間から逆算した時間に終われば、そのあとローラーやインクをきれいにする時間をとってお祈りに入れるではないか。それはお前たちの管理職の問題だ、長の下がムタワですから、「これと話し合っ、これが作業計画ではないか。そういうふうにしたらどうなんだ」ということで、なんとか和解はしましたけれども、えらい剣幕で叱られましてね。イスラムでない人間がお祈りをさせなかったということですね。でも、話せばわかります。結局、お祈りの時間前に段取りが終わるように彼らが努力するようになりまして。計画性が出たのですね。彼らは怠け者ではない。食事を終わって夜9時から朝2時、局長を真夜中に職場に出させたこともあれば、忙しいときには休暇も返上させた。どのようにして彼らに生産の喜びを与えるのか、それが問題ですよ。

それからというものは、そのムタワとは、イスラムは素晴らしい、イスラミヤは良くない。「お前見てろ、町中を。いまの若い人間を見てみる。あれはイスラムか。あれは良くない」。彼らも知っています。イスラムは徐々に弱くなって、ということも知っています。けれども健気に守っている。そのうち何十年かしたら変わるんじゃないですか。顔をオープンするまでは行かないでしょうけれども。

サウジの人に宗教論争を挑むというのは、こちらでものすごく準備をしないと、ちょっと。

毛利 一般的には論争は避けたほうがいいと言いますね。けれども、僕は大いに論争したほうがいいと思う。そもそも皆さんはこういうアラブ、イスラムの研究ですから、当然『コーラン』はご存じの上での話でしょう。ならざるはずですよ。

具体的にどういう宗教関係の勉強をされたんでしょうか。

毛利 『コーラン』を読むだけよ。簡単じゃない。読んだことあるでしょう。

ええ。

毛利 じゃ、知っているでしょう。僕がいつも言っている論法はそれなりにあるわけですよ、奥の手が。「コーラン96章は1章に来るべきだ」という話

題は、サウジ人が好きな共通の話題で、よく議論をしました。111章は、ムハンマドの個人的感情である、というのが読んでいるうちにわかるわけじゃない。

そういう論争史のようなものを何かお読みになったんですか。

毛利 ただ僕は『コーラン』を読んでいるだけよ。『コーラン』を読んでいると、よくわかるじゃないですか、それが。111章を見れば、ムハンマドの幼少時代の歴史が書いてあります。生い立ちが。どうしてああいう文章ができたか。96章はなぜ96章なんだろう。オマールの奥さんの編集が悪いからなんです(笑)。

なるほど。

毛利 論争は彼らも喜びますよ。まず、焚き火について、焚き火の周りに子供がいる、その子供の背中を火の方に押し、脅かしてやるじゃないですか。あれをやったときサウジはどう思いますか。111章をもし知っていたらわかるはずですよ。火をなぜ彼らは嫌いますか。仏陀は死後、火できれいに燃やしてしまうのではないかと。なぜ必ず彼らはそう言いますか。個人的な感情でしょう。彼らにとっては火で肉体を燃されるというのは最悪なんですよ。

だから、僕はいつも言うわけです。日本はかつてはイスラムと同じように土葬だった。その証拠にタテ穴式もある。これは弥生時代から。のちにヨコ穴になったけれども、これはサウジだって、タテはいまでもエジプトにあるけれども、そのうちにヨコもあるだろう。ハーイルのアジャ山にヨコ穴式がありますからね。日本の過去の歴史とまったく同じだ。ただ違うのは、いま日本は火葬というやり方だということ。これはサウジで言う、イスラムで言う砂と、日本で言う、東洋で言う火はほとんど同一である(からだ)。サウジの場合、アラブ圏の場合は砂は水と同じように清潔にするもの。アジアにおいても火は清潔にするもの。意図は同じである。日本では場所もない、湿度も高い。埋葬、土葬すればバクテリアもわく。衛生上よくない。それで100年ほど前あたりに、政府が、火葬という方式を用いなければいけないということにした。それ以前にも火葬はあった。現在、インドでも火葬はやっている。けれども、ああいう式とは日本は違う。より衛生的というか、昔はインドと同じように、木材で。いまはちゃんとした施設で設備を整えてやっている。材料は昔は木だったが、いまは重油またはガスでやっている。今は電気もあるらしいですね。それぞれ

に土地柄でもって、それが文化の違いだ。だから、お前たちが仏陀をうんぬんする。(でも) あんた方は仏陀を知らないはずだ。そもそもムハンマドは仏陀を知らない。ムハンマドはダマスカスに二度行っているだけだ。国外に出ているのはね。その人間が仏陀を知るわけがない。なぜキリストを彼が認めているかという、いろいろな歴史の上もあるけれども、ムハンマドが商業隊の旅行で2度行っている。そのうちの一度クリスチャンの老人に会っている。そのクリスチャンに「お前の目は素晴らしい、澄んでいる、お前はいつか偉い人間になるだろう」と言われたのがきっかけじゃないか。(だからあんた達も) 仏陀に会ってないからそういうことを言うんだ、ということ言うわけです。

また、仏陀と『コーラン』とはかなり接近している。「事実そうだ」と言うサウジもいるんですよ。日本に何度も来ているサウジは、日本の宗教に興味を持ったので仏教を少し知っている。これは真面目に。

解釈をめぐる理論ですよ。つまり、極端に言ってしまうと、『コーラン』の解釈を踏み込んでやるということになりますね。そうすると、これは宗教関係者にとっては大問題になるんじゃないかと思いますが。

毛利 そこまではオーバーに考えない。個人的な話ですから。そこで彼らはちゃんと教えてくれますよ。イスラムはこうである。お前の考えは違うと。だから、そこで勉強ができますよ。自分が間違っただけを言ってもいいんです。相手は専門家ですから、教えてくれる。

それから、一番最初のアラビア語をどうして覚えたかというのは、最初のころはテレビが1チャンネルしかなかったんですよ。「母を訪ねて三千里」とか、ああいう画像を見てわかるやつがあるわけです。アラビア語はもちろん出るわけですから、勉強をしたいというときにテスト問題になる。そのドラマを見るために、毎日テレビを見なければいけない時間帯があるわけです。翌日、それを表現するわけです。それでアラビア語を少し勉強する。

もとは日本のアニメですか？

毛利 いやいや、インドとかエジプトの「母を訪ねて三千里」みたいなやつがあるんですよ。絵で見ればわかるわけです。「ああ、これ日本の『母を訪ねて三千里』だ」と。昨夜の画像はこういうストーリーだったということなんとなんとか話すわけです。その中で、向こうが、間違っただけを教えてく

れる。僕の何らかの表現が正しいかどうかをわかって、それで意志疎通の仕方を知るとか、言葉を知るとか、そういう方法でやっていました、市場のほかには。だから、一時は日本人とのお付き合いはよしたこともあります。

というのは、毎日、第二の石油省と言われて、うちに夜、みんな集まっていますから。うちで彼らが食事をつくってくれたり。僕は飲み物をいつも何ダースも買っておくわけです。彼らは肉を買ってきてくれて、庭でバーベキューをする。で、料理の仕方も覚えたよ、そんなわけです。

8番目の「日本に対する印象」です。これはいいですよ。ひとくちに言って、良好、好ましい印象だったんですよ。それにはまず第1番目に、日本の製品というのはトラック、車とテレビです。それから、ラジオ。トラックを含めて、日本製品はまず壊れにくい。ピックアップというのをご存じですか。あれが当時流行ってまして、金持ちはメルセデスなんですよ。プリンスはキャデラック、一般はピックアップというくらいにはっきり分かれていた。ピックアップは砂漠の中を走っても故障が少ない。燃費なんて考えていませんから、安いわけですから、燃費よりまず故障が問題になります。で、これはアメ車と違って、日本車は壊れにくいですよ。もうどこを走っても、砂漠を走っても。

これはテレビの影響、週刊誌の影響もあるんです。週刊誌でアメリカ、ドイツ、オランダ、フランスだったかな、それから、エジプトがあって、日本があって、子どもの教育、数学の問題、なぜ日本人は頭がいいかという問題が出たわけです。週刊誌によりますと、日本には算盤がある。算盤というのは指先でやる、目で見ると、頭でやっている。三者が一体となって算盤をはじいている。だから、算盤の玉がなくても、指の動作で頭に描いている算盤で計算している。だから、素晴らしいんだ。これが基礎で、基礎教育すべてが日本は素晴らしい。世界の（教育水準の）ランク、そういう（ものを計る）テストみたいなものがあるんだそうですね。この中で（日本が）毎年1位を取るの、こういうところに起因するのだ、というのがありました。

そのほかにテレビでは「おしん」ね。これもつい最近までのサウジとまったく同じだ。苦労して、自分の基盤をつくって、努力が報いられたということは、まったく同じで、「おしん」の家族内における動作、行動、ものの考え方とい

うのは献身的である。これは見習うべきだ。従来のサウジもそうだった。けれども、最近の若い人間には見せて教育しなければいけない。僕は、日本のいまの人間には『コーラン』が必要だと言っている。

そういう背景で、イランからエジプトまで、あの辺一帯で「おしん」はすごい人気なんです。「おしん」はサウジで2回放映されているんです、ラマダン時期に。だから、よけい視聴率もいいわけです。その反面、サテライトでヌード、セックス映画を見ている老人もいます。けれども、お祈り時間になると、ちゃんとお祈りしている。終わると、あわてて帰って来て、続き見てるくらいで。何をやっているかわからない。

それからまた別な老人は、嫁さんをもraitたい、第二夫人をね。その奥さんはもう目がちょっとかすんで、白内障で、夕方なんか特に危ないので、車に乗っける場合、僕が手を引いて車に乗っけたりするわけです。あれはもう古いからだめなんで、若い嫁さんが欲しい。サウジの嫁さんは高値。だから、シリアに行って、シリアで探せばいいじゃないか、という話になりました。それについては、どの女がいいかお前と一緒にいって、お前が定めてくれと。では、検査の方法はどこまでお前許すのかと、そんな話なんかしてね。やっぱり第二、第三が欲しい訳ですよ。

奥さんが出産で実家に帰る。その間、待ちきれないから第二夫人をもらう。金のある人はわりとやりますが、2人、3人というのは少ないです。うんと上級か下のほうかどっちかです。中間は1夫1妻。これはムハンマドも言っています。1人が一番いいんだと。もし力があれば、2人、3人、4人までがいい。けれども大変ですよ。2人、3人、4人は。彼らはそれだけの力がない。だから、いろいろな話があると、そっちのほうの話になりますよ。どうしたら精力がつくか。それから、避妊とかなんとかというのはよく分かんない訳ね。子どもができないとか、すぐできちゃうとか。一応、オギノ式を教えてやるわけです。でも生まれた後、すぐまたできちゃった。「お前の言うのは正しくない」と言い出した。よく話を聞いたら、最初のスケジュールを出産とは全く関係なく、ずっと同じやつでやっている。「お前バカか。なんのために出産後40日間、夫婦が別居するか。こういうことをまず考えなければいけないだろう。それから、データを出してやらなければいけない」と。そういう基礎知識がない。

うちのワIFEもかなりあちこちで奥さん連中の話でそういう話も出ます。それから、娘の中には、イスラムに逆らって身だしなみがかなり変わっています。女性が断髪ね、髪を短くして、さらに茶髪にしている娘もいます。こういうのもいますから、サウジは内部では変わっています。もちろんエジプトあたりでも、ものすごく変わっています。イスラム全体がそうではないですかね。

欧米化？

毛利 欧米化。だから、若い連中はショッピング・センターでもダボダボのズボン、ポロシャツ、丸首、ちょっと大きめな、そして帽子を逆にしちゃってね、全く、アメリカナイズですね。そういうものを見た上でムタワと話す。「イスラムは素晴らしい。イスラミーアは良くない。お前どう思う」、「おれもそう思う」と言います。ムタワがそう言う。そういう点でムタワとは話ができますよ。「いま日本でもこうだ。サウジだけじゃない、日本もそうだ」ということで、ムタワと理解し合えます。これは最初話した、会ったときの仕事前の挨拶、これとまったく同じテンポですよ。公式的な感じでお互いの話をし、お互いの状況を話し、家族なり友人なり、そのほかイスラムも入るだろうし、いいところ悪いところを話して、人間お互いが打ち解けるんじゃないですかね。堅い話ばかりではいけないですよ。どんな偉い人だって、シモの話は面白い。それには少しネタを持たなければ、「アラビアン・ナイト」ではないけれども。

日本に対する印象についての質問を書いたときには、確かに日本はこれまで、非常にいい印象を持たれていたけれども、今後だんだん悪い印象を持たれるようになって行くんじゃないか、と考えたんですが。

毛利 一時は悪かったですよ。でも、最近はお互いが努力しているでしょう。いい方向になりつつあるんじゃないですか。

悪かったのはいつごろですか。

毛利 アラ石が終わる6ヶ月前からですよ、悪くなってきたのが。これはサウジの話なんです、ある噂が流れた。これはダンマン地域から流れてきた。「お前、こういう噂がいま市内に横行しているよ」、「なんだ」、「アラムコは病院なり道路なり、すべてをきれいに町をつくってくれている。けれども、日本のアラ石は油を主に日本に持っていきただけで何も貢献していない」と。

これに対して、「アラ石がアラムコに比較して貢献していないというのは嘘

だ。何も無い土漠、これをいまのカフジという町にしたのはアラ石の力じゃないか。あそこにアラ石があったらこそサウジが集まったんじゃないか。そのために銀行もできた。病院ができた、学校もできた。それを見て、お前たちはどう思うんだ。お前たちが自分の国の歴史を知らないからそういうことを言うんだ」ということを反論したわけです。

よく考えてみて、日本からちょっとおかしい話も流れてきた。どうも中に不調和ができていて、鉄道の問題だね。それで、サウジ側の誰かがその感じを受けとって、自分の保身のためにアラ石を悪いようにしておけば、自分が少しは助かるのではないかと考えたのではないか、という気がして、それはサウジにも話したことがあります。そこまで考えなければいけない。アラブという国はまともに話は聞けないですよ。その裏は何かということに絶えず僕は会話の中で思っている。彼の言っているその裏は、なぜ彼がそれを信じるのだろう、その話は彼にとってどういう利益があるかと考える。それがアラブですよ。

アラ石の件で言えば、私は3月に行ったんですね、カフジに。サウジ側が完全にオペレーションをアラムコに任せているのかと思ったら、そうじゃなくて、まったく日本に任せたままの状態なんですね。これはクウェートを待ってから考えようとしているんですかね。

毛利 それ3月？ いまはもう完全にアラムコの操業です。

ジョイント・オペレーションで、実際はアラムコ流に完全に変えるのではなくて、いままでのやり方をそのまま維持していくということですね。

毛利 ただ、日本人は別にして、それ以外は給料体系まで争うでしょうね。まだクウェートが続く以上はそうするのがお互いが一番いいことではないか。それを切るわけにはいかないでしょう。もし切れれば、サウジとクウェートの問題ですよ。

クウェートがはっきりしたら、アラムコ流にやるかどうかを決めるんですかね。

毛利 お互いが今後の話をしてんだから。生産だけでもね、しておけばいいじゃないかと。最初からそれをやるべきだった。そういう案を出せばよかったのね。依怙地に鉄道にこだわっちゃったから、すべてがおかしい。クウェートの問題が2003年1月ですから、これをどうするか。アラブ協会にも書いてあ

りますが、官民一体になって考えなければいけない。中長期的な戦略を考えなければいけないのではないですかね。いま日本はイランに片寄っているけれども、それでいいのかどうか。

操業だけやらせてくれと言っていますけど。

毛利 でも、いまそれはできないでしょう。クウェートの問題が解決しなければ。クウェートがガス田をかなり重視しているわけです。石油も大事だけれども、これからガスだと、ガスにかなり力を入れています。

それもガスも輸出するのだったら、RPを上げようと、契約をしている。国内で利用するのだったら、オペレーションするだけ、と。自分のものだと言ってる訳ですね。書いてあるんですね。だから、いずれにしても東京に本社があるような会社であり続けるのは難しい。

毛利 僕はだめだろうと思うんだけど、サウジがこういう結論を出して、じゃクウェートは独自にやりますと。これは難しい問題ですよ。サウジのメンツもあるでしょうし。だから、そこをうまく具合になんとかいい方法がなければ。

でも、日本国内で行われる新聞報道はやけに楽観的です。

毛利 楽観的に書いているのは、小長さんがそういうことを言い過ぎているのではないのか。本来は、小長さんが責任を取るべきでしょう、あの時点で。取らずに、ほかのアラブ通のみんなをクビにしちゃって、自分とある重役だけが残って、「いま一生懸命クウェートでやっています」では通らないでしょう。そういう立場の人間が悲観的なことを発表するわけがない。いい方向に、明るい方向でニュースを出さないと。

サウジの外交の感覚なんですけど、例えば、今回、日本がイランの油田に対して大きな投資をするといった場合、それはサウジから見ると、日本は自分の国益を守るために当然のことをしている、というふうに考えてくれるか、それとも、オレという国がありながらなんていうヤツだ、というふうに考えるか。

毛利 サウジ側がそう考えるのはごく自然ですよ。イランにある数字がいずれ公表されるでしょうけれども、なぜあのとき2,000億出さなかったのかとか、そういうバランスが入るでしょう。それが入る前に、いま大使も一生懸命

やっているのは、いかにしたら日本とサウジが昔のように仲良くできるか。そのためにサウジはものすごく努力しています。今年に入って二つかな、大きなミッションが来てますよ。投資に関して説明会も開いてますしね。投資という意味合いから言っても、アラブと東洋、日本人の考えがかみ合わないんですよ。

サウジだけではないですよ。カタル、オマーン、バハレーン、GCC、だいたいあのへんはみんな来ました。アラブはこれだけの条件を出します、とやった結果、彼らはかなり譲歩しました。税金の問題、土地の問題、これらはみんな協力しますと。日本の企業に来てくれと。けれども、日本からはそれらしいいい返事はいまのところ出てないのではないですか。

その次に来たミッションも同じようにやりました。この間、来たのはサウジだけです。商工会議所関係、商工会議所が中心だな。でも、一生懸命やりましたよね。ところが、過去の実績が日本にとって印象がよくないんですよ。

というのは、製薬会社がある場所を決めた。契約をしたあとで、さあ建築が入ろうとしたら、そこはもう契約が終わっているから、お前のところはこっち側の場所だと移動させられた。それでも移動を了解して、さあ工事に入ろうとしたら、その下に下水管か何かがあった。それを移動しなければいけない。これで2億損している。やっとなんとか本工事に入っているらしいです。

この間、商工会議所が来た中で、それとは別に小規模なサウジ紹介コーナーを開いた。サウジ大使館でパーティがありまして、そのときにミッションの(メンバーでもあった)オーナーといろいろ話をしたわけです。そうしたら、「駐車場をつくりたい」と。(そして)「日本でやりたいというのがいる」と紹介されたわけです。「どういう駐車場？」と聞いたら、「近代的な駐車場をつくります」、「場所どこ?」「ホーフだ」。そのオーナーに、「お前どこにいるんだ」、「ホーフだ」と。要は自分の土地に何か目新しいものをやりたいわけです。日本人とは、その(店の)社長に(なる日本人と)話した。ホーフがどういところなのか、近代的な、また近代的でなくても、立体的な駐車場が必要な都市なのか、そういう立地条件を調べましたか?と聞いたら、「いや、彼がつくりたいと言うから作るんです」。そういう考えですよ。

あんなところにつくって、オーナーは喜ぶ。けれども、数年したら、日本に

だまされたとはいいますよ、使いものにならない。それほど車がないんだから。だから、ただ目先でやりたいからやるじゃだめなんだよね。

ちゃんと言ってあげなくちゃいけないんですよ。責任ですよ。それはね。

毛利 だから、僕はそのオーナーにも話したんです。「お前の周辺に車がどのくらいあるか」、「いや、作りたい。彼（日本人の社長）も作ると決めた。いいじゃないか」、「いいよ、いいけれどもあとで文句を言うな」と。そんなもんですよ。

日サ合同委員会では、サウジに日本企業が来てほしいのは間違いなさそうなんですけど、例えば、マーケティング、デザインなど、仕事のやり方の提案が欠けているのではないのでしょうか。

毛利 日本のレベルでの話をそのまま持っていっても彼らは理解しないですよ。彼らには、具体的に何をしたいのか分からないとか、マーケットが広いということの戸惑いがある。市場調査を日本側も十分行っていない。

けど日本には期待はしてるんですよ。まず、頭がいいね。

ルベイシーの言ではないけれども、彼ら（日本人）の考えていることはよくわからないけれども、あとで必ず「ああ、よかった」という立証を彼らはしてくれる。これが日本人です。ヨーロッパ人と違って言葉の風呂敷は敷かない。ヨーロッパ人は口がほとんど主役で仕事をやっちゃうでしょう。実際とは違って。そういう点は日本を信用はしているんです。根底はいまでも変わらないはずですよ。一時の小さな出来事、アラ石の問題があったにせよ、この考えは変わらないと思います。

逆に言うと、何千億円も出して、そんなものをつくるよりも、かえって今までよくやってきた、という見方もできるわけですね。商社の人達は、これから着実に人口も増えるし、やるべきことはいっぱいあるし、自分たちの仕事をやっていくと言っています。

毛利 商社の目的はまた別なんです。数字の上で、生活用品を何か、必需品を輸出できる。それは本当にサウジのためになっているのか。そこまで考える必要はないのかもわからないけれども。例えば水資源の問題が一番いい例ですよ。海の生態系が変わるというのを認識しているかどうか分からないけれ

ども、海水から飲料水をつくればいいという考えだけではもう(だめではないでしょうか)。

放出口付近の海水温度が高くなっている。温度だけでなく、塩分も高くなっているはずですよ。海洋生態系が変わるのは当たり前でね。確かにサウジは水が必要なんです。ならばもっと自然の水をいかにして蓄えるかというのが、これからやる(植)林の問題ですが、こっちのほうがより大事だと思う。なぜ日本はああいうところにもっとより積極的に出ないんですかね。

95年から、JICAは、環境アセスの方針をとることになっています。

毛利 欧米なんか大きい風呂敷広げて、この案を飲んだら、何年後に雨が降るとかね。そういうことは、日本は謙虚だから言わない。やった結果、だめならしょうがない。

だから、アラ石の問題だって、僕がアラ石に提案したのは、すぐに要求を受けなくて、しばらく話し合いを続けた後で契約する形をとるべきだと。ならばここで「じゃやみましょう」と。「けれども、最初の案は良くない。自分のところとお前のところと共同で、もう一度調査し直そう」。サウジは「うん」と言うに決まっています。それで3年か5年かけて、結果、できませんでした。それ以前に『利権延長』が合意されているのですから。(利権延長の合意をした後で鉄道問題を話し合うという)そういうやり方が得策だと思います。ごまかしようもないんですよ。サウジを巻き込んでやって、その結果、できなかったと。やるだけのことをやって。これは実に不可能だとやれば、それでいいわけです。その前にサインしている。これは欧米のやり方です。なぜそういう手を使わないのかね。それを話したことがあるんですよ。詐欺だと言ったけれども、詐欺でけっこう。でも、本当の意思は詐欺ではないよ。やることを前提とした意思でもってやるんだから。結果は見えている。けれども努力はするべきだ。たまたまその前にサインをしちゃっただけの話じゃないのと。そういう発想が違う。

JICAの宣伝をしないともらえない。

毛利 いまJICAの仕事も本当に難しいんだよね。これ、中国もそうだけれど、専門家がいますからね。専門職がいろいろ悩んでいますから。でも、往々にして企業主導型が多いですよ。いま牛木さんがやっているのは、それこそ

地味すぎて目につかないんだけど、本当はそういうのが大事なんですよ。地道なやつが。両国にとっても。もっともそういう理解ができないから、日本側なんか。

人的資源開発について、JICAは2年単位なので、このようなことはもともと無理なんです。やはり長期的な視野に立って事業をすべきでしょう。技術移転はできると思いますよ。彼らは繊細だ。だからやればできる。いかにやらせるかが、問題なんです。肌のぬくもりの時間をかけると、彼らはできるようになる。これが本来のJICAの技術移転の精神だと思います。

アトラスを作る提案をした。彼らにとっては絵で理解することがしやすい。古いアトラスの更新ができていない。各省庁の担当者にやらせることにしたら、彼らはやる気を出した。3年でできた。日本では10年かかります。彼らに興味を持たせるテクニックがあれば、彼らはやる。そのやり方がやはり問題なのだと思います。

サウジ人のスタッフにいかに力をつけさせるか、という場合、まず彼の父親から本人をほめてもらって、家族と本人をその気にさせてもらったことがあります。「やればできる」という気にさせる。何度かやると彼は仕事の中心になる。そうすると彼に「役」を与える。そして権力者に作り上げる。ただその場合、1人が抜きこんでると彼らはたたき合いをするので、「役」につけた人間に対しバック・アップが必要となります。

JICAには国別地域別研究会があるんです。事例中心で学識経験者、専門職、JICA一般職課長以上が参加するもので、1年以上かける研究会です。ここに、場合によって現地事務所の意見を入れるべきではないでしょうか。現地事務所の意見のプライオリティーは低く、研究会が現地の情報を基礎にしている、とは言いがたいのが現状ではないでしょうか。JICAの所長の権限を拡大すべきだという気がします。

毛利 友好、交流、全体を考えた作文をJICA所長が行うが、これを日本では理解できない。中期・長期戦略が日本にはないんです。それはJICAだけの問題ではなく、日本の政府や商社の場合も同じではないでしょうか。そもそも、アラビア石油がああなったのも、日本に政策がなかったためです。日本政府と日本国民そのものに、地下資源がないという認識がないから長期政策がな

い。あるいは長期政策が公表されていないので国民は知らない。

金を出せば石油は買える、という考えが一般化していますが。

毛利 十数年前、アジアの産油国は将来輸入国に転ずるので、今のうちに外務省、JICAはきめ細かい対応をする必要がある、と言ったことがある。これに対して、外務省の幹部は「1にコリア、2にアメリカ。石油は金で買う」と言った。アラブは砂と言われるが、その場では甘いことを言う。だから、我々はその裏を考えて行動しなくてはならないと思いますよ。

私は1990年6月に、湾岸の動向がおかしい、とJICAを通して、アラビア石油に言ったことがあるが、社長に危機感は無かった。

表に出なかった話だが、イラクがアラブ諸国にイラン・イラク戦争時に借りた戦費を返すと意思表示をした。これに対し、サウジは返済を要求しなかったが、クウェートは全額返済を要求した。クウェートの全額返せという意見は、基地を作りたいアメリカの意向である。いつ火がついてもおかしくない状態を、アメリカは作っているじゃないでしょうか。クウェートをけしかけ、緊張関係を作り出している。

湾岸戦争で、アメリカの軍事産業は利益を得た。エジプトは、ムバラクが儲けた。借款は棒引きになり、アラブ圏のリーダーの地位を得たし、失業対策が可能になった。損をしたのは日本だけだ。

プロジェクトは「要請主義」だと言われますが、1994年ODA白書以後「要請主義」という言葉を強調しなくなっていますね。

各省庁の下部機関ADICAが、国建協「プロファ」と称して。相手方に売り込む形をとっています。

毛利 例えば淡水化システムについては、当初JICA担当だったんですが、現在はメーカーが担当で、JICAには結果の報告が入るだけの形になっている。その結果、淡水化が20年後にどのような影響を海洋生態系に与えるのかを調べてはどうか、とアドバイスをしても、企業は関心を示さない。どういう状況になれば淡水化事業を中断するべきか、まで相手に提示すべきだと思う。今のままでは、相手のことを考えて事業を進めているとは言えないのではないですか。

日本側は気が短くてハデ好みで。サウジは、特に周辺国とは感情が違いますよね。周辺国は貧しくても、心は豊かでしょう。サウジはお金はあって、心は

なんか卑しいところがあるんだよね、ガメツイというか。

いままで話した中で矛盾はありますが、つかみようがないのがサウジです。僕はいつもひとことでサウジを言うと、「アラブ特にサウジは一握りの砂だ。握っている間は砂は自分の手の中にあるけれども、開いたら終わりだ。みんな落ちちゃう」と。

ヨルダンの知り合いなんか、収入や生産は少ないけれども、心は豊かだね。ヨルダンの友達夫婦なんか、われわれを招待するのに、友達から金をかき集めてパッとやってくれます。つらい顔はしない。小さな子どもまで。ああいう子どもを嫁さんにしたらいいなと言っている。それくらい素晴らしいね。シリアもそうですが、ヨルダンも豊かですね。ヨルダンにおられてどう思いますか。

そうですね。ずいぶんサウジ人とか湾岸人とリアクションが違う。おっしゃる通り湾岸人の中でも、クウェート人、サウジ人とでは、ずいぶんものの考え方が違いますけれども、おしなべて昔から貧しい所のほうが人当たりもいいですし、ホスピタリティもあります。

だからといって、私はよくこれを引き合いに出して、サウジ人、クウェート人は目の敵にしますけれども、決して私は湾岸勢が心が貧しいというわけではなくて、スレているとは感じてはいないんですけれども、ただ、ちょっとディフェクションが全然違って、ヨルダン人やシリア人なんかのものの考え方、身の振り方というのが比較的日本人には理解しやすい。湾岸の人々のほうが、我々には、更に、わかりづらい。振る舞いの仕方が。そう認識しているだけだと思うんですけれども、いずれにしてもサウジ人の中に入ってみると、かなりホスピタリティもありますし、ただちょっとベクトルが違うので、びっくりしてしまいますけど。

話は飛びますが、特にサウジについて、どうやって今後仲良くしていくべきなのか。いずれにしても仲良くせざるをえない。歴史的に見てもそうですし、それから、いかにしていくべきなのかという議論が、特に98年をピークに行われていましたが、いまだにはっきりとしたかたちが出てこない。どうしても目がアラ石ならば最終段階の鉄道の話になってしまいますし、多角的な見方という点から言えば、先ほどおっしゃった話の中、アラ石がなくなったのは実はよかったのではないかと、というこの考え方は一つ納得がいくかと。その反対の意

味もありますけれども。と申しますのは、実はアラ石という縛りがなくなったほうが、一度ゼロ・ラインに立って、また方向性を決められるいい機会になるのではないのかなと。アラ石がありますと、アラ石に目が向いてしまいますし、アラ石を切って何かと、大きな一步を踏み出せない。アラ石の契約が終わってから感じています。ただ私としても、今後どうやってサウジとの関係をさらに深めていけばいいのか。もちろんいまのところサウジ側のリクエストは投資の話がいろいろありまして、いかに見えるかたちで投資を持って行って、雇用が増えて、サウジに、国として未来を保障してあげられるかだと思んですが、これも去年の秋に急にできた話ですし、帰国したばかりですから、そこらへんのところをもう少し私なりの意見をとします。

ただ、ヨルダンとサウジという話に戻りますが、ヨルダンもいいですし、われわれにわかりやすい面が特にございます。ヨーロッパにも近いです、ものの考えが。サウジというと、ちょっと普通の日本人から見ると見にくいですし、比較すると誤った解釈をしてしまう。別に彼らに悪気はないんだけど、つい悪気に取られるようなことをやってしまう。

毛利　いまの中で、サウジがわかりにくいと。お互いが同じ気持ちだと思うんです。それは文化の交流がないからね。サウジが日本を知ろうという努力も少ないし、日本もまた同じ。サウジを知ろうという努力がない。また、その環境がないということね。まず環境づくりが必要である。では何をもって環境を作るのかと。ひとことで言って、交流なんでしょうけれども、そう容易に交流ができる国、相手国ではないですよ。今、観光がありますけれども、それも制約されている。ではサウジが日本に来るかということ、これも男子のみでしょう。女性はごく一部であって、女性の観光団体というのは考えられない。

だから、アラ石がこういう結果になって、むしろゼロになって逆にやりいい。なにをもってやりいいのか。では目標があるのかと言うと、いま言われたように、目標がない、やりいいだけである。ところが(残念なことに)、いまJICAでいろいろやっていますが、これは単発なんですよ。

自動車連盟が一昨年(1999年)の1月に来たときに、「日本は自動車整備学校を作りたい」ということになった。僕が話したのは、日本が協力するからには、サウジの法的改良も必要であると。日本は一つのことに猛進するのではな

く、付随したものの、例えばその人は自動車関係で来たわけですが、自動車整備学校をつくる。それもけっこう。自動車整備学校をつくったならば、卒業生に資格を与える。資格を与えるということは、名誉を与えると同時に、将来の就職の斡旋においても有利になるようにしなければならない。社員数 名以上の、修理工場を含んだ車関係の会社では、資格を持つサウジを 人雇わなければいけない、という営業条件を付ければ、これはどの面からいってもサウダイゼーションに最適である。そして、ただ単に車を売買したり修理するのと同時に、そのパーツをサウジ国内で作るように日本がやったらどうなのかと思う。

大手メーカーだけが出るのではなく、大手メーカーに付随して中小企業が向こうで輪を広げる。こういう方法でなければ、ただ単に一つの電子工学院を作った、で終わってしまう。これも今年の3月で終わりですよ。大学まで行った。けれども、就学率が何%なのか、卒業した人間は何%なのか。卒業して社会に役立つのは何%なのか。これは驚くほど数字が少ないんです。彼らが役所に行って何をやっているか。マネジメントというか、机に座っているだけの話で、これ1年もしたら忘れますよ、学校でやったことをね。

たとえば、工業電子学院(GOTOVET)(現在は短大)の場合、卒業生の進路を見ると、この学校で学んだことが役に立っているのが3%、そして彼らは課長をしており、現場で作業をしていない。この例から分かるように、車の事故が多いから、板金や塗装技術の援助を、と考えても、サウジ人はハンマーを持たないと思いますよ。サウジが何を必要とするかを考えず、日本の考えでやっても失敗するだけだ。この場合、サウジ側と話し合い、資格制度をサウジに作ってもらい、その資格を持つサウジ人を何%雇用する、という形にしないと技術協力しても役に立たないと思います。JICAは強烈に相手に要求して、つまり、これが通らなければ援助する必要はない、という強い態度で要求し、見返りも求める関係を、強い意志でとり結ぶべきではないでしょうか。欧米は日本がなぜ無償援助なのか不審に思っていますよ。

学校で学んだことを忘れさせないためにも資格制度が必要なんです。日本がもし大きなお金を使って協力するのであれば、向こうもそれなりに法改正をしてくれなければ困るんです。会社なんて大きな問題ではないんです。いま現実にサウジがサウジ人を5%使わなければいけないという規定を出しているん

だから、それに付随させればいいんです。

例えば、5年なら5年先以降は、こういうところの学校を出て、こういう資格を持った人間を就職させないと営業はできないと、それをひとことやればいい。これは決して難しい問題ではないと思う。一つのものからいかに幅を広げるか、それが両国間の大きな、アラ石以上の絆が保てるということです。いままでアラ石があって、両国間の大きな強い絆があったわけですが、これが切れちゃった。

先ほどから言っている商社にとっては良かったと思われるかも知れないけれど、その代償は何かというと、ないわけでしょう。じゃ、「いい」という言葉を使うなと言いたい。計画があるのならいいですよ。数年後、アラ石を動かすだけの絆が保てる計画があるんですか。これからやるでは話にならない。うわ言に過ぎない。

アラブ流に考えると、彼らには必ず代案というものがが必要です。目にぶつけないと。僕はいま、自動車連盟でやろうとしてる事なんかは最適だと思っているんです。だから、連盟が来たときにそれを話しているんですが、どこまでいっているか。あれに通産が手を出すらしいですね。最初の話が大きくなっちゃってる。

建物の話になっちゃうんですね。

毛利 ええ。政府が手を出すのであれば、喜ぶ。さっきのアラ石なんかと同じですよ。取れるものは取っちゃえ。やるのなら、最初のとおりリヤドでやればいいんです。場所も決まっていたのだから。なぜジェッダに行ったのか。向こうの政策の問題、だれかに利益があるんでしょう。じゃ、商社がいまここで、アラ石がいなくなっていいというのは何かモノを売る。どういう分野で開発しようとしているのだろうか。

発電機が売れるとか、そういうレベルです。

毛利 発電機を売っても限りがあるんだからね。修理工場が必要でしょう。売るのは目先の問題。それをいかに維持するか。ソニーが一番いい例なんです。ソニーの所長ともう一人修理する（人と）、2人の技術者がいた。これでソニーが一気に上がったんですよ。日本人がいるというので。日本人がいなくなったら、だめですよ。安い方へ行ってますよ。

この車の件も、いまサウジが欲しいのはハイテクのエンジンだとか何とかじゃないんですよ。板金とペイントなんです。塗装だって資格を与えればいいんだよね、技能職。電気といっても、大きな発電はあと何箇所か、3、4か所あるくらいでしょう。それから、都市間のコントロールをする変電所、これもだいふできて、まだこれから増えるだけですから、力を増そうというだけの話です。これも有限です。そうすると、やっぱり継続しようと思うとメンテナンスです。

電気、水でしょう。それ以外に何がありますか。日本を離せないというものは。

主立ったものはその二つ。

人、教育。

IT。今みんな盛んに口約束をしているんですよ。

毛利 IT言うんであったら、GOTOVET（工業電子学院）だってあるわけですから。ところがこれも3月で切れちゃったでしょう。これをもっと継続させればいいのに、なぜ継続してないんだろう。いまリーダーが文部省から派遣されている視学官の人でしょ。それだけの先見がなかったんですかね。だって、GOTOVETを除いて、ITを生かそうといったら、またゼロからやり直しです。あそこは高校ができて、短大ができて、これをなぜ延ばさなかったのかね。あれは復活できないんですかね。

相手をもし巻き込むのであれば、あと農業開発ですよ。農業にITがかなり使えると思うんですね。何か大きなものを、品物の売買などは値付けがわかりますから、もっと大きな力の、根強いものがないとね。

それにはまず第1番に人的交流が必要ですよね。両国間にそれぞれの国のセンターをつくるのが一番いいんだよね。サウジに日本センターをつくり、そこに行けば、日本のすべてがわかる。本当は大使館がやらなければいけないんでしょうけれども。

サウジでは人脈が大事ですから、時間をかけ、信頼を得ることが大切で、相手側と関連する人間を作らないといけない。ちょっとサウジとの付き合いに戻れば、サウジ側の力は、大学、学位、人望がどれだけあるかで示される。一番怖いのはパーティーだね。力の表現は、パーティーに何人集まるかで示される

ことになるから。

人脈づくりといえば、アラビア石油において、30年間にわたって毎年サウジ青年を日本に招いてきました。年間30人を超えています。これまで数人が日本に残っています。招聘青年の中に石油大学のフセイン・アーナミー教授がいますが、彼以降、光る人材が出ていません。貢献としては素晴らしいが、成果は出ない。どこに原因があるのでしょうか。

毛利 招聘青年の名簿はあるのだろうか。懇親会はあるのだろうか。日本在住のサウジ人のパーティーをサウジ・サイドではやっていない。

サウジ国内では、結社の自由がないからできないのではないのでしょうか？ シリアの場合はシリア政府が抵抗しました。研修生が偉くなって、ようやく同窓会組織ができました。小さな区域でやればやりやすいのではないのでしょうか。この点については日本人会で話をしました。8年前です。大使館は作ると言いました。アラビア石油も住所、電話番号の資料を持っていますが、内容が新しいかどうかは不明です。これは大使館に渡してありますが、しかし後の追跡がありません。人脈づくりの大きな欠陥は、多くの会で、フォローがないことです。サウジ留学生も苦労しているので、今、問われるべきだと思います。クウェートではちゃんとやっているらしいです。

毛利 また、ポイントを作る必要がある。そのためには、先ほど言ったような「犠牲者」となる人間が必要でしょう。サウジへの派遣が、最初から5年ないし10年という期限付きでは無理だ。大企業が進出する場合、関連する中小企業も同時にサウジに入り、下請けで直接サウジ人と手を組むところから関係を拡大してゆく必要がある。自動車連盟が行っているような、タイヤやチューブをそのまま持ってゆく、というやり方では、製品はサウジ製になるが、サウジ人のためになっていない。子会社を引き連れて行き、5年から10年以上サウジにとどまる「犠牲者」が出てくれることが重要ではないのでしょうか。

IT化については、電気、水のほかに何かありますか。ただ単なるITでなく、その使い道、どういう分野に広げていくか。

家庭に入れていこうと。教育もそうですし。国土広いですから、教育には相当使えるんじゃないでしょうか。

98年の10月、例の日サ協力アジェンダ第1回のケースとして、サウ

ジの教育省から2人、社会科と地理学の先生方を送ってきて、初のケースとして受け入れていますが。なぜ第1号が教育関係者なのか。いろいろな分野があるのに、なぜ教育関係者が最初に来たのか、びっくりしてしまっただけですけども、それを見ていると、日本の強さというのは教育だろうというのが、まずサウジ国内でコンセンサスがあって、サウジも強くするにはまず教育から考えているようです。おもしろいのは、高等教育省ではなくて教育省から来ている。基礎教育を充実させようというミッションが来てまして、実際、受け入れてみて何なのかというと、一般的な教育メカニズムのほかに非常にコンピュータ教育、ITですが、それをいかに教育に日本は結び付けているのかということに関心があったので、ITというと、どうしても教育という面に彼らの熱い視線が注がれているところだと思います。

どうなんですか、蓋を開けてみたところ、日本はそんなにパソコンがない、というのが実情ではないでしょうか。

毛利 逆にサウジのほうは、女学校がIT教育をしていますから。日本はそこまでいってないですからね。ただ、サウジもITの中でゲーム(分野)がありまして、それが一時中断された時期があるわけです。商社がやれば、たぶん賭博精神を持ったおもしろいやつでしょうね。これは禁止されているわけです。だから、相手の国情を考えて商売をしないと、長続きしないですよ。

だから、教育だとか医療とか、そういう面で、僕も一時それをやろうとしたわけです、数年前に。というのは、地図情報を石油省が一手に全部(集めて)、IT化のためにデータ・バンクをつくったんですよ。基礎まではつくったんです。全部座標形で、あと機材をどう搬入するかが問題でやめたわけです。ITで、各省庁が3点座標を押して縮尺を押せば、自分の必要な地域の地図がポンと出てくる。これは経済的だし迅速であって、すべて無駄なくなるということを訴えて、そのセンターをつくろうとしたわけです。基礎まではできた。基礎をつくったけれども、実際というと、これはお金がかかるので、ちょうどサウジも貧乏になりかかっていたのでやめたんです。各省庁がつくらないと。

(でも)例えばサウジで成功すれば、ほかの国でもできるんです。同じことをやればいいんですからね。そういうことを、もう一度日本も見直して、最初のデータ・ベースから考えると、ITというものはできるんですよ。同じ教育

でも、人文地理から入るか数学から入るかで、えらい違うんですが、人文地理から入るのが一番実用的ですよ。

やっぱりカーナビとか。

制約が多いですね。センサーをしてますしね。要するに情報を流せない部分というのがどうしてもあるからね。

毛利 それをセンターで押さえればいいんですよ。例えばITの中には、光ケーブルもあるだろうし、いろいろな分野が入ってくると思う。だから、決して単品ではいけない。そこに幅広く広げる何かを付随させないと、過去のアラ石には勝てないと思います。

4年ぐらい前、サウジ国内の基幹都市に対して光ケーブルを引くという話があったんですが、どうなっちゃったんですか。

毛利 立ち消えですね。いずれやるでしょうね。

あのときは、10年だか15年計画でやっていくという話が出てました。

毛利 その前に、電話回線を5人に1本つくる。1日500回線を開通しているわけです。一時期。地域で、それぞれ違いますけれども、これは実施しているんです。だから、それが終わってからではないですかね。余裕をもって、それからケーブルに入る。遅いけれども、逐次やっています。

宗教的な教育時間というのは減らさないんですか。

毛利 だから、僕は教育省に話しているのは、人文地理から入れと。なぜならば、子どもたちが自分の周辺国のことを知らないじゃないかと。

小中高のこの時間が変えられない以上、高校を出たあとに職場教育をする、というのはすごいですよね。

毛利 基礎がないから。その基礎をやろうというときには、そろそろ固まってくるわけだから。

これはもう変えられない、というのがサウジの……。

毛利 いまのところね。これを変えるべきだ、変えなければいけない。

減らないですね。これだけ宗教をとっちゃえば、後の時間、無いですから。

これは本当にねえ……。

毛利 大変。

2番のサウジの大人にとって理想的、あるいは尊敬に値する人間像とはどういう資質を持った人間だとお考えになりますか？ この3月サウジに行ったときにマスコミの方から、「私は日本のサムライに憧れているんだ」というような話もありまして、彼らがよしとする人間像とはどのようなものか、と考えてしまいました。

毛利 やっぱり努力ですよ。例えば田中角栄。彼は小学校を出て一国の総理になった。これは彼の努力です。同時に、日本はそれだけ開けている、というのが、サウジを批判している言葉になるわけです。サウジではなるべくしてなっているのと違って、日本では努力によってなったんだと。そういう相反する両面を持っているんですね、角栄がいいと言うのは。

大国であるロシアにかつて日本は勝ったと。第2次大戦であれだけ破壊された国が、数年の間に世界の経済大国になっちゃった。その理由について、彼らと比較して僕がいつも論法でやっているのは、第2次大戦で、広島、長崎でも日本は壊滅状態になった。これがなぜここまで来たかというのは努力だと。いま食べるものがあるても手を付けない。明日のためにということで現在をしのいだ。それが結果的にはこうなった、という説明です。

よく欧米で批判する。日本人を働きバチみたいに、蟻みたいに、言うけれども、人間がある目的を得るためには、努力なしには得られない。そのためにはどうすればいいんだ。働かなければいけないだろう。時間を惜しんで働かなければいけないだろう。そのために空腹がある。多少の無理は我慢しなければいけないだろう。その結果が発展だ。サウジにそれがあるか。何かというと外人を使う。これではまずい。と同時に、宗教面でもお祈り時間が設定されている。この間にすべての店が閉まるのは良くない。良くないということは、政教分離しなければいけない。ところが、政教分離をすると王家は崩壊するだろう。王家を守るだけに、イスラムはさらに堅固でなければいけないだろう。これは理解するよ。

キングダムである以上は、これは破れない。じゃ、キングダムが破れたらどうなるだろう、という論争も彼らにだってあった。でも、結果は、一致するところは同じなんです。というのは、まず支配者になるのに、いまのところリーダーとしての人格はだれもわからないわけですから、もし金があって、知名度

があるとなると、プリンスになるでしょうね。地方的にはサウジの国内は三つに分断される。けれども、結果、現在の王族の誰かがそれぞれを取るんだろう。ブライダーみたいに、あるムタワがワーッと出てくるということはないだろう。そうすると、いまの王制でもいいじゃないかと。

そこまでサウジは話せるようにはなったということです。彼らも将来を考えています。どうなるかわからないけれども、いまの状態では悪い。けれども、これを壊して、その結果、どうなるだろう。結果は同じではなからうか。

そういうものを壊すには、教育が必要である。それから、外国も見なければいけない。外国の文化を知らなければいけない。自分の国がいいのか悪いのか、それを批判しなければいけない。これは父親はみんな思っています。少なくとも半数以上のパーセンテージで思っています、サウジで。そういう、いま大きな過渡期だと思うんだよね。アラ石問題が入り、これからの日本が資源を求めてどうするのか。イランに片寄って、サウジを切るのか。切ればクウェートも切られるのか。僕はむしろオマーンを大事にしたほうがいいと思う。オマーンとかイエメンね。出てるんだから。イエメンがこれからは穴場ですよ。株で言うなら、買い時だ。大使館関係者には、しっかりやらなければと話しました。丹波さんみたいな人がいるとね。

丹波大使はどう違うんですか。

毛利 あの人にはもう赴任時から言った。自分はほかの大使と違って政府内に入ると。事実入りこんでいる。奥さんも一緒に。

それは知り合いを増やすということでしょうか。

毛利 奥さんが女性のパーティを多く開いて、得た情報は早い。外務省なんて問題なし、大使館も問題なし、奥さんの情報が大きかった。

そういう意味では岡崎さんもまだ名前が出てきますね。

毛利 岡崎さんは、あのころはまだそういう状況じゃなかったですね。岡崎さんはむしろ商社を大事にした。岡崎さんは戦略では日本よりアメリカに名が知れている人です。僕は丹波さん、岡崎さんはいいと思う。政略的にはよかったと思う。あとの大使が悪いとは言わないけれども、特に悪いのが一人いる。岡崎さんは戦略家だよね。アメリカのペンタゴンでは有名ですから。日本では名前は売れていないけれども。

岡崎さんは口も八丁、手も八丁ですね。何をやっても最後は勝つ。ブリッジはAクラスでしょう。書道をやるしね。百人一首、和歌、ああいう古典もする。それからマージャンはする。賭け事は好きでね。あの人は賭博器具買ってくれた。確かにやり手だ。

日本大使館の役割については、どうでしょうか。

毛利 イラクには30数箇所のミサイル基地があったが、湾岸戦争の時、日本大使館はイラクのミサイル基地を19とした。アメリカ大使館から航空写真をもらい、数えたら19だったそうです。しかし、アメリカは日本に完全な情報を渡すはずがない。

湾岸戦争の時の大使館の実態は、女性を脱出させるための切符を手に入れることもできなかった。民間人は数ヶ月前から国外に脱出していたのに、大使館はそれを把握していなかった。また邦人に動揺を与える、という理由で、JICAの専門家は出て行けなかった。地図については、湾岸戦争の時、日本以外の国はストックしていた。しかし日本大使館は地図をもっていなかったので、石油省の地図を利用していました。危機管理が不十分でした。また、日本大使館員の任国の人間との交流は無いに等しいです。

日本人のビジネス・マンの方との付き合いは？

毛利 立場上、あんまり付き合わないようにはしておりました。故意に。もちろん挨拶ぐらいはしていますが、深くは入らない。ただ、サウジを案内するとか、ピクニックだとか、そういう自然相手のときで、道案内とか解説とかそういうものはしましたけれども、それ以外はしてないです。個人的にはゴルフではお付き合いはありますけれども、仕事に関する一切のことは立場上しない。

外部から見るかたちで、こんなことをしなければいいのにな、というような事は？

毛利 それはさっきから言っているように、来て、挨拶して、ガタガタッて来て、パアッと帰ってね、返事もろくすっぽしないで、「帰りましたら」とか「本所に伺い立てます」とか。「ヤツはいったいなににきたんだ」と。

まさにアラ石の交渉ですね。

毛利 代表というかたちで来るから問題があるんですよ。日本を出るときには権威があっていいかもわからないけれども、向こうに来て、代表でなかっ

たら、ただ単なるメッセンジャー・ボーイです。それから、商社の人とわれわれは立場が違うので、ものの見方、考え方が変わりますけれども、商社の方はサウジ人を好きになれない。なれないし、個人的な交流がないですよ、第一。商社はそれをやろうとしないですね。いままで見ていて。言葉で実際にやっているのを見たことがない。第一番に居住の問題ね。コンパウンドのいいところに入ってしまおうでしょう。コンパウンドにはサウジ人を入れにくいです。ああいうみだらな環境の中には、サウジ(側の管理者)から言わせると、ショート・パンツでタンク・トップで屋外を歩き回るコンパウンド内部に(サウジ人を)入れたくない。現に、問題が起きたんですよ。あるマンションのプールで男女一緒にテニスをやっていた。それをムタワが見て禁止しちゃった。テニスをやる女性はアバヤを着ろ、と言った。アバヤを着てできるわけがない。そういうことがある。

したがって、いいコンパウンドは、日本人、欧米人にとっては住みよい場所でも、彼らは決してサウジを呼べないし、交流はできない。だからといって、日本人が彼らのところにばかりに行くと、サウジは卑しさを感じる。ヤツらはうちにばかり来て、招待もしないで卑しい、となります。呼べないわけです。交流は自然になくなりますよ。

だから、商社の人間がもしサウジをうんぬんするのであれば、彼ら自身も反省した方がいい。だから、一軒家に入りなさいといたいね。それだけの努力もしないでサウジの人だけを批判する。相手を知ろうとしないで、批判が多い。

商業ベースだったらことさらですよ。ただ、他国の企業との競争も厳しいですね。フランスがパイプ・ラインを建設した時、スペックがなかった。フランスはパイプを地面に並べるだけで何もせず、サウジ側に日本のスペックを示させて、それよりも低い価格を提示し、仕事を取ってしまった。更にサウジとの交渉も厳しいですからね。一応契約するでしょう。お金を払う段になって、また値切れ、ですからね。パレスチナと同じですよ。和解は問題の始まりなんです。契約はこれから値切る始まりなんです。約束しただけなんです。そこが違う。だから、商社の方はサウジを嫌うでしょうね。それから、金払いが悪い。

商社だけじゃなくて、サウジ人同士でもそうですよ。それで農水産省大臣が

やめちゃったからね。農業政策はよくなった、成功した。ところが、農産物の代金を払わない。3年間、遅配ですよ。王様との板挟みになって退職しました。

日本企業が、納期が遅れた事により問題が発生し、裁判にかけられた。石油省が原因をつくって問題を起こしたんだから日本の企業は悪くありません、と証言するが、大蔵省が、十数年前のもう時効じゃないかというところの、以前の税金が不足だったから払え（と言い出した）。払わなければ交渉は進まないのだから払うが、そのあと、ノンビリと話が前進し、現在も進行中の有様。これは大使を始め、ことあるごとに、サウジも悪じゃないかと、カネ払いが悪いということを行っています。

王様だとかプリンスは「わかった、なんとかしよう」と。少しはいい方向には動いても、その場限りです。その場だけ、あとはだめです。

だから僕はね、毎週月曜日に国民が王様にキスして紙を渡すでしょう。あれがあるうちはだめだと言っている。何か問題があると、王様に会って、問題点を書いて渡すわけですよ。王様が見るわけではないよ。すぐに秘書に渡すでしょ。それを秘書が分類するではないですか。省庁に行って、王様からということですから、まず王様の依頼だから早くしなきゃ、と早くするだけの話。あれがある以上はだめなんです。

サウジも悪いところはたくさんありますよ、組織上。いや本当に大使館あたりがそういうのを指摘すればいいんですよ、強硬に。外国のそういう連盟があるんでしょから。日本でもありますよね。大使の。そういうところで話し合ってやればいいんだよ。最後に尻まくろうと思えばね、やっぱり彼らも損得を考えますから。

身内の良くないことを話すんですが、うちにもそういう問題があったわけですよ。ある人がどうしても意に沿わない。帰せとなった。いろいろな話し合いがあったけれども、解決できないんですよ。最後には、次官の言うとおりにしましょうと。ただし、全員退却と。で、その席を立っちゃった。翌日、彼らのほうから提案してきましたよ。どうすればいいんだ。やっぱり損得を考えたら、彼らは損するんですから、それを考えた上で決断すればいいんですよ。弱気を出さないでね。そうすれば、彼らはちゃんと知っている、損得は。折れるところは折れますよ。そのへんのけじめが難しいんじゃないですかね、ここで勝負

をかけようかどうかという。そういう点、ヨルダンなんかまだ楽だったと思う、そういう駆け引きがそこまでエゲツくないから。人がいいし、その前に、ヨルダンの人も本音を出すでしょう。

サウジが一番強いんですか、駆け引きというのは。

毛利 世界の商人の駆け引きで、いちばんすごいのはユダヤとされているのです。ところが、そのユダヤがアラブにはかなわない。湾岸戦争のときを見ても、クウェートだってね。クウェートよりサウジのほうが人間的にいいような気がするな。クウェートも悪いことをしてますよ。拷問の仕方を見るとね。サウジはせいぜい手を切るか、クビ切るかで終わっちゃうけれども、クウェートは殺さないで拷問する。あれを見ても、僕はクウェートのほうがすごいかな、と思う。

サウジとか湾岸の場合は、ヨルダンも含んででしょうが、ある期間、住んで、彼らとの交流を保たないと、分かりにくいですよ。言っていることが理解しにくいと思う。そんなことを言っただけでは身も蓋もないでしょうけれども、実際そうなんですよ。分かりにくい。人はいいんですよ。そこに、間に仕事が必要なければ。仕事が入るから、問題が起きる。

アラブは気楽な心で和やかな交友が見いだせる、肩の凝らない人たちですが、一旦仕事を間にしたアラブとの交渉は、箸にも棒にもかからない、やっかいな、地獄絵を見せてくれる人たちであることも忘れないで、心してください。

最後の9番。直面するという問題は、さきほど言ったように、国境問題は一件着着しましたので、あと教育問題ね。全生徒を、適正な年齢になった人間を100%受け入れるだけの能力あるかどうか。その前に就学率の問題もあります。平均でいくと70何%かな、男女ともに、就学率が。

それと定職、就職の問題です。早急に外人労働者を追い出して、サウジ人を雇わなければいけない。でも、サウジ人を使うということは、それだけの知識、能力がないから、すぐに使えない。それをどうにかたちで徐々に減らしていくか。それには専門学校、資格の問題、さっき言った法的な改正、こういうものを逐次計画的にやっていかないと、サウダイゼーションは不可能だと思います。人はどんどん増えるのに学校がこんなことばかりやって、基礎教育が完全でない人間が社会に出て、ああしたいこうしたいと言っても、その人に基礎

能力があるのかと言いたい。肝心の数学とか理科系とか、経済とか、こういうのはある程度脳が固まった時点から始まってますからね。果たしてこれで間に合うのか、ということですね。もし機会があって、教育関係、教育庁と話すときにはこういうところから話してほしい。サウジの将来のことで、例えば20年先を考えればいいわけです。最低でも12、3年先のことを話し合えるんじゃないですかね。今の小学校1年あたりからね。

彼らの子どもも家帰って勉強してます。宿題がありますから、勉強をするとしても、ほとんどの親の力を借りている。だから、それぞれの専門家が家庭教師とかなんとかかという、そういうかたちでもって行っているから、子供が本当に勉強ができるかどうか。それで一度テストをしたことがあるんですが、あまりよくない人間を1日10分間、それから2ヶ月後には30分、そのうちに様子を見て1時間、それ以上は机に向かうなということで2年の間にやったのですが、クラスでトップ5位に入った。十数年後、彼は日本に来て、日本語を覚えて、いまアメリカに行っています。

やればできるんだよね。どうやってやらせるかが問題です。黒板に書いて教えるのと違って、やる気を出させる、勉学の向上心をいかにして湧きださせるか、これが一番の大事ではないですか。教育と就職ですよ。JICAはこういう案を持たないんですかね。もっと幅広いやつを、すその広いやつ。

発言が重い内容で。

それでは長い間、ありがとうございました。

<了>

筆者紹介



毛利 彰介（もうり しょうすけ）

1979年 1月 JICA地図作製専門家としてサ
ウジアラビアへ赴任。

以後、現地に滞在。

1996年11月 JICA地理行政アドバイザーに
就任。

1999年 2月 帰任。

資料

(提供 毛利 彰介氏)

アブダビ雑感

或るオイルマンの体験談

吉田祐司

とき 2001年(平成13年)5月27日(日)

ところ 東京大学文学部アネックス2階小会議室

ききて 武石礼司、福田安志、中村覚、水島多喜男

はじめに

アジア経済研究所の福田さんから本日の講演を依頼されましたが、実はそれ以前に私の友人であります日本アラブ協会事務局長の南井さんからも同様の依頼を受けておりました。福田さんからお話をお伺いすると、どうやらその話と繋がっているようでお引き受けさせていただきました。“演題は？”と聞かれまして、何も考えていなかったものですから、とっさに“「アブダビ雑感」とでも”ということで決めさせていただきました次第です。私はアブダビを離れてもう十数年になりますので、最近のアブダビの情勢は疎くなっていますが、アブダビ石油の社員として現地に駐在致しました1960年代後半から70年代にかけての現地の事情、並びに会社の原油開発事業の展開についてお話させていただきたいと思います。

人事部からの呼出し

私は1958年にコスモ石油の前身の丸善石油に入社しました。1967年の暮れも押し迫った或る日、私は人事部から呼出しを受け担当課長から次のように言われました。“新聞発表で知っていると思うけれど、このたび丸善石油、大協石油、日本鉱業の3社でアブダビの海上利権を取得した。来年早々に操業のための新会社をつくる。丸善から渉外担当の人を出すことになっているが、会社としては君が適任者と思っている。内示の前に本人の意向を確認することは人事として異例なことであるが、勤務場所が場所だけにあえて君の意思を確認しておきたい”とのことでした。

私は即座に“結構です”と言いました。何故ならば、石油の精製・元売りというダウン・ストリームと原油の開発・生産というアップ・ストリームの双方を経験できるということは、まさにオイルマン冥利に尽きると感じたからでした。“家族を帯同できるようなところではないので、家に帰って奥さんと良く相談した上で年が明けてから返事して下さい”と言われましたが、私はその場でOKしてしまいました。会社でそのように人事から言われるということは、もう事実上その人事は決まったようなものであるからです。ひとつのポストを動かすと玉突き状に何人かの人を動かさなければならぬことは、サラリーマンの常識として知っておりました。

家に帰って会社での出来事を家内に話したところ、“そのアブダビと言うところはどこにあるの？”と聞かれました。家にあった地図を取り出し、“確かこの辺の筈だがな”と、バーレンから少し下がったところを探しました。その辺らしきと思われたところは点線で囲った中に「トルーシアル・オーマン」と記載されており、アブダビと言う地名は見つかりませんでした。“おかしいな、確かこの辺の筈だがな”とつぶやきながら何度も探したのですがどうしてもアブダビの地名は見つかりません。そうすると、“地図にも載っていないような所にあなたは私と子供2人を残して行くつもりですか！”と家内に泣きつかれてしまいました。後日家内の実家からも苦情が出て、“しまった”と思いましたがもう後の祭りでした。

翌日、会社に行ってワールド・アトラスで調べたら見つかりました。やはり境界線は点線で書いてありましたが「トルーシアル・ステイツ」と書いてあ

り、その中にアブダビという名前があったのです。会社にある資料で周辺の状況を色々調べて見ました。昔ガルフとインドの交易は、アラブ人が「ダウ」と呼ばれる帆船で行っていたそうですが、15世紀末から喜望峰のルートが見つかったから、ポルトガル・オランダ・フランス・イギリスがアラブに取って代わり、特にイギリスが圧倒的な勢力を振っていたそうです。ところが、18世紀末そのイギリスの商船を狙って海賊が横行し、当時湾岸地域は「Pirate Coast」（海賊海岸）と言われていました。イギリスは海軍を派遣して海賊行為をやめさせ、湾岸土侯国と平和条約を締結し、それ以降この地域は「Trucial Coast」（休戦海岸）と言われるようになりました。トラファルガの戦いで有名なネルソン提督が、まだ幹部候補生だったころ軍艦に乗ってこの周辺に来たそうです。

利権取得の経緯

先ほど申しましたように、翌年1968年1月に3社共同出資によるアブダビ石油株式会社かが設立されましたが、会社が生まれる基になる利権についてお話ししたいと思います。これは私が利権取得並びに会社設立に関与された人から直接聞いた話ですが、関係者のほとんどは鬼籍に入ってしまった。1967年、当時住友商事の監査役だった広瀬満直さんが退任間際にセンチメンタル・ジャーニーでベイルートに行かれました。広瀬さんの祖父広瀬宰平さんは、住友本社の総経理をされ「住友の3柱石」と言われた3人の功労者の1人で、幕末から維新にかけて住友の社業の発展に非常に貢献された方です。そのお孫さんの広瀬さんは1934年にケンブリッジ大学を卒業されましたが、留学時代の友人がベイルートにいたので彼を訪ねて行かれたわけです。その学友と言うのは、石油関係の人なら良く知っておられると思いますがOPECの総長も勤めた人で、当時ベイルートで石油コンサルタント業をされ、またアブダビのザイド首長の石油顧問をされていたナジム・パチャチ博士でした。博士はイラクの元閣僚ですが軍事革命で追われ亡命中の身でした。

2人がベイルートで再会した際広瀬さんは「アブダビのオフショアでオープン・エリアがあるが、日本の企業でどこか興味をもっているところはないか？」と博士から尋ねられたのです。とにかく一度一緒にアブダビに行こうと誘われ、

広瀬さんは現地入りされました。ザイド首長は、国際入札でなく随意契約ベースで利権を与えたいとの考えを持っており、また利権交渉はすべて自分に任されているとの説明が博士からありました。

広瀬さんは日本に帰るとパシフィックコンサルタントの河野社長にこの話を持って行かれました。広瀬さんと河野さんとはどんな関係であったか良く知りませんが、当時パシフィック・コンサルタントはすでにアブダビに足がかりを持っており、海洋調査のため同社の技術者が2～3人アブダビに駐在しておりました。河野さんはこの話を取りまとめるためには政治力が必要であると考え、田中清玄さんのところに持って行かれました。清玄先生は日本興業銀行の中山素平頭取にこの話を持って行かれました。ご承知の通り中山さんは早く頭取職をしりぞかれ相談役になられましたが、財界の鞍馬天狗と言われた方で非常にエネルギーについて関心を持っておられました。田中・中山会談で、“これは日本の自主開発原油確保という国策にのっとった事業であり、民族系石油会社で是非とも実現させよう”と言うことになりました。そこで、丸善石油、大協石油、日本鉱業の3社に根回しをされ、3社長の合意を取り付けられました。利権交渉のネゴシエーターとして、業績不振の責任を取って辞められ当時浪人中の身であった、元丸善石油副社長の杉本茂さんが指名されました。杉本さんは3社長の委任状を持って単身ペイルートに赴き、パチャチ博士と利権交渉を重ね1967年12月アブダビにおいてザイド首長と協定書の調印をされました。その利権協定にもとづき新会社が翌年1月に設立され、協定書の権利義務はすべて新会社に譲渡されました。

アブダビ石油へ出向

私は予定通り会社設立と同時にその会社に出向しましたが、ダウンストリームからいきなりアップストリームの分野に足を踏み入れた私にとって、見る事、聞く事すべてが新鮮でチャレンジ精神が大いに掻き立てられたものです。新会社で私に課せられた最初の仕事は利権協定の翻訳でした。その内容は、およそ4,400平方キロのアブダビ海上鉱区における、石油の探鉱・採掘・生産・貯蔵・販売の独占的権利を45年間にわたって首長が会社に授与するというも

のです。

当初、アブダビの鉱区はすべて、陸上は ADPC (Abu Dhabi Petroleum Company)、海上は ADMA (Abu Dhabi Marine Areas Ltd.) といういずれもメジャーによるコンソーシアムが独占的にその利権を保有しておりました。アブダビ石油の鉱区は ADMA が利権協定にもとづいて 1967 年 1 月に最初に返還した鉱区なのです。利権協定には必ず「操業義務」と共に「鉱区返還」の条項がありまして、アブダビ石油の場合協定書の発行日から 8 年以内に鉱区面積の 25% を、10 年以内に更に 25% を返還するよう規定されております。これは会社がいたずらに時間を費やさず、探鉱作業を迅速に行うようにとの考えからです。一般的に探鉱作業はまず鉱区の全地域を概査して、その中で有望と思われる地域を精査するという手順を踏みます。従ってアブダビ石油が取得した鉱区は ADMA が概査の結果有望でないと判断した地域ということになります。では、処女地でない他人が棄てた物を何故拾ったかという素朴な疑問を持たれることと思いますが、それには幾つかの理由があります。ADMA は広大なアブダビ海上全区域を保有しており、最初に返還された鉱区の探鉱は概査の概査に過ぎなかったのではないかと思われたこと、また当時の地震探鉱技術およびデータ解析技術のレベルが低かったことがその理由としてあげられます。

石油開発には膨大な費用と長期にわたる期間が必要とされることは、皆さんもよくご存知のことと思います。当時のお金で海上試掘井を 1 本掘るのに 10 億円もかかっております。先ほど述べましたように、まず 鉱区全域を地震探鉱で概査のうえ、有望と思われる地域を精査したのち、試掘井 (Test Well) を掘削し、鉱区全体の推定埋蔵量を確認したうえで、フィージビリティ・スタディーの結果を踏まえ、開発計画を立案し、開発、生産に移行するのが理想的であると言われております。例えば概査の結果鉱区の中に 5 つの構造が見つかったとします。そうするとそれぞれ構造のある海域を精査したのち、最も有望と思われるロケーションで試掘 1 号井を掘削します。幸運にも試掘に成功した場合、無論その構造の大きさにもよりますが、油層の広がりを確認するために、さらに数本の評価井 (Appraisal Well) を掘削しなければなりません。この手順をすべての構造について行うとすると大変長い期間と膨大な費用がかかります。そこで、最も有望な構造を開発しながら他の構造の探鉱を続

けるとか、生産しながら開発・探鉱を続けるといった同時並行的な手法が取られているのが実状であります。一方、鉱区の返還は細切れでは出来ないことになっています。従って ADMA が 1 回目に戻還した鉱区の中には、順序としては後回しになるかもしれないが精査に値する幾つかの構造が含まれていた可能性はあったわけです。

初めてのアブダビ訪問

私が初めてアブダビの地を踏んだのは忘れもしない 1968 年 4 月 1 日、今から 33 年前のエイプリル・フルでした。新橋の虎ノ門電気ビルに新会社の事務所が設けられ、3 社からの出向者の顔ぶれも揃い本格的に会社業務が開始された時期です。社長を団長とする会社の首脳陣が、アブダビのザイド首長への表敬訪問のため現地に向かいましたが、私もカバン持ち兼通訳としてその一行に加わることになったのです。私にとって初めての海外旅行で、いきなりファーストクラスに乗せてもらいましたが、緊張の連続で旅行中 2 キロも体重が減ってしまいました。

南回りのパンナムの便で羽田を発って、香港、ニューデリー、テヘラン経由で 3 月 31 日早朝ベイルートに到着しました。ホテルで小休止ののち、夕刻中東航空でベイルートを発って深夜ドバイに着き、翌 4 月 1 日の夕刻ドバイからアブダビ入りしました。余談ですが、私は会社からザイド首長への贈物日本刀一振りを手荷物として機内に持ち込んでおりました。今では到底考えられないことですが、ハイジャックと言う言葉も耳に馴染んでいなかった当時のエアー・ラインも日本刀の機内持ち込みをまったく問題にしませんでした。ただ、羽田出国の際その日本刀が重要文化財でないという証明書の提出を求められ、見送りの人が慌てて走り回ってくれてやっと出発に間に合わせたというエピソードがあります。

ドバイから飛び立った DC-3 がアブダビの上空にさしかかった時は、すでに夕闇が迫っていました。“間もなく当機はアブダビ国際空港に到着します”とのアナウンスのあと、飛行機は高度を下げながら大きく旋回して着陸体勢に入っていました。私は顔を機体の窓にくっつけて地上の様子を見詰めており

ましたら、漁り火のようにゆらゆらと揺れている長い2列の明かりが目に入ってきました。飛行機が着陸してから分かったことですが、それは石油缶に入った油が燃えている明かりで、滑走路の誘導灯の代わりに使われていたものだったのです。

ブロック塀の掘立小屋同然の空港建物にたどり着いた時は、日はとっぴりと暮れておりました。裸電球がぶら下がっているのに、停電のためか電気がついていない真っ暗な建物の中に入って通関の列に並びました。列の先頭には入国管理官が懐中電灯を小脇にかかえパスポートをチェックしていました。管理官は無言で私のパスポートにペタンと1ページがすっぽりと埋まってしまいそんな大きな検印を押しました。その瞬間、“ああ、とうとう地の果てアブダビにやってきた！”という実感とともに、やがてこれからの何ヶ月いや何年間をこんな所で生活しなければならぬのかと思うと、急に自分自身が情けなく思えてきたものでした。

ザイド首長謁見

アブダビ到着の翌日、私達一行は3台のベンツに分乗してザイド首長表敬のためアブダビ市から約160キロ離れたオアシスの街アル・アインに向かいました。当時アブダビ市内には1本の舗装道路も無く、まして砂漠のなか160キロも離れた場所まで道らしい道がある筈がありません。見渡す限り砂漠の中を、前に走った車のわだちを辿りただひたすらに走るだけでした。途中、車がエンコしたり砂の中にスタックしたりして目指すアル・アインの街についた時はすでに日はとっぴりと暮れておりました。

私達一行の中にはプロのカメラマンが一人加わっておりました。現地進出に際しては、先輩格のアラビア石油さんから何かにつけ助言をいただいたのですが、創業当時の映像記録が無いのをアラビア石油さんは大変悔いておられるのを知って、アブダビ石油は会社設立当初から一貫して記録を取り続けていたのです。創業から30数年の今日すでに7本の記録映画を作成しております。いずれも貴重な映像記録で、最初の記録映画「アブダビの海を拓く」の一コマに、砂嵐の中スタックした車を社長自ら汗だくになって押しているこの時の一

行の姿が写っています。

ザイド首長との会見は深夜アル・アイン宮殿の謁見室で行われました。ザイド首長は明治天皇を彷彿とさせるような威厳に満ちた風貌のなかにも、慈愛にあふれた態度で遠来の私達一行の労を心からねぎらわれました。ザイド首長は 1966 年 8 月、無血革命で兄のシャクブートから首長の地位を受けついでまだ 2 年も経っておりませんでした。また当時のイギリス労働党内閣が、同国軍隊を 1971 年末までにスエズ以東から撤退させるとの声明発表を行ったのが前年の 1967 年 7 月であり、この時のザイド首長はまさに首長国の連邦結成のまとめ役としての重責を負わされていた時だったのです。

ザイド首長は第 2 次世界大戦で壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、驚異的發展を遂げた日本に対し尊敬の念を示されると共に、「東の国」から初めてやってきた日本企業の成功を心からアッラーに祈ると始終物静かな口調で述べられました。その翌年の 9 月、テスト油のサンプルを持参し奇しくも同じ場所で試掘 1 号井の成功をザイド首長に報告することが出来ましたが、その時の首長の喜ばれようはそれはもう大変なものでした。

社長一行はその後クエートからカフジ入りしアラビア石油の施設を見学させていただいたあと ADMA の主要株主である BP、CFP（フランス石油）を表敬訪問するためロンドン・パリに立ち寄り、技術資料の買い取りデータの交換など今後の協力を各社に要請して帰国しました。ロンドンで BP を訪問した際、“あなたがたの成功をお祈りしたいと言いたいとこだが、もしも成功されると私の首はとんでしまう”と冗談交じりで言った探鉱部長の言葉が印象的でした。

1 回目の現地勤務

私は 3 回にわたり通算 11 年間アブダビに滞在しましたが、とりわけ 1 回目の現地勤務は今ではとうてい信じられないような体験の連続でありました。1968 年 9 月、妻と 2 人の幼い子供に後髪を引かれる思いで羽田を発ち、カラチ経由で現地入りしました。アブダビに着いてまず驚いたことは、空港から市内に通じる 15 キロの道が先の表敬訪問からわずか 5 ヶ月の間に完全に舗装さ

れていたことです。

私が着任した当時は、首長から借りた 8 千坪ほどの土地に日本から持ち込んだ小さな 3 棟のプレハブ住宅を組み立てて、そこを生活の拠り所としておりました。事務所は街中のフラットを借りアブダビ石油駐在代表部の看板を掲げておりましたが、駐在代表、それに私と同僚の僅か 3 名の小さなオフィスでした。

アブダビ石油は本格的にアブダビに進出した最初の日本企業であり、私達 3 人のほかは数人の日本人しかおりませんでした。電気は自家発電、食事は自炊、おまけに昼間は 40 度を越える炎熱地獄です。私達先発隊に課せられた任務はオフィス・キャンプの設営でしたが、この厳しい環境のなか自分自身いかにして生きて行くかと言うことが問題で、「生きること」それ自体が会社の仕事よりもよほど重要な仕事であったわけです。最初の勤務は 1 年と 10 ヶ月でしたが、当時の現地事情などエピソードを交え述べてみたいと思います。

水、とにかく水

何と言っても一番困ったのが水です。当時のアブダビでは海水の淡水化など夢のまた夢で、アル・アインから汲み上げパイプ・ラインで引いてきた地下水がまさに「生命の水」でした。アル・アインから送られた水は、アブダビ市街地から少し離れた小高い丘の上に建てられたタンクに貯蔵され、そこから高低差による重力でもって街中に送られていましたが、末端まではなかなか行き届いておりませんでした。

私達はキャンプ内にある 2 基のコンクリートの水タンクに時間給水された水を受け入れ、そこに溜まった水を地上 3 メートルの高さにある給水タンクにポンプアップし、そこからプレハブの各建物に給水しておりました。アブダビ石油のキャンプはこの水タンクのある丘のすぐそばにあり、水圧も高く水に関する限り立地条件は非常に恵まれていたわけです。それでも幾度も断水の苦い経験をさせられました。

“水なんて、飲み水さえあれば何とかなる”という考えは、とんでもない間違いであると身をもって知らされました。飲み水こそお金を出せば缶入りボ

トル入りのものは手に入りますが問題は生活用水です。洗面、トイレ、シャワー、洗濯、食事 etc.どれをとっても水は欠かせません。朝歯を磨いた後うがいをしてしようと思っただけで蛇口をひねったら断水、仕方なくコーラでうがいをしたこともありました。水の出ない水洗便所は全く始末におえません。阪神大震災のとき被災者の皆さんが一番困っているのはトイレであると、私は自分の経験からとっさに判断しました。水が無いと排泄物(大の方)の処理は地中に埋めるしかありません。コンクリート・ジャングルの都会の中では、身近な場所で簡単に掘れるところと言えば公園か学校のグラウンドしかありません。その点私達は幸せでした。何しろキャンプは8千坪もの広い敷地があり、しかも柔らかい砂地なので足で穴を掘ってしゃがんで用を足しそのあと足で砂をかければ良いのですから。

事務所は5階建てのビルの最上階にありましたが、水が無いのでトイレを使用することが出来ません。仕方なく近くのホテルまで車を走らせて用を足しました。当時アブダビには、アル・アイン・パレス・ホテルとビーチ・ホテルの2軒しか無く、ビーチ・ホテルは客室がトレーラー・ハウスでホテルとは名ばかりのものでした。私達がよくトイレを拝借したのはアル・アイン・パレスの方でしたが、用を足すのもこれまたひと仕事でした。事務所の建物にはエレベーターがあるものの電力不足で動かないので、用を足すためにその都度階段を上がり降りしなければなりません。炎天下に駐車していた車の中はハンドルもタオルを巻かないと握れないほど暑いのです。ホテルにたどり着いてもトイレに行くためにはどうしてもフロントの前を通らねばならず、そのうち“あいつ、またトイレに来たな。”というフロントマネージャーの無言の抗議の視線を感じるようになり、ホテルの敷居がだんだん高くなって来ました。

そこで思いついたのがオフィスビルの屋上です。何も長い階段を上がり降りする必要はありません。僅か数段の階段を上がりさえすれば良いのです。アブダビ市内を一望のもとに見渡しながら用を足せば、またたく間に蒸気となって消え何の痕跡も残りません。しかし用を足すといっても「大」の方はそういうわけにはまいりません。水に馴れないため着任当初は慢性下痢の症状が続き、オフィスとキャンプの間をベントで何度往復したことが数えきれません。

水にまつわる面白いエピソードはまだまだあります。アブダビでも冬場は

冷えるということでキャンプのバス・ルームには給湯機が付いていました。実際には冬場でもヒーターのスイッチは常時オフにして温水を使ったことは殆どありません。夏場は建物全体に冷房が行き届いているため、給湯タンク内の水はシャワーに最も適した温度となっています。ある日、同僚が使ったあと私が引き続きシャワーを使っているとシャワーが突然熱湯に変わり“あっち”とやけどをしそうになったことがあります。給湯タンクの水を使い切ると、その後から出てくる水は屋外のタンクから直接送られてくるものでまさに熱湯そのものなのです。或る日、日本からのお客さんが私達のキャンプを訪問された時のことです。“暫く風呂に入っていないのでひと浴びさせていただけませんか？”と私達に頼まれました。“お安いことです”と気安く引き受けてバスタブに水を張り始めました。しかし、バスタブ一杯に水を張るためには給湯タンク容量の数倍の水量が必要でそのままではとても熱くて入浴できません。冷蔵庫から氷を取り出しバスタブの中にほうり込んで温度を下げて入浴してもらったという信じられないような事もありました。

星空を仰ぎ家族に想いを

水だけではありません、電気にもひと苦労させられました。不運にも、私が現地に着任した数日前にキャンプ内の発電機が故障し、小型発電機でなんとか電灯用と冷蔵庫の電源は確保したものの着任早々エア・コンなしの生活を1ヶ月半も送る羽目になったのです。9月と言えど昼間は40度の灼熱地獄です。日本から持ち込んだプレハブは、クーラーが働いている時は極めて快適ですが、クーラーが働かないと夜になって外気温が下がっても日中に暖められた室内の温度は一向に下がりません。建物の断熱性を高めるために開口部は小さくとられており、外で涼しい風が吹いても窓を開けてその涼しい風を室内に取り入れる事が出来ないのです。まるでサウナに入っているみたいでとても部屋の中で眠れたものではありません。そこで、ベッドのマットを外に持ち出しお星様を眺めながら夜を明かすことになりました。

まず驚いたのは、“アラビアの星は何故こんなに大きいのだろう”と言うことでした。大気汚染など無論なく、夜空を彩るネオンもなく、真っ暗で澄み

切った中空にちりばめられた星は数が多いばかりでなく、ひとつひとつの星自体も日本のそれより遥かに大きく輝いて見えるのです。その上、息を止めてみている間にも、1つ、2つ、3つ、4つと流れ星が横切ってさながら宇宙ショーの主演を演じているようでした。星空を眺めながら日本に残した妻子に思いを馳せ感傷に浸ったものですが、今にして思えばよくも体力が続いたものと感心している次第です。

あわや砂漠でドライ・アップ

アブダビでも雨が全く降らないわけではありません。年間 100～120 ミリ程度の雨が冬場に集中して降ります。アブダビ市内の道はサブカという塩分を多量に含んだ砂で出来ており、表面は一応硬い土のようですがいったん雨が降ると泥沼のようにぬかるんでしまいます。その泥水を跳ね上げるので、車のマフラーは塩分による腐食で1年もするとボロボロ孔だらけになり、街を走るタクシーのエンジン音のけたたましさは異常です。

大雨が降った12月のある日ドバイに行く用事が出来ました。かねてから1度ドバイまで車で行ってみたいと思っていたので日本人として初めてこれにチャレンジしました。出発の前に現地の人から“雨上がりで道がぬかるんでいるから海岸線よりの道(と言ってもサブカ地帯に車のわだちがある程度にしかなり過ぎません)を避けるように”と忠告されました。危険だからと反対する駐在代表を強引に説得して、私達3人は早朝ベンツに乗ってキャンプを出発しました。

最初は快適なドライブでしたが、砂漠のなかに入っていくにつれ車のわだちの数が、だんだん少なくなり私達は心細くなってきました。わだちは幾重にも別れていますが、前日雨が降ったので忠告通りなるべく内陸寄りのものを追って走りました。そのうち、砂の層がだんだんと厚くなってきました。車は一定のスピードを保って走らないと砂の中にスタックしてしまうので車を止めて方向を確かめるわけにはいきません。歌の文句じゃあないけれど、走り出したら“もう、どうにも止まらない”わけです。

そのうち、わがベンツはドカッと砂の中にあぐらをかいてしまいました。

車体をジャッキ・アップして、タイヤと砂の間に詰め物をしたり、タイヤの空気を抜いて抵抗を強くしたり、半日悪戦苦闘しましたがどうしても脱出することが出来ません。そのうち日も暮れてきたので仕方なくその夜は野宿することになりました。

アブダビでも 12 月と言えば真冬です。しかも砂漠の奥地に入りこんでいるので、夜になると気温はどんどん下がって寒くて仕方がありません。3 人とも車の中でエンジンをかけっぱなしにしてヒーターを入れ、まんじりともせずに狭い車の中で一夜を過ごしました。脱出方法について 3 人で話し合いましたが、その場にとどまっても通りがかりの車に救出される見込みがなさそうなので、自力脱出を試みようと思いが一致しました。とにかく、朝日を背に受けて歩けば必ず海岸に出られる筈だと、翌日朝早く 3 人は車を棄ててテクテクと砂漠の中を歩き始めました。持ち物は 2 個のオレンジと缶入りのエビアン・ウォーター 1 本だけです。朝日を背にし自分の影を追って歩くこと 3 時間、前方遙か先の地平線上に車が走っているのが見えてきました。かげろうのせいでしょうか、車はまるで宙に浮いて走っているように見えました。それから 1 時間後ようやく通り掛かりのトラックに拾われ、やっとアブダビにたどり着きました。

駐在代表をホテルに送り届けたのちスタックしたベントの救出に向かいました。2 重遭難を防ぐため 2 台の 4 輪駆動車をチャーターし、同僚と 2 人で各自ウオーキー・トーキーを手にして現場に引返しました。運良くスタックしたベントを発見し車の救出に成功しましたが、運転手に“ドバイに行くのに何故こんな道を走ったのか？”と呆れ顔で聞かれました。どうにか命拾いすることが出来ましたが、これが夏場であつたら 3 人ともドライアップしていたかも知れません。本社へのレポートにこの出来事にふれたところ即刻“ドバイへの車を運転しての出張は禁ずる”との厳命が下されました。

当時、砂漠でのドライ・アップは年間数件発生していたと記憶しております。遭難者は主に ADPC の地震探鉱下請業者の作業員が多かったようです。搜索のため当社への緊急チャーター要請が何回もあり、またさそりの血清を運ぶためのチャーター要請も 2 ~ 3 度ありました。ドライ・アップの現場を見た ADPC 担当者から、遭難者はラジエーターの水まで飲んだ形跡を残してい

たと聞かされたこともあります。参考までに、ADPCの安全規則には「車で遭難した際は、その場を決して動かず、車の下に穴を掘りその中に入ってひたすらに救出されるのを待つこと」と書いてありました。

パーティーで聞かれることは

現地では石油会社に勤務する者の地位はきわめて高く、また日本人の数が少ないこともあって私達は非常に珍しがられことある毎にパーティーに招待されました。現在ではありとあらゆる娯楽施設が整っているアブダビですが、何も無かった当時は、持ち回りでホーム・パーティーを開くのが数少ない楽しみのひとつであり、またこれが唯一の社交の場でもあったわけです。何しろ日本人は数が少ないので、私達は大変興味を持って見られ色々質問攻めにあいました。初対面の人に必ずと言ってもよいほど聞かれるのは待遇に関することです。“何年契約でアブダビに来たか？”、“給料はいくらもらっているか？”、“休暇制度は？”、“家族は何時やってくるのか？”等々です。ところが私達の会社は出来たばかりで、在勤規則も無し、任期・休暇制度・現地給与も決まっていません。決まっていたのは、当面の手当ては日本からの出張ベースで計算した金額が支給されることと、家族の帯同は認められないということで、“待遇上の諸条件はまだ決まっていないが、そのうち会社が決めてくれるであろう”と返事したら“全く信じられない。お前達のメンタリティーは理解できない。よくもお前の Wife が許したものだ。俺がお前の立場だったら間違いなく離婚騒ぎだよ”と、呆れられたものです。

ちなみに、私達のキャンプの隣には、陸上鉦区で探鉦活動を行っていたフィリップス社がキャンプをはっておりました。彼らは石油が出るかでないかも分からないのに、家を建て、学校を建て、教会まで作って家族と一緒にやってきました。私達がみすばらしいプレハブに単身で住み自炊生活を送っていること自体、彼らにとっては大きな驚きであったみたいです。

インシャ・アッラーに溶けこむ

現地政府との折衝業務は私達の重要な日常任務でした。当時はアラブ首長国連邦もまだ形成されておらず、アブダビは小さな一酋長国にしか過ぎなかったのです。従って政治体制も十分に整っておらず、重要事項に関して政府の許可を得るには直接ザイド首長に会って頼まなければなりませんでした。首長との会見と言っても日本人が想像するようなものではありません。アポイントは一切不要で、パレスにおもむき首長が留守でないことを確認して中に入り、首長執務室控えの間の絨毯にどかっとかぐらをかいてただひたすら我慢強く自分の順番を待つわけです。

ある日、地震探鉱の下請業者からデッカ・ナビゲーションの基地を或る無人島に設置したいので政府の許可を取って欲しいと依頼されました。早速、駐在代表とパレスにおもむき首長執務室の控えの間に入りました。1時間半ほど待ったでしょうか、列がだんだんと短くなりあと3人、あと2人、やっと私達の番がやってきたと思った時、突然アラブの服を着てひげをたくわえた王族らしき一団が腕に鷹をとませた鷹匠をひきつれ、執務室にドヤドヤと入って行きました。30分ほどして出てきたので、やっと私達の番と思ったら、“本日の決済はこれにて終了！”と執事が宣言、翌日最初からやり直しということになりました。

アラビア語に「インシャー・アッラー」(神の意の召すままに)という言葉があります。例えば時間を約束していても相手は平気で遅れて来るのです。何故遅れたかと聞くと“車のエンジンがかからなかったのだ。これも神の思し召しであり遅れたのは私のせいではない”と平然と言っただけのけりです。私達の常識からすれば車の点検を怠った当人が悪いのだし、タクシーを使うなり他の車に便乗を頼むなりして約束の時間に間に合わせようと努力するのが当然ですが、この点が全く違うのです。当人はあっけらかんとしておりまことにあっぱれとしか言いようがないくらいです。

郷に入っては郷に従え

このように日本的な考え方では腹に据えかねることが何かと多く、私も初めの内はイライラしどおでした。しかし外地で生活している以上地元の人

の考え方に従うのが当然であり、その為には自分の考え方を 180 度切り替える必要があることに気付きました。私は“ここは日本ではない、アブダビなのだ”と、自分自身に何度も言い聞かせ出来る限り自分を現地の人の考え方に溶け込ませようと努力しました。そうすることによって初めてイライラから解放され、現地の人と上手くやっていく事が出来るようになりました。

当時の私の上司である初代駐在代表は、丸善石油から出向された松浦清人さんと言う方でした。松浦さんはもともと東京銀行出身の方で東銀在任中ベイルート事務所を開設され初代の事務所長を勤められた人です。ベイルートに駐在中スエズ動乱の勃発を予言したテレックスを本店に入れ変人扱いされた事もあったそうです。松浦さんはガルフの豪商カヌー・ファミリーとの親交が厚く、中東一般情勢に精通され特にパレスチナ問題に関する造詣はとても深いものがありました。

顔を覚えてもらうことが大切

その松浦さんは、私より 3 ヶ月前の 1968 年 6 月に初代駐在代表として着任されました。少々変わった方で“私の仕事は昼寝をすることだ。”と、誰にでも公言して憚らない人でした。「会社は協定書発行日から 6 ヶ月以内に駐在代表事務所をアブダビに開設しなければならない」との利権協定上の規定に基づいて会社から派遣されたわけで、現実には事務所もない、部下もいない、やることもない、ただホテル住まいでひたすら時間を過ごすのみという、並大抵の神経の持ち主では勤まらないポストにつかれた方です。

松浦さんはアル・アイン・パレスホテルの 1 室に住まわれ、形式上そこを駐在代表部の事務所として現地政府に届け出ておりました。当時のアブダビのホテル事情は劣悪そのものでした。これは松浦さんから聞いた話ですが、ある日外出先からホテルに帰ると自分の部屋の中に簡易ベッドが運び込まれていたそうです。マネージャーに理由を問いただすと、満室なので相部屋にすること。いやなら自分で出て行くしかないので、じっと我慢の子を決め込んだとのこと。そんなホテルでも格調高くレストランでは「夕方 5 時以降ネクタイ着用」と来ているものですからあきれてしまいます。

その松浦さんが着任早々の私に、“アラブで仕事をするにはまず顔を覚えてもらうことが大切です。そして次の5つの「あ」が必要なのでよく覚えておきなさい。5つの「あ」とは、慌てず、焦らず、あくせくせず、当てにしないで、諦めない。特に最後の諦めないが大切です”と助言されました。私が先方に電話で用件を伝えようとすると、“先方に出向き直接本人に会って用件を伝えなさい”とよく叱られたものです。たとえ些細なことでもそれを伝えるために先方の人と会う口実が出来るわけで、その機会を無駄にしてはいけないと言うのが松浦さんの持論でした。

アラブ人の付き合い方は、挨拶に始まり挨拶に終わるものであると言っても過言ではありません。ガッファというアラビアのお茶をすすりながら延々と挨拶を続け、本題は終わり頃にちょっぴり出てくる程度です。譬えは悪いですが、やたらと長い前戯が続き本番はニワトリ並みと言ったところでしょうか。相手も忙しいだろうと思っていきなり用件を切り出すなんてヤボな事は絶対にしてはいけません。これは相手に対し大変失礼なことになります。顔を合わせる機会の頻度は親しさのバロメーターで、親しい人ほど顔を良く合わせると言われております。

顔を覚えてもらうことが大切と述べましたが、ここで松浦さんから聞いた面白いエピソードを紹介しましょう。鷹狩に出掛けアブダビを留守にしていたザイド首長が久し振りに戻ってきたので、駐在代表が御機嫌伺いにパレスのマジョリスを訪れた時のことです。例によって、広いマジョリスの絨毯に大勢の人があぐらをかき車座になって雑談しておりました。松浦さんもその車座の中に入ってザイド首長の姿を遠目で追っていた時、車座の中から1人のベドウィンがすくっと立ち上がりザイド首長の所に行きました。そして代表の方を指差しながらザイド首長の耳元で何やら囁いている様子が伺えました。ザイド首長も身を乗り出して松浦さんの方をじっと見つめている様子でした。すると間もなく、お付きの者が“ザイドがあなたにお話をしたいとのことなので一緒に来て欲しい”と松浦さんを迎えにやってきました。

話を聞いてみると、ザイド首長の耳元で囁いていたベドウィンは、代表がよく利用されたタクシーの運転手だったとのこと。この運転手はアル・アイン・パレス・ホテルに詰めていたタクシーの運転手で、代表がホテル住いを

しているとき代表のお抱え運転手気取りでいたそうです。他のタクシー運転手もホテルの玄関先に松浦さんが出てくると、順番から言えば自分の客になるのに彼に譲ったそうです。その運転手はマジョリスで松浦さんの姿を見掛けたので、“あのヤバニはとても親切で、俺にチップを弾んでくれた”とでも首長に報告したのでしょうか。ザイド首長から“彼に目をかけてやってくれて有難う。アブダビでの生活に不自由はないか。探鉱開始のための準備は順調に進んでいるか。もし私に出来ることがあれば何でも遠慮せず言って欲しい”との言葉を戴き、松浦さんはとても感激したそうです。

その時のシーンを日本流に再現してみると、皇居の拝謁の間で都内のタクシーの運転手が天皇陛下の耳元でひそひそ話をするようなもので日本では全く考えられないことです。それだけマジョリスは民主的で、一般の国民に開かれたものであると言えるでしょう。松浦さんの言葉を借りれば、まさに“ This is Arab ”です。

鉱業所の開設

地震探鉱の結果幸いにも幾つかの有望な構造を見付ける事が出来ました。本格的な試掘作業に着手のため、1969年3月に技術者の第1陣が日本より派遣されることになりました。本社から3名の事務系社員の増員を得て、第1陣受け入れ準備のため急ピッチで宿舍の手配と事務所の拡張を手がけることになりました。

宿舍は町中のフラットを賃借しましたが、1棟で必要フラット数を確保することは不可能で2～3個所に分宿することとなりました。一方、事務所は分散するわけにはいかないので、駐在事務所に隣接するフラットの住人に高い立退き料を払って出てもらい、内壁をぶち抜いて内部で行き来できるようにしました。そして「アブダビ鉱業所」の看板を掲げ、一応事務所としての機能を果たせるようにしました。フラットはもともと生活のための居住空間であり、やたらと台所、バスルーム、トイレが多くウナギの寝床みたいな極めて非効率的な事務所となってしまいましたが、これ以外の選択肢はなかったのです。食事はキャンプのプレハブ1棟を食堂に改造してケータリング会社と契約を結び、

私達も半年間の自炊生活からやっと解放されました。

何しろ当時のアブダビはインフラが全くと言っても良いほど整備されてなく、水・電気・通信手段の確保には大変な労力を必要としました。許認可に関する現地政府の扱いは、石油会社であるゆえに最優先であったのでとても助かりました。掘削業者はよりインフラが整備されていたバーレンを基地として選定し、そこに事務所並びに資材倉庫を置いたのでわれわれも資材倉庫は業者と同じくバーレンに置くこととしました。

通信手段としては一応電話があったものの市外通話はすべて局に申し込まなければなりません。バーレンに電話してもなかなか繋がりません。やっと繋がっても市外通話は全部ロンドン経由となっており、自分の話している声が少し遅れてエコーして聞こえてきて話しにくいこと甚だしいのです。普段は無線機を使って通信しますが気象状況が悪いと雑音が入って通信不能となります。言葉のハンディーもあり、掘削業者との日常的なコミュニケーションには苦勞させられたものです。

試掘第1号井の掘削は1969年5月4日はるばる米国ヒューストンから曳航されてきた掘削船リグ「ペガサス」によって開始されました。キャンプ・事務所の設営という裏方の仕事に徹してきた私達事務方は、この日を無事迎えることができ、感無量でした。言うなれば、事務方が作った土俵の上で技術者の関取が相撲を取るようなもので、後はいい結果を出してもらうことを望むだけ、文字どおり「インシャ・アッラー」の心境でした。

オタイバとの出会い

アブダビで操業する石油会社は、アブダビ石油省の管轄のもとに置かれていましたが、イラク人の次官を筆頭に事務方の主要ポストは、ほとんどパレスチナ人が占めておりました。次官のイラク人は、ザイード首長の石油顧問であるパチャチ博士が招聘した人で、彼もパチャチ博士と同様革命でイラクを追われた有能なテクノクラートでした。後にサウジのヤマニについて OPEC のスポークスマンの存在となったオタイバ石油大臣は、私が着任した翌1969年にバグダッド大学を卒業しアブダビ石油省の大臣のポストにつきました。

欧米系の石油会社は、大学を出たばかりのこの名も無い若者を冷たくあしらったのですが、私達は彼が間違いなく将来大物になると確信しておりました。当時、アブダビに大学出など殆どおらず、名門の出の彼は将来の国づくりのためバグダッド大学に派遣された留学生の第1期生だったのです。アブダビ・ナショナルの海外留学第1期生は、オタイバを含め3人おりました。私達は俗に「アブダビ3羽ガラス」と呼んでおりましたが、あとの2人はアハメッド・スウェィディーと、モハメッド・バブルシュで、それぞれ後に外務・大蔵の最高責任者となった人たちです。ザイド首長の兄シャクブートは教育に全く無関心で、アブダビには教育の場が全くありませんでした。このため3人はいずれも子供の頃隣国のカタールで教育を受けておりました。

大学を出たばかりのオタイバは英語もまだたどたどしく、石油の専門的知識も乏しかったのですが、彼の国づくりに対する情熱的な姿勢を私達は感じ取ることが出来ました。当社のキャンプにもときおり遊びに来て、私の手作りの料理を振舞ったこともありました。彼は1971年1月にアブダビ石油の取締役役に就任しましたが、大臣着任当時から毎年のように日本を訪問しております。昭和天皇に拝謁の栄を浴し、また慶応大学で名誉博士号も受けております。彼は大の親日家として知られておりますが、彼の親日感情を芽生えさせそして後日大きく開花させたのは、他ならぬ私達であると自負している次第であります。

1973年のオイル・ショックのことは、皆さんの記憶の中にいまだ新しいことと思います。これはエジプトとシリアが1973年10月にイスラエルに同時侵攻したいわゆる第4次中東戦争に端を発する出来事でした。戦争そのものは極めて短期に終結しましたが、OAPEC加盟国が「イスラエルの占領地域からの完全撤退」と「パレスチナ人民の権利回復」を要求して石油を武器として行使する戦略を発動し、それがもとで全世界がパニック状態になったものです。石油禁輸（embargo）は極めて巧妙で、石油輸入国を「友好国」「準友好国」「中立国」「非友好国」の4つのカテゴリーに分けて輸出削減・禁輸を行おうとするものであります。

「中立国」扱いにされた日本は慌てて三木副総理を中東に歴訪させ、俗に言う「油乞い」外交の結果「友好国」の扱いにしてもらったと言われております。この件に関して、私は個人的に親しいオタイバの秘書官から聞いた話をこ

ここで披露したいと思います。彼の話によると、1973年12月開催のOPEC会議の席上でオタイバ大臣が日本を「友好国」扱いにすべきであると発言しました。会議出席者から当初は賛成とも反対とも積極的な発言はなかったのですが、そのうちクエートの代表がオタイバの提案に反対する旨の発言を行い、オタイバとの間でかなりの激しいやり取りがなされました。興奮したクエート代表がオタイバに向かって“お前は日本のエージェントか？”とまで言ったそうです。するとオタイバは“アブダビでは日本の石油会社が、メジャーが見向きもしない中小油田の開発を手がけて我が国のために貢献している。中立地帯のカフジで操業している日本の石油会社もクエートのために貢献しているではないか。私はこの数年来、最低年に1回は日本を訪問しておりそのたびに日本の首相並びに主要閣僚と会談している。その会談を通じて、彼らがパレスチナ問題でアラブよりの姿勢を持っているのを私は十二分承知している”と反論し、結局その会議で日本は「友好国」扱いとされることになったとのこと。オタイバの発言が無ければ日本は決して「友好国」扱いとはされていなかったと、オタイバの秘書官は私に断言しました。

出油に成功

私の1回目の現地勤務は、キャンプ・事務所の設営がその主目的でしたが、在任中に試掘1号2号3号と連続出油成功を見届けて帰国できたことは本当に幸運でした。技術系事務系を問わず、鉱業所の全員が海底の地下3,000メートルに油を求めて掘り進むビットの先端にその全神経を集中させていました。当時の鉱業所の雰囲気はスリルと緊張感に満ち溢れており、すでに安定操業時期に入っていた2回目、3回目の勤務では到底味わうことの出来ないものでした。

1969年9月18日試掘1号井の出油に成功しました。本社の技術担当役員立ち会いのもと採油テストが行われました。深夜、リグ上の技術担当役員からキャンプにいる鉱業所長にテスト油の回収を行った旨の無線連絡が入りました。掘削の段階で油徴は見ていたものの、現物を回収すると喜びもひとしおでした。私は駐在代表・同僚と共にこの無線による交信を傍受しましたが、その

晩は興奮のあまりまんじりとも出来ませんでした。私が現地に着任してちょうど1年が経過した時のことでした。

民間外交官として

まだ日本大使館も開設されていなかった当時、最初に進出した日本企業として私達は日本の民間外交官としての役割も果たしておりました。現地政府も私達を日本の代表者として扱っておりました。たとえば、アブダビが外国の元首を受け入れる際、パレスから私達に空港で出迎えるようにとの要請がなされ、私達は各国の大使と同じ列に並び外国の元首を出迎えたことが幾度かありました。私の古いアルバムの中に、1969年にヨルダンのフセイン国王がアブダビを訪問した際、空港に出迎えた私が国王と握手している写真が収められています。儀典長が機内に出迎えに入ってから国王がタラップに姿を見せるまでかなりの時間がかかりましたが、これは国王自らがパイロットとして操縦桿を握っていたため、着替えに時間がかかったものだと後になって聞かされました。

また、私達はアブダビを大阪万博 (EXPO 70) に参加するよう呼びかけて欲しいと、万博開催事務局から要請を受けておりました。現地で勧誘のための運動を粘り強く行い、その結果アブダビは参加することになったのです。国家としての体制をいまだ成していないアラビアの一首長国にしか過ぎないアブダビが、単独でパビリオンを出すなど考えられもしなかったことです。首長の長男ハリーフア皇太子が、アブダビ・ナショナルデー式典出席のため1970年8月に訪日することになり、私は皇太子の訪日に先立って1回目の勤務を終え帰任しました。皇太子は副最高司令官の肩書きで来日し、日本側のカウンターパートである中曽根防衛庁長官がシルクハットをかぶって出迎えられましたが、私も羽田空港でアブダビ国旗の小旗を振りながら一行をで迎えました。その光景は30年経った現在でも鮮明に私の記憶に残っております。

連邦誕生の苦しみ

アラブ首長国連邦は1971年12月に結成されましたが、私の在任中の1968

年から 1970 年にかけては、連邦結成を目前とした動乱期でまさに日本の幕末から維新にかけての様相を呈しておりました。当初 9 カ国で結成する予定であったのが、バーレンとカタルが単独で独立し、結果的に現在の 7 つの首長国で連邦が結成されました。もともと連邦は自然発生的に結成されたものでなく、大国の思惑によってつくられたものであります。連邦を構成する各首長国、並びにその周辺各国の色々な思惑がからみとても複雑な問題を包含しておりました。

当時のイギリスのウイルソン内閣は、経済的理由によりスエズ以東に駐留する軍隊の撤退を余儀なくされました。イギリスとしてはせっかく築いたガルフでの基盤をそのままにして撤退すると、湾岸地域は暖かい海を求めるソ連南下政策の格好の餌食になると危惧しておりました。そのため連邦の結成を促したわけですが、バーレンの領有権を主張するイラン、アブダビとの未確定の国境線問題を抱えるサウジはいち早く連邦結成に反対しました。しかしながらアメリカ、イギリスの説得もあり結果的に現在の形で連邦は結成されたと言う経緯があります。

現在の連邦を形成する 7 つの首長国の利害は、必ずしも一致するものではありません。石油を産出する国しない国、人口の多い国少ない国、面積の広い国狭い国など、とりわけアブダビとドバイの主導権争いはし烈なものがありました。私の在任中アブダビとドバイの国境に装甲車が集結するという緊迫した事態が発生したこともありました。

連邦は結成されたものの、当初は連邦予算のそのほとんどをアブダビが負担しておりました。1971 年に制定された暫定憲法によると、恒久的首都はドバイとアブダビの中間地帯に置くことになっておりましたが、アブダビは連邦政府の機構をアブダビに置く為の既成事実をつぎつぎと積み上げていました。ドバイはそれに反発しておりましたが、金を出さないくせに口だけ出すなと言う態度をアブダビは取っていたように見受けられました。

OPEC の加盟は、国名は UAE 結成後もしばらくアブダビのままでしたが、その後 UAE の名義に変更されました。OPEC 内部では、従来アブダビに与えられていた生産量の枠は、UAE の生産量として扱われましたが、ドバイは応分の減産には一切応じようとしませんでした。OPEC 総会后、オタイバ石油大

臣が連邦の各首長に会議の内容をブリーフィングしようとしたら、その必要はないとドバイのラシッド首長に追い返されたという話を聞いたことがあります。もともと地下資源に対する主権はそれぞれの首長国の首長に帰属するものとされており、連邦結成後もこれは変わっておりません。UAEの中で最大の産油国であるアブダビは、OPECにおけるサウジのようにUAE内でスイング・プロデューサーの立場を取らざるを得なかったわけです。国家歳入の大半が石油収入によって賄われているにもかかわらず、石油収入はそれぞれの首長の懐に入る仕組みに、連邦としての体質の脆弱性が見出せます。

連邦政府と各首長国政府との重複はいろんな分野で目につくものであります。連邦の総面積は北海道とほぼ同じで、人口は横浜市よりすこし少ない程度ですが、国際空港と名が付くものが6つもあることがこのことを象徴的に物語っております。1971年に制定された連邦の暫定憲法が恒久憲法となったのは1996年ですが、実に25年もの歳月を要したことが連邦自体が抱える事の複雑さを現しております。

2 回目の勤務

1976年の秋、政府関係部マネージャーとして再赴任し3年半アブダビに滞在しました。巨額な石油収入をバックに街は近代都市に変貌し、インフラの整備も私の着任時にはほぼ整っておりました。キャンプ近くの高台にある水タンクは前回の勤務では市内の何処からでも見えましたが、高層ビルに遮られよほど近くに来ないと見られないほどビルが乱立しておりました。会社の操業は極めて順調で、キャンプの敷地内に立派な事務所、独身寮、家族帯同社員用宿舎、テニス・コートなどの娯楽施設が出来上がり、居住環境は前回の勤務に比べ想像できないほど快適そのものでした。

アブダビ石油省の組織も出来上がり、スタッフもかなり充実しておりました。その半面、何を行うにも石油省の許認可を取らなければならず、政府関係部の仕事は煩雑を極めました。雇用委員会、購買委員会、技術委員会など、石油省を中心とした政府機関との共同委員会が設立され、その委員会で審議し認可を受けなければ何事も出来ない仕組みとなっていました。探鉱・開発段階に

においては比較的自由に会社の裁量で行ってきた事柄が、生産段階に入り税金を収めるようになると、コスト削減のためすべての面での締め付けが厳しくなってきました。考えてみれば、政府にとって会社のコスト削減は即国の税収の増加に結びつくわけで、彼らにしてみれば当然の手段を講じたことと言えましょう。

ここで雇用委員会について若干触れてみたいと思います。委員会は連邦石油省、アブダビ石油省、アブダビ労働省の担当者によって構成されています。従業員を採用するためにはこの委員会の審査を受け許可を得ないと、採用者の就業用査証の申請が行えない仕組みとなっております。この委員会は明らかにアラバイゼーションを推し進めることを目的としたものです。委員会の規定によると、従業員を採用する際には地元の新聞にアラビア語と英語の求人広告を出すことが義務付けられて、アプリケーションは会社と雇用委員会双方に送付することになっております。委員会は月に1回開催され、採用予定者の資格を証明するドキュメント一式取り揃え委員会に提出しその場で審議・決済を受けるわけです。

プラント・オペレーターの採用については、地元のアブダビでは応募者があまりいないためヨルダン、エジプトを中心にリクルートメント・チームを派遣し、採用試験並びに面接を行ってまいりました。一応雇用委員会はその機能を果たしてはりましたが、日本人勤務者が交代する際の後任者の取り扱いが、委員会の席上いつも問題とされました。委員会では交代という観念が理解されず、日本人が帰国すればそのポストは欠員となりその欠員は採用によって埋めるべきと言うのが彼らの主張でした。日本人のポストの欠員を補充する際、いつも問題とされるのは何故このポストは日本人でなければならないかと言うことでした。

アブダビ石油の日本人従業員は、一部のプロパー社員を除いて親会社から出向しております。雇用委員会において交代者の資格審査を受ける段階では、すでに親会社で人事発令がなされており、もし委員会でパスしなかったら大変なことになるわけです。私の着任前にこれが現実の問題として起きていました。日本人管理職の1人が審査にパスしなかったため就業用査証が発給されなく、訪問用査証の更新を繰り返しながら任期を全うせざるを得なかったのです。こ

のようなことを2度と繰り返さぬためにも、日本人のポストを委員会に包括的に認めてもらう必要性がありました。

私は委員会にアラブ化推進のための政府の具体的ガイドラインを求めましたが、明確な返事をもらう事が出来ませんでした。委員会を構成する省庁の次官に面会を求め政府の意向を確かめたところ、いずれも具体的な目標を持っていないことが判明しました。そこで、逆に会社が自発的にアラブ化計画を作成しそれを委員会に提出して一括承認を得ることを思いついたわけです。アメリカの著名なマネジメント・コンサルタントであるブーズアレン&ハミルトン社に依頼し、長期スタッフィング・プランを作成しました。そのプランとは、アラブ人の採用を5年間にわたり段階的に増やしていくと言う具体的且つ詳細な計画書でした。鉱業所の所長以下全従業員に背番号をつけて、そのすべてのポストについての職務分析を行い、可能な限りのポストについてアラブ化を図ると言う内容のものでした。このプランは表向きにはアラブ化計画ですが、真の狙いは日本人ポストの確保にあったのです。このプランは委員会に承認され、以降日本人の交代にまつわるトラブルは回避する事が出来ました。このアラバイゼーションの波は、3回目の勤務の時にはナショナルイゼーションにとって変わりましたが、現地人雇用の問題については語り尽くせないほどのエピソードがあります。

イラン革命、イラン・イラク戦争

一方、私の2度目の勤務中に中東情勢を大きく変動させる事件が勃発しました。それは1979年2月のイラン革命と翌1980年9月のイラン・イラク戦争の勃発です。原油価格は昂騰し第2次オイル・ショックを迎えました。これは産油国ならびに石油開発会社にとって大変なフォローの風であったわけであり、クエートに追いつけ、追い越せ”の合い言葉のもと、膨大な石油収入をバックにしたアブダビの急速な発展振りには目を見張るものがありました。また会社も恩恵を受け、事務所・独身寮・福利厚生施設の拡張を図る事ができ、従業員の生活環境は一段とレベル・アップしました。

景気のバロメーターは人と物とお金であると言われております。人と物と

金の動きが多ければ多いほど景気は良いわけです。お金の動きは目には見えませんが、航空会社のアブダビ空港への乗入れ便数、ミナ・ザイード港に寄港する貨物船の数を見れば人と物の動きがいかにかに多いかは一目瞭然でした。日本航空は最盛期に週3便ジャンボ機を乗入れました。しかしその後、景気の後退と共に週1便に減便され、さらに機種も DC-10 に変更されやがてはアブダビから撤退してしまいました。

日本から報道記者が大挙して入れ替わり立ち代わりアブダビに取材にやってきたのは丁度この頃です。“ホメイニーは革命の輸出を考えているが、対岸の UAE としてはいかなる具体的な対策を講じているか？”と記者に質問されましたが、私は“この国で革命がおきるなんて考えられない。政府もその為の対策は何ら講じていないと思う。それが証拠には、革命の最中にアブダビのザイード首長もドバイのラシッド首長もパキスタンに鷹狩に行ったままこの1ヶ月間 UAE を留守にしている。もし本当にやばいと思ったら、即刻帰国するはずである”と答えておきました。

もともと、UAE の人口は少なく外国からの出稼ぎ労働者の人口比率が圧倒的に高いのです。どの首長国もナショナルは優遇されております。一方、外国人出稼ぎ労働者は自国よりも高水準の賃金に満足しております。鉱業所のあるインド人海上勤務者が、自分の本国送金で15人の家族を養っていると私に語ってくれたことがあります。下手に反政府的な過激な行動をとると即刻国外追放処分となり、本国に残した一族郎党が生活の糧を失うことになるので、彼らが革命のプロモーターになることは絶対に考えられません。強いて言えば、すでにアブダビでもカタールでも経験していることですが、首長の首の挿げ替え程度で、政治体制の根本的な変革はおこり得ません。これは首長制をとっている湾岸諸国に共通して言えることであります。

イラン・イラク戦争の時も、アブダビを訪れた報道記者から“イランの船でもイラクの船でも良いから、砲撃によって沈められ、周辺の海が油で汚染されている現場を案内して欲しい”と頼まれたものです。写真がないと書く記事も臨場感に乏しいらしいみたいです。イラン革命もイラン・イラク戦争も、現地では日本で報道されているほどホットに受け止められておりませんでした。イラクはこの戦いをアラブの代理戦争であると位置付けていましたが、GCC

(湾岸協力機構)加盟諸国は結構しらせていて、回ってくる奉賀帳に応分の金を払うだけでした。“この戦争はイランが勝ってもイラクが勝っても困る。何故ならばホメイニもサダムも拡大主義者 (expansionist) であるからだ。願わくばこの戦争は両国が力尽きるまで長く続いて欲しいものだ”と、アラブの友人が笑いながら私に語ったことがあります。意外とこれがアラブの本音だったのではないかと思います。

<了>

なお、本稿はインタビュー原稿をご本人がまとめられたものです。

筆者紹介



吉田 祐司 (よしだ ゆうじ)

元アブダビ石油株式会社取締役、
アブダビ鉱業所副所長。

ジャーナリズムの側面から見た中東と日本の関係

牟田口 義郎

とき 2001年（平成13年）10月13日（土）

ところ 東京大学東洋文化研究所 会議室

ききて （公開講演会形式）

きょうの講演会は、ジャーナリズムの面から中東と日本の関係を考える、というのが趣旨でありまして、先生のこれまでのご経験から中東報道における課題について、いろいろお話をいただければと思います。

牟田口 私、ジャーナリズムから中東を見るということをはじめたのが、朝日新聞カイロの特派員になったときで、1957年です。そのころ日本のマスコミが中東をどのくらい重視していたかといえ、特派員の数で分かります。私が行く1年前は2人しかいなかったのです。本当は1人かな、朝日新聞は、当時スターリンとユーゴのチトーが喧嘩していたので、そこをひっくめて取材するというので、イスタンブール特派員を出した。そうしたら、今度は56年の第2次中東戦争です。それで彼はイスタンブールからカイロへ移ったのでカイロは2人になった。東京中日新聞が前からいたのです。

そのあとで僕が行ったときは、第2次中東戦争の影響で、毎日、共同、読売がいました。今はテレビを入れて10社。エルサレムやイスタンブールに駐在させている社もあります。

東京へ原稿を送るには、電話が掛かりませんから、タイプライターで打ち込んだ原稿を電報局へ持って行く。ところが何かうるさくなってくると、国連で認めた言葉、公用語以外はダメだといわれて、えらい苦労しました。僕も58年のイラク革命で行ったときには、バクダードのイラク革命政府がやはり検閲をやりますので、5部作らなければいけないのです。カーボン紙を4枚はさんで、それでタイプ・ライターでバタバタとやる。1枚が本人用であって、1枚は電報局が受け取って、1枚は検閲でどうのこうのとなるわけです。

僕はそこで3年苦労したのだから、これからしゃべることは皆さんに聞いていただけるに十分な中身を持つのではないか。というのは、中東の出来事を報道するには歴史を知らなくてはいけない、ということなんです。最初われわれには予備知識がほとんどなかった。中東と日本との距離は、実質的な距離ではなくて、心理的にいかに遠いか。それに未知なるイスラームが加わるのです。日本人はイスラームの「いろは」を知らない。そういう読者にどう報道するか。それにはまず歴史を勉強しなくてはならない。苦労の始まりです。

とにかくあそこは宗教が支配する地域だと割り切っている連中が多い。「だからわれわれの常識が通じない」というようなことになるのです。そうじゃないというわけで勉強を重ね、私はその後ジャーナリズム、それからアカデミズムを卒業したので、その記念にと、今年の6月に中公新書で『物語 中東の歴史』という本を出しました。これです。そこで僕は、いま言ったようなことを本当に肝に銘じていたので、このプロローグのところでのこのようなことを、Q&Aの形で書いたのです。

Q&Aですから皆さんがQと思ってくださいよ、私がアンサー役とね。

Qですよ。「日本人はイスラームとか、アラブとかという言葉が聞くと<わからない>とって、すぐにお手上げになってしまうようだが……」。

それで私がしたり顔をして言います。

「それは日本人の中東認識が遅れているからだよ」。

すると、「では」といってQが来る。「イスラームはいつ頃日本に紹介されたのかね」 皆さん、お分かりですか。

紹介者は、新井白石ですよ。皆さん、誰でも知っているでしょう。知らない人は出ていく。(笑い)1725年に彼は死んでいます。18世紀です。「けっこう古いというかもしれないが、預言者ムハンマドがイスラームを広めてから1100年もたっている。白石は『西洋紀聞』の中で「世界の宗教はキリシタン、マゴメタン、ヘイデンの三つ」、と書いた。これが最初だね。

白石は別に漢文で『采覧異言』という世界地理書を書き、そこでは今度は漢字で書いています。ムハンマド(謨罕鶯徳)です。このような難しい字があったとは知りませんでした。

マホメット Mahomet とは、ムハンマドのフランス語表記が一般化したものです。いつだったか、私がカイロでエジプト人の新聞記者と話をしていた時、マホメットと2、3度言ったら、とうとういやな顔をして、「それはヨーロッパ訛りだから、どうかムハンマドまたはモハンメドとよんでくれ」といっていました。

それで僕はまたついでに「サラセン文明」といったのですよ。「サラセニック・シビライゼーション」というと相手は分からない。「何だい？」というから、これこれこうだといったら、「なんだ、それはアラブ文明だよ」というのですよ。(笑い)だから僕はテヘランでそう言ったら、テヘラン大学の教授から横槍が出て、「あれはアラブ文明ではないですよ。あの文明はバグダードで栄えて、その時中心になったのは、われわれアジャム(非アラブ)だ。そのアジャムの筆頭がわれわれペルシャ人ですよ」ということです。だいぶ面倒くさくなりましたが、とにかくマホメットと言ってはいけない。

「じゃあ、マホメット教といわずにムハンマド教といえればいいのか、イスラームの代わりに？」といったら、「だめだめ。イスラーム教徒のことをムスリムというのだが、彼らはムハンマドを拝まない。キリスト教徒がイエスを拝むのはイエスが神の子だからで、これに対しムハンマドはイエスやモーゼと同じく預言者だが、それ以上のものではない。」

マホメット教とは、その違いがわからぬヨーロッパ人の誤認によるものです。そういう誤認が文明開化の日本に、舶来思想として入ってきた。では回教徒とすればいいのか。ダメです。それは中国人の誤認です。今では新疆・ウイグル族ですが、あの頃の回族が、中国では真っ先に、イスラームに帰依した。それで長安、その他中国の漢族の間では回族、回教徒といわれたわけです。

ところで、現在日本のマスコミは回教という語の使用を止めています。しかし、止めたのは近いのですよ。いつかという、第1次オイル・ショックの時に、1973~74年のころです。

第4次中東戦争で、アラブ産油国は敵に油は売らない、イスラエルの味方のアメリカに売らない。敵に協力している国には売り方を減らすとあって、アメリカべったりの日本をキリキリ舞いさせました。あの時は田中内閣の時代で、

政府が自由にできる原油の量は4日分しかないということがわかって真っ青になった。これでオイル・ショックが起こる。

そうしたら日本イスラーム協会の理事長が朝日新聞に投書をしたのです。いまいったように、回教、回族というのは誤認なのだから、その使用はこの際やめて、回教は「イスラーム」と改めてください、と書いた。でもそうなるにはずいぶん時間がかかったですよ。新聞の保守性の一例です。

あの時、二階堂官房長官が「新中東政策」を出しまして、「イスラエルは占領地から撤退せよ。撤退しなかったら、わが国政府も考えることがあるぞ」、と書いて、「伝家の宝刀」を抜きそうな発言をしたのですが、とうとう動かないで済ませてしまった。あのころの新聞は盛んに、この「新中東政策」なるものは「油乞い政策」である、油目当ての政策転換であると書き立てたものです。

論説委員だった僕はそのころ、アルジェリアの在京大使館の参事官と仲が良かったので、お茶に呼ばれたとき、当然のことながら官房長官談話が話題となり、「新聞では『油乞い外交だ』といているが、どうだ」と聞くから、「いや、まさにそのとおりですよ」と受けて、「その油という字を一字ひっくり返すとアラブとなるんですよ」といったが、向こうは分からない表情だったから、僕はカタカナで「アブラ」と書いて、その下にローマ字で「ARABU」と書いて、「ほら、これ、一字ひっくり返すとアラブがアブラになるでしょう」というと、手に持ったコーヒー茶碗が揺れて、今にもこぼれそうでしたよ。「こんな解説を聞いたのは初めてだ」というわけで、「近く在京アラブ大使館の広報官の会合があるからそのときは紹介させていただきますよ」と大喜びでした。

では、次の問題に移りましょう。「白石の後継者はいなかったのか。」蘭学者の中には大学者がいたが、地理学者にとどまって、このイスラームに関してはオランダ人の偏見を下書きにしている程度です。そして明治維新後は舶来万能の時代になる。日本人で初めてメッカ巡礼をしたムスリムは、山岡光太郎という人で、これは20世紀に入って明治42年、1909年のことです。日本人の中東意識が遅れているというのはこのような事情からです。

山岡光太郎が書いた『アラビヤ縦断記』(事務局 注1)という本を読むと、彼がもてて大変なのは驚きですね。メッカで礼拝してメディナに行くのですが、そうしたら出迎えが来て、立派なホテルに入れられて、そこで講演してくれと

いうのです。何の講演かという、地図の上で見たら、こんなに小さい日本が、どうしてロシアに勝ったのか。その秘密を日本人の立場から話してくれということで、メディナでそれをやるのです。次には北上してシリアのダマスカスへ抜けたら、今度は市長が出迎えて、あなたのために講演会をセットしたから、同じテーマでぜひやってくれという。またまた大成功だったらしいですよ。イスタンブールに行ったら、また同じこと。トルコはロシアに負け続けている国だから、それほど日本はもてたというのです。

そのようなわけで、向こうのほうがかえって日本を知っている。たとえばエジプトの民族主義者、ムスタファ・カーメルはパリに留学して日本を知り、帰国してから『日本近代史』という本を出しているのです（そのようなことは、僕は特派員時代にはまったく知りませんでしたけれども）。それからさらに羽衣伝説、浦島伝説などもフランス語の本から取材して出している。ですからそれを讀んだエジプト人のインテリは、当時の日本人よりもはるかに日本のことを、日本人が中東を知るよりも知っていたということになるのです。

わが方はその後、昭和 10 年代にずいぶんイスラームを研究しました。東京に大日本回教研究所というのができて徳川公爵が会長になった。僕はそのことを知って国会図書館へ出かけて機関誌を引っ張り出して読んでみたら、昭和 15、16、17 年、内容は大変高度です。感心しました。また弘文堂が昭和 19 年に「世界史シリーズ」を出しているのです。その中で、「西アジア」という一冊の中で詳しい「中東史」が出ているのです。いや、感心しましたね（事務局注 2）。

昭和 19 年といえば 1944 年ですが、アラブの統一はなるか、とか、アラブ連盟というものを作ろうとしているけれども、これは果たして将来性があるかどうか、まで書いているのです。なかなか読み応えがあるのです。その筆者は誰かという、戦後わが国の総理大臣になった民主党の芦田均さんです。芦田均は日本大使館のイスタンブール駐在をやったから、その経験を生かして中東現代史を書き上げたわけで、僕はそれを知って、われわれには立派な先輩がいたものだと感じ入りました（事務局注 3）。

以上のようなことはあとになって、中東学というものをやり出してから知ったことですが、カイロ勤務を終えて 1960 年、日本に帰ったら忙しいわ忙

しいわ、あちらこちらから毎日のようにお座敷が掛かってくるのですよ。講演してくれ、やれ、原稿を書いてくれとってね。中東は日本人にとって未知の世界、心理的に遠い遠い世界だと痛感したものですよ。「こんな具合なら、将来を中東に賭けても賭けがいがある」なんてね。

私は、大学は文学部で、それもフランス文学です。ですから朝日新聞へ入ったときは、10年以内にパリ特派員をやってみたいなと思ったのです。そうしたら見事願いがかなって、8年後にパリの土を踏んだ。しかし、これはカイロからの出張でした。ヨーロッパの特派員がパリに集まって、特派員会議をやって、それで新聞に何か連載記事を書くということで、カイロはロンドンの管轄下に入っていたので、生まれて初めてヨーロッパへ行ったわけですが、その時受けたパリの感じとカイロの感じとは全然違った。何と言うか、文化ショックというか、異国を感じる、外国へ来たとき身構える感じ。それはカイロの時のほうが断然強かった。

パリについてはこちらはフランスに行く前から予備知識があったから、そんなに違和感がないですね。ところがカイロでは砂漠と乾燥、右から左に書くアラビア文字、三大一神教の一つであるイスラーム　　こういうところに住んで違和感を感じなかったらどうかしていますよ。この違和感を乗り越えて初めて中東学は発展するのですが、わが国ではそれがなかった。日本の中東学は大東亜共栄圏政策のための回教研究が目的で出発したのだから、いま紹介した回教研究所は戦争が終わると自然消滅してしまった。ですから日本の中東学は戦後、それも昭和30年以降の再出発ということになります。

何しろ、文部省にまだドルがなかったから、大学の先生も、東大などは真っ先に中東へ行きたかったでしょうが、「まずは欧米に追いつけ」の時代のあおりで、文部省に中東留学の枠がなかったのですね。だからマスコミも遅れていました。

そこで僕の経験をひとつご紹介しましょう。

1980年にイラン・イラク戦争が始まったころ、「アラブが内輪喧嘩ばかりしているのは、イスラームの教義に欠陥があるせいかな？」と聞かれて、僕は返答に窮しましたよ。実はこれは外にいわれては困るのですが、それは朝日新聞の論説委員室でのミーティングの時でした。論議がまとまって社説の執筆を引

き受けた僕に、同僚の一人がそう質問したのです。そこで僕は、「両者はイスラーム教徒だが、イラン人はインド・ヨーロッパ系で、イラク人のアラブはセム系なんだがね」と答えたら、詰まった相手は「だって国の名前が似ているじゃないか」と反問するのです。「語呂合わせでこられては困る、議論にならない」と僕は言おうと思ったけれどもぐうっとこらえましたね。

そのころ外務省が主催して、イスラーム世界の学者を集めて、帝国ホテルで国際会議を開きました。それが終わってホテルのレストランで懇親会をやった。乾杯が終わってから、脇にいた僕よりも背の高い人に自己紹介したら、相手はインドネシアのジャカルタ大学の法学部長だという。その時、いま紹介した話を思い出したので聞いてみました。「あなたがた、本物のイスラーム教徒は、こんな時どのように返事しますか？」

そうしたら彼はちょっと考え込んで、「そんなことを聞かれた覚えはない」という。そして「待ってくださいよ。こういうのは直接的に答えるのはあまりよくない」と、「何かちょっとひねって反論する。変化球で答えたらどうでしょう。たとえば、今世紀には世界大戦がいくつあったかと聞く。そしたら相手は、『二つあった』と答えるでしょう。そこで、この二つの大戦はイスラーム教徒が起こしたのでしょうかと反論してご覧なさい」というのです。「どうです。あの二つの大戦は敵味方ともクリスチャンだったじゃないですか。だから、キリスト教教義の欠陥のために戦争が起こったといえますかと突っ込んだら、相手は黙るでしょうね」といってね。戦争は国益の衝突から起こる、と締めくくりましたよ。

ここで、論説委員時代前後のことを少し話しましょう。僕は1970年前後の3年間、支局長としてパリで過ごしました。しかし、論説委員として帰国したあと、どこからもお座敷がかからなかった。カイロの時とは雲泥の相違です。明治以来、パリ帰りは無数にいたからでしょう。そしたらまた急に忙しくなった。さっき話したオイル・ショックのためです。そこで僕は「中東に後半生を賭ける」との思いを新たにしました。

ところで、論説委員とは、まず「社説」と「天声人語」、次には題字下の「窓」と「素粒子」を分担執筆します。報道人の仕事は一種の啓蒙活動ですから、たとえば社説を書くとき、読者の知的平均をどの辺りに定めるか。「大学3年生

ですか、社会人1年生ですか」と論説主幹に聞いたら、「違う、違う、高校3年生だよ」というのです。高校3年生に分かる新聞の社説、記事を書いたら、これは大人もちゃんと分かる。難しいテーマでも、筋道立てて分かりやすく高校3年生が理解できる原稿を書けば、「これは立派な社説だ」といわれました。以来その教訓は忘れておりません。

そのような論説時代を10年送って朝日を卒業し、成蹊と東洋英和の両大学で計20年の教壇生活を送ったあとの新世紀は「毎日が日曜日」と思っていたら、この事件じゃないですか。米同時多発テロ！

僕は現役を退いて、予備役だと思っていたから、この20年来の中東の現象をあまり熱心に、国際関係の中でフォローしていないんですよ。しかしそういってはおられないから、この半世紀間に蓄積した知識で、特に欧米首脳の発言をチェックしてみると、歴史的無知から来る落第点がありますね。あげ足をとるつもりはないが、国際的リーダーが歴史に無知であっては困るので、落第点にしたのです。ついでにいうと、日本人の学者にもでたらめがありますね。

まずブッシュ米大統領。それからベルルスコーニ・イタリア首相。それから日本のさる学者、僕は、きょう、用意して来た（一同笑い）彼らの「失言録」を公開します。

まずイタリア首相。彼はドイツ訪問中の9月26日に、このようなスピーチをした。「私たちの文明は繁栄をもたらし、人権の尊重も保証している。その点、われわれの優越性を意識しなければならない」これで収まったらよかったです、例としてイスラームを引いたのが勇み足、いや、本音？「こうした価値はイスラーム諸国にはなく、1400年前の段階に留まっている国も多い」といったのです。そこでアラブ連盟の事務局長が、「まさに人種差別的な発言だ、十数億のイスラーム教徒に謝れ」と抗議したのは当然でしょう。

これに関連してさるテレビ番組を見ていた時、司会者が「この憎悪の源はどこにあるんですか？」と軍事アナリストなんていうのに聞いたのです。そうしたら「何しろ2000年の歴史がありますから根が深いです」とイタリア首相よりもっと酷いことをいってましたよ。（一同笑い）

もう一つは、今度は日本の学者です。『歴史とはなにか』という本を書いている、ある大学の名誉教授ですが、これは酷い。こんなことを言っているので

す。タイトルは「歴史を持たない文明同士の衝突」です。よく分からないのですが、アメリカもイスラームも歴史をもたない、文明を持たないというのです。

「18、19世紀にできた近代国家というのは、戦争をするために存在します。そして戦争するためには相手も国家であるべきです。しかしイスラーム文明というのは、実はいまだかつて国というものを持ったことがないんです。イスラームは一つであるという意識のほうが優先します。」

どうなんですか。ウソ八百ですねえ。アラブはイスラームを旗印に掲げて国をつくった。イスラームという宗教が国をつくったわけではない。アラブとイスラームを往々にして学者は混同しています。アラブの国造りは教祖ムハンマドの指導で始まり、聖地メディナを首都にして「正統カリフの時代」が40年続き、次はシリアのダマスカスを首都にしたウマイヤ帝国が90年、次はバグダードを首都にしたアッバース帝国で、いわゆるサラセン文明が開花。「千夜一夜物語」の時代ですね。この文明の旗手は「物語」に数十回も登場する第5代カリフ、ハールーンですが、真の指導者はその息子のマアムーンでした。この文明をひと口でいえば、ギリシア文明の再生（ルネサンス）です。

サラセン文明とは、要するにイスラーム文明のことですが、その担い手のアラブがギリシア文明を受け継ぐとは、どういうことでしょうか。ハールーン、マアムーン父子はビザンツ帝国から、大量のギリシア諸学の文献を高価で買い求めました。ビザンツ側はもうかった、と思ったようですが、ビザンツ人とはギリシア人の移民の子孫です。その彼らが、アリストテレス、ヒポクラテス、ユークリデスら、古典古代の先輩の業績に無関心で、その知的遺産の継承者であることを放棄していたのは、その理由はひとつ、彼らはイエスを知らなかったからだ　　ということです。このことを知って、僕は驚きましたね……。

そこで、ギリシア学の諸文献が、バグダードでアラビア語に訳されていきます。カリフのマアムーンは820年ごろ、「バイト・アル＝ヒクマ」という学士院、つまり翻訳センターを創りました。「バイト」とは「大きな家」、「ヒクマ」とは「知恵」、つまり「知恵の館」ですね。彼はしばしば、このバイトの会議に出てセミナーを主宰し、「ゆうべアリストテレスが夢枕に現れ、自分の学問とイスラームの聖法との間には、何の矛盾もないと語ったよ」などと話したそうです。

このようにしてバグダードがイスラーム帝国の首都になってから 100 年足らずの間に、アリストテレスの哲学書、新プラトン派の著作、ヒポクラテスやガレノスの医学書、プトレマイオスの天文・地理学、およびペルシャやインドの科学書がアラビア語で読めるようになっていくのです。

「知恵の館」に集められた、信仰に囚われない学者たちの仕事は、翻訳から始まったのですが、そのうちに彼らの知的シンク・タンクの中で、文明の融合という現象が起こり、いくつかの出口を見つけて外に広まって行く。バグダードからカイロに達した文明の移転の道は、北アフリカを經由してイスラーム・スペインに落ち着きました。その首都コルドバは「バグダードに追いつき追い越せ」と文化を競う。やがて 11 世紀末、学術都市のトレドが、クリスチャンのレコンキスタ(国土回復運動)のため陥落すると、ここにヨーロッパ各地から知的エリートの若者たちが勉強に来てまずアラビア語を勉強し、アラビア語でギリシア諸学を読み、それらをラテン語に翻訳して帰国する。最も珍重されたのはアリストテレスと自然科学だったそうですよ。当時のヨーロッパのインテリは、アラビア語から重訳されたラテン語で、アリストテレスを読んだわけですね。

そこでいいですか、それでアリストテレスをもう一つやりますが、「イスラーム神学の基礎には、アリストテレスの論理学がある。この方法論によってイスラームはアラブの民族宗教の枠を越えて、ペルシャに行っても、インドネシアに行ってもそれを受け入れられる普遍性をもつことができた」ということです。

このような歴史的事実をイタリアの首相は知らないのですから困ってしまいます。「忘恩の徒」だとよくアラブの人が言っていますね。スペイン経由でわれわれからこれだけ恩義を受けているのに、もう喉もと過ぎたら全部忘れてしまったということになる。恩義は受けたけれども、その後ニュートンとか、ガリレオとか、コペルニクスらの大学者が出てきたので忘れられてしまった、となっているのですね。

さて、今度はブッシュ大統領です。「これは戦争だ」といって、「これと戦うのは十字軍だ」といったでしょう。あとで学者に言われて引っ込めたそうです。十字軍という表現は、イスラーム以外の世界で軽々しく使われています。

20年ぐらい前のこと、私は笑ってしまったのですが、夏休みの記事で、農村の過疎化が進んでいるので、学生たちが草ぼうぼうになったところへ行って草を刈る。そうしたら新聞は見出しで「草刈り十字軍」といって、ほめていましたね。

十字軍とはどのようなものであったかを考えてみましょう。今度の事件では、文明に対して加えられた「集団的国際テロである」といわれましたね。しかしいいですか。キリスト教紀元2000年までのあいだに、国際的な集団テロ、しかも神の名まで使ったテロの第1号は誰かといったら、これは十字軍なんです。あれはヨーロッパ諸国がローマ法王に扇動されて行なった集団的国際テロ、国際的集団テロでしょう。ところがそのようなことを言っているのはまだ一人もいないようですね。十字軍の本性というものは、1099年7月何日か、エルサレムに攻め込んだ連中が何をやったかを見ればわかる。彼らは、そこに住んでいる人間は全部、そこに在のクリスチャンやユダヤ教徒もひっくるめて皆殺しにしたのです。それでゴルゴダの丘に上る。そこには聖墳墓教会があり、だらだら坂ですけれども、血の川が流れていた。くるぶしまで血の海に浸りながら、彼らは「神、そを欲したもう」と唱えつつ、むせび泣きながらイエスの墓まで歩いていった、とされています。

これは、ヨーロッパに帰国した兵士たちが自分たちの武勲を在の連中に物語ったという形で、キリスト教側の資料として残っています。

それからもっと酷いのは、シリアの北のほうのマアッラーという町の場合です。その町は十字軍に囲まれて、市民の不動産、その他に手をつけないという条件で安心して城門を開いたら、全員の皆殺しでした。その上、大人は鍋で煮て食べ、子供は串焼きにして食べたというのです。19世紀までこの話はヨーロッパに十字軍の武勲の一つとして誇らしげに伝えられていたそうです。聖地奪回のためには相手の人肉まで食って務めを果たした。「ああ、立派だな」というわけです。

この十字軍という言葉は、侵略されたアラブ世界に、今も生きています。「聖地奪回」というけれども、当時そのエルサレムでキリスト教徒が迫害された事実はない。エルサレムがイスラーム教徒統治下になってからは、そこに住むキリスト教徒、ユダヤ教徒は共存していた。そこへ十字軍が攻め込んで来たので、

ユダヤ教徒は自分達の寺院（シナゴーク）に逃げ込んだ。「ここは聖域だから安全」と信じたのですが、十字軍は出入り口を板で目張りした上で火をつけ、全員を焼き殺してしまったそうです。その上で、「神、それを欲したもう」と唱えるのだから、ひどいものです。

ここでユダヤ人の悲劇について語りましょう。ユダヤ人に対する差別と迫害はヨーロッパで絶えることがなく、シェークスピアの「ヴェニスの商人」にも現れていますね。19世紀後半には東西ヨーロッパで集団迫害が起こる。東ではロシア皇帝の暗殺事件が起き、犯人グループの中にユダヤ人がいたのです。西ではパリでドレフス事件が。参謀将校ドレフス大尉が軍の機密をドイツに流した罪を問われ、本人は否認のまま有罪判決を受け、流刑地送りになりました。有罪か無罪かで国論が二つに割れたほどの大事件です。この事件を取材したウィーンの有力紙の特派員がユダヤ系のテオドール・ヘルツル。彼は「自由・平等・博愛」の国のフランスでさえこのようなことから、住んでいる国に同化して忠節をいくら尽くしても、あすの安全についての保証はないと痛感し、1896年、『ユダヤ人国家』という本を出し、翌年スイスのバーゼルで第1回シオニスト会議を開き、設立されたシオニスト機構の理事長に選出されました。シオニズム、シオニストの誕生です。

シオンとはエルサレムにある丘のひとつの名前で、そこにダビデ王の廟があることから、ユダヤ人にとってはエルサレムの代名詞になっています。そこでシオニストのスローガンは「シオンに帰れ」、すなわち、ヨーロッパを離れ、パレスチナで国づくりをしようというもので、ヘルツルの言葉を借りれば、「土地なき民（ユダヤ人）に民なき土地（パレスチナ）を」ということになります。

ところが、そのころのパレスチナに住むユダヤ人は70万人のうち1万人に過ぎなかった。あとのパレスチナ人はアラブ系です。そこへ、よそ（ヨーロッパ）からやって来て国づくりをしようというのだから無理がある。ヘルツルは現地の事情に無知でした。それは十字軍を送りこんだローマ教皇の無知と同じです。迷惑を受けたのはパレスチナ・アラブ人です。

さて、20世紀に入ると、第1次大戦が起こります。するとイギリスは、この中東地域の将来について、3つの矛盾する約束をしました。いわゆる三枚舌外交で、1つはアラブとの約束、もう1つはフランスとの約束。そして最後は、

今日まで尾を引いているユダヤ人との約束で、これが有名なバルフォア宣言です。戦争末期の1917年11月に出されました。バルフォアとは当時の外相の名で、これは閣議がOKを出しているから、英政府の公式な約束になります。それは次のとおりです。「イギリス政府はパレスチナにユダヤ人が民族郷土をつくることに賛成し、この目的が容易に達成されるよう、最善の努力を払うであろう。」

しかしパレスチナのユダヤ人が義勇兵をつのってイギリスと共闘したことはない。では何のための約束か。めあてはアメリカの裕福なユダヤ人です。イギリスは戦費を調達するために、彼等の財布を当てにした。そこで彼らに反対給付として「民族郷土」を持ち出し、戦後はパレスチナを統治下に置き、バルフォア宣言を統治の原則にしたのです。これではパレスチナのアラブ人が怒るわけですよ。

ビン・ラーディンがっていますよ。「われわれムスリム(イスラーム教徒)は80年以上、人間性と尊厳を踏みにじられて血を流してきた」と。1920年に初めてパレスチナで、シオニスト・ユダヤ人とパレスチナ・アラブ人との集団衝突が起こった。アラブ・イスラエル紛争の第1歩です。

その後のパレスチナ情勢をかんたんにフォローしてみましょう。第2次大戦が終わって世界は平和を回復したのに、パレスチナでは紛争が再開し、斜陽帝国イギリスは治安を回復する能力がなく、1947年5月、1年後のパレスチナ撤退を宣言、以後の処置をできたばかりの国連に委ねた。そこで国連は現地調査の結果、「アラブ人の多いところはアラブ国、ユダヤ人の多いところはユダヤ国、エルサレムは国連の統治下に置く」という報告書(いわゆる「パレスチナ分割案」)を提出しました。これが11月の総会にかけられます。アラブは全員が反対しましたが、シオニストはどんなに小さくても自分たちの国ができるので賛成です。情勢は反対派が優勢でそのなかにはアメリカもいましたが、突然トルーマン大統領の命令で、態度を一変して賛成に転じ、その結果、翌年5月、シオニストはイスラエル国の独立を宣言、これを認めないアラブ諸国と戦火を交えます。以後4回も続く中東戦争の始まりです。このいきさつを見れば、イスラエルをつくったのはアメリカだということが、おわかりでしょう。

トルーマンはなぜこのような変心をしたのでしょうか。それは翌年に迫った大統領選に勝つためです。民主党の彼は共和党の対抗馬よりはるかに旗色が悪かった。それを見た在米ユダヤ人協会の会長がトルーマンに持ちかけたのです。「もし大統領が分割案に賛成してくれれば、在米ユダヤ人の200万票は全部あなたへ行くでしょう」と。トルーマンはこの取引に応じ、翌年、「奇跡の逆転劇」が起こりました。よろしいですか。世界地図を見てもすぐにはわからないほど小さなパレスチナの地域紛争が、超大国アメリカの最大のイベントである大統領選挙のキャスティング・ヴォートを握ることになったのです。彼の有名な言葉が残っています。「アラブに味方して票になるかね。」

以後、パレスチナ問題はアメリカの重要な国内問題になりました。

以後の中東戦争については、今ではタテ文字で書かれている参考書を読めばわかることですから、私の話は一応この辺でやめようと思います。何かご質問があったら、いくらでも。

どうも、ありがとうございました。大変に幅広いお話になりまして、質問も多岐に渡ると思うのですが、とりあえずこの研究会の趣旨から、日本とアラブの関係に絞って質問を始めたいと思うのですが.....。

牟田口 それでは一つ呼び水を出します。いままで日本が出てこなかったからね。たとえば日本は何をすべきかという問題。その前に弁えておくべきは、アラブの人たちは、本質的に日本に好意をもっているということです。というのは、日本はいまだかつて、この中東で一つも悪いことをしていないからです。兵を出して侵略したりということをしていない。これが19世紀の帝国主義時代に、散々インドネシアからモロッコに至るまで自分たちの植民地にして、搾取して、差別した西側の国とはまったく違うところです。ここで僕の経験を紹介しましょうか。もう25年以上も前になりますが、イラクの大きな国祭日に招待されて出かけた時、資料をいろいろもらって来ましたが、その中に『サッダム・フセイン講演録』という新書判ぐらいの小冊子がありました。

その中で日本のことが出てくるのです。いろいろなことが書いてあります。「日本とは大いに付き合うべし」といっている。なぜかというと、「われわれは日本と戦争したことがない、向こうも仕掛けたことがない。そこでわれわれの明日を考える時、日本は必要なものをたくさん持っている。しかも、日本は

われわれに宗教的、政治的な野心を持っていない。だから大いに付き合い」と強調している。いまでも僕はサダム・フセインという政治家は好きな男ではないけれども、その語録は相当アラブの人の意見を代弁していると思うのです。日本は悪いことをしていない。ということは大変なプラスじゃないですか。

そうしたら、そのころ私の尊敬する外務省 OB がいて、ベテランのアラビストだったのですが、「しかしね」といってね、次のように語りましたよ。僕はよく覚えています。「なるほど。日本はどこを捜しても悪いことをしていません。これは事実ですよ。だからそれを利用して結構です。しかし、いいことも何一つしていない。これが問題です。両者の関係はまだ白紙だというのは、そこなのです。悪いことをしていないというプラスの面と、良いことをしていないというマイナスの面を共有しているんですね。」

さらに聞いた話を要約してみましょう。

中東を見てごらんください。イギリスは悪いことをたくさんしているが、良いこともしている。フランスだってそうです。たとえば、カイロにエジプト学研究所という施設を作ったのはフランスで、早くもナポレオンの遠征中に旗揚げし、200年たった今でも活動していて、古代エジプトの歴史にとって貴重な資料の復刻版を出したりしています。

次にペルシャ湾を眺めてみると、イギリスは1972年にこの地域から撤退したので、その支配下にあったアラブ首長国連邦、カタール、バーレーンが独立した。その時、バーレーンの首長はあいさつにきたイギリス駐在代表に「ブリティッシュ・カウンシルは残してくれ」と頼んだそうです。これは、イギリスの文化・言語の普及のための施設なのですが、首長の願いは、新生国家の教育制度が確立するまで、その施設を利用させてくれ、ということだったのですよ。

ありがとうございました。特派員のかたがたはどんな方法で取材されたのですか。

牟田口 学者とちがって、新聞記者は足で書け、といわれますが、まさにそのとおりでした。1950年代はアラブ民族主義の時代で、その後半のリーダーはエジプトのナセル大統領でした。そしてクーデターや革命が起こり、アルジェリアでは反仏独立戦争が進んでいる。現場を見聞しなくては記事を送れません。また、今は静かでも、いつ政治的な地殻変動が起こるかも知れないから、

事前に各国の首都を見ておく必要がある　というわけで、僕の行動範囲は、東はイランから西はアルジェリアに及びました。新聞の社会部記者は事件記者といわれましたが、その筆法でいけば、僕らは国際事件記者でしたね。

これは後日談になりますが、中東での行動範囲が広がったということは、定年後に大学の教壇に立った時、貴重な財産になりましたね。

ふつうの学者ではできないということ？

牟田口　そう、そのとおり。あれは74年のオイル・ショックのころだったかな。政府や民間機関がいろいろ研究会を催しました。その時に会った関西大学の藤本勝次先生の話がとても印象的だったですね。先生は中央公論社が出した「世界の名著」シリーズのなかで『コーラン』を担当されたアラビストです。こう話されましたよ。「牟田口特派員発の記事はよく読みましたよ。文部省がわれわれに中東行きを許してくれなかったのですね。みなさんの現地発の記事はわれわれにとって、とても貴重な情報源でした。」

報道管制みたいなことはありましたか。

牟田口　うーん。ある時も、ない時もね。というのは、送稿手段をまず説明しなくちゃね。手段は電話と電報しかなかったが、電話はまずかからないから、電報で送る。平時はローマ字で打てたから、管制も検閲もないのに等しいですね。ところが革命や戦争など、緊急事態が発生すると大変でした。英仏語その他、国連の公用語でしか打てない。ということは、検閲されているということです。

次は現地の新聞。たとえばカイロの新聞ですが、御用新聞ですから役に立たない。政府批判の記事など出ないですからね。エジプトは紡績業が盛んです。そこでデルタ地帯の大きな工場を訪れた時、「エジプトにはなぜ労働組合がないんですか」と総務部長に聞いたら、「労働者が満足して働いているところに組合を作る必要はない」という返事が返って来ましたね。これは聞くだけにして、記事にはしませんでしたよ。（笑い）

ナセル大統領に対する反論を知るにはレバノンのベイルートに行けばよかった。ここには言論の自由がありましたし、英・米・仏の新聞や雑誌が自由に販売されていましたからね。

オイル・ショックからもう 25 年以上たっていますが、アラブに対し、何かいいことをやりましたか。

牟田口 1993 年 9 月、クリントン米大統領の仲介で、アラファト PLO 議長とラビン・イスラエル首相がホワイト・ハウスで握手しましたね。あれは、両者が武力解決の道を捨て、話し合いで解決しようと誓ったもの。「土地と平和の交換」を決めたオスロ合意の確認で、解決は今世紀中は無理、と思っていた僕はこのニュースを知って興奮しましたよ。この結果、欧米主要国と日本が、この紛争解決のために応接しようという努力しましたよ。そのため日本は何をしたかということ、特筆すべきは、PLO に対する財政援助ですね。その額は日本が一番ですね。そのためアラファト議長は日本を 2 度訪問しています。その時僕は外務省外郭団体の中東調査会の常任理事という資格で、外務省の正面玄関で要人たちといっしょに彼を迎え、しっかりと、握手しました。その後の記者会見に出ましたが、彼は心から感謝していましたよ。

もう一つ、具体的な話をしましょう。

村山富市首相が中東主要国を訪問した時のことです。アラブのなかでも急進派として知られるシリアを訪問したら、ダマスカス空港に首相以下 20 数人の閣僚全員が出迎えていました。サウジアラビアでもエジプトでもこんなことはなかったので、村山さん以下びっくりしたそうですよ。大統領官邸に案内されて会談すること 1 時間余り。次の訪問地へ行くため空港に着いたら、閣僚全員が見送ってくれたそうです。それはアサド大統領から日本政府に対する心からの感謝の意思表示だったのです。

その中身は何か。発電所の寄付です。電気洗濯機が存在など、今の日本ではニュースにもなりません。シリアではまだ各家庭に行き渡っていません。定期的に停電するからです。そこで日本が 500 万ドルで発電所を作った。そして、まず大都市で停電がなくなった。さらに 500 万ドルでもひとつ作っている。これが完成したら、シリア全土の夜が明るくなるのです。そうすれば洗濯機はいつでも使えるし、テレビも好きな時に見ることができるわけですね。首相に随行した中近東課長が帰国後の会見で語ってくれましたが、中国で 1,000 万ドルの道路を建設しても目立たない。ところが、シリアの 1,000 万ドルは相手の一番身近なニーズに応えたので、これだけ感謝されたんですね。

もひとつあります。無償援助で消防車を寄付した。車体にはそのことを明記しています。そこで、シリアでは、火事があるたびに、プレゼント・オブ・ジャパンの消防車が走り回る。目立ちますね。まったく T.P.O. の援助ですよ。

中東を理解するにはまず歴史を学べ、と先生は強調されたように思いますが、どういう角度から勉強すればよろしいでしょうか。

牟田口 そうですね、カイロ特派員はエジプト 5000 年の歴史を学べ、といっても無理な話。近現代史と取り組むべきですが、当時のエジプトは社会主義志向だったから、政府のいいぶんをウ呑みにできない。そこでさっきいったように、ベイルートへ行く必要が出て来るわけで、それは物事を相対的に、客観的に見よ、ということですね。いまでは国際関係学という適切な学問の分野が生まれました。私は朝日を辞めてから、津田塾大学の国際関係学科でしばらく教えましたが、「日本の大学でこの学科を設けたのは本学が一番早い」と当局のかたは自慢していましたが、要するに、国際政治学と国際経済学を足して 2 で割ったものです。

そこで、「国際関係のなかの中東」を勉強する、といえはすっきりするでしょう。この視角からみると、例のバルフォア宣言も額面どおり受けとるわけにはいかないですね。

先生はこれまで長い間中東研究に専念してこられました。その中で注目した人物は...？

牟田口 日本人ですか？

ええ。

牟田口 同世代人としては石原慎太郎ね。彼は 1954 年のイラン石油紛争に巻き込まれた日本人企業マンをテーマにした小説を書き、2 年後、英仏イスラエル 3 国がエジプトを侵略したスエズ戦争（第 2 次中東戦争）の時は、「義勇兵としてエジプト軍に加わりたい」と発言して、マスコミをにぎわせましたね。でも彼の中東関心はそこまでだったですね。

次は先輩、それも大先輩、大正時代に名著『日本風景論』というベストセラーを書いた地理学者・志賀重昂（しげたか、1863～1927 年）。たくさん出した著作のなかで、今日的意義を失っていないのは、最後の著作となった『知られざる国々』（1926 年）。飛行機もない時代に地球を 3 周したという行動派

の学者である彼は、まぎれもなく、われわれジャーナリストの先輩でもあります。この本のなかで彼は中東を訪ねている。インド～オマーン～ペルシャ湾～バグダード～ダマスカス～アンマン～パレスチナの順序で、旅の最大の目的は当時脚光を浴びていた石油開発の現状を視察することで、「将来の日本の石油需要を満たしてくれるのは中東だから、日本のめざめた若者は、今のうちから中東へ出かけ、現地の事情をよく勉強しておけ」と提言しています。すばらしいですね。

それから、最後にパレスチナを訪ねて、アラブ・ユダヤの紛争に巻き込まれ、詳しいルポを残していますね。そして帰国後も紛争をフォローし、例のバルフォア外相がエルサレムのユダヤ人大学開校式に臨席した時は現地のアラブ市民の冷たい歓迎を受け、帰途、シリアのダマスカスを訪れた時は、怒れる大群衆にホテルを襲われ、ほうほうの体でバイルート経由、帰国したそうです。皆さん、この本を読みたくありませんか？

原文は旧カナづかいで制限漢字が多く、君たちにはとっつきにくいかな？それでは僕の解説文を読んでください。むかし、朝日新聞社から出した『中東への視角』（1977年）の第1章「志賀重昂の最後の旅」の全部を中東紀行に当てています。80ページ以上もあるから、役に立ちますよ。図書館で探してください。

ウルトラ級の先輩ですね。もう少し時代が下ると？

牟田口 僕が個人的につき合った大先輩を列举してみましようか。不思議な共通項がありますよ。諸君との関係も出てきます。

中野好夫	東大英文科	1926年卒
柏倉俊三	同	1927年卒
杉 勇	東大西洋史学科	1927年卒
小林 元	同	1928年卒
前嶋信次	東大東洋史学科	1928年卒
小野 忍	東大支那文学科	1929年卒

このうち、杉・前嶋両氏以外は全員 T.E.ロレンス、つまりアラビアのロレンスとかかかっているところが面白い。すなわち、中野氏は1940年に岩波新書版の『アラビアのロレンス』を出して、わが国におけるロレンス・ブームに火

をつけた。柏倉氏はロレンス著『知恵の七柱』の完訳本(平凡社・東洋文庫版、全3巻)を出し、小野氏はロレンスの大学の後輩で作家のR.グレーヴズ著『アラビアのロレンス』を訳し(東洋文庫版)、小林氏は『イギリスとロレンスとアラビア』という単行本を1941年に出し、1960年には外務省系の財団法人・中東調査会を設立しました(僕は現在その理事の一人です)。前嶋さんはイスラーム学者として『アラビアン・ナイト』の原典訳に取り組みました(東洋文庫版全20巻のうち1~12巻を担当)。また杉さんは中東古代史を専攻、すでに戦中に、「古代オリエント」という用語を文部省に認めさせた人です。どうです。中東に深くかかわった大先輩が皆、君たちの直系の大先輩なんですよ！

それらの方たちについて、さらにお話下さい。

牟田口 学生時代の杉・小林両先生の関係は君たちに大いに参考になると思いますよ。二人は山上御殿の近くや、病院通りの運動場に隣接していたバラック造りの文学部仮教室でよく議論したというのです。仮教室というのはですね、当時は関東大震災からまだ4年しか経っておらず、被害を受けた建物の再建がままならなかったんですよ。そういう環境下で、二人はいわゆる中東問題を論じ合った。当時の日本には「中東」という用語が存在しなかったから、この地域を何と呼ぶべきかが、二人の間の重要議題だったそうです。当時の歴史教育は東洋史と西洋史だけに分かれていたから、杉さんが専攻する古代史は西洋史、小林さんのイスラーム史は東洋史に属し、十字軍戦争は西洋史に組みこまれるという具合。時間的にも、空間的にも、一貫した歴史的世界を構成しているのに、これは全く不当な扱いではないのか というのが議論の出発点です。

そこで杉さんが問題提起。「昔、ローマ人はこの地域をオリエントと呼んだから、それで行こう」。ところが、オリエントは本来<東>という意味だから、小林さんが反対。「そこは東洋ではないし、だからといって西洋でもない。両者の中間にあるのだから<中洋>ではどうか」。小林さんによれば、コーランには「東のものでも西のものでもない」という文句があるそうです。しかし、杉さんはコーランというお墨つきを出されても引込まず、論戦はドローになってしまったが、考えてみると小林さんの発想は何と独創性に富んでいるではありませんか。

小林先生は1963年に亡くなられましたが、中東調査会は13回忌に際して追悼誌を出し、そのなかで杉先生は以上のエピソードを紹介した上で、さらに次のように書いています。

「中洋という名称こそは、同君が半世紀も前から提唱したものであり、学会に残した同君の業績の一つであることは疑いなく、高く評価してよいことであると思っている。」

どうです、皆さん、今から75年も前に、本郷キャンパスでは、以上のような高級な会話が行われていたんですよ。偶然ながら小林さんの中学の後輩である僕は、この「中洋」という用語のPRにつとめており、さるカルチャー・センターで「東洋と西洋のあいだ <中洋史>の5000年を鳥瞰する」という講座(全12回)を持っています。

皆さんもどうか、この大々先輩の業績を銘記し、折あるごとに、「中洋」という用語をPRして下さい。そして中東学ならぬ「中洋学」についての独創的なアイデアを、キャンパス内の会話から生み出して行って下さい。

以上、話は古巣の東大に戻ったので、この辺りで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(小休止)

では、第二部と申しましょうか、特派員の仕事について、さらに縦横に語って頂きたいと思います。先生が特派員として行かれた中東では現地の方が思ったことをしゃべってくれないという御苦労もされた。その中で先生自身は中東というものを理解する努力をどのようにされたのか、あるいは、どういった人たちから影響を受けながら、先生なりの見方を創ってゆかれたのかを教えてくださいただけたら……。

牟田口 うんうん、やはり原稿を書くときにね、その都度反省をしなくてはいけないですよ。たとえばバルフォア宣言の記事を書くときに、イギリスが言ったとおりのことを書いては駄目でしょう。そうするとね、これがそもそもアラブ・イスラエル紛争の原点であるということになると、では原点でその後どのようなことが現地で起こったかということ、今度は本を読んで調べなくてはならない。たとえば僕が先ほどいった1920年が、エルサレムでパレスチナ人とユダヤ人とが激突した最初であるというようなことです。それは分かるけ

れども、では中身がどうであったかということは本を読まなくてはいけない。するとどのような本かという、僕の場合は英語とフランス語の本です。しかしそのような本を読むときに、やはり鵜呑みはできません。どうもおかしいと思ったら、そこから搜索を始める。

すると、イギリス人、フランス人の中にやはり僕と同類の連中が、学者だったり、ジャーナリストだったりが出て、そのような「おかしいところ」を探し出して新しい本を書いている。だからそれに飛びついて読むと、従来の記述とは別なことが書いてあるのです。

それは、先生が読まれた本の中ではどのようなものが、あるいは、お付き合いのあった方の中では、どのような方でしょうか。

牟田口 一冊挙げてみましょうか。1956年7月26日にナセル・エジプト大統領がアレクサンドリアで演説して、万国スエズ運河会社を国有化した。その時のナセル演説を聞いていたフランスの「ル・モンド」の記者がいるのです。これが帰ってから本を出した。その本を読んだら、どういう口調で彼がしゃべったかが分かる。この記者はアラビストだったからそれだけに迫力があってですね。

後年私はアラブの歴史に関する本を出しましたが、そのなかで、迫力満点のサワリの部分はチャッカリ頂戴しましたよ（笑い）。それを紹介する前に、この運河を建設したフランス人、レセップスの名を頭に入れておいてください。さあ、行きますよ。

「ナセルは語る。1956年7月26日はファルーク国王がアレクサンドリアの離宮から追放されて4年目の記念日だ。その日の夕方、同市の綿花市場のバルコニーから、ナセルはムハンマド・アリ広場にあふれた群集に向かって演説を始めた。従来こういう場合の演説は文語、すなわち聖典に記されたアラビア語の文法に基づくのが習わしだったが、彼は伝統に反した俗語、すなわちエジプトの方言で始めた。群集は驚き、次いで喜び、彼に向かって拍手を始める。彼はやがてハイダム融資をめぐる交渉経過を激しい調子で報告する。そして一転、文脈とは無関係なレセップスの名がとび出した。たとえばこんなふうだ。《われわれが餓死しようとしているときに、レセップス、 宝の川 はすぐそばを流れている。そしてレセップス、 帝国主義の一会社が、レセップス、われわれ

の利益を横取りしている》」とレセップスを3回言ったというのです。文脈とは関係がないでしょう。待機していた国軍に対する「ゴーサイン」が演説の中の「レセップス」だった。そのあとで彼は続けます。「私は発表する。私が諸君に語っているこの時間に、万国スエズ運河会社はこの世から消えたのである！ われわれは人民のためにこの会社を国有化した。運河はいまやわれわれのものだ！」 群衆の熱狂ぶりがわかるようです。これは後に「世紀の大演説」といわれたもので、その現場にいたこの記者は、まさに「記者冥利(みょうり)」に尽きたでしょうね。このような貴重なデータを蓄積しておくことが必要ですね。

そのほか、いかがでしょうか。

牟田口 首脳が折に触れて行う記者会見について話しましょう。ナセルは「私は、大事なことは真っ先に国民に知らせる」といっていました。「広場の政治家」といわれたわけで、定例記者会見などはやらなかった。そこで、別の例を挙げましょう。トルコのメンデレス首相がわれわれ日本人記者団に行った記者会見です。

1958年の春、彼が政府賓客として日本を訪問するというので、カイロ在住のわれわれは、出発前の独占記者会見をカイロのトルコ大使館を通じて申し入れた。そしたらすぐ返事が来て「すぐアンカラに來い」という。そこで4人でアンカラの情報省を訪ねたら、担当官がこういいました。「首相の出発まではまだ2週間ほどあるから、その間にわが国を見て、日本の読者に、トルコとはどんな国であるかということをお知らせしてください。そうしたら首相も喜ぶでしょう」というわけで、車や飛行機を出してくれ、係官が同行してくれ、2週間で、東部のカッパドキアを除き、エーゲ海、黒海沿岸地方を取材させてくれ、その上がりが首相との会見でした。場所はイスタンブールのデラックス・ホテル。首相はそこにオフィスを持っていたのです。首相はにこやかに、一つ一ついいねいに、われわれの質問に答えてくれ、同僚がしゃべっている間に、一人がタバコを取り出すと、さっと立ち上がって、火をつけてくれましたよ。一国の首相からタバコに火をつけてもらったなんて、初めてです。

私は56年の新聞を見て中東をやろうと思ったのですよ。ナセルの演説、朝日だから牟田口先生の記事が、私の人生を変えたのではないかと思います。

て……。 (笑い) それで勉強したりした。50年代の後半ですが、日本のエジプトに対する関心がかなり高かったと思うのです。経済的にも高橋借款を出すとかいろいろやっています、なぜか、エジプトに対する関心が50年代に高まって、その後またすうっと引いてしまうのですが、これはどういうわけで…。

牟田口 一言でいえば、冷戦体制の確立で、日本はアメリカべったりの政策を再確認したからでしょうな。

ナセルの政治的威信の高まりに危機感を覚えたイスラエルと英仏の3国が、適当な戦争理由をつくってエジプトを攻撃した。スエズ国有化から3ヶ月後のことで、これが第2次中東戦争です。そしたらソビエトの国家主席だったブルガーニン元帥が「侵略3国は直ちに撤退せよ、さもないと3国の首都にミサイルを撃ち込む」との声明を出した。その時パリの新聞がモスクワ特派員を呼び出して、「あれはブルガーニンのリップ・サービスか」と聞いたら、「とんでもない、ソビエトは本気なんだ」との返事。この情報が世界に流れたので、地図の上では見つけにくいほど小さな地域の紛争が、まるで第3次大戦前夜のようにエスカレートした。これを鎮静化させたのは、アメリカのアイゼンハワー大統領の功績ですね。

当然、日本人の関心も高まります。でも、それは「ナセルびいき」という大衆感情で、その先頭に立ったのが、先ほど紹介した石原慎太郎でした。ナセルが掲げた「積極中立主義」という言葉もはやりましたね。そういう関心に冷水を注いだのが、世界を2つの陣営に分けた冷戦体制で、こうなると対米一辺倒の日本は、ソビエトから大っぴらに武器を買っているナセルを援助できなくなった……。

その「積極中立主義」について、少し……。

牟田口 そうそう、メンデレス・トルコ首相との会見の時、われわれもその質問をしたことを思い出しましたよ。中東の政治家の一人として、理解を示すかと思ったが、さにあらず、大変批判的で、「ナセルは非論理的だ」というのです。こういう説明でした。中立主義とはAとBのどちらにも属さないというのが大原則で、そこに積極的、消極的などという差があったらおかしいとね。後年ナセルは、これを「非同盟主義」に言い換えますが、それはインドのネー

ル首相の助言によるものでした。非同盟も積極中立も、中身は同じですが、非同盟の方がわかりやすい。そこで今では非同盟諸国は国連加盟国のなかの3分の2以上を占めるまでになっていますね。

ひとつ思い出しました。この「ナセル主義」のスポークスマンの話。カイロで一番権威のある新聞は、ピラミッドという意味の「アル・アフラム」紙で、その主筆のモハメド・ヘイカルが週にいっぺん書くコラムは、中東で注目的でした。その彼が日本に来た時に対談したのですが、私が「冷戦体制がこのように確立した現状では、非同盟主義は行き場所がないではないか」と水をかけると、彼は激しく反論しましたね。「冷戦の谷間にあつてこそ、われわれの存在価値は高まる」というのです。東西の両大国に比べれば、われわれの武力はあってもなきがごとしだからこそ、武力の脅しを抜きにした正論を述べることで、世界の緊張緩和に実質的に貢献することになる　　こういうのですね。説得力がありましたよ。

特派員と通信社との関係を教えてください。

牟田口　たとえば朝日は AP（米）とロイター（英）と特約しています。パリ特派員時代はロイターの世話になりました。朝日の事務所はロイター・ビルの中にあつたんですからね。ほかに、日経と共同通信が店子でしたね。思い出として残るのは、1970年9月、いわゆるブラック・セプテンバー事件です。ある日、ヨーロッパの上空で旅客機が3機パレスチナ人にハイジャックされ、1機はカイロ空港で、他の2機はヨルダンのアンマン空港でそれぞれ爆破された。PLO（パレスチナ解放機構）がパレスチナの大義を世界に訴えるための行為といわれたが、ヨルダンのフセイン国王は国軍に出動を命じてアンマンにいる PLO の追い出しにかかる。アラブ対アラブの戦いが始まったわけです。その時、報道陣はどうしたか。

彼らは国外からやってきて、アンマンのインターコンチネンタルというデラックス・ホテルに宿泊していた。ところがこのホテルは丘の上であり、ふもとの両側が双方の陣地で、ホテルの上を弾丸が飛び交うわけだから、危なくて、仕事どころではないカン詰状態。カイロからやってきた同僚の笹川君もその一人。そしたら東京から電報が来て、「アンマンの笹川を救出し、彼と任務交代せよ」　　これはえらいことになった。アンマン空港は閉鎖されているから、

とりあえずベイルートへ行かなくちゃと、ロイター支局長にお願いに行き、ベイルート支局長への紹介状を書いてもらった。この紹介状のおかげで、ベイルート支局長さんはとても親切でした。そして、「取材は難しいですよ、ここでは。まず ABCD をマスターしなくては」というんですね。「はてな？」と私は考えましたよ。

昭和 10 年代、日本は A (アメリカ)、B (ブリテン)、C (チャイナ)、そして D (ダッチ) に締めつけられ、その包囲網を破るために、いわゆる大東亜戦争を起こしたと、私たちは教えられて来たのですが、そんな「古語」がこんなところに生き残っているとは　　すると相手は笑ってね、「中東の ABCD」を説明してくれました。まず、A はアンマン。そこは現在、情報の窒息状態。B はここベイルートで、C はカイロ。カイロはナセル主義の PR ばかり。D はダマスカスで、政府はカイロより強硬派。となると、残るは政治的圧力のないここベイルートが重要となるが、ここにあるのは情報ばかりで、オリジナルなものがないから、その中からピカリと光るものを捜し出すのはひと苦労、というわけです。その前に私は中東派遣員でしたから、彼の話はとても参考になりましたよ。情報の洪水の中から、ニュース・ヴァリューのあるものを選び出すことの難しさ、ということですね。

中東にまず行かれて、そこから次にパリに行かれたとおっしゃいましたが.....。

牟田口　ええ、10 年後。

もしこれが逆の場合、つまりパリに行ってそれから中東に行かれていたとしたら、先生の見方というのは違うものになっていたのでしょうか.....。

牟田口　これはいい質問ですね、僕は大学は仏文ですから、新聞記者になったときは、パリに行きたいと思っていたから、先にパリ特派員になったら、僕の人生はその線上で行っちゃったと思いますよ。だからときどき、「それ、中東へ行け」、「あそこはフランス語だ、それ、行け」といわれて、エジプトへ行って来ても、本当に点ぐらいしか観察できず、これを線にし、面にするような暇がないから、「なるほど、相手は第三者世界だな」ということぐらいで終わったと思います。

日本に地中海学会という学会があり、僕は会長になりましたが、地中海を会員の多くは上から見ているのですよ。ヨーロッパ側から地中海世界を見ている。だからイスラームが出てこない。ところが、私は先に南に行ったから、そこは全部黒い、イスラーム世界です。だからそちらのほうに関心を持って、イブンハルドゥーンの『歴史序説』からよく引用される言葉ですが、そのころ、つまり14、15世紀ごろまで「ヨーロッパ人は地中海に板子一枚浮かべることができなかった」。つまり制海権はイスラームが握っていたのです。そこで地図を広げ、地中海の東西南北を眺めてみましょう。東はシリアとレバノンで、時計の針の回りで行くと、エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、そして北アフリカの西のはずれはモロッコで、東と南は全部アラビア語圏です。これに対し、西と北はポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、ギリシア、それにバルカン諸国とトルコで、言葉は12もあるそうです。ここで視点を変え、トルコがイスラームということを見ると、地中海の4分の3はイスラーム圏ということになる。つまり、地中海はイスラームの海なんです。ところが、ひと目でそれがわかる地中海の地図は見つけにくいですね。残念なことです。これは厳粛な事実なんです。それを体得できたのは、僕がパリより先に、カイロに住んだからなんです。西洋史観が世界史観ではないということがわかりましたね。これは貴重な収穫でした。

各社の特派員はそれぞれ一人で、その守備範囲が広い。僕の場合でいうと、さっきもいいましたが、イランからモロッコまでで、トルコももちろん入り、アテネを訪ねることもできました。夜、アテネの裏町の食堂に入ったら、おやじが「サラマレク」とあいさつしたのは驚きでした。これはトルコ語経由で入ったアラビア語で、「こんにちは」「こんばんは」の意味。これで、ギリシアが300年もオスマン・トルコの領土だったという歴史的事実が納得できるんですね。パリからやって来たのではわかりませんよ。

だから私が先にヨーロッパに行っていたら、僕の人生はまったく別だったと思ったですね。実は、私の前任者が、地中海世界は第一外国語がフランス語だから、ここでの取材にはバイリンガー、英語とフランス語ができるのが大変有利で、その点で見ると社会部員100人のなかで適役は牟田口一人しかいないか

ら、俺の任期が終わったら、彼が後任として来るのがいちばん社としてもいいのではないかと推薦してくれたのです。だから僕は彼に恩義を感じています。

アラビア半島の国に、日系のブサイナ姫という方がいて、その情報を先につかんでこられたのは、牟田口さんだという話を聞いていますけれども、どうやって情報を得られたのでしょうか。その後週刊朝日の下村さんが行ってインタビューして、まとめて本にして、大変日本でも関心が高まったと思いますけれども、そのあたりのお話を伺いたい。

牟田口 ペルシャ湾の出口にあたるアラビア半島側に、オマーンという首長国があり、カブース現首長の叔母がブサイナさんで、彼女の母親は日本人なのです。このような高貴な血筋を引く日系女性は、中東を見渡しても、彼女以外におりません。彼女の父はカブースの祖父のタイムール首長で、そこには「アラビアのロマンス」の香りが立ちこめています。

タイムールは首長を20年務めた後、位を息子のサイドに譲って首都マスカットを去り、パキスタンのカラチに住むが、数年後の1936年ごろ日本に渡って関西の芦屋に落ち着きました。落ち着いた、というのは、彼はここで日本女性と結婚したからで、彼女との間に生まれたのがブサイナ姫なのです。昭和12年(1937)ごろのことでした。タイムールはよほど芦屋での暮らしが気に入ったらしく、和服で正装して座り、羽織の紐をきちんと結び、右手に扇子を持った写真も残っています。しかし間もなく愛妻が結核で死んだころ、大戦前夜のきな臭いにおいが強まって来たので、彼は3歳の娘を連れて日本を去り、インドのボンベイに住んで、終戦後にそこで死に、以来ブサイナは首長家に引きとられ、マスカットに住んでいるというわけです。

どうしてそんなに日本が好きになったのでしょうか。

牟田口 きっかけは、先に紹介した中東研究の大先輩である志賀重昂。彼は1925年、ボンベイから船でオマーンを訪問、マスカットの王宮でタイムールに歓迎されました。二人はひと目で意気投合したらしく、アジア・ナショナリズムについて熱っぽく語り合っています。このことは先に述べた『中東への視角』のなかで詳しく紹介しているので、ぜひ読んで下さい。

ブサイナ姫の存在は外務省には知られていましたが、これをマスコミ界で最初に報道した(週刊朝日)のが私で、それにもとづき、日本人記者として初め

てオマーン入りして、彼女の存在を確認したのは同僚の笹川カイロ特派員でした。そしたら、『週刊朝日』が動いて、「湾岸特派」の内命を受けた下村満子記者が僕のところへ、アラブ取材のイロハを聞きに来た。僕はそのとき論説委員で東京にいたんです。彼女は後に『朝日ジャーナル』の編集長になったほど優秀な記者でしたが、「女の私なんか行っても取材できないんじゃないでしょうか」という。「冗談言うな、男が絶対できない取材があるんだ。何かといたら、あそこのアラブ首長国連邦は7人も首長がいて、それにカタール、バーレーン、オマーンをいれたら10、それにクウェートを加えてご覧なさい。このハーレムを取材しなさいよ。男は絶対に入れないけれど、ハーレムの門はあなたがた女性には開かれていますよ」といったら、彼女はその通りバリバリやって全部会えたのです。ですから連載は大好評で、あとで本になりましたね。僕はその帯を書きましたよ（『アラビアの王様と王妃たち』）。

オマーンではもちろんブサイナ姫に会えた。いろいろな話を聞いたあとで、日本から持ってきた和服、つまり訪問着をプレゼントして、日本ではこうやって着るのですと着せて、それをパチンと撮影して、それが週刊誌の表紙を飾りました。「やったやった」と僕が喜んでいたら、あとから読者から皮肉な手紙が来た。「この女性記者は和服なんて着たことがないんでしょう。このお姫様は左前に着ていますよ」ですって。（笑い）

ところがこのお姫様は「お母様の墓まいりをしたい」と、その筋を通じて下村さんに伝えてきた。「あなただけ取材に来てください。記事の解禁は自分の離日以後」という条件です。もちろん下村さんは芦屋に飛んで行き、いろいろと取材しましたね。それによると、お姫様の母親の実家の親戚たちはみんないい人で、タイムールが建てた愛妻の墓をきれいにし、昭和13年ごろから墓守をきちんとやっていたというのです。ブサイナ姫はそれを見て、自分の亡き母、記憶にもない母、それがここにこのように立派に葬られているということで大変感激して、親族一同がお茶の会、お別れの会をやったとき、彼女は持ってきたイヤリングだか、指輪だか知らないが、みんなダイヤか真珠のものを皆にプレゼントして帰っていったというので、また『週刊朝日』に彼女の記事が出ましたけれども（事務局 注4）、そのようなわけで、何とはなしに僕はオマーンに親近感を持っていますよ。ひとことつけ加えると、ブサイナ姫は独身で

通ってしまったらしいですね。身分が高すぎて、ふさわしい相手がいなかったためと聞きました。こんなところでよろしいですか。

今日はどうも長い間ありがとうございました。（一同拍手）

牟田口 どうも、ご静聴ありがとうございました。

<了>

（事務局 注1）山岡光太郎『アラビヤ縦断記：世界の神秘境』（東京東亜堂書房、1912年）。

（事務局 注2）足利惇氏他『世界史講座5 西亜世界史』（弘文堂書房、1944年）。

（事務局 注3）芦田均「西亜世界の動向」足利惇氏他『世界史講座5 西亜世界史』に所収。

（事務局 注4）「現代千夜一夜物語 三十年目にベールを脱いだオマーン王と日本娘の純愛秘話」『週刊朝日』昭和48年6月15日号、28-30ページ。「砂漠の国オマーンから混血のブサイナ王女ひそかに来日 40年ぶり念願果たして 暎の母の墓参り」『週刊朝日』昭和53年10月20日号、26-29ページ。

筆者紹介

牟田口 義郎（むたぐち よしろう）



1923年生まれ。東京大学文学部フランス文学科卒業後、1949年から82年まで朝日新聞の記者として、中東特派員（1957年～60年）、パリ特派員（1970年～1973年）

論説委員を歴任。

退社後は成蹊大学教授、東洋英和女学院大
学教授。

現「中東報道者の会」会長。

家族と過ごしたカフジ勤務

60年代から80年代にかけて

秋元 一浩・元子
川畑 義雄

武田 力・芳子

(50音順)

とき 2001年(平成13年)11月10日(土)

ところ 東京大学文学部アネックス2階小会議室

ききて 武石礼司、武藤幸治、福田安志、水島多喜男

きょうは、現地で、とくにアラビア石油の創設に携わられて、しかも家族で赴任された方々にお集まりいただき、いろいろな話をお聞かせいただければ、と考えております。

まず、何年ごろ、どのぐらいの人たちが、どのような場所に行かれたのか、という辺りからお話いただければと思います。最初にお仕事としてご主人が行かれて、次に御家族がそのあと行かれたわけですから、その順番でお願いします。

武田(力) 武田でございます。カフジの1号井の掘削が始まったのは、1959年ですが、1号井が当たったあと、最初、アラビア石油は専属の技術者というのを持っていませんでしたので、1号井が当たったあとに急遽ヘッド・ハンティングというか、技術者集めを始めたわけです。私は当時大学を出て帝国石油に入っていたのですけれども、そこでの若手の人間を集めるということでリクルートされたわけです。その意味で、私は1号井には直接関係していません。1960年5月にアラビア石油に帝国石油から移籍しまして、次の月の6月に現地に行ったわけですが、その時はちょうど2号井がそろそろ終わるかなという頃でして、われわれが行ったのはコール・アル・ムハッタというところ。アミノイルが、陸上に油田を持っていたのですけれども、そのアミノイルの資材を積み下ろす港のところを一時借りて、アラビア石油のムハッタ基地として、そこに仮の基地を造っておりました。建設の方々は、もうすでに、カフジに永久基地を造るということで調査団が行ってしまして、われわ

れが行った8月頃から向こうの測量を始めたのです。それが私としてはいちばん最初の体験です。

それでご家族、奥さんは……。

武田(力) ムハッタからカフジに基地を造りまして、それでとにかく家族というよりも操業ベースを作るのが優先で、家族は4年後ぐらい、オリンピックの年だっけ。

武田(芳) 64年。

武田(力) これだったですね。彼女が来たのが64年の何月？

武田(芳) 11月8日。(一同笑い)

武田(力) その間に川畑さんとか、行かれたでしょうし……。

川畑 僕は川畑といいます。私は、どうしてアラビア石油かというところから話をすると長くなるのですが、僕は日本大学の卒業ですが、学校の卒業論文作成の為、1年間東京工大に行って、油圧制御関係の研究、卒論をやっていたのですが、そのときに、その研究室に同じような研究員がいたのです。その人に、「川畑君、アラビア石油がいま人を探しているのだけれども、どうだろう。」と言われた。「どうだろう」と言われても、アラビア石油が、何かこの前、油を当てたとか、1号井が出たというのを、ニュースで聞いていただけでした。僕は、終戦後、疎開から帰ってきて父親がすぐに亡くなって、さて、学校も新制になったような頃で、大学へ行くのにどうしても資金がない。何とか学費を稼がなければならず、アルバイトを探してやって、それで大学へ入ったものですから、少し遅れたのです。そのようなことで、卒業したのが1962年で、そのような求人話があったので、ではちょっとアラビア石油に顔を出してみるかということで行きました。

ちょっと前後するのですが、アラビア石油はサウジ政府のための製油所を作りたがっていた。これは、クウェート政府に対しては、海老の養殖の施設を作って会社が提供したのは聞いているのですけれども、では、サウジに対しては利権協定のお礼で何をするか。そこで製油所を作って、それで精製した油を船の燃料にしたり、それから発電機の燃料にしたり、カフジ港に入ってきた貨物船に燃料を出荷したりして、その利益はサウジ政府にあげましょう、ということで話が進んでいたらしいのです。それで、どうしても製油所の建設要員が欲

しいというので、僕はそのような機械系の勉強をしたものですから、施設・機械ですから、「ぜひ、お願いするわ」ということで入ったのが62年です。

僕らも精製関係までは実際に体験していないので、アラビア石油に入ってから2年間は、日本の製油所めぐり、だから実習ですよ。運転、保守の実習で大協石油、東亜石油、アジア石油を、転々と2年間回って、そして給料をもらうときに月1回本社に来て給料をもらうという感じでした。精製施設の設計の勉強もして、それで「いよいよ」では建設の準備が始まるからカフジに行きなさい」といわれたのが1964年、東京オリンピックのあった年の暮れです。12月25日頃だったか、クリスマスの夜に飛んだ。その頃はまだ外貨の持ち出しが500ドル以上はだめで、500ドルを持って飛んでいった。そのような実情でした。

それでカフジに行ったのは、もうすでにカフジに鉱業所ができた後です。だから武田さんもすでにカフジで仕事をされていたのですが、カフジの単身者用宿舎はトレーラー・ハウスやバラックです。そのような非常に小さい部屋にみんながよく頑張っているな、という感じで生活した覚えがあります。これも、いろいろ掘削関係は帝石の優秀な方が途中で応援に来ていただいて良かったのですが、僕らの施設関係は、油の生産、施設の維持管理が仕事で、僕らはリファイナリーの建設で行きましたけれども、その他に、砂漠の基地で皆さんが生活する生活条件を満たしてやらないといけない。そのためには海水蒸留で水を作る。それから発電機を回して電気を起こす。それからそれ以外にも、皆さん生活しているから、排水、水洗トイレの最終的な浄水装置の殺菌、滅菌なども含めて、全部みんな協力してやった覚えがあります。

海岸に沿ってファミリー・クウォーターのクウェート寄りの外れまでトイレのパイプ・ラインが引いてあるのですが、トイレの移送ポンプ掃除などもずいぶん手伝いをしました。施設だから、これだけやれという人の余裕がなく、皆さんの協力を得ながら、また我々もみんなと協力して、そのオペレーション施設の維持、管理までやった覚えがあります。それが当初の感想です。

秋元さんがいらしたのはやはり何年ごろになるのですか？

秋元(一) 秋元です。諸先輩から比べると、私は一番若くて、したがってカフジへ行きましたのは、1974年11月でした。当時は、もうすでに理想的な形ではないのですが、生活のインフラというのは出来上がってしまっていて、そ

れから創業時代、立ち上げ時代にいろいろご苦労された方々も一段落されたかな、という感じのときで、いろいろな面で一番良い時にいたと思います。

1974年の暮れから1989年まで、約15年間カフジのほうにありまして、そのうち家族は1975年から10年間おりました。子供二人おりますけれども、向こうの小学校、あとで話が出ると思いますが、卒業して、小学校を終えた時点で日本へ家族は帰ってきた。

私の仕事は、これもまた後でお話が出ると思いますが、1973年にオイル・ショックがありまして、その時にサウジ政府は、それまでに中級技術職といったようなレベルの人たちを、インド人とかエジプト人とか、それからパレスチナ人、そのような人たちに頼っていたのです。そのような人たちを追い出すので、その代わりナショナルの人たちを教育して欲しい、ということで、初めは教員として、学校、会社の中に職業訓練校がありまして、そこで4年半ほど職業教育をやりました。

その後いろいろ経緯がありまして、アラビア石油のほうに移籍しまして、1989年までそこにいたのです。

武田（芳） 武田と申します。1964年11月、第一陣の24家族が最初にまいりましたが、最初に行きましたときはまだ小学校も、幼稚園の施設もありませんでした。この時、一緒に行った中でいちばん上の子が小学校に行っていたかな、と思います。小学生の何年生だか、何しろ小学生がいて、とにかく小学校がないというのは困りますので、教育大が何かを出た若い男の先生がいらしたのです。大学院の学生さんだったと思うのですが、その方に最初は見えていただいていた。そのうちに明星大学だけ、明星学園と会社が提携いたしまして、2年のローテーションで、最初2名だったと思いますが、2名の先生に来ていただいて、「カフジ明星小学校」という名前で小学校が発足いたしました。

いつのことですか？

武田（芳） 調べておかないと。3年ぐらいあとだったかもしれませんが。2年くらいはその学生さんに見ていただきました。

すると24家族がいらしたときは、お子さんを連れて行く方も結構たくさんいらしたのですか？

武田（芳） そうですね。

武田（力） 先生の代わりは？ 幼稚園は父母がやっていたでしょう。

武田（芳） そうです。幼稚園は、お母さんたちが交代で、それも場所がないので、家庭を提供しまして、ちょうど担当した人のお家で毎日毎日交代でやっていました。それで、幼稚園のような、ただお遊びのようなことをやっていました。ですから、幼稚園も明星と提携してからでしょうか……。

その当時、カフジにいらっやって、カフジというのはどのような所だったのでしょうか。お家があったのですか、という感じもします。（一同笑い）インフラについてお聞きしたいのですが、みんなそれは会社の作られたハウスというか……。

武田（力） カフジで操業するところのコンパウンドと、社員用のコンパウンド。それから現地人のモスクとか、そのような場所を会社が作ったのですよ。

それで、オペレーション用としては、それこそ入江を挟んで南側が、川畑さんが言っていたように製油所とか、タンクとか、フレア・スタックとか、油圧、発電所とか、油の基地です。あと、入り江の北の方が、事務所とか、倉庫とか、独身者の宿舎とか、そのようなものを作りまして、その外側にファミリー・クォーターのキャンパスを作り、そこを社宅にした。

それは60年の初めぐらいにはもうできていたわけなんですね。

武田（力） はい。

皆さん方がご赴任される前には。

武田（芳） 社宅は、まだ何もない。

武田（力） 何もない。砂漠ですよ。

60年から始まって、皆さんがご赴任された時には、男だけが行って作業をやっていたということですね。

武田（力） そうですね。

住宅づくりとか、電気など。

武田（力） バラックですよ。私らのときは……。それからトレーラー・ハウス。

64年ぐらいになると、そろそろそのような設備ができていたということですね。

武田（力） はい。やっと最初の家族を受け入れたのが、64年の11月です。その時はファミリー・ハウスができた。

借り上げられるような村とか家とかは無かったのですか？

川畑 砂漠で何も無いところに作ったものですから……。

入られたのはクウェートからですか？

武田（芳） クウェートです。クウェートでした。

ちゃんと道路がありましたか？

武田（芳） その時は……道路はあったのね。

武田（力） グレーダーで均して、油をね。

川畑 そうそう。砂漠の中に道路を造るわけでしょう、これもグレーダーでグワーッと押して行って……。

ブルドーザーみたいなものですか。

川畑 ブルドーザーみたいなもので、それで押していったあと、あれは何と言うのだろう、ガッチと言ったかな、砂漠の特殊な砂、それはちょっと青っぽい砂ですが、持ってきて置いて、それで海水を上から掛けてローラーで踏み固めると硬くなるという砂があるのですが、その砂を置いて、固める。そしてその上から、アスファルトはその頃はなかったので、原油を上から撒くのです。そうやって道路ができる。それが唯一のその当時の道路で、走っているとそのうちに削られてしまうでしょう、だからガタガタした。クウェートまで、あれは130キロぐらいあるのですが、あの当時は会社が厳しく管理して、クウェートへ行くヤツは1台で行くな、スタックしたり止まったりして動かなくなると、命に関わるから、必ず2台以上で行け、というような頃でした。シャマルなんて言う砂嵐が吹いてくると、砂が移動して、道路をふさいだりするので、そのようなものも注意して、だからパトロールもやっていたらしいのですが、僕らはそのへんはよく分かりません。

武田（力） そうですね。

そのような撒いたり流したりする仕事は、実際には地元のコントラクターがやっていたのでしょうか。

川畑 コントラクター、そうですね。それはベース・コントラクション、そのような土木関係の仕事は、アラ石の担当部署の管理で多分やらせていたのだと思いますね。

すみません。話の腰を折りまして……。

川畑 いえいえ。

でもまだ外貨規制とか、飛行機に乗って外国へ行くというのは珍しい頃ですね。

武田（芳） そうでしょうね。一応ジェットに乗った。その前はプロペラだった。2、3年……。

武田（力） われわれの頃はプロペラしかなかった。

家族の方だけで行かれたのですか。

武田（芳） 人事の方で、一応引率の方がいらして……。

何回も降りて……。

武田（芳） そうですね、最初2回、18時間掛かったのかしら。

秋元（一） 僕らもあまり変わらないですよ。

武田（芳） そうですか。

今だったら、アラビア半島の旅行は楽しいところがあるかと思いますが、当時はどのような気持ちだったですか、行く前は……。

武田（力） ううん。

武田（芳） うううん。

行きたくなかった。（一同笑い）

武田（芳） 私は、何かものすごく楽しみで行きましたけれども。どんなところかなという感じで……。

川畑 僕が行ったときは、もう一人の仲間と二人で行ったのです、カフジにね。カフジ・リファインりの建設、一応目的はそれです。それで乗った飛行機がパン・アメリカンの世界一周便だというのはです。飛行場がまだ羽田だったでしょう。それで会社の連中が羽田に見送りに来てくれた。そして花束をくれた。花束をもらって飛行機に乗ったのですが、この花をどうしたらいいかと思ったら、アメリカのスチュワーデスが、機内を行ったり来たりしているもの

ですから、「これをプレゼントであげます」といったら、「オオ、サンキュウー・ベリー・マッチ」です。(笑)

それで僕らも初めてだったので、飛行機というのはこんなに静かなもの、こうやって椅子のテーブルのところに鉛筆を立てても転ばないのです、いや、飛行機というのはすごいな、こんなに性能がいいのだ、というような感じを受けて、パン・アメリカンで、あれはテヘランとクウェート、いや、クウェートはまだあの頃は止まっていなかったの、テヘラン、バイルートに行って、バイルートで降りた。右も左も分からない若者二人。それでバイルートでクウェート行きのクウェート・エアウエーに無事乗り換えて乗ってクウェートに着いた。

武田(芳) そういうコース。

川畑 そのようなルートだった。

武田(芳) 私、乗り換えなし、ルフトハンザ。最初カラチか、ボンベイか、あの辺で1ヶ所休憩、もう1ヶ所どこだったのか。でもあとクウェート。

川畑 クウェートね、直接。

武田(芳) 小さな空港でね。

川畑 そうそう。

武田(芳) 金網があって、いまの空港からはちょっと……。

武田(力) 最初にクウェートに着いたときの印象では、空気の匂いが違うなという感じがありました。全然日本と違う。それからカフジに行く間は、先ほど道路といいましたが、道路が全部地平線にまっすぐ消えているわけです。地平線に消えて、もう向こうが見えない。それで、周囲はほとんど草木というか、ブッシュの枯れたような、本当に荒涼として、何でこのようなところに私が来なければならないのかという感じでした。最初はムハッタにいたでしょう。それで、半年間、世の中の女性というのを見たことがなかったわけです。それでそのうち女性が見られるというからジープ2台でクウェート空港まで行って、フェンスの外からスチュワーデスが降りてくるのを見てました。(一同笑い)

武田(芳)ほんと、こうやって見ているの、ウサギみたいに。

川畑 はーっ、見たんだ。そこに行ったんだ。

武田(芳) おかしいですよ。

武田(力) すごい所で、いまでいうと監獄というか。山下太郎さんは、「一人ひとり大使になったつもりで行け」なんて言いましたけれども、行ったら犬みたいになってしまった。(一同笑い) 大変だったんです。

周りには全然人家がなかった。

武田(力) 全然ないです。何も無い。

何十キロも。

武田(芳) そうね。

武田(力) たまに遊牧民、ベドウィンのテントがときどき移動していますから、雨が降る季節とか、乾期に合わせて移動していますから、そのテントがときどき目に付くが、でもわれわれはそのテントに近づいても女性のいるところには入れない。男性とは話しますが、女性とは話せないし、当時は何もなかったね。しかし若かったしね。

ここに最初の頃は全体で何人ぐらい住んでいらっやったのですか。

武田(力) 最初ムハッタには日本人が20名くらいいました。そしてムハッタから先発隊という調査団が行っていただけで、初めカフジには誰もいなかったですよ。その永久基地をどこに作るかというので、調査団がいろいろ探して歩いた。そして最終的にはカフジが一番良いだろうと決めて、そこで建設関係の方々が4、5人常駐していました。そしてアメリカの業者のポメロイという業者を使って、グレーディングしたり……、していました。

なるほど。1号井の時はほとんど日本人ではなくて、帝石とか、仕事はほとんどどこかに委託してやったのですか。

武田(力) 石油関係はご存知だと思いますけれども、ちょうど雑誌社だと思えばいいのです。要するに編集機能とか、そのようなものを持っているけれども、印刷したり、製本したり、あるいはそれを発送したりというのは、だいたい外部に発注するのです。川畑さん時代は違いますが、とくに、われわれは井戸を掘る技術のほうですから、ちょうどその雑誌社とか、新聞社にたとえますと、編集者はアラビア石油です。印刷したり製本したりするのはほかの業者を使ってやるということで、われわれはアメリカの業者を使っていました。実際に機械を持ってきて掘るのはアメリカの業者です。

そうすると、ムハッタはトレーラー・ハウスだけだったんですか。

武田（力） トレーラー・ハウスについては、最初に IDC（インターナショナル・ドリリング・カンパニー）というアメリカの会社を使っていましたが、彼らがトレーラーをとりあえず持ってきてくれまして、ドリリング・キャンプを作ったのです。それでムハッタをなぜ使ったのかというと、アミノイルが陸上利権を持っていましたから、それが陸上に資材を揚げるときに使っていたベースを借りて、そこにトレーラーを置いて、その業者のトレーラーにわれわれはとりあえずカフジができるまでは間借りしましょうということで、間借りして泊めてもらっていた。当時は、だから日本人が陸上に 20 人ぐらいいました。海上の掘削現場に 5、6 人いましたから、私が行った当時は陸上に 20 名で、海上に 5、6 名という感じです。

みんな男性？

武田（力） そうですね。砂漠の中で、スチュワーデスが降りてくるのを喜んでいる。そのような感じです。

するとカフジと場所を決めたあと、本格的に基地作りが始まったわけですね。

武田（力） ある程度、寄宿舍と資材関係ができたころに、全員が移ったのです。それが 1960 年の後半あたり、61 年ぐらいだった。61 年になるとほとんどそちらに移って、そこから作業をやっていた。

武田（芳） 社宅なんてうんと後でしょう。

武田（力） 社宅ができるのは 63 年ぐらいから建てて、受け入れが 64 年です。

武田（芳） そう。

家が、住ができた。それでは食のほうはいかがですか。

武田（芳） 食のほうは、最初はクウェートによく買出しに行きました。クウェートにニュー・スーパーというようなスーパー・マーケットが 1 軒あって、でも、あまり生野菜とかがないのです。しなびたようなほうれん草だとか。

武田（力） カフジにも店があったでしょう。

武田（芳） カフジはうんとあとでできた。最初はクウェートに 1 週間に 1 回買出しに行っていた。

クウェートとの往復は、ビザとか、それはフリーだったのですか？

武田（芳） あ。ゲートまで……。

川畑 ゲートはあるけれど、アラ石が発行していたパスをもらって、それを見せれば通過できました。

武田（芳） ただお酒とか、豚肉などは買うと大変だったから。

武田（力） お酒のリカー・パーミットも、外国人にあったのです。最初はお酒まで買えたのです。

川畑 僕等が行った頃は配給制。

武田（芳） そうね。

武田（力） まだそのころは、クウェートは英国の保護領でした。通貨もルピーを使っていたのです。インドが使っているルピーを。イギリスの保護領でしたから……。

武田（芳） 女王のマークが付いた。

武田（力） クウェートが独立してから、新しくディナールという通貨を作りましたが、われわれが行ったころはまだルピーを……。

奥さんがいらしたころは独立していましたね。

武田（芳） はい、していました。していましたけれども、私たちが買い物に行きまずでしょう、スークに行きますと、珍しがられて、車の中をこのように覗かれたり。珍しかったのでしょね、東洋の女性は。

大使館などはまだないですね。

武田（力） 我々がいたころは、何ヶ国かを、巡回大使館というか、クウェートに常駐はしないで、アブダビとかカタールとか、いまちょうどタジキスタンとか、あのようなところみたいに、どこかにベースを置いて巡回し、何ヶ国を管轄していた。だからクウェートには、後でできた。61年か、62年かにかできたのです。

武田（芳） じゃあ私達が行ったときに河野大使という方はクウェートだけの……。

武田（力） 独立してからではないの。

武田（芳） でしょうね。

毎日どのようなものを食べていたのでしょうか。日本食、それとも向こうのもの。

武田(芳) 色々な材料を使いまして、日本食、あまり無理して日本食でなくても、よくテンダーロイン、牛肉、……何を食べていたんだろう。

今ですと、日本人の方は結構お米を炊いていらっしゃると思いますが、お米などありましたか？

武田(芳) お米はエジプト米だったのかしら。ちょっと臭いがあって、臭い。

きっと皆さん、お米を炊いて、何かおかずを作っておられたのでしょうかね、朝、昼、晩と。

武田(力) 家族が来ましてから、日本から資材を積んで船が来るでしょう。それに食料品を積んで、希望を取って……。

武田(芳) うんとあとよ、それ。

武田(力) うんとあとにね。

武田(芳) 3年ぐらいあとじゃない。日本のデパートと契約しまして、現地で一括して希望を取りまして、それを取り寄せてくれましたから、後半は小豆とか、とにかく不自由がなく日本食でした。最初は何を食べていたか、私たちは……。

武田(力) 何を食べていたかな。

武田(芳) クウェートのニュー・スーパーに行きまして、ちくわと……。

ちくわ？

武田(芳) 缶詰ですよ、それを見つけた。

ちくわの缶詰があるのですね。

武田(芳) あったのですよ。知らないでしょう。

川畑 生協ができたのはずうっとあとだった。

武田(芳) ずうっとあとですよ。

川畑 われわれがお金を出し合ったんだものね。

武田(芳) そうそう。そして取り寄せて、みんなの希望を取って、お米何キ口、誰々が何キ口、そして家族全部の分を船で取り寄せてもらった。後半は楽だったよね。お豆腐も作れたし……。

お子さんがいたら、いろいろな食べ物、お子さん用、赤ちゃん用のものとか、洋服とか、いろいろ必要なものがあるでしょうし……。

武田（芳） そうですね、最初のうちは皆さん、結構日本から持っていったみたいですよ。

武田（力） だってミルクなどは。

武田（芳） ミルクはあちらで結構……。

武田（力） イギリス製のものを買ったでしょう。

武田（芳） そう、アメリカ製。

武田（力） 第2次中東戦争で、ミルクがなくなるというので、慌てていっぱい買い込んだことがあった。

川畑 ミルクは三角の紙の袋があるじゃないですか。

武田（芳） あれはフレッシュミルク。じゃないの。

川畑 あっ、じゃないのか。

武田（芳） 缶入りのMM……、忘れちゃった。ML 何とかというアメリカの……。それからクウェートへ行きますと、そのようなアメリカのものとかが多かったのですよ。イギリス、デンマークのものとか。デンマークの冷凍の食パンも売ってました。そのようなものを買ってきて、何を食べていたんだろう。

こちらの奥様が行かれたのは何年ごろ……。

秋元（元） 私は75年です。秋元です。私が行ったときにはもう75年になってしまっていて……。

10年、11年ぐらい。

秋元（元） 武田さんが、ちょうど1年ぐらい向こうで一緒にいたぐらいで帰られたころでしたね。すべて出来上がってましたから……。

武田（芳） すべてもう。

その時は何人ぐらい、何家族ぐらいが……。

秋元（元） その時はもう何次何次とかいうのはもうなくて、それぞれ……。

武田（芳） 100家族ぐらいいたでしょう。

秋元（元） 100 家族まではいないかったですけれども、60 家族前後はもういる状態で、本当に日本人学校も 50 人ぐらい子供がいるときでした。

武田（芳） そしてお手伝いしていただいた。学校をね。先生でいらしたから。

秋元（元） そうですね。だから、食事の面もそのようなことで、年 2 回注文を取って、日本食品が来ましたので、もう日本にいるよりもずっと日本的な、しかも高級品を食べるといふか……。

武田（芳） ね。

秋元（元） そのような生活にもうなっていました。

武田（芳） やはり最初は大変だったからでしょうね、しょっちゅうパーティーとか、私は毎日お客をやっていたみたいです。お昼も……。

川畑 よくやったよね。

武田（芳） はい。

川畑 よく呼ばれて、みんなでお客を呼びあってね。

日本人の奥様方が……。

武田（芳） そう。24 家族ぐらいしか行ってないから……。

武田（力） 独身が多かったですからね。

武田（芳） どなたかが、納豆とか、油揚げとか、お土産に持ってきてくださると、自分たちだけで食べるともう惜しくて、誰々、誰とか呼んで、といって、他の若い人たちとか……、若いって、私も若かったんですけど。

川畑 だいたい半々でしたからね、独身寮に住んでいるのとファミリーに住んでいるのと。だから独身寮に住んでいる連中には、独身用の食堂があって、ちゃんと日本人のコックさんもいました……。ですから奥さんの作った料理を食わしてくれるわけです。呼んでくれるので、楽しみに……。

毎日の生活のパターンというのはどのような感じだったのですか。朝、仕事には何時頃出られたのでしょうか。

武田（芳） 7 時だね。

秋元（元） 7 時かな。

武田（芳） お昼ごはんには帰ってきて、それで……。

秋元（元） 昼寝の時間で……。

武田（芳） お昼寝。2時間あるんですね。

するとお昼ご飯を入れると3時間ぐらい？

武田（芳） いや、入れないで。

秋元（元） 2時間。

入れないで食べて2時間。

武田（芳） それで4時ぐらいに……。

すると12時ぐらいに戻ってこられて、2時ぐらいまでゆっくりされて、2時ぐらいからまた仕事されて、5時ぐらいまで……。

武田（芳） 5時でしたっけね。

川畑 5時。

秋元（一） 夏と冬と違っていましたよね。夏は5時だったかな、冬は4時。

武田（芳） たしかに5時だったような気がする。

戻ってこられて、旦那さんが家にいて……。

武田（芳） 戻ってくるのも、1時間とか、1時間半後でした。リクレーション・ルームでマージャンやってきて。そういうのを、何となく皆さんで楽しんで……。 (一同笑い)

武田（力） ゴルフをする人だっていたよ。

武田（芳） 私が行った当時はゴルフなんて、だってゴルフ場ができたのはいつ頃でしたっけ？

川畑 僕等が赴任した時はもうあった。9ホールだけだったが。

武田（芳） あったの？ では殿方はやっていた。

川畑 会社の外にできていたから。

武田（芳） ああ、外ね。

それで休日が、土曜、日曜ぐらい。

秋元（元） ちがう。木曜日、金曜日。

川畑 金曜日が聖日で、木金。

武田（芳） 週二日です。

武田（力） 木曜はクウェートに買い物に行くとか、海岸で朝から魚釣りするとか。

武田(芳) 結構やっぱり皆さん、レジャーはしていましたよね、ああいう所ですから……。

川畑 最初は発電所などもよくトラブって、シャット・ダウンしたり、夏の外気温が40度ぐらいなのに、電気が止まってエアコンが止まったり、もう大騒ぎしたことがあるのですが、機械の調子もだんだん落ち着いてきて、それで皆さんも、休みの日だと海で泳いで魚を採ったり、魚釣りに行って、子供たちをみんな集めて魚釣り大会をやったりしました。秋元さんは、よくそういう企画を立てたりして、だからすごく楽しい思い出をしましたね。そして夜、砂漠に行って望遠鏡で星を見たりね……。

武田(芳) あれは最高。プラネタリウムの室内で見るのなんか、もう全然。あれは本当に素晴らしかったです。あれだけは……。

川畑 あの辺は沙漠よりも土漠という感じかな、ブッシュがざあっと生えていて、車がときどき通った道などがあって、間違えないようにその道を張り付けていけばスタックしないですむし、そうやって砂漠の中へ子供たちを連れて行って、星を見たり……、だから非常にいい思い出がある。

武田(力) アラブの人と混在しているのですよ。日本人もアラブの人と一緒に住んでいるのですよ。

コンパウンドの中にですか？

武田(力) はい。だから私の隣は、パレスチナの……。

武田(芳) 歯医者さん。

武田(力) 誰だったっけ、エジプトだったっけ……。

武田(芳) ラシッド。

武田(力) 要するにお隣がアラブということもあるのです。だから……。

武田(芳) 一応グレードが。

武田(力) 日本人ばかりが固まっているわけでもない。

そうすると、たとえばプールで奥さん方は泳いだりなどはできなかったのですか？

武田(力) プールはない。もう海だ。ないですよ。

川畑 プールは、海。

武田(芳) 20、30メートル前がペルシャ湾。

川畑 海岸ですからね。ペルシャ湾。

するとコンパウンドの中では、どうなのですか。服装などは、わりと自由なまま、アラブ人と一緒でも構わないわけですか？

川畑 コンパウンドの中はいいんですよ。外が……。

武田（芳） ううん、でもね、ショート・パンツはやめましょう、とか…

…。

川畑 肌を出してはいかん。

武田（芳） 最初の頃は、ノー・スリーブもやめましょう、と言われた頃もあった。

武田（力） （ホワイト・ボードの）絵にありますけれど、ファミリー・コンパウンドの前は海ですから、その海で子供とかは泳いでいる。

もう秋元さんがいらしゃったころは、ずいぶんいろいろな娯楽施設みたいなものができていたのでしょうか。

秋元（元） 娯楽施設というのは、ボーリング場とか映画館とか、ヨットのクラブ・ハウスとかが、ファミリー・コンパウンドの中にあり、それから、ヨット・ハーバーとかがありました。そういうふうでしたね。

武田（芳） ゲスト・ハウスでは……。

秋元（元） ゲスト・ハウスではマージャン大会とか……。

秋元（元） ゴルフも、ゴルフ場のほうは、ご夫婦で皆毎月ゴルフ・コンペして……。

川畑 自分たちで設計して、業者を呼んできて工事をやらせる。だからつきっきりですよ。業者はゴルフを知らないから。

芝の生えているコースですか？

川畑 いやいや。芝が生えていないものです。土漠の表面をグレーダーで平らにして。

全部でピーク時には何人ぐらいいたのですか。現地の人から全部を入れると……。

川畑 日本人が、ですから 50 名、60 名として作業していたから。

秋元（元） 50、60 家族ですよ。

川畑 家族全体で……。

秋元（元） 50、60 家族だから、それで 4 人家族とかになるから……。

川畑 単身がだいたい 50 人ぐらいですな。

それが日本人だけでしょう。

川畑 日本人だけで百、5、60 名。200 名弱かな。トータルで 1,700 から 1,800 人ぐらい。現地人含めて 2,000 人弱だったですね。僕の記憶だと。

一つのコミュニティーができますよね。

川畑 できますよ。現地人のファミリー・クウォーターが続いていました。

武田（力） 回教徒のモスクとか、そのようなものを会社が造ってね。

川畑 そうそう。

ちょっと奥様方を前にお聞きするのも憚られるのですが、単身の、最初の頃は、遊びに行くのはやはりベイルートですか？

武田（力） 単身のころは、最初の頃は休暇が 1 年半に 1 回ですよ。

結構厳しかったのですね。

武田（力） 1 年半に 1 回で、あとで独身は 1 年に 1 回になりましたけれどもね。そうすると、もう家族がいる人は日本に帰る。よそに休暇で遊びに行ったのは、家族同伴の人はヨーロッパへ行ったり、単身の人は日本へ帰ったみたいね。

川畑 うん、日本に帰ったよ。ヨーロッパ経由で日本に帰ったり、いろいろ経由しながら日本へ帰る。それは僕らの経験、単身のころね。

よくベイルートへガス抜きに行くという話を聞きましたけれども

……。

川畑 ああ、ああ、ああ。それはあったでしょう。僕らは 64 年だから、そのあとはもう家族も一緒にベイルートも行きましたけれども……。僕もガス抜きで行ったという話は聞いています。だからもっと前に来ている、いわゆる掘削の地質調査とか、そのような時に来た、非常に厳しい状況の最初の頃じゃないかなと思うんだけど……。

武田（力） 俺は 1 年半、ばっちりカフジにいましたよ。

川畑 あ、そう。じゃあもう……。

武田（力） 長かったです。

武田(芳) だって、学校とかいって、1ヶ月はパリに行ってたじゃない。
いや、ガス抜きとかじゃなくて勉強に……。 (一同笑い) あれは学校。

武田(力) ガスではなくて液体になっていたから……。 (一同笑い)
すみません。

よくクウェートのほうへ行くという話は、先ほどから伺っていますが、リヤドとかダンマームとかに、買い物とかで行かれることはないのですか。

武田(芳) 多いですよ。

川畑 300キロ、3百2、30キロあるからね。

秋元(元) アル・コバールは行けますよね。

川畑 だから行きだしたのは、向こうも道がよくなってからですよ。それまではクウェートなんです。

武田(芳) 私たちのときはクウェート。

秋元(元) 距離が3倍になりますものね。

武田(芳) 距離がね。

武田(力) クウェートのほうがいろいろなものを売っている。

武田(芳) ホテルの料理もおいしい。

武田(力) 最初の頃は豚肉も売っていたのです。サウジには何もなし。

武田(芳) そうそう。

川畑 クウェートのチェック・ポイントで持ち物検査があるのでね。サウジはチェック・ポイントがないから、そのまま店で買える。けども遠いので。

武田(芳) 遠かったですね。

川畑 道路が後半よくなったので、それで行くようになったね。

武田(芳) 私はクウェートが好きだ。いいお店が多かったでしょう、ヨーロッパナイズされて。

川畑 そうだね。

武田(力) ガソリンが1リッター10円とか11円とか、そのようなものでしょ。

川畑 12、13円かな。

武田(芳) お水より安いという。

武田(力) 水よりもはるかに安い。日本に帰ってきてガソリンを一杯満タンにして、ガソリンスタンドで500円を出したら怒られたとか……。(笑い)

カフジあたりの人口が増えてきたという話ですけども、食料品のお店などもだいぶ増えたのでしょうか？

武田(芳) スーパー・マーケットもすぐそばにできまして、配達もしてくれたり、魚も。

武田(力) (ホワイト・ボード上の地図をさして) あれで行きますと、ファミリー・コンパウンドの家のほうの……。

武田(芳) ゲートが、そう、大通りがありました。

川畑 大通りがあって、これがフェンスで囲まれていますけれども。

武田(芳) そう。

川畑 この道がこのゲートで、これがカフジ、クウェート。

商店街みたいなのは？

川畑 商店街みたいなのは、これから何かこうあって、ダンマンに行く方向はこうかな。この辺にいろいろお店が……。

それはどこの人たちですか？ クウェートの人たちですか、それともサウジの人たち……。

武田(力) サウジ。

サウジですか。

川畑 クウェート人はなかなかここまで来ない。

来ないのはなぜですか？

川畑 辺鄙でね、しょうがないわ。

武田(力) パキスタンとか、そういうのが多かった。

秋元(元) 働いている人がね。

武田(力) インドとか。

武田(芳) 経営者はそうみたい。

川畑 最近は、造水装置やそういうものができたり、いろいろしているから、ちょっと変わっているかも知れない。町はこのへんがカフジの町です。

武田(力) 人口は全部でどのくらいですか？ 2万人くらい。

秋元（一） われわれがいた 1980 年代で 2 万人ぐらい。今もっと増えているのじゃないでしょうか。

武田（力） その一帯は戦場になったのでしょうか。イラクは攻めてきたんでしょう。

川畑 イラクが攻めてきたけれども、要点だけ爆弾を落とすだけで、町は壊れていなかった。

武田（力） 戦場にならなかった。

私達、3 月に行ってきました。

武田（力） 行ってきた？

ええ。初めて見ることができました。

武田（力） ううん、そうですか。

武田（芳） いまの海岸通りは素晴らしいでしょう。

そうですね。

武田（芳） 私たちの時は、そのままつつつと行って、何もなかったね。

いま日本人は何人ぐらいおられるのですか。本社の方は……。

武田（力） いまは半分以下か。

80 人ぐらいですか、だと思います。

武田（力） そうだろう。

家族は本当に少ないです。

日本食料品店とか、日本食堂というのはありましたか？

武田（芳） 日本食堂はなかったと思います。日本食料品というのはありませんでした。特にその専門店はなかったです。

秋元（一） 取り寄せられるから、ですよ。で、取り寄せるのも短期の人などが面倒くさいというと、生協ができた。生協ができたというのはいつですか。それになって日本食品も生協に置くようになった、というのを聞きました。

川畑 あれは……。

武田（芳） コックさんも呼んで、日本食が作れるようになった。

川畑 日本人も呼んで、仕入れをやっていましたよね。

秋元（元） そうですよ。

川畑 あれがいつかな。

武田（芳） 私たちがいるところだから……。

川畑 うん。70年ぐらいじゃないですか、74、5年。

武田（芳） それで、時々食べに行ってもいいっていうことになったじゃないですか。

秋元（一） だから日本食堂というのは、いまの独身寮のところが日本人のコックさんがいて、本当にファミリー・クォーターが日本人食堂、日本人何とか、というのを全部兼ねていたような……。

武田（芳） そうですね。

秋元（元） 感じですよ。

武田（芳） 家庭がもう……。

秋元（元） 家庭がすべてそこを……。

武田（芳） しょっちゅうバーベキューをしたり……。

川畑 だからすごい。奥さんのコックの腕がすごいんですよ。

武田（芳） 腕が上がりましたよ。最初は何もできなかったのね。

お魚はどこで手に入りましたか？

武田（芳） 私たちのときはお魚を売りに来ていたんです。あれはどこかな、シリアか何かの国のおじいさんがね。

武田（力） 釣りに行ってた。

秋元（元） 釣りがみんなもう趣味でね。

武田（芳） フィッシングではすごい。

川畑 あの辺はお魚を食べないのですよ。ハムール以外は食べない国ですから、だから魚市場というのがあったらしいけれども。

武田（芳） ありました。クウェートにあったけれども。ほとんど行かなかったじゃない。だってあのおじいさんが売りに来て……。

武田（力） コンパウンドの近く、ちょっと南に、漁村があって、そこへ行くと買えたのですよ。

それはお刺身ができるくらいの……。

武田（芳） そう、もう生きている。

秋元（元） カツオ。

武田（芳） カツオでしょう、それからマグロでしょう。

秋元（元） モンゴウイカ。

武田（芳） モンゴウイカ。

武田（芳） それから、エビ。

秋元（元） エビね。

川畑 そんなにあったの？

武田（芳） あった。それから、サヨリは釣れていたけれども、サワラ。

川畑 キスも釣れていた。

秋元（元） 海釣り、アジとか。

武田（芳） アジね。

秋元（元） ハマグリじゃなくて、アサリ。

それでお刺身を作ったり、お寿司を作ったり……。

武田（芳） そうです。お寿司大会ってやるのです。ご飯を作って。

武田（力） アサリは海岸に行けば……。

秋元（一） いっぱい取れましたね。

武田（芳） そうね。

川畑 きれいな海だったよな。

武田（芳） きれいな海だった。確かに……。

60年代というと、冷凍食品とかというのはまだたくさん出回って
いなかったのでは。

武田（芳） 冷凍が多かったですよ。

ありましたか。

武田（芳） はいはい。クウェートのスーパー・マーケットに行きますと、
全部冷凍です。食パンにいたるまで。ただね、ケーキ屋さんとか、そのような
ものが、後半シェラトン・ホテルとか、そのようなところに入るようになった
のですが、それまではそのようなケーキ屋さんというのはいないから、みんな、
おそらく日本人の女性はケーキを自分で作ったと思います。私は毎日作って
いた。

冷蔵庫が普及するのは、意外と後ですね。

武田（芳） 冷蔵庫はすごく大きい。

秋元（元） 大きい冷蔵庫でしたね。びっくりするような……。

冷蔵庫ですか、冷凍庫ですか。

武田（芳） 冷蔵庫。

秋元（元） 冷凍庫と冷蔵庫、そういうのもある。

武田（芳） はい、それはすごく大きくて、こう開けてびっしり詰めていたけれども。

そういうのは、家族の方が最初に来たときにはもうちゃんと揃って置いてありましたか？

武田（芳） 冷凍庫はなかったです。ただ冷凍室がついた冷蔵庫はありましたけれども、冷凍庫は後半ですね、それを買って……。

武田（力） 社宅には一応スタンダードだけのクッキング・レンジとか、冷蔵庫とか、そのようなものがありましたけれども、あとは自分の好みでやった。ベッドはあるけれども、シートとか毛布はない。それは自分たちで買う。

武田（芳） 水は海水から作った。

川畑 そうそう。

武田（芳） だからカルシウム分とか、そのようなものが含まれていないから、あの水を飲んで虫歯が増えたという話も聞いたけれども……。

秋元（元） 子供たちもね。

川畑 塩素滅菌しかやっていないからね。

秋元（一） それは多分始めのころの話で、われわれが行ったころは定期的に水質検査をやっています……。

武田（芳） ああ、そう。

秋元（一） 貝殻を入れたりなどをして、カルシウム分を調節していました。

秋元（元） 有線テレビなどが入ったのはいつ頃ですか？

秋元（一） あれは1974年ですね。いま日本でやっている有線テレビの先駆けなのです。日本よりも早かったです。藤倉電線がそういうシステムを作った。

武田（芳） もう少し前なのか。74年くらいですか？

秋元（一） もっと前なのかな。

武田（芳）　うちがいた頃からでした。

それは日本のテレビが見られるわけですか？

秋元（元）　そうです。日本のテレビがテープで全部見られるのです。

秋元（一）　テープで持って行って、そしてそれを再生して、ケーブル・テレビに乗せるわけです。

衛星でやっていたわけではない。

秋元（元）　じゃなくて。日本の家庭にだけ。

秋元（一）　ただ、異文化が入るわけですから、アラビア人の家にはケーブルは引いていないのですけれども、実際のオペレーションはアラビア人がやっているのです。そのために有害なテレビ番組、たとえばお相撲というのは裸ですよ。男でも裸はよくないというので、お相撲は見られなかったです。

秋元（元）　そうですね。

武田（力）　お酒のコマーシャルも。

秋元（一）　そうですね。

秋元（元）　女性の肌が出る。

秋元（一）　そうです。

秋元（元）　ラブシーンになると、富士山のテロップ。（一同笑い）

あれはオペレーターがやっていたのですか？

武田（力）　最初あれは大変だった。

秋元（一）　それは多分我々が行く1年ぐらい前から始まったと思うのです。

武田（力）　サウジの監督官が、オペレーションを交代でやります、と言っていた。

秋元（一）　そうでしたか。

週刊誌などの、なかのグラビアが切り取られる……。

秋元（一）　見つければね。空港でよくカレンダーなどを持っていくと、没収されるか、うまく行って墨を塗られる、というのがよくありましたね。

すると、だんだん生活も整ってきて、日本人の学校ができた。いつ頃ですか、学校などが整ってくるのは。

武田（芳）　4年ぐらい掛かった。そんなにかかってない？

武田（力） 自分の子供で当てはめて考えればいいんじゃないの。

武田（芳） そうですね。

武田（力） 幼児なんかは始めから……。

武田（芳） 幼稚園だから。幼稚園で2歳より前で、幼稚園じゃないんだけれど。

秋元（元） 学君は向こうで生まれたんですか。

武田（芳） そう。

秋元（元） あ、そうですか。お産もだからあったんですね。お医者さんの問題もいろいろと……。

武田（芳） そうですね。その問題もね。

武田（力） 学校ができたのは、あの「アラビア石油」に書いていないですか。

ええ、小学校だけは書いていない。

秋元（元） 小学校だけね。

武田（芳） 幼稚園のちょっとあとでした。

武田（力） そうだったな。

秋元（元） たまたま私はそこに行くまで教員をやっていたものですから、75年に行ったときに、その日本人学校の先生が3人で複式学級をやっていて、非常に教育が心配だということで手伝って欲しい、というふうな言われ方をし、確か5月に行ったのですが、9月からお手伝いするような形になった。

武田（芳） そのころの校長は？

秋元（元） あっ、そうそう、小堀先生。

武田（芳） そうすると……。

秋元（元） 学君が4年生とか、そのぐらいです。

武田（芳） そうですね。3年生だったと思います。

秋元（元） 3年生かもしれません。

武田（芳） はい。そうすると小堀さんが、遡ると福島先生……。

武田（力） ただ、社宅は非常に閉鎖された社会ですから、ある意味で逃げ場がないという、何かあったときの精神的な逃げ場がないという、かなり苦しいことがやはりあるのです。日本でしたら、この人が気に食わなければあち

らに行く、ということが出来るのですが……。そのような閉鎖社会の弊害というのも、私はあると思う。

お仕事のほうでお聞きしてよろしいですか。川畑さんがいらしゃったときに、利権の見返りというか、こちらからクウェートのほうには、海老の養殖場の提供ということになった。

それからサウジのほうでは、製油所をされるということですが、その製油所というのは実現したのですか？

川畑 実現して、3万バーレルの製油所だったのですが、あれは重油、これは船の燃料です。それから軽油、これも船ボイラ、タービンの燃料、それからガソリン。このように製品が3種類なので、簡易トッパーと言います。

そのカフジの製油所でのお話だったのですか？

川畑 そうそう。(ホワイト・ボードに書き込みながら)これは、ここが橋で、この図がこうあるのですが、それからゴルフ場、このへんに製油所。これが事務所、製油所の煙突があったり……。

それはアラ石さんの所有ではなくて、向こうに移転するような意味で作られたのですか？ 作られてから寄贈されたわけですか？

川畑 そうです。それで最近の話だけれども、人の話で聞いただけですが、この製油所もいよいよ操業ストップという話になっただけ。

どうしてですか？

川畑 プラスにならないんだろうな。この話は誰が話を持ち出したのかというのは、そのへんの細かいことは分からないのですが、製油所建設で僕らが飛んでいったときに、誰かが「おい、川畑、おまえよく来たな。あの製油所は多分儲からない製油所だよ。」といった人がいる。カフジ会でそれを調べてみたけれど分からない。だけれども、3万バーレルの製油所が完成して、完成式にはサウジの皇太子かな、が見えて、それで開所式をやった。そこまでやった。

いつ頃の話ですか。

川畑 あれは68年ぐらいかな。整備、地ならしから始めて3年、4年ぐらい掛かったか。67年か、68年ぐらいじゃないのかな。

竣工というと、それはできたということじゃないですか？

川畑 そうですね。それでこの前まで運転していた。だからサウジの利権が生きている間までやっていたのではないかと思う。僕らがいるころはずうっと運転していたのですから……。

それはアラビア石油の財産ではなくて、アラビア石油からサウジ政府に贈られたもの、というのでしょうか。

川畑 そうそう。

それで操業の指導などもされていた。

川畑 そうそう。当初はね。だから日本人も入って、オペレーションも日本人のスーパーバイザーが各シフトに入っているのと、指導した人もいます。もういま日本に帰ってきてしまっているのですが……。

その後はサウジ人だけでやっていた。

川畑 そうそう、その後はね。だからそれ迄は一人ぐらいはずうっと交代で若いのが就いていたと思います。最初から同じ者ではなくて、誰かが就いていたな、白銀（しろがね）さんがずうっとしていましたね。

秋元（一）さんのお話の中に、職業訓練学校の指導に行かれたというのがあったのですが、そのへんの話を少ししていただけませんか。

秋元（一） そうですか。まず私は、日本でやはりそのような学校にありましてやっていたのですが、アラビアでこういうような仕事があるのだが行ってやってくれないか、という話がたまたまありまして、それでいろいろ話を聞きまして、日本にいる間にシラバス、カリキュラムというか、そのようなものを準備したり、それから教科書とか、教材、実験装置とか、生徒に工作をやらせる材料などを全部手配しまして、そのようものと一緒に向こうへ行ったのです。会社の作業訓練施設というのは、私の聞いている話では、「利権協定の中に現地の若者を教育しなさい」という一項があるのだそうですね。

武田（力） 教育訓練ね。

秋元（一） ええ。そして「積極的に登用しなさい」ということなのです。それに則って、トレーニング・センターという施設と、制度としてはアプレンスといいまして、社員ではないのだけれども、向こうの高校を卒業した人たちを会社で給料を出して教育しますよ、という新聞広告を国中の新聞に出しまして、国中からそのような若者を集めて……。

国というのはサウジとクウェートの両方ですか？

秋元（一） 両方です。実際にはサウジの人間が多かったです。それで応募してきた生徒を面接したり、試験をしたりして、正確な人数を覚えていないのですが15人くらい採りまして、コミュニケーションの手段が英語なものですから、英語の授業を入れまして、これはイギリス人の先生が付きまして、毎日1時間、2時間の英語の時間があって、あと残りの会社の作業時間はいろいろな勉強をして、理論とか、実際にやるのですが、2年間コースです。そして卒業したあとは会社の社員になって、主に無線とか、電話とか、それからいろいろな作業のコントロール・システムのメンテナンスをするような部署に送られていました。

実は、私も2年コースを1回やって、もう一度やってほしいということで、2回やりました。それで準備期間とか、いろいろ入れて4年半はそういったものに携わったのですが、そのうち自分が教えた生徒のOJT(On the Job Training)ですね、現場で指導するというので、私も現場へ入りまして、それで一緒に仕事をした、ということをやっておりました。

学生はどのような人たちが集まったのでしょうか。

秋元（一） 非常に優秀な連中には、たとえば日本へ留学できる、アメリカへ留学できる、という制度もあるのです。だから、そのような試験には受からないけれども、会社に入って会社員となって生活したい、という人がそこに来ていたと思います。だからレベルは玉石混交というか、かなり優秀な者もいましたし、どうしようもない者もいました。

地元の人ですか、それとも……。

秋元（一） 地元といいますと、カフジという場所がサウジアラビアの中でどのような位置かという、日本でいったら網走とか、（一同笑い）そのようなところに当たるのではないのでしょうか。

川畑 そうかもしれないね。

秋元（一） 要するに辺境なのです。やはり中心地はジェッダとか紅海側なのです。アラビア湾側というのは、言ってみれば辺境で、その中でもカフジというのは新しい、新開地です。だから、たとえばある生徒の場合は、ジェッ

ダのずうっと南の方の紅海側から来ているのです。会社には寮がありますから、そこで生活しながら勉強しているのです。

川畑 新聞広告は全国にやるわけですか？

秋元（一） 全国にやっていました。

武田（力） 全部。

秋元（一） そうです。

そこで研修した人は自動的にアラ石さんで採用されるという前提で……。

秋元（一） そうです。

そうですか。

秋元（一） よほど問題がある場合を除いてです。

入ったあと、このような人たちはすぐに辞めてしまってジョブ・ホッピングする、というのはいかがでしたか？

秋元（一） それもカフジの特質で、そのようなところですから、中にはそのような人もいましたけれども、なかなかすぐには、周りにほかの会社があるのであれば別ですが、ないですからね。

やはりそのようなところに集まってくる生徒であれば、たとえば高校を出て、ある程度優秀な人で、先生から「どうだ、受けてみないか」といわれて来た人達はいましたか。

秋元（一） そのような人もいましたね。ですから優秀な人はそうなのです。それからどうしようもない者もいましたけれども、ただ、たとえば国で羊を追っていたのだけれども、これでは将来不安だから来た、という生徒もいました。

話をまた生活のほうに戻させていただきます。先ほどお医者さん、病院の話が出ましたけれども、皆さん、病気の時はどうのようにされていたのでしょうか。

武田（力） 病院がありました。病院を会社のほうで……。

日本人のお医者さんですか。

武田（力） 日本から内科とか、産婦人科、外科ですとか、その時代によって来る先生の数が違ったのでしょけれども、われわれがいたころは産婦人科、内科、外科と、歯はいなかったね。歯は現地人。

武田（芳） 歯は渡辺先生が……。

武田（力） それに看護婦さんが……。

川畑 定期的に。

武田（力） 病院に日本人の看護婦さんがいたのです。

すると60年代の初めぐらいから……。

武田（力） 最初はなかったのです。それで最初は具合の悪い時はクウェートに行ったのです。

病院の中には、手術や入院ができる施設があったのですか。

武田（力） 出産とか盲腸ぐらいなら、できたと思いますよ。それ以上になるとクウェートに行かなければだめだった。

武田（芳） 67年になって、産婦人科の先生に来ていただいて、赴任みたいだね、結構長くいらした。大神先生は……。

秋元（元） 知らない。川畑さんも向こうでお産なされた。

川畑 そのころはうちの一番上の娘はカフジで生まれたのですが、逆子で臍の緒が首に巻いていたというのです。だから帝王切開しなければ、これはダメだよと医者に言われたのです。まだ病院、病院といってもトレーラー・ハウスです。手術室もトレーラー・ハウス、そして入院施設なし、それで、さてどうしようかといったら、皆さん、まだ秋元夫人はいなかったかな。入院施設がないから、手術、産んだあと、自分の家に帰って来なければならない。

武田（芳） その日に。

川畑 旦那は仕事に行ってしまうし、その日に帰ってくるから、食事とか、そのような準備ができない。だから、「みんなで協力するから、もうカフジで産みなさい」と奥さんたちに励まされて、それで帝王切開です。外科医もあの頃はいたのです。だけれども表面の麻酔は効いたけれども、中が効かなくて、（えーっの声）それで一応帝王切開で、もし出血多量のときは困るから、O型なので、会社のO型の連中をみんな呼んで、病院で待っててもらった。木曜日かな、会社が休みだったから。そして僕らはリファイナリーが終わったあ

と、発電機とか、造水施設関係のオペレーションのメンテナンスをやっていたので、水が止まってはいけない。電気が止まってはいけない。それでそちらのほうのスタン・バイもさせて、それでみんなに協力してもらって、結局輸血はしないで済んだらしいのですが、無事に終わって退院してきた。皆さん、奥さんたち、みんなの協力で生まれた、という感じです。そのような環境でした。

向こうで赤ちゃんを出産される方がずいぶん多かったのですか？

武田（芳） あまりいなかったわね。

武田（力） 聞かないね。

秋元（元） 川畑さんのうちも、二人目、三人目は「もうカフジは」といって、日本で……。

川畑 それは医者か、もうオペは……。

秋元（元） あ、そうか、帝王切開の……。

川畑 「カフジで産んでは困る」と、「もう日本へ帰って産んでくれ」といわれて、それであとの二人は日本に帰って……。

日本人の方でもそれぐらいいたら、急病とか重病になる方というのが、長い間にはおられませんでしたが。

川畑 急病、重病というのはあまり聞いていないな。

武田（力） クウェートに運ぶでしょ、そういう時には。

救急車を買われたのではないですか？

武田（芳） うちが子供が小児喘息になりまして、2歳半で……。

武田（力） 呼吸困難になって、酸素を口に当てて、クウェートまで送る訳です。

武田（芳） 堂前先生かな、内科でしたか、内科の先生がおられたのですけれども、何かちょっと手当てができなくて、クウェートのほうへ看護婦さんに付いていただいて、お父さんと、酸素ボンベの小さいのをに入れて、タクシーでクウェートの病院に入院したことがあります。大きな病院もあったわね。

武田（力） それでそこで死ぬ人もいたのですよ、カフジで死ぬ人もいた。

武田（芳） そうですね。

武田（力） たとえば脳溢血とかね。これは本当の話です。

武田（芳） 社員の方でね。

武田（力） 亡くなった方もいました。

お葬式とか、その後、どのようにされたのですか？

武田（力） 家族が来るのを待って、飛行機で遺体を日本に運ぶ……。

それは茶毘に付すとかではなくて、そのまま……。

武田（力） 茶毘に付した人もいますし、遺体を日本に送った人もいます。

川畑 坊さんの息子もいまして、それがちゃんとお経も読んでくれて……。

武田（芳） 池野さん。

川畑 独身、単身で来ていた人。

武田（芳） あの場合、単身でいらした方が、一人でしょ部屋が、寝ている間に亡くなった。

武田（力） 冷凍庫に入りきれないから足を折って詰めて、家族が来るまで保存した。。

武田（力） 焼くという習慣が回教徒にないのです。

川畑 そうですね。

武田（力） インド人の集落がクウェートにありますから、集落に持って行って焼くわけです。薪を積み重ねて遺体をのせ、油かラードみたいなものをかけて火を付ける。神経が相当強くないと見ておられない。

川畑 あそこのモスLEMというのは焼かない習慣ですから、だから大変だったよね。

武田（力） 焼くのはクウェートのインド人のヒンズー教徒ね。

川畑 特別な。

クウェートではアラビア石油の敷地とかに日本人のお墓などありますか？

川畑、秋元（元）、武田（芳） 墓はない。

遺骨はよく持ってきていた。

武田（力） 墓はないですね。

私の小学校の時の友達に船の設計をやっているのがいて、タンカーについて「中東とかの船は冷凍庫を付けて」という話を聞いたことがあります。ムスリムが船の中で死んだ時に遺体を持って帰らないといけないというので、

そのような船がある、と言うのでびっくりしたのですが、日本人の場合、そのようなケースは無いわけですね。

川畑 そのような場合もあったよ。冷凍して送り返した。家族が来るまで冷凍しておいて、家族が来て、確認して、お棺の中にドライアイスみたいなものを詰めて、それで持っていく。それで日本で……。

飛行機でね。

武田（力） 焼いた人もいました。

あと、日本にご家族の方がたくさんおられると思いますが、今だったら電話とか、ファックスとか、インターネットですぐに連絡が取れますが、当時日本との連絡、会社ではなくて家族の方との連絡は、どのようにされていたのでしょうか。

川畑 あれはカフジに電話局があったよな。

武田（力） いや、私……。

秋元（一） あそこに行って僕は電話したよ。

武田（芳） クウェートでしょう。

秋元（元） クウェートまで行きました。

武田（芳） クウェートで申し込んでね。

秋元（元） クウェートの電話局。

武田（力） 郵便局へ行って、名前と電話を申し込んで、つながるまで待っている。

秋元（元） 待っています。

カフジにはなかったのですか？

秋元（元） なかった。

社宅には電話は付いていましたか？

武田（芳） 電話はあった。

秋元（元） お互いと会社につながるのね。

武田（力） コンパウンドの中だけの電話があった。

そこから外の、たとえばリヤドとか、ダンマンとかに……。

武田（力） いや、全然通じない。当時は無線を使っていましたから、クウェートとか、ダンマンは無線機を使っていた。国際電話がカフジにできたのはいつ頃ですか。

川畑 いつだろう。俺が、姪の結婚式に「おめでとう」という電話を式場にやったことがある。

武田（力） 何年ぐらい？

秋元（一） 82年ぐらいに入ってからですよ。

その当時ですか？

秋元（一） ええ、カフジ内に。そうだね。80年過ぎだね。

川畑 かもしれないな。

70年代にいらっしゃっていた秋元（一）さん、ちょうど石油ショックの時にいらっしゃっていたのですか、そのあとですか？

秋元（一） 後ですね。その石油ショックの時に、結局外国人の中級技術職を追い出して、「追い出す」という言葉が悪いけれども、自国の若者を登用するというふうな方針になった。

すると日本はその石油ショックに慌てふためいて、いろいろな政治家とか、いろいろな人を送っている時期ですね。

秋元（一） そうですね。

女性の方、皆さんパーマとか、床屋さんとかはどんなされたのですか？

武田（芳） 私たちのときは、カフジにはそのような美容院もなく、クウェートのホテルに行きますと美容室があって、男性の美容師がいたりしたのです。ですがそのうちに、皆さんクウェートへ行くのも大変だし、時間も掛かりますので、家庭でできる美容セットみたいなものがありましてセットができる人がいました。そのうちお互いをお願いして、交代で掛けていただいたりしたのです。あと、たまにカットぐらいは自分でやったりしたような気がしますけれども……。

旦那様の髪の毛は……。

秋元（元） インド人のところに……。

武田（芳） もうなにかあったのです。

秋元（元） インド人で。

秋元（一） そうですね。

武田（芳） ですよ。確かありましたね。汚いタオルでまた顔を拭いてくれるとかと言っていてまして……。 （一同笑い）

秋元（元） 買い物とか美容院に行くとかで、クウェートのホテルに行くというのは、やはりすごく奥さんにとってのリフレッシュの機会というふうでありましたね。

何時間ぐらいでクウェートまで……。

秋元（元） 1時間半ぐらいです。

武田（芳） 1時間半ぐらい、130キロ。コンスタントに時速120キロぐらいで走ったのかしら。

最初、道路に砂をトレーラーが流して作ったという、その道路もアラ石さんが造ったのですか。

川畑 そうだよ。

結構いろいろなことをやっているのですね。

川畑 うん。

確かに立派な道路ですね。

川畑 いまは立派でしょう、きっと。最近行ってないから。僕はそうだ、もう7年ぐらい行ってないかな。

アラビア石油のカフジにある場所というのは中立地帯ですよ。それでサウジとクウェートの国境はちょっと複雑だと思いますけれども、そのようなことで何か問題などはないですか？ クウェートの間に検問所があるだけで、あとはすうっと行ってしまおうとか。

秋元（一） うううん。問題は感じなかったな。

生活をしていて。

武田（力） 2ヶ所あったでしょう。サウジ側とクウェート側と……。

川畑 両方ありました。何か移動したりはしていましたね。

武田（力） 中立地帯は誰もいなかったのです。中立地帯とクウェートの間に検問所があって、そこでパスを見せる。

川畑 検問所の位置がときどき変わっていたのね。

武田(力) 中立地帯が分割したら、分割したところにクウェート側とサウジ側と二つできた。それにいちいち出さなければいけない。

秋元(元) そうそう。

武田(力) だからこちらから、カフジから行くとまずサウジの検問所があった。それを抜けると、今度クウェートの検問所。

秋元(元) そうですね。海岸は、イラクのほうから来る、いわゆるメッカへ巡礼する通路になるのです。だからそのような時になるとものすごく人が車、トラックに乗って来て、その時にすごく検問が厳しくなったり、そのような時にはまたペストとか、かなり伝染病があるみたいで、そのような時にクウェートに行ったりするときにぶつかると、かなりチェックを厳しくされる、ということがありました。

秋元(一) コレラ。

秋元(元) コレラか、ペストではなくて。コレラでよく何かありましたね。

皆さん方はドライバース・ライセンスを、どこからもらうのですか？

秋元(一) 皆さん日本の免許証を持っているのですけれども、通用しなかったですよ。だから向こうで実際に自動車教習所に行って、試験を受けて…
…。

その時はクウェートですか。

秋元(一) クウェートです。

武田(力) われわれが行ったころは、日本の免許はそのまま……。

川畑 そのままもう、自動的にサウジの免許証に換えてくれた。

それはサウジですか？ クウェートの免許になるのですか？

武田(力) われわれの時はクウェートでしたけれども、いまはサウジ。

秋元(一) 僕らの時はサウジだった。サウジでは教習所で試験を受けたり、ということはありませんね。

川畑 ないね。

秋元(一) だから結局それはクウェートの免許を持っていれば、自動的に国際免許と同じで、多分(免許のスタンプを)押してくれたと思うのです。

あと、お子さんの生活について、少しお伺いしたいと思います。小さい方がずいぶんいたと思うのですが、どのようにして遊んだり、どのような生活をしていたのでしょうか？

武田（芳） やはり暑い国ですから、外で遊べないので、結構誰かのお友達のお家に集まったり……。

武田（力） 日本と決定的に違うのは、夕方になると亭主が帰ってくるのですよ。日本だったら遅いでしょう。その亭主が貝を採りに行ったり、海岸に連れて行ったりね、結構子供の面倒を見るのです。

武田（芳） まだ明るいし。

武田（力） 水辺で、水溜りで小さな魚を追ったとか、魚を釣ったとか、いわゆる会社の終わった後ですね、夏は暑いですから……。

武田（芳） やっぱり屋内です。

川畑 日中は外では……。

秋元（元） そこが決定的に違いますね。お父さんがものすごく子供と遊ぶ時間があつた。

武田（芳） ありますね。

秋元（元） そのところがね。

武田（力） もう決定的に違う。

学校は8時から午後の2時か、3時ぐらいまで……。

秋元（元） そうですね。でも結局いま日本は来年から週休二日制になりますけれども、もうその時点で日本人学校も全部木曜日、金曜日と週休二日制で、お父さんの休みは子供も全部休み、学校もお休みと、ずうっと五日制です。そこがまたお母さんの不安の種にもなっていたわけ。日本は六日やっているのに、大丈夫かどうかというのがね。

武田（芳） でも同じカリキュラムでやってね。

秋元（元） 同じカリキュラムでやっていて、別に何ら損傷はなく、先取りしていましたよね、みんなね。

川畑 優秀だったじゃない。

秋元（元） そうですね。

武田（芳） 学校のことで、前後してしまいますけれども、ちょっと調べましたら、65年に大学院生の方に1年間だけ来ていただいているのです。でもちょっとあまりパツとしないということで、1966年から明星学園と会社が提携させていただいて、それで2年間のローテーションで、最初、ずうっと二人だった。

武田（力） そうでしたね。

秋元（元） それと幼稚園の先生。

武田（芳） そう。幼稚園の先生が1人、幼稚園は69年から来ていただいている。前之園先生、お子様が幼稚園のほうにいて……。

秋元（元） そうだったのですか。

武田（芳） そのあと、2年間は高島さんという方です。そのあとはちょっと誰だったか、女の人がいたのですが、名前を忘れてしまった。何しろ2年間ずつ交代で来ていただいていたのです。でも、私が帰るまでに6代の校長格の先生が、小堀さんまで。76年に私は日本に帰ってきましたから12年間はいたのです。

学校はこのコンパウンドの中に……。

武田（芳） 中にあった。

秋元（元） そうです。また、日本人学校と同じ造りで、アラビア人の学校と、二つ小学校がありました。

武田（芳） ね。

お昼ご飯などは、お子さんとしては家へ帰って……。

秋元（元） 家へ帰る。そうです。

お弁当を持っていくとかではなくて、家でお昼はみんなお父さんと……。

秋元（元） みんなお父さんと一緒。

朝食べて、学校、勤めに行って、お昼時に戻って来て、夜もみんなで遊ぶということですね。

学校のステータスは？ 文部省の認可と、向こうでの生活の両方の意味です。文部省のほうは、そこで6年間やれば、小学校卒業。

秋元（元） ええ。卒業。

サウジ政府やクウェート政府などの側では何かあったのですか？

秋元（元） どうなのでしょうね。とにかく、一企業のために文部省が、いわゆる日本人学校というのを作ることができない、ということで、それで結局明星大学とアラビア石油のどなたかがお知りあいということで契約した、ということで、毎年毎年……。

いわゆる文部省がやっている日本人学校とは違うのですね？

秋元（元） 違う違う。全然ステータスは違いますね。また私が行ったときも、小学校というふうにはっきり決まっているのでありながら、明星大学と契約しているので、小学校の免許も持っていない方が先生として来ていたりして、小学校教育はこれでいいのかとか、お母さん方がすごく心配だった。

武田（芳） 大学の先生……。

秋元（元） 大学の先生が小学校の先生をやっているのか、みたいな、そのような不満というのがすごくあったみたいです。

カリキュラムは？

秋元（元） まったく同じように……。

向こうの政府から指導はなかった？

秋元（元） なかった。何もなく……。

そうですか。

秋元（元） 全部日本のカリキュラムで……。

歴史を教えろとか、アラビア語を入れろとか、そのようなことはなかったのですか？

秋元（元） ないですね。

武田（力） うちのほうは英語は早くからあった。

秋元（元） 英語が入っていたことです。

武田（芳） そうね。

秋元（元） 4年生ぐらいからでした。

1年に入って6年までいられた方も、お子さんの中におられたのですか？

秋元（元）、川畑 うちもそうなのです。

武田（芳） うちの子は卒業しました。

それで日本に帰ってきて日本の学校に入って、普通の中学に？

武田(力) 寮に入るのです。私の場合は、会社から桜美林という学園の、中学校に入れてもらって、寮に入れています。

武田(芳) 一年半ぐらい、ちょっと親と離れて、ちょっとまだ仕事があった。

武田(力) ある人はロンドンの立教に……。

秋元(元) そう、立教に。

武田(力) 立教関係がロンドンにある。

武田(芳) ちょうどオープンになった。

秋元(元) うちの子もそうです。寮の、それで茨城に行ったのですけれども、茗溪学園というのが、やはり寮を持っている。中学生の場合はそうでしたね。だいたい寮に入れて、親と離れて……。

武田(芳) そうね。

秋元(元) 夏休みにアラビアに帰ってくるという……。

川畑 卒業したら寮のある日本の中学校、高校。

武田(芳) 帰ってから通える距離で考えるでしょう。で、やっぱりうちは町田の桜美林学園にしたのです。

日本だったら、小さい時から受験とかで大変な方もいると思いますけれども、そのような勉強を向こうでやっている方というのはおられたのですか？

秋元(元) 全然それは。だからそのへんが……。私も(教員を)やっています、やはり少人数ですから、少人数のすごくいいプラス面、ものすごくちゃんと個人に応じてしっかり教えられるというプラスの面と、それから先ほど武田(力)さんがおっしゃっていたのですが、人数が少ないがゆえに子供たちも逃げ場がない、そこの中でうまくいかなくなると、どうにも逃げ場がないような窮屈さというのが、やはり子供の学級の中でもあって、そのような大変さは確かにあるのです。それで、みんな勉強に関しては、お父さんお母さんも非常に關心を持っておられました。

1クラスは何人ぐらい？

秋元（元） その年によって違うのですけれども、6年生1人で5年生が5人とか、人数が低学年ほど割合に多いのです。

武田（力） 複式でしょ。

秋元（元） 複式で……。

クウェートの日本人小学校というのは、もう後半にはありませんでしたでしょう。

秋元（元） ええ、もうずうっと前からありました。

武田（芳） あったんです。それこそ外務省。

秋元（元） でもクウェートの日本人学校に通えるかということ、毎日通学というのはちょっと無理でした。

そこの交流はなかったですか？

秋元（元） 一度ぐらいはやった。運動会と一緒に招待しあってやりましたね。

川畑 後半ね。

秋元（元） 後半ね。

武田（芳） 中学まであったんでしょう。クウェートのほうは、小中と。

秋元（元） そうです。

多い時は2,000とか、3,000人ぐらいクウェートにいたんじゃないですか。

秋元（元） そうですね。

川畑 そんなにいるわけですか？

建設の人達がいっぱいいますから。

秋元（元） 日本人学校はわりと大きかったですよ。

武田（力） そんなにいた。

秋元（元） うん。学校は全体が百何十人ぐらいでしょう。

武石さんが行ったのはいつ頃。

武石 私は80年代から、83年から……。

もう少なくなってきました。

秋元（元） いや、いちばん多い時ですよ。

そうですね。

80年の後半になって少なくなって来るでしょう。

秋元（元） まだ。

武石 同じですよ。

秋元（元） そうですよ。武石さんとは4年一緒だったね。

秋元（一） そうだね。

武石 やはり子供たちは子供のころを過ごしたという感じをものすごく覚えていて……。

秋元（元） 覚えていますよね。その時にはあまり感じなかったのですが、日本に帰ってきて、やっぱり子供たちが置かれている状況というのにいろいろなところで触れると、やっぱりあの時の子供時代は、あそこですごさせたとというのは、子供たちにとって幸せだったな、というのをものすごく思います。子供らしいという部分を全部体験できて、それからお父さんとのつながりとか、それが一番大事な時期に……。日本だとお父さんがいちばん仕事に忙しくて、家に帰ってこない。

川畑 親父の仕事の様子分かる子供たち。

秋元（元） そうですね。

川畑 夜中に電話があって飛び起きたりするのを全部知っているでしょう。

秋元（一） 学校のほうでも、お父さんが、どのようなところで何しているのだろう、というのをできるだけ見せましょうというので、バスに乗せて……。

秋元（元） 見学。

秋元（一） 見学して回ってきた。

川畑 発電所にも来ましたよ。

秋元（元） ええ。

川畑 あれを全部説明してね。

最初にいたころの子供たちというのはみんなもう働いている年代ですね。

秋元（元） そうです。30代ですよ。

武田（芳） もう 39 とかね。（一同笑い）すごい。雅典君とか、一緒のクラスでみんな 38、39 ですよ。

武田（力） なるね。

武田（芳） 佐藤雅典君、佐藤一郎さんの息子さん。

秋元（元） 知らない。

アラビア関連で仕事している人はいますか？

秋元（元） アラビア関連で仕事をしている人はあまり聞かないです。

秋元（一） 聞かないな。

国際的に活躍しているような人がいるんでしょうか？

武田（芳） それこそ、一郎さんのいまの、長銀でね。

武田（力） つぶれた。いま外資系だ。でも、結構優秀な人がいましたね。

秋元（元） そうですね。

武田（力） 東大の法学科を現役で入学するのもいたし、カフジのほうでも……。

カフジで 6 年過ごして帰って……。

武田（力） 6 年にはならない。

武田（芳） 謙太郎？

武田（力） うん。

武田（芳） 健太郎は前之園先生の 1 年生でもう帰ってきたのです。3 歳から行って幼稚園、1 年生で帰ってきた。

武田（力） アラビアで働いているのはあまり聞かないね。

秋元（元） そうですよ。

武田（力） アラビア石油は子弟を採らないでしょう。

武田（芳） 子弟を採らないということになっているの？

武田（力） 昔からそうなの。社内結婚の場合片方が会社を辞めるのが慣例となっていた。

武田（芳） だって会社内結婚は……。

熱海さんというのは違うの。

武田（芳） ああ、熱海さん。

秋元（元） 熱海さん。

2代ですね。

武田（芳） そうね。息子さんね。

秋元（元） 勤めていらっしゃるの？あつ、そうだ。

武田（力） 熱海さん。

秋元（一） お父さんが。

武田（力） あれは辞めてから……。

武田（芳） お父さんは、私たちがいる頃ね。

秋元（元） あ、そうですか。

武田（力） 辞めてからだから。

カフジというのは、あそこは夏は相当暑くなるのでしょうか？

武田（力） 42～43度になります。

川畑 いや、もっとよ。僕は45度近いのを体験した。

武田（力） 地表に近いときはそうなるかもしれない。

川畑 冬が3度ぐらいかな。

氷が張るわけではない。

川畑 氷はクウェートでは張ったけれども、私の辺は、北側でイラン、テヘランの雪の山から吹いてくる風が冷たくて、冬の仕事場というのは、海岸は寒くて大変ですよ。

武田（力） ですから冬は寒いというけれども、アフガニスタンほど寒くはない。

皆さんのお家はコンクリートでできているようでしたが。

武田（力） みんなセメント・ブロックです。

秋元（元） 石造り。ブロックを積んでいる。

武田（芳） ほんとにプリミティブな建て方よね。ただ載せているという

……。

秋元（一） だから冬はヒーターです。

武田（芳） そう。ヒーターを使っていました。

武田（芳） でも不思議ですよ、人間の順応性というか、私たちは夏に平気で昼間でもゴルフをやっていたじゃない。

武田（力） うん。

武田（芳） 汗拭き拭き……。

川畑 夏場の昼間はもうできないから、朝早くと夕方、会社が終わってから……。

武田（力） そうすると、現地の家族なども、暑いと、海岸も熱くて素足で歩けないから日中は海に入りませんけれども、夕方になると、お母さんたちは黒いベールを被ったまま子供と一緒に……。

秋元（元） そのまま海へ入るのです。

川畑 お風呂に入っているようなものだ。

秋元（元） そう。

秋元（一） 暑いといっても、私は夏はだいたい向こうにいましたが、休暇は春秋の季節のいいときに日本に帰ってきた。夏に日本に帰ってくると、湿度が、これがたまらなかつたですね。

武田（芳） かえって苦しいですね。

カフジは湿度があまりないのですか？

秋元（一） 夏の終わりの夕方になるとかなり湿度が高かった。

川畑 8月頃、季節の変わり目ね。もう雨が降るように水滴が落ちるくらいに湿度が高くなる。

武田（力） ただ昼間などは割合に暑いけれども過ごしやすかった。

そうですね。ジェッダとか、アブダビとかのよう感じではないのですか？

秋元（元） じゃないです。アブダビの人の話を聞くと、ああいうふうではないです。

秋元（一） もっと過ごしやすい。

川畑 湿気が少ないから過ごしやすい。

冬は雨が降る？

川畑 降ります。冬がそうね。降りだすのが12月過ぎくらいかな。12月初めごろに降った覚えがあるけれども、だいたい1月、2月くらいですか。降って、それで3月頃ばあっと草が芽を吹く。花がばあっと咲くわけです。

砂漠にアヤメが咲くという……。

武田（芳） きれいです。

秋元(一) そうすると砂漠を散歩するのがまた楽しい。そうするとベドウィンが黒いテントを張って羊に草を食わす。

アヤメみたいな花が、リヤドにもありますけど。

武田(芳) いい香ですね、結構。短いのですけどね。

秋元(元) そうそう。

秋元(一) 4月になると雨もやんで、降らなくなって、一切草なども枯れてしまう。

花もね。

皆さん、季節によっては、ハイキングとかピクニックに行かれていたのですか？

川畑 ハイキングは、もうドライブで、どうこうすることはない。走るぐらいです。

武田(力) ゴルフ場のそばの花のところに、よく子供を連れて行った。

秋元(一) そうですね、武田さんはジープもっていらしたから……。

武田(芳) ジープを持っていたから子供たちが乗りたがるわけ。それで、まず最初に奥さんたちを休みの日に車に乗せて送ってゴルフ場に落としてね、そのあと子守りをしていた。(一同笑い)みんな乗りたがるんだもの。

川畑 ゴルフ場の花を全部採って、押し花にして取ってあるね。

武田(芳) 今でも？

秋元(元) そうですか。

そういえば、お正月などは、皆さん、どういう生活されていたのでしょうか？

秋元(元) お正月は基本的にはないのだけれども、先ほどの話、やはり日本人でお正月というところで、ファミリーは全部いまの独身寮の人たちを、毎日ね、呼んだ。

武田(芳) そうそう。結構、そうですね。

秋元(元) 大晦日の日とか、お正月とか、ずうっとそのへんね。

武田(芳) クリスマスから。

秋元(元) ずっとつながって、必死に何かいろいろ作りましたね。

川畑 正月休みがないからね。

会社のほうは？

秋元（元） 会社は休みです。

秋元（一） 1日ぐらい休みだった。

武田（力） 一日と天皇誕生日だけが……。

秋元（元） 日本の休日として休みで、あとはアラビアのほうのラマダン明けの休みとか、イードの休みと、なんかそのようなものは休みになりましたね。

ラマダン中とかはやはりいろいろ食事とか、遠慮されていたのですか？

秋元（元） 仕事であるんでしょう、やっぱり職場で。ラマダン中はお茶も飲まないとか。

秋元（一） そうそう。

武田（芳） お茶とかはね。

シフトが変わったりするのですか？

武田（力） シフトは、アラビア人は午前中で終わる。

秋元（元） 終わっちゃうね。

川畑 終わるのは、われわれラマダン中は2時で終わった。7時から2時まで仕事。

早く終われば、始りが早くなる？

川畑 いやいや、7時だったな。2時で終わる。だから2時まで、おなかが空くんだ。

秋元（一） 異教徒がタバコを吸ったりお茶飲んだりするにはやっぱり大変だろう、というので、飲む時は家に帰って、アラビア人の目の届かないところでやってください、ということでした。だからわれわれも、喉が乾くと車に乗ってうちへ帰ったりしていましたね。

川畑 やっぱり注意しましたよね。

秋元（一） タバコも……。

武田（力） つば飲み込んじゃだめなもの。

川畑 つばまでは人もわからないんだけど。（笑）

武田(力) サウジアラビアあたりは、異教徒にもそういうのを強制するのですね。ところが、ほかの東南アジアあたりは、そういうのを強制しないですね。

武田(芳) 同じイスラムでもね。

秋元(一) やっぱりあれでしょう、メッカがあるということでしょうね。

武田(力) 宗派も違う。

アラビア石油ではイスラム教徒の日本人の方がいらっしゃいますけれども、向こうへ行ってから改宗された方というのはいますか。カフジに行つて……。

川畑 いや、聞いたことないな。

それは最初から？

武田(力) 私がマレーシアにいたころ、一人モスレムに変わった人がいました。

川畑 あ、そう。

武田(力) あれは宗教局に届けて、名前をもらうのですよ。ウサマ・ビン……。 (一同笑い)

武田(芳) ラビィン。

武田(力) ラビィンの息子のウサマというと、日本人がもし回教名をもらうと、私は武田でしょう。武田・ビン・アブドラです。だからアブドラの息子。それは宗教局が証明書を出すのです。ちゃんとした証明を出して、それがないと回教徒の女性との結婚ができない。

あとアラビア石油の基地の場合、海上にも施設が確かあったと思いますが、あそこは人が住んでいるわけですか？

武田(力) はい。ギャザリング施設には、人員がだいたい常時4、5名……。

川畑 オペレーション担当者がね。

たとえば陸上に住んでいて、何日間か海上施設に行つて、泊まり込みで仕事をやって、また戻ってくるみたいな生活ですか。それともそこにずっと住みっぱなし？

武田(力) 住みっぱなしのうち、たとえば1週間交代で住み放しの人は4、5人いまして、日帰りの人もいるのです。日中は仕事で結構20、30人が出ていますから、だから12、13名は通い、あと4、5名は当直。

ヘリコプターはそんな前からありましたか？

武田(力) いや、なかった。

川畑 なかった。

秋元(元) ベトナム戦争のあと。

武田(芳) 船で。

船で大変ですね、時間が掛かりますね。

川畑 われわれなどはよく施設課で行った。船ですから荒れると気持ち悪くなって、向こうのギャザリングに着いてから仕事にならない。ゆっくり休んで、酔いが覚めるのを待つ。気持ち悪くて……。

気分が落ち着くまで2時間ぐらい掛かるのですね。

川畑 ええ、1時間半か、酷い時は2時間弱だね。

そこでの生活というのはどのような感じなのでしょうか。

秋元(一) まあ、船の上の生活とっていただければよろしいのではないのでしょうかね。

川畑 だけれども向こうに着いてしまえば揺れないし、あとはオペレーションでいろいろ圧力計を見たり、温度計を見たり、音を聞いたり、という仕事でしょう。あとメーターを見て巡ったり、という仕事だから、ちゃんと仕事の内容は決まっているし……。

泊まっている方は、食事は自分で作って……。

川畑 それは食堂がある。コックさんがいるの。

日本人の？

川畑 いや、日本人じゃない。ただオペレーションはほとんど現地人だから……。

秋元(一) ヘリコプターが入ったのは1980年代の真中ぐらいで、それからいままで、先ほどの話で、2時間弱かけてギャザリング・ステーションまで行っても、海が荒れているときなどは、2メーター、3メーターと動いてい

るところから飛び移るわけです。危ないわけです。タイミングを図ってね、乗るわけです。

川畑 だからロープに捕まってね。それでふわっと飛び乗ったり、飛び降りたりしないといけない。

秋元(一) だからその意味からいっても、ヘリコプターは、時間にしてたった20分です。ずいぶん便利になりました。

川畑 20分でそのギャザリングという集中操業室までは行けるのだけでも、あと井戸とか、フロー・ステーションがまた別にたくさんあるわけでしょう。そこにはヘリコプターは行かないから、船で行かなきゃならない。慣れていても、先ほど言ったように、間違っただけで挟まれたり、怪我したりしたヤツがいるからね。

油田とか海底油田というのはよく分からないのですが、下を掘って行って、何かそのようなところをメンテナンスする必要があるのですか？

武田(力) ありますよ。機械が壊れたり、腐ったり、取り替えなければならぬという作業があります。

海底の油田でも……。

武田(力) はい。長くなると、具合が悪くなったり、穴が開いたりする。それをまた入れ替える。そのような仕事は常にあります。そういう作業は、ほとんど外国のコントラクターを使って、日本人はスーパーバイザーの部署にいます。

なるほど。あとは、原油の積出港というのは、日本のタンカーなどが来て、この辺りから積み出していくのですか。

秋元(一) シー・バースでしょ。

川畑 これが港で、物を運んだり、運び出したりするところです。たとえばこんなジャケットなんかいろいろあるでしょう。そのようなものをこの陸上で組み立てて、ここからバージに乗って、ここを出す。原油の積出港というのは、これは別にね、海の中にこういうふうにあるのです。タンカーがこうで、そしてこのようにパイプ・ラインがあって、ここはバルブが……。こうつないで、タンカーに乗せる。このパイプ・ラインは、いわゆるオイル・タンク。これ、ここにポンプがありますね。何台もありますよ、陸上に。タンカー

が着いたよ、パイプとつないだよ、と連絡し合いながら、このポンプを回すわけです。このバルブを開けてね。するとダアッと海底パイプ・ラインで、ローディング・ドックに送油される。

積み込みには、どれぐらいの時間が掛かるのですか？

川畑 まあ、どれだけ掛かるだろう。

たとえば10万トンぐらいのタンカーが来ると……。

川畑 そうだね。ちょっとその時間まで計っていないけれども、24時間ぐらいは掛かるなあ。

船員の人たちが陸上に上がって泊まったりはしないのですか？

川畑 船員はしないです。会ったことがない。

秋元（一） でもタンカーが来たときに、陸上から船に乗って、アラビア石油のスタッフはローディング・ドックというのですが、そこへ上がってバルブを開けたりします。陸上からももちろん遠隔操作もできるのですが、一応つないであるところが外れてしまって、油がこぼれるということもあり得ますので。

川畑 確認でね。点検を常時しなければいけない。

船員が、水を積んだり食糧を積んだりして陸に上がってきたり、買い物したりしないのですか？

秋元（一） それはやっていなかったですね。

川畑 それはしないですね。やはり入国許可を得たりなどいろいろしなければいけないから、だからローディング、 SHIPPING関係の専門の部署があるんです。船のそのローディングに、だから何十万バレル出したか、出荷したかというのは、記録から操作から、全部 SHIPPING・デパートメントという部署があって、その連中が専任です。担当しています。

それは1航海で、きっとみんな積んでいるのでしょうかね、

川畑 うん？

補給船なんか、片道3週間ぐらい掛かるのでしょうかね。

川畑 日本から？

ええ、日本から。1ヵ月半分ぐらいの必要物資は、みんな持っているのですかね。途中泊まらないでしょう。

武石 それは全部、全然中東に寄らない。
ジェット機みたいなもんですよ。
このタンカーに乗って、アラビア石油の方が日本に帰ってくるという
ことは……。

川畑 それはいまないですね。

武石 片道だけだけど、乗った人は聞いたことがありますよ。

武田（力） いる。我々がいるころ、早稲田の学生が貨物船で来た。

武田（芳） 学生さんたちが来ました。

それはどのような経緯で？

武田（力） 何か中東に興味があったのでしょうか。若いから……。

上陸されなかったのですか。

武田（力） いや、上陸しましたよ。上陸してどこかを回ってきた。片道
だけでした。片道は飛行機で帰ったと思うのですけど。

それはカフジに上陸されたのですか？

武田（力） そうです。

私たちが行ったときはビザが厳しくて、普通では出していただけな
かったのですが、その当時は比較的簡単に出了のでしょうか。

武田（力） 何かやはり特殊なルートがあったのでしょうか。私も詳しく知
りません。

富塚さんではないの？ 勉強か何かで、タンカーで行かれたのは。

川畑 私がマスカットへ行ったとき、昭和海運かな、大使館で働いていた
コックさんがいて、そこから昭和海運の船に乗りたいと言って、マスカットの
港から乗って帰ったことがあって、その時に、港の中まで送りに行って船の中
を見せてもらった。ちゃんと宿泊できる設備はあるのですね。

それはタンカー？

川畑 コンテナ船。

コンテナ船。ホテルみたいな。昔は結構そのような貨物船を使っ
ていた、という話を聞いた。

いろいろ話を聞いていると、やはりカフジの町がここまで成長した
のはアラビア石油があったから、ということをよくおっしゃるのですが、皆さ

ん、やはり市街に買い物に行かれたりということがかなりあったのでしょうか。つまり市街との交流ですね、そのような関係は頻繁なのでしょうか？

武田(力) ううん。ほとんどなかった。

秋元(元) 日本人はないですね。ファミリー・クォーターとか、そこに働いている人では、サウジ人がたくさんいたわけですから、あのような人たちがみんなあちらに行ったのでしょうかね。

武田(芳) そうでしょうね。

秋元(元) 洋服屋さんから家具屋さんから。

秋元(一) 家族持ちの人と単身で行っている人とは、またかなり違う。単身で行っている人は、かなり、やはり……。

武田(芳) ぶらっと？

秋元(一) ええ。

秋元(元) 遊びに行く？

秋元(一) 遊びに行ったり、買い物に行ったり。

武田(芳) そうね。金(きん)屋さんもあったし絨毯屋さんもあったし、案外そうかも知れない。

武田(力) たまには外で、インド人が作るインド料理を食べてみたりとか、というふうなことで……。

武田(芳) そういえばね。シシカバブなどもおいしいとか。

秋元(元) ああ、そうですね。

武田(芳) 食べたことはありません、気持ち悪いから……。でもおいしいそうだなと思った。

湾岸戦争のときに私はテレビを見ていましたら、下に草が生えているのを見て感動したのですが、それは、ひょっとするとここはやはり遊牧ができる地域ではないのかな、と思ったからです。やはり遊牧民などが頻繁に往来しておりましたでしょうか。

秋元(元) していましたね。

武田(力) 結構羊を連れて、ブラブラと羊をつれて放牧している人がいましたよ。季節によって移動します。黒いテントを張って……。

川畑 最近の遊牧民は、昔はラクダにテントなどを積んで歩いたのでしょ
うけれども、最近は……。

秋元（一） トラックに載せてずうっと走ってくるんだよね。

武田（芳） 飲み物だって、カナダ・ドライなどをいっぱい買い込んだり
して、あまり不自由でなかったのではないかしら。

ほかの、たとえばイランなどの話を読みますと、有力部族が石油
会社に分け前をよこせという要求を突きつけた、ということがあったらしいの
ですが、サウジの場合はかなり強力な王権がありましたから、ないとは思うの
ですけれども、何かそのようなことはありましたか？

川畑 聞いたことがない。

武田（力） ないな。

川畑 ないですね。ちゃんとそういうような組織は、サウジアラビアはし
っかりしているからな……。

秋元（一） と思いますね。

モスクというのは、ファミリー・コンパウンドの中にあっただのでし
ょうか？

秋元（元） ありましたね。外にも。

武田（力） ありあり。

秋元（元） 映画館の側に大きいのがありました。ファミリー・コンパウ
ンドの中にも1戸ありましたね。

川畑 コンパウンドは、ずうっともっと広いんです。

コンパウンドというのは何軒ぐらい家があるのですか？

秋元（元） 百何十軒ありましたよね、日本人だけではないですから。そ
れから町にはいっぱいあります。大きいのがありまして、できましたよね。

たとえばコンパウンドの中に欧米系とか、サウジ人とか。

秋元（元） 欧米の人もいたし、サウジ人もいたし、パレスチナ人、エジ
プト人、いろいろな人がいました。

交流というのは？ サウジの方とのお付き合いとかは、生活のレベ
ルでいかがでしたでしょうか？

武田(芳) わりと他人の生活の中に入り込んでくるでしょう。ちょっとこうね。アメリカ人のような気持でつき合うと、こちらの都合が悪くても、ハローとかと、さっさとドアを開けて入ってくるし……。何か、わりと中に人が踏み込むというのは感じたのですけれども……。

武田(力) 隣近所というよりも、職場の関連で呼んだり呼ばれたりというところがあったような気がします。

日本人の方、奥様方はアラビア語を勉強した、というのがあまり聞かれませんが。

武田(芳) アラビア語はちょっと……。

秋元(元) 英語はやっている人はかなりいましたね。

武田(芳) そうね。

すると向こうの人とコミュニケーションを取るとすると英語で…

…。

秋元(元) 英語です。そうですね。

川畑 僕はコントラクターの家だったけれども、カフジの外の、だから市街地の家に2、3人呼ばれたことがあるのです。呼ばれたのだけれども、例のこうやって座って、お茶をご馳走になって、あと何かちょっと物が出てきたかな、台所で料理、だけれども絶対に奥さんは出てこないんだね。あと子供が運んでくる。奥さんは黒いベールをかぶってやっている。絶対に出てこない。

武田(芳) そうでしょうね。私も女性だけで何かパーティーに呼ばれた。打楽器をたたいて、ベリーダンスをやるの。女の人たちがスカーフをさらっと腰に巻いてね。女だけ。

川畑 女性ならいいんだね。

武田(芳) ベリー・ダンスに招待されていったことがある。

コンパウンド、アラビア石油の社員の方は外人だから、全員がコンパウンドですか？ それとも町に住んでいる人もいるわけですか？

川畑 いなかったですね。だけれどもコンパウンドはちゃんとしたブロックで造った家だからね、エアコンもヒーターもある。従業員はそっちに入りたくなるのではないかしら。

ほとんど中に住めるくらい、でもない訳でしょ？ 約2,000人近くいるので。

秋元（元） ここへ入れる人のグレードがあるんじゃないですか。

武田（力） ローカルの方は外に住んでいるのでしょうか。

武田（芳） 一応グレードがあったのです。社宅に入れる、ね。

秋元（元） 入れる条件……。

川畑 グレードがいくつ以上とか。

武田（芳） だってAタイプ、Bだのという決めていたじゃない。

川畑 それはあるよね。

武田（力） 1,800人もいれば、外に住まなければ住めない。

秋元（元） そうですよ。

秋元（一） そうですね。

それで外に住んでいる人はいろいろな国籍の人が入っているわけですね。たとえば日本人もクウェート人も、何となく分けているのですか。

武田（力） さあ、そのへんはどうやったんだろう。

お隣が歯医者とかとおっしゃっていた。

武田（力） 私のところは隣がエジプト人だ。歯医者さん。

武田（芳） ラシッドさん。こっちが、2軒隣がパレスティン人でした。すぐ隣が歯医者さん。エジプト人でした。

皆さん、住んでいる方は自動車を持って……。

秋元（元） そうです。

川畑 自動車がないと生活ができない。

近いから自動車が要らないのかと思った。

秋元（一） そうやって書くと狭く見えますが、実際にファミリー・クォーターから南岸の操業地域に行くのに、そうですね。

武田（芳） 歩いたら大変です。

秋元（一） 歩いたら大変ですね。車で行っても20分とか掛かる。

秋元（元） 距離的にはある。

何キロという……。

秋元（一） そうです。

ここに住んでいた日本人の方というのは全員アラビア石油の社員の方ですか。

秋元（一） ですね。

秋元（元） 社員でない人もいるでしょう。契約……。

秋元（一） その意味では、たとえば英語の先生とか、それから学校の先生とか看護婦さんとか、そのような人たちは一応社員ではなかった。

でも一応ファミリーみたいな……。

川畑 位置。

秋元（一） そうですね。

皆さん、映画などを見に行かれるということがありましたか？

武田（芳） 行きました。

川畑 行きましたね、日本映画はね……。

川畑 寅さんなんかやっていましたね。

武田（力） そうです。

川畑 結局それも CATV の施設が完成したら、あとは結局つぶしてしまった。シャハラザードという名前の、なかなか立派な映画館。

武田（芳） そうでしたね。

街の中での映画館ではなくて、会社の……。

武石 町は禁止ですよ。映画は……。

武田（芳） 学芸会というの？ あれをその映画館の舞台でやったよ。

秋元（元） そこでやっていたのですか？

武田（芳） だってそんな所しか場所がないでしょう。

秋元（元） そうですね。

武田（芳） 学校の校舎の中でやるよりも、あそこを使って白雪姫など…

…。

クウェートに映画館はありましたか、それとも禁止？

秋元（元） 映画館はありました。クウェートは行きましたよ。

ここはサウジ並みなんだ、その意味では……。

武田（力） クウェートの席は男の席と女の席と……。

秋元（元） そう分かれている。ファミリーの席と……。

武田（力） ファミリーと……。

秋元（元） そうですよ。レストランもみんなファミリー席とあと男女別とね。

サウジではまだ女性が自動車を運転できませんけれども、武田さんが行かれた当時からはやはりそうですか？

武田（芳） サウジはね。クウェートはよかった。

ここの中立地帯はどうなのでしょう。

秋元（元） ダメだ。

武田（力） 昔はクウェートの免許でよかった。我々も全部クウェートの免許でした。今はちょっと違う。

だけれども女性は……。

秋元（元） 女性はダメです。

武田（力） 女性でもクウェートの免許を持っていればよかった。

秋元（元） やってもよかったのですか？

武田（力） 昔はね。持っていれば……。

武田（芳） 私は運転していたよ、だから。クウェートは、アバヤーを被っていないくて、結構ヨーロッパの人がいたから、女の人も……。

秋元（元） 運転していましたね。

武田（芳） 颯爽として……。アバヤーとかを被ったことがある？

秋元（元） ないです。

武田（芳） ないでしょう、我々の時はね。でもダンマンだと長いのを…

…。

秋元（元） 被っていましたね。

武田（芳） 買い物に行って被るだけでも、被らないと……。

川畑 そうでしょう。

どちらかという、クウェートの警察とか司法の管轄下にあったような雰囲気ですか、カフジの町は……。

武田（力） 行政は、私はサウジだと思います。

秋元（元） 行政はサウジ……。

宗教警察もあまりうろうろしていないのでしょうか？

武田(力) 半々の権益の時が前はありましたからね。サウジの免許がクウェートの免許証のどちらかということ。私の車のプレートはクウェートだったのです。どっちでもよかったのです。

奥さんが運転された、違法ではやっていたわけではないのでしょうか。

武田(力) そう、それだったら違法かもしれないね。

武田(芳) そうね、もしかしたら、捕まらなかった。ファミリー・クォーターの中でね。

川畑 チェック・ポイントがあるのだから、サウジ側ですよ。

武田(力) 行政はサウジです。だから刑務所の管轄も、あれはサウジがやっていたんでしょう。刑務所があったでしょう？

川畑 あった、あった。

武田(力) 会社が刑務所をつくって、会社の人間が入っていた。(一同笑い)

武田(芳) 交通事故を起こした人とか。

武田(力) いろいろな犯罪を犯すと……。

川畑 そうそう。よく刑務所にお願いに行ったよな。(一同笑い)

武田(芳) ほんとうね。

武田(力) 昔は刑務所もクウェートにあったのですよ。正力さんが入ったのはクウェート。夜中にオカマを掘られそうになったとか。

川畑 行ったんだ。電気屋さんだったよな。

武田(力) そうそう。

欧米の方もおられたということですが、いろいろな宗教の方が集まっているわけですね。日常的な宗教活動というのは、何か制約のようなものがあったのでしょうか。

武田(力) サウジでは、日本人はほとんど無宗教みたいなもので、別に日本人の宗教活動はなかったですね。お釈迦様が亡くなった2月15日に甘酒を飲むというのは、日本でもやってないですよ。

武田(芳) ないって、そんなこと。

武田(力) 土地の人は1日5回、礼拝していました。ラマダンもやりま
すし、かなり宗教的な生活をしていました。

川畑 異教徒は特に活動していないな。

武田(芳) そうね、宗教活動というのは……。

川畑 クウェートに教会はあったわね。僕はクウェートの教会には行ってない。クリスチャンでも礼拝その他はやらなかったですよ。

武田(力) カフジには教会がないでしょう。

川畑 カフジにはないな。クウェートまで行きゃあ……。

秋元(一) 何か日本の旗日に日の丸を掲げるとか、そういうことは……。

武田(力) 昔はやっていたのですよ。たとえばいまの天皇が皇太子の頃に来たときとか、そのような時はやっていたけれども、その後禁止されたのです。ここはサウジの領土であって、日本じゃないんだと。だからやめさせられた。それが60年時代だ。

今おっしゃった「昔」というのはいつ頃の話ですか？

武田(力) 60年代ですね。60年代の初めの頃です。1960年代は船も日本の旗を立てていましたし、皇太子が来るというと、海の上に作業槽のうえに日本の旗を上げました。60年後半だったかな？

川畑 そうだったな。

武田(力) あの頃は問題がなかったですね。あそこは領土が違いますから、そういうのが60年代の後半には禁止されました。

分割協定ができたのはいつですか。もっとあとですね。

74年？

武田(力) 分割は70年代、74年だな。

その前からサウジ色が厳しくなっていったのですか？

武田(力) そういう文句を言うてくるのはサウジで、クウェートは權益があるけれども、ほとんど入ってこない。行政はもともとサウジが……。ゲートを出たところに軍隊がいまして、朝夕国旗を揚げたり下げたりしていました。

それはサウジの国旗ですか？

武田(力) そうです。

あと、現地の方と、何かもしトラブルとかがあれば、その内容を教えていただいて、それをどのように解決にもっていったかということをお聞き

したいのですが。たとえば、日常生活、あるいは職場での仕事で、ということですが……。

武田(力) 裁判になったのは、私は分からないのですが、日常トラブルはよくある。たとえば止まっている車にぶつけると、ぶつけたほうが本当は悪いでしょう。でも、でもサウジ人は、「おまえが止まっているから、俺はぶつかったんだ」という。私は横からぶつけられまして警察に行ったのです。私は言葉がしゃべられないし、結局明らかに向こうが悪いのだけれども、結果的には、「おまえがそんなところを通るからぶつかるんだ」。(笑)。裁判になったというのは、刑務所に入れられたのが裁判になったのではないのでしょうか。

川畑 あれはどうなったかな。裁判をやったのかな、強制じゃない。

武田(力) たとえば交通事故で人を殺したとか、というのがあったわけでしょう？

どうなったかは？

川畑 ちょっと分からない。

武田(力) 裁判というのはあまり聞かないね。

川畑 うん。

今の交通事故のお話をちょっと、それは示談でやるわけですか？

武田(力) 結局派出所に連れて行かれまして、おまえ、そんなところを通るから、俺がぶつかったんだというので、それが通ってしまった。それで私は10ディナールか、罰金をその場で払わせられて、当たられ損みたい。

川畑 外国で事故を起こすと、その土地の人にはかなわないですね。

武田(力) かなわないでしょう。

川畑 けちつけられて……。

秋元(元) 夏休みなど、いつも45日間という休暇を取るということで、できるだけ取りなさいと会社のほうも言うみたいで、その45日間で日本に帰るとか、旅行に行くとか、家族でするわけですけども、その45日間、家を空けますよね。その間に結構泥棒というのが……。

武田(芳) あった？

秋元(元) ありましたよ。私たちの家も入られました。だけれども先ほどの話、入られると、入られたほうが悪いということで、もう全然それは……。

秋元（一） 最後のほうは窓に全部格子を入れました。嫌ですけども、何か牢屋に入っているようで嫌なんだけれども、そうしないと責任が持てない、と会社のセキュリティーが文書で……。

コンパウンドの中ですから……。

秋元（元） ゲートがあるのですが。

ゲートがあって。

秋元（元） にもかかわらず。

ガードもいるのでしょうか？

秋元（元） いるんです。入り口に。

秋元（一） パトロール・カーもしょっちゅう巡ってくる。にもかかわらず。

にもかかわらず。

川畑 机なども全部カギを掛けて、休暇の時は……。

武田（芳） そういうのをやっていたね。一部屋だけはしっかりガードして。とられたこと無い。

特に問題を処理してもらえるようなセクションというのは、会社のほうにはあったのでしょうか？

川畑 あったんだけどダメだ。

秋元（一） 一応あるのだけれども。安全部、セキュリティー・部門というのがありましたね。

川畑 役に立たないですよ。取られるのが悪いんだからな。

じゃ、交渉するというよりも、問題が起こった時は、ただひたすら耐えていた。（笑い）

秋元（元） 絶対に盗られないようにする。自衛手段しかなくて……。

武田（力） 絶対、自分が悪いと言っちゃいかん。

川畑 持っているのが悪い。（一同笑い）

武田（力） 向こうが悪いといわないとダメなんだ。ああいう環境ですとね、申し訳ないといったほうが悪いわけです。

武田（力） 悪いからそのようなことを言う、ということになっている。

皆さん、現金などはどのようにされていましてか。銀行に預けるとか、自宅のタンス預金とか……。

武田（力） 会社の預金で……。

では会社の金庫に入れておくとか。

武田（力） 会社に貯金通帳みたいなものがありまして、給料は全部そこに入れてしまうのです。そこから出すとか、入れるとか。入れるのはしなかったけれども、常にそこに置いていましたね。またそれを内地に送るのも自由だった。

手許にあまりお金を置かないように……。

川畑 あれはリヤド銀行だけ、カフジの。

武田（力） リヤド銀行。

武田（力） 行くときはトラベラーズ・チェックを作るときだけ。

お金は何を使っていましたか？

秋元（一） サウジ・リアル。

川畑 最初はドルだったですね。64年ごろは……。

武田（芳） ルピー。

川畑 あっ、ルピーか。

武田（芳） クウェートと一緒にのほう。

秋元（一） ディナール。

ルピーからディナールになって、いつからリアルになったのですか？

武田（力） いや、クウェートに行ったら……。

秋元（元） 換えなければいけない。サウジのお金を……。

武田（芳） お金は使わなかったんだ。

武田（力） クウェートはディナール、カフジはディナールが通じない。

ああ、最初から。

武田（力） そうです。クウェートへ行ったら両替しなければならない。

秋元（元） そうですね。

秋元（一） 先ず両替屋さんに行って両替をして、それから買い物をする。

日常的にお金を使うシチュエーションというのはどういうシチュエーションだったわけですか？

川畑 食料品を買ったり……。

武田（芳） スーパー・マーケットで。

秋元（元） 野菜だけだね。

 ストックの食料はあってというか、野菜とか。

武田（芳） そうです。そのようなものをね。

秋元（元） 1週間に1度ぐらい。

 それはどこで買われるのですか？

秋元（元） ガソリン・スタンド。

 その町ですか？

武田（芳） その外に、大きなスーパー・マーケットができて、

 いつ頃？

川畑 コンパウンドのできた……ほぼ60年代。

秋元（元） 私が行ったときはありました。

武田（芳） 67、68年ぐらいにはもうできていた。サファーブというのを知ってる？

秋元（元） そう、知ってる。

武田（芳） イランの人で、結構日本語、上手になってね。

秋元（元） 上手に。

 イラン人？

武田（芳） イランの人ね。「分かった、分かった。いますぐ」とかやっていたでしょう？

 お店の人？

武田（芳） お店の人。

秋元（一） あの方は配達もしてくれていましたよね。

武田（芳） そうそう。「あとで、あとで」とかといって、すぐに持ってきてくれてたね。

 韓国人が豆腐を作ったり、納豆を作ったり、大根を作ったりはしていませんでしたか。

秋元（元） 当時はしていました。

武田（力） 韓国人はいましたよ。

武田（芳） サウジの道路を作ったりしましたよ。私たちが行ったとき...

....

日本人相手に日本人食とか.....。

秋元（元） それはやらないです。

武田（芳） 飲み水をもらいに来たということはしていたみたいです。だけれどもお店はしません。

秋元（元） クウェートのチャイニーズ・レストランというのは、始めから、私たちが行ったときからあったのですけれども、その韓国のレストランというは、いわゆる焼肉系のレストランで、私たちが帰る頃にでき出しました。それでいわゆるキムチをやるので、すごく、とにかく白菜をクウェートで作っていて、そういう白菜の一部が、今度はサウジのほうに来るというのがありました。

それを皆さん方がカフジに買いに行かれた？

秋元（元） そうです。買うという感じで.....。

武田（芳） あのような暑いところで白菜ができる。

秋元（元） ええ。

この中で野菜を作っておられた方は.....。

秋元（元） それはすごかったですよ。

武田（芳） 後半はすごかったですよ。

川畑 ファミリー・コンパウンドの各家の庭が.....。

秋元（元） 庭は全部.....。

川畑 あれは何坪ぐらいあったかな。

（不明） 10坪。

川畑 意外とあるんだよ。

武田（芳） 全部、入れ替えして。

秋元（元） 土を入れ替えて.....。

川畑 あそこは沙漠でしょう。沙漠というのは塩分濃度がすごく高いので、だから畑にならない。何とかこの土を変えよう、できたら羊とかラクダの糞も

混ざったようなそういう肥えたような土があればいいな、というので、会社でそういう部署を作って、緑化も含めて管理をしている部署があって、そこで会社から土をオーダーしてもらって、トラックで何台も持ってきってもらって、希望する家庭の庭にばっと撒いてもらった。あれはチグリス・ユーフラテス川、何か向こうの川の土ではないかと思うのだけども、そのようなところから持ってきて、そして畑をした。うちなどもよく……。

秋元（元） 立派な菜園が、だから大根から、日本の大根、ナス……。

秋元（一） レタス、トマト。

川畑 あの頃からだなあ、やりだしたのは……。

それでヌカ漬けなども……。

秋元（元） そうです。もちろん。

あともう一つ伺いたいのですが、皆さん、転勤とかがあると思うのですが、どれぐらいの頻度で、どれぐらいに期間で入れ替えとかをされていたのでしょうか。向こうに行く方は、どれぐらいの期間住んでいたのかと思って……。

秋元（元） これが問題なのです。（一同笑い）

武田（力） サウジはビザを申請するとき、まずサウジ人でそのような適格者がいないかどうかということ調べて、いなければ日本のほうから来ていいよ、ということだった。だからだんだんと、たとえば私があそこに2年半いて帰りたいとすると、その穴を埋めるのに、どれだけの日本人を赴任させたいとなるでしょう。するとビザの申請をしないといけない。すると、（適格なサウジ人が）仮りにいたら、それを雇わなければいけない。だからそれが嫌なものだから、（日本人社員の滞在が）だんだん長くなる。長い人は20何年もいる。私は現地に16年いましたし、川畑さんも10何年もいたでしょう。

川畑 そう、18年。いや最初はね、リファイナリーの建設で行くと、3年でいいよ、という本社の話だった。そして行ったらさ、試運転が終わって、定期点検のスペックから何から全部作って用意して終わり、と思ったら、今度は施設課に移れ、と。施設課に移って、電気とか造水装置をやり出したら、3年どころじゃない、15年です。（一同笑い）

そのうち、疲れが出て、目がかすんで見えるようになって、それで医者に診てもらったら、日本で検査して治療したほうがいいよ、と言われて、じゃあ帰任してもいいや、という話になって、やっと帰ったのです。それも帰ったのが3年くらいですか。それでまた（現地赴任が）あるでしょう。

武田（カ） われわれは、それを「アラバイゼーション」といった。だからたとえば、機械の経験で大学を出て3年のはいないから日本人を連れて行きたい、というときに、そのような（適格の）者がいっぱいいるわけですよ。それを雇いなさい（と指導されることになる）。すると、川畑さんの交代はサウジ人になる。会社はそれが嫌なものだから、（日本人の現地での勤務が）ずうっと長くなる。

川畑 64年というあの頃は、まだサウジの大学卒業生がいない頃です。だからシニア・スタッフが雇えないわけです。だからアザー・アラブも含めて、サウジ人も、レベルの下のフォアマンとかオペレーターとか、メカニックだよな、彼等に仕事を教えていて、大学卒は、われわれが10何年いたときに、やっとリヤド大学とか卒業した者が応募してきて、面接して筆記試験もやって、それでOKして採った。われわれが試験をやったんだものね。それでやっと入ってアラバイゼーションに移っていったのではないかな。

武田（カ） 順位があってね。

川畑 サーフィー（メンテナンス部のシニアの個人名）とか。

武田（カ） ファースト・プライオリティとかね。

川畑 マルガラーニー（プロジェクト部のシニアの個人名）とか。

武田（カ） サウジはファースト・プライオリティで、セカンドがアザ（other）・アラブでしょう。三番目が日本人だから。

川畑 うん。

アザ・アラブとは何ですか？

武田（カ） いや、そのパレスチナとか。

川畑 サウジ、クウェート以外の……。

武田（カ） サウジとクウェートにいないければ、それを探す。そこには大学出がいっぱいいる訳です。

ちなみに川畑さんの後任はサウジ人ですか。

川畑 後任はだから……、後任というよりも施設関係のシニアになった、サーフィー、あれはプロジェクトか。マルガラーニー。

何人？

川畑 サウジ人。

川畑 僕らとは、もうずうっと年代の差があったけれども、彼らは順調にビュッ、ビュッ、と何しろ偉くなるのが早いので、部長になってやっているでしょう。それを何とかサポートしなきゃいけない。

アラビア石油の場合は、入社後しばらく東京にいてから向こうに赴任されたのですか？ それともいちばん最初から、もうカフジに赴任ということになるのでしょうか？

武田（力） 最初は、一回の申請で通ったんですが、だんだんアラバイゼーションがでてきた。大学を出て何年以上という、ジョブ・ディスクリプションと言いますが、この職種は大学出て5年以上とか6年以上、として、そうしてそれを募集すると、それ以下の人は行けない。

なるほどね。

武田（力） だから最後はだんだん行けなくなった。

最初のうちは大学を卒業して、入社してすぐぐらいに行かれたのですね。

武田（力） カフジには大学出はいなかったからね。

いちばん長い方でどれぐらい、何年ぐらい。

武田（力） 20何年。

川畑 25、26年でしょう。

へたをしたら、入社してすぐ行って25年？

武田（力） 連続そのままということはないと思いますがね。途中で帰ってきて……。

サラリーマン人生のほとんどを……。

川畑 そうそう。だから本社にいても長期出張、半年の出張とか、いろいろ何回も行っていると、そのようなものまで入れれば僕らでも24、25年になる……。

……よろしいでしょうか。長時間にわたり、本日はどうもありがとうございました。大変恐縮ですが、最後にお声を、どなたが話したかというのが分かるように、お名前をもう一度お願いいたします。

(略)

ありがとうございました。

武田(芳) 結局楽しかったんだわ。

秋元(元) そうですね。

武田(芳) いい時代だった。

秋元(元) やっぱりいい時代だったと思います。

<了>

(補足)

なお、当日この後、秋元 元子さんから、(1)心身ともに健康な状態であれば、現地での滞在が困難になり、早期に帰国せざるを得なくなるか、あるいは最悪の場合には、自殺に至ること、そして、(2)在留日本人のメンタル・ケアのために、日本大使館の関係で、自殺予防の専門家が80年代にクウェートに派遣されたこと、(3)何のメンタル・ケアもない状態で皆さんがカフジでの勤務を全うし得たことは、振り返ってみれば称賛に値することだと感じていること、を内容とする補足があり、インタビューで言い残した重要な問題として、心の健康管理の問題があることが指摘されました。

また、カフジ勤務が最長であった方が、カネコ キンプロさんであり、勤務年数が20数年であること、が話題に上りました(事務局 注1)。

(事務局 注1)カフジでの生活については、秋元 元子「アラビア湾のほとりにて 砂漠の中へ、石油と男たち、暮らしを創る、夫人たちの楽しみ、海の楽しみ、海の幸、砂漠の中の家庭菜園、アラビア人と羊料理、イスラム教と生活、ベールと女性、買い物、学校、<最終回>選択」東海教育研究所『望星』1986年5月～1987年4月、を御本人より頂いております。

筆者紹介



(写真 左)

秋元 一浩(あきもと かずひろ)

元アラビア石油社員

元子(あきもと もとこ)

主婦・元カフジ明星小学校非常勤講師



(写真 右)

川畑 義雄(かわばた よしお)

元アラビア石油社員



(写真 左)

武田 力(たけだ つとむ)

「アラビア鉱業所開発部」

元アラビア石油社員

芳子(たけだ よしこ)主婦

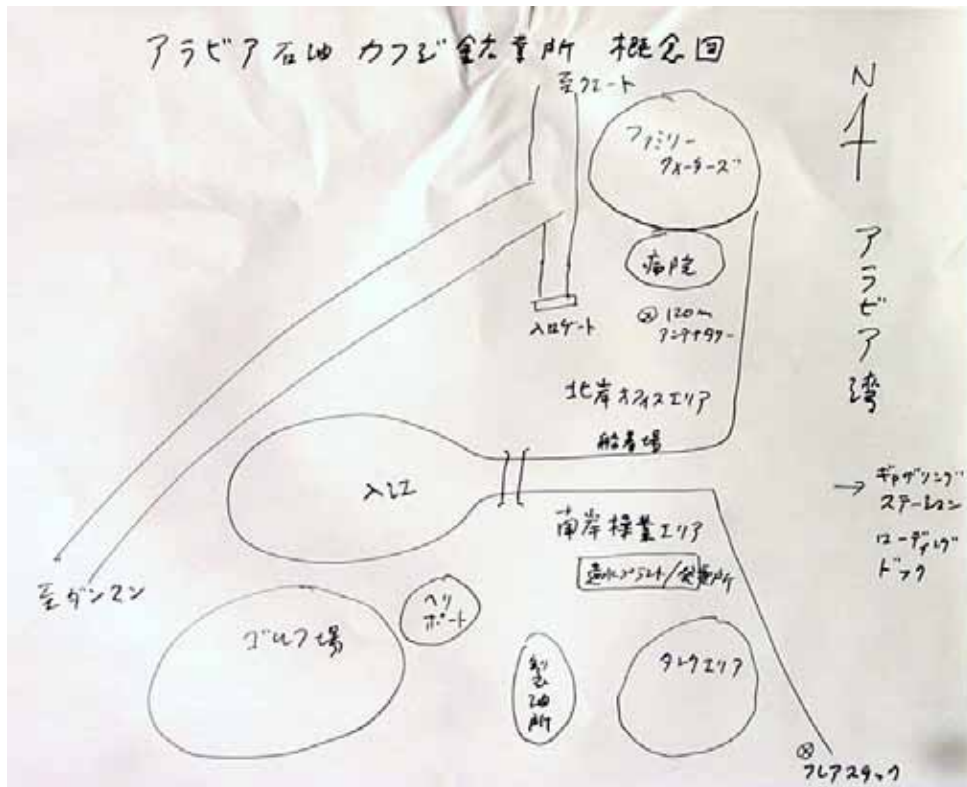


図1 アラビア石油カブリ金業所概念図



写真1 120m アンテナタワーからファミリークォーターを見下ろしたところ。
北側を見ている。画面右側が海。



写真2 120m アンテナタワーから南側操業地域を見下ろしたところ。

原油生産基地カフジとサウジアラビアの発展

60年代からの事業運営

長谷川 捷一

とき 2001年（平成13年）11月25日（日）

ところ 東京大学文学部アネックス2階小会議室

ききて 武石 礼司、水島 多喜男

（尚、事務局から事前にお聞きしていた質問は、以下の通り。）

- 1) 赴任時期。
- 2) メンテナンス作業における御苦労について。
- 3) 操業トラブル（火災事故等）への対処について。
- 4) サウジ人、クウェート人に対する教育訓練や、雇用の流れについて。
- 5) ご本人以前に赴任された方の活動についてお聞きになったこと。
- 6) 欧米の石油企業と日本の石油企業の力量の比較について。
- 7) 現在関わっておられるプロジェクトの場合と比較した場合、初期のアラビア石油の操業とはどのような活動であったと考えられるか。

長谷川さんからはとくに技術的な点について、お話を伺えればと思います。私たちは全員文系でありまして、なかなか技術のほうの話というのは分からないものですから……。

長谷川 私の専門が石油精製ですので、全般のことが話せるかどうか分かりませんが、質問をしていただいて、分かる範囲でお答えさせていただきます。

最初に赴任時期という質問がありましたので、私の経歴を持ってきました。余計なことも入っていますので、その中から取捨選択していただければと思っています。一番最初にアラビアへ行ったのが1966年です。アラビア石油アラビア鉱業所はサウジのカフジという、クウェートの国境に近いところにあるのですが、そこに75年3月まで勤務しました。そのあと7年ぐらいニジェールのウラン・プロジェクトに携わりました。再びアラビア鉱業所に呼ばれたのが1983年4月で、1988年2月まで勤務しました。それから半年本社勤務後クウェートへ行きました。1988年9月から約2年経過したところでイラクの侵攻に遭ってしまい、3ヶ月イラクで人質になりました。解放後本社勤めになったのですが、まずカフジのアラビア鉱業所の「環境改善マスタープラン」を作成するため、鹿島建設と3年ばかり一緒に仕事をしました。定年後は「対サウジ投資プロジェクト」に携わり、1999年1月から約1年サウジのジュベールに行きました。その後2001年2月より「日本セラミックエンジニアリング株式会社」に嘱託として勤務し現在に至っております。ですからアラビアには通算18年ぐらい滞在しました。

経歴を拝見いたしますと、サウジの投資プロジェクトの企業化調査に従事なさったのでしょうか。

長谷川 最近はね。

1962年、資料の3段目にありますが……。

長谷川 これは、利権協定の中に製油所を作らなければいけないという項目がありまして、そのための準備を入社してからずっとやっていたわけです。日本揮発油（現在の日揮）に2年ばかり出向し、そこで設計を一緒にやりました。そして1966年にカフジの建設現場の監督、オペレーターの採用・教育訓練等から入っていった訳です。

カフジの製油所で建設計画を立てる際に、一番ご苦労なされたのは、どのようなことでしょうか。

長谷川 まず日本が外国でそのような建設をやったことがほとんどない時代でしたから、日本揮発油としても、おそらく海外で2件目のプロジェクトだと思います。南米の次のプロジェクトがこれだったと思います。そういう訳で皆目アラビアのことは分からないということで、アラビア石油が日本揮発油にいろいろ注入しながら、2年近くかけて基本設計と詳細設計を実施しました。要するに、ほとんど現地の状況が分からないでやるということは大変なことだったのです。

その場合、たとえば欧米のメジャーと技術的なやり取りはあったのでしょうか。

長谷川 これは、アラビア石油の原油生産基地がほぼ出来上がったあとですから、完全にもうアラビア石油が独自に利権協定に沿ってやった仕事でして、とくにメジャーとのやり取りは何もなかったのです。それからこれは簡単な製油所です。日本のコンビナートなどで見られるような大規模な精油所ではありませんので、分解装置もなければ改質装置もない、という簡単な蒸留装置です。ですから、とくに外国のノウハウを持ってくる必要もなかったわけで、日揮の力だけです。一部ガソリンの洗浄装置など、マロークックスという装置などは米国の技術と言え技術ですけれども、それは大したことはないですね。ですからメジャーの力は何も借りていません。

ライセンスとかの形で、外国の技術が入っていたことはないんですか？

長谷川 入っておりません。製油所に関しては……。

日揮自身はもうすでに外での仕事をずいぶんやっていたか？

長谷川 これが2番目でしょう。外国の製油所として……。

他にはなかったのでしょうか。

長谷川 いや、このあとどんどん出てきました。それは数から言ったらすごいと思います。千代田化工がサウジアラビアで一番強くて、ジェッダ・リファイナーを1968年に完成したのですが、千代田は、サウジアラビアの工事

で初めて納期に間に合ったということで、えらく評価されて、その後はサウジのいくつかの製油所は千代田化工がやっていますね。

アラビア石油が探鉱、掘削をはじめた頃は外国の技術をどんどん採用しないとやっていけなかった時代でした。地震探鉱というのを最初にやりますけれども、これはジオフィジカル・サービシーズ・インターナショナルという、ロンドンに本部があるところでやったのですが、ドリリングは、インターナショナル・ドリリング・カンパニーです。そういうことで、外国の技術ですよ。

カフジ基地の建設は、ポメロイという会社が請け負ってやりましたし、そのあとのカフジ基地の恒久施設は、マクダーモットという会社が請け負ったのです。

設計と建設、現場での立ち上げと教育訓練を、すべて担当されてこられたのですか？

長谷川 そうですね。そのあとリファイナリー・エンジニアとして働きました。労務管理もやれば、生産管理、年間の補修管理、予算編成等、製油所のことはほとんど全部やっていました。

設計、あるいは現場での据付の時に、現地の方との交渉というか、その設計をする際に現地の状況を考えて、この点を考えなければいけなかった、あるいは建設をする際に、現地の事情から、この点を考えなければいけなかったというような何か問題がありましたでしょうか。

長谷川 設計は日揮ですけれども、建設は日揮がスーパービジョンをして、英国の業者にやらせました。要するにそのような外国のコントラクターも、いわゆるレイバーは現地人を使うわけです。ほとんどそのころは教育を受けていない連中でしたから、大変苦労はあったと思います。しかし、われわれはそこまで面倒を見切れないので、業者に対して注文だけをするわけですけれども、そのコントラクターにしても彼らの習慣はよく分かっていなかったでしょうから、意思の疎通が図れたとは思えないので、そのような苦労はあったと思います。お祈りの時間は勝手に休むとか、ラマダン中は半分ぐらいしか仕事をしないとか彼らの前で飲み食いできないとか、そのような不都合や困難があったように思います。それはわれわれもそうですが、現地人をオペレーターとして

採用して教育していたわけですから、彼らの慣習、習慣をわきまえてやらないといけなかった訳です。

実際に完工するまで、建設そのものにはどれくらい時間がかかったのですか？

長谷川 1年半です。

1年半ですか。でも実際にレイバーというと、現地人のほかに、エジプト人とか、パレスティン人とか。

長谷川 当然入っています。

こういう時は、資材は日本からかなり調達したのですか。それともほかの場所から……。

長谷川 かなり日本からです。その当時は現地の事情も分からなかったから、ほとんど塔槽類にしても、加熱炉にしても、熱交（換器）にしても、パイプにしても全部日本から持っていったのです。

それを作って、全部日本から……。

長谷川 そうです。

現地で据え付けるんですね。

長谷川 タワーなどはカフジの沖合で貨物船からバージに瀬取りするわけです。それでゆっくり引っ張ってきて、陸揚げして建設しました。

大変ですね。大きなクレーンがないと。

長谷川 そうそう。

そういう手順も段取りも日本で一応考えるのですか？

長谷川 もちろんそうです。

それはやはり日本で建設するよりも相当割高ですか。

長谷川 それはそうですね。

もともになった、たとえば日本で同じものというか、既製品があったりするのですか。カフジと同じようなものがどこかにあって作っていたとか。

長谷川 それはないんですよ。というのは、原料の油が違うでしょう。カフジ原油を使うわけだから……。

中東原油というのはすでに入っていた訳ですね。でもやっぱりもっと重かったですか？ カフジは、質が。

長谷川 設計上、利用できなかったかという意味ですか。

ええ。

長谷川 そういうものではないんですよ。というのは、規模がだいたい違うし。

小さい。

長谷川 小さいし、カフジは3万バーレルに対し、日本のコンビナートは10万バーレルの単位でしょう。一番小さくて5万くらいですかね。それと日本の製油所は世界の多種の原油を処理しなければならない上、軽質分はペトケミへ持っていくのが主なので、そのような設計にするでしょう。ところがここは簡単な常圧蒸留装置でガソリンを造らず、ナフサで取って、ディーゼル・オイルを取って、あと重油という非常に簡単な製油でした。そのようなものは例がないので、全部最初から最後まで設計が違うわけです。

たとえばポンプとかコンプレッサーは、スタンダードのこういう型、こういう型というのがありますが、そこから選ぶことができます。ここのディーゼル・オイルのタワーから抜き出すポンプは例えばパイロンジャクソンというメーカーの何番を持ってくれば適合するということがあります。それはわざわざ設計するのではなくて、仕様に合ったものを引っ張ってきて据え付けばいい。

規模を3万にしようとしたのは、なぜ3万なのですか？

長谷川 これは利権協定で決められている。具体的な数字は忘れましたが、原油の生産量が何バーレルに達したら、その何%に相当する規模の製油所を作れというものです。

その拡張計画はあったのでしょうか。

長谷川 フェーズ1、フェーズ2とあり、そのフェーズ2まで設計していたので、結構時間を食ってしまった。

フェーズ2ではどうなりますか？

長谷川 フェーズ2だと、ペトケミに持っていけるような原料を作れるのです。

ガソリンも作るんですか？

長谷川 ええ。結局やらず仕舞いで終わってしまいました。

そのころはまだクウェート・サイドの製油所というのは、全然考えていなかったのですか？

長谷川 クウェートは最初から製油所建設に関心を示さなかった。だからクウェートも関心を示したのだったら規模は6万BD(b/d)になっていたはずですよ。

そのころだったら、お金があったのですか。作れば作れた。

長谷川 いやいや。渋かったですよ。いやあ、厳しかった。

製品の一部は、やはりサウジ内に流れたというか、出荷あるいはそのサウジ政府が引き取るという形ですか？

長谷川 いえ。ほとんど日本へ持ってきました。中間溜分のディーゼル・オイルだけは発電所の燃料として使いましたけれども、それ以外は全部日本へ持ってきました。

発電所というのはカフジ鉱業所の中の発電……。

長谷川 そうです。全部自分でやらないといけませんから……。

では次の項目のメンテナンス作業におけるご苦労についてお伺いしたいと思います。

長谷川 その前に、私がそれをやったのは最初の9年間で、製油所関係は一切やったのです。そして2回目の赴任では、鉱業所の技術全般を見る立場になって、一応アップ・ストリームからダウン・ストリームまでと見るようになりました。3回目がクウェート事務所で、これはクウェート石油省とカフジの操業とのコーディネーションを2年間やりました。結局現地には3回の赴任ですけれども、仕事の内容はそれぞれ違っていました。

「メンテナンス作業におけるご苦労」と書いてあるのですが、メンテナンスというのは、オペレーションと違いまして、オペレーションというのはオペレーション・マニュアルを作って、それに従っていけばだいたい運転できる。もちろんいろいろな知識がないといけないのですが、懇切丁寧に教育していけば何とかできるのです。ところがメンテナンスというのは、それこそ経験そのものなのです。それがないとできないので、メンテナンス要員を育てるといのは、オペレータを育てるよりもよほど大変です。

最初のころは、日本人のメンテナンス要員というのにベテランが結構いましたので、ほとんど日本人がやっていたのです。カフジというのはアラビア石油が初めて乗り込んだ土地で、ほかには何もなかったわけですから、だんだんに周りの業者が力をつけてきて、10年、15年経ったところで徐々にそのような業者に任せられるようになってきたのです。最初の10年、15年というのは、本当に日本人は大変だったのです。

要するにカフジの更地にアラビア鉱業所というのを作ったのですから、すべて自分でやらなくてははいけなかったわけです。油を掘って、タンクに入れて、タンカーに出せばいいというわけではなく、そのために必要な電気も作らなければいけない、それから水も海水を蒸留して作らなければいけない。そのころはまだ電話がほとんどなくて、ラジオでオフショアとの連絡をやっていたので、そのラジオとか、それから電話、車のメンテナンスから重機械のメンテナンス、電気計装。又、マシン・ショップで旋盤でいろいろな部品を作るなどということがありました。日本の油会社では想像もつかないようないろいろなことを一切自前でやらなくてははいけなかったから、その苦勞というのは大変だった。

それは何人ぐらいの方々にされていたのでしょうか。

長谷川 カフジの日本人のピークは初期に175名という時期があった。だんだんに現地人化、サウダイゼーションという言葉を使っていますけれども、サウダイゼーションの圧力が徐々に強まってきて、日本人全体で120名ぐらいでずうっと続いたんです。このあいだサウジの利権が取れなかったのが今は80名ぐらいに減っています。そのような感じですが、その120名というのは事務系の方も全部入れてですが、現地人を合わせて2,000名近くいたのです。そのうちにサウジ人が1,300人ぐらいで、クウェイティが300とか350ぐらい。中立地帯ということでサウジとクウェートが半々権益を持っているわけですから、その意味では雇用数が同数でないといけなかったのです。ところが、オフショアの中立地帯はそのままですが、オンショアの中立地帯が1970年にサウジとクウェートに分割してしまったのです。その結果、カフジの基地というのはサウジ領になってしまったものですから、クウェイティというのは国境を越えてカフジに入ってくるようになったのです。それであんな市から離れた基地に行けるかということで、クウェートからは人気なかったのです。ク

ウェート政府は半分雇えというのですが、クウェイティは居つかない。従ってそのようなアンバランスが生じることになる。

事務系を入れて日本人 175 名の方ですから、実際にいろいろな技術を持っている方は更に少なく、その方達が、いま言われた電気とかラジオとかを全部担当されたのですか？

長谷川 そうです。全部やったのです。それぞれ担当の日本人は一匹狼でしたから恐かったですよ。(一同笑い) そうしたら、その人達の許可をもらえないと何もできない。責任がそれぞれにあるから、それは恐くなりますよ。

日本にいるときよりもたくさんの分野の仕事をしなくちゃいけない.....。

長谷川 そうです。そうですよ、何でこんなことをしなくちゃいけないのかと思うほどです。

雑用だけ？.....それとも、やはり分野的に相当広がりますか。

長谷川 ちょっとうまく表現できないけれども、まったく違いますよね。

どのように、たとえば日揮での仕事のやり方と比べると相当違うんですね。

長谷川 違う。たとえば熱交(換器)をクリーニングしてくれという場合、日本だったら、業者がいて、「やれ」といえばすぐに済むことが、ではそれをクリーニングするために取り外して、クリーニング設備を整えて、と段取りから全部考えなければいけないでしょう。作業者の能力も考慮しなければいけない。そのようなことは日本ではないでしょう。これをやれという命令だけでいいから。このような条件でやれと契約書を作ってしまうと、それで済むわけです。相手の能力まで考えなくてもいい。

それは初期のころはそうだったけれども、だんだん違ってきて、いまは全然違う。

長谷川 今では全然違います。サウジはジュベールにロイヤル・コミッションの一大工業基地ができたではないですか。あれでいろいろな産業が起きて、あそこで業者が育ったのです。ですからサウジはかなり力をつけたのです。

今年3月に3人でずうっとサウジを回ったのです。ジュベールも見てきたのです。何も無い所によくあそこまで。しっかり定着した感じですね。

長谷川　そうですね。ジュベール工業団地はベクテルがやった仕事なんです。あの時はサウジの景気が良かったからいくら金を使ってもいいっていうんで、ベクテルも思い切ってやったんです。

いまおっしゃられたジュベールの建設というのは、サウジの経済発展にとってやはり決定的に大きかったのでしょうか。

長谷川　ええ、そう思います。何せ、ARAMCOからの原油とガスを使った一次的な工業、そこで出る製品を使った2次工業、1次、2次をサポートするセクション、と3つに分かれている。それが非常にいまになってうまく融合して、あそこで何とかすべてカバーし合えるという一大工業地帯ができました。鉄まで作っている。アルミがまだできていない。バハレーンとドバイにはありますけどサウジにはない。で、まあ例の鉱山鉄道の話が出てきたわけです。ボーキサイトの山はあるけれども、それを工業団地へ持ってこれない。

アフリカとかオーストラリアから持ってきたほうが安いのではないですか。それで多分、もう需要的にも域内だったら十分ですね。2ヶ所で...。だからあえてそういう競争をしかけるのかどうか、という問題になりますね。

長谷川　そうですね。

ジュベールができて、いろんな産業が育ってきた。それまでは、やはり業者には相当苦労する訳ですね。

長谷川　そうですね。だいぶ苦労しました。能力が落ちるからね。

ジュベールは80年代でしたか。

長谷川　そうですね。70年代はまだ大変でした。従って最初の10年から15年ぐらいはものすごく苦労しました。

現地社会への貢献という面では、現地の業者を育てる、あるいは、現地従業員の方の教育をするという、二つの面がありますけれども、その現地の業者を育てるという面では、どのようにして育てていかれたのですか。10年から15年かけて作っていかれたといっても、まずそのような仕事をしてくれる現地の人というのはどこから来たのかとか、あるいはレベルはどの程度であったのか、もしよければ.....。

長谷川 実際にはアラビア石油の、たとえば日本人が手を下して、「こうしろ、ああしろ」と教えたわけではなくて、この部分はこのように改良してくれとか、そのようなことで時間を掛けてだんだんと要求していった、その答えを見ながらやっていくという方法ですから、その業者にしても、アラビア石油1社だけでなく、クウェートの石油会社の仕事を取ったりとか、あるいはダンマンの仕事を取ったりとかということをしていくうちに、ここはこういう意味だったのか、とか、彼らもいろいろ復習しながら技術を磨いてレベルアップしていった。

業者にやらせても、もちろんスーパービジョンはアラビア石油の日本人がやるわけです。だからその意味で、監督をしながらいろいろ意見をして、ここはこうしろ、あそこはこうしろ、ということで、先ほど直接指導しないといったけれども、その意味では直接の指導もあったということです。

ARAMCOが周辺に多量の中小企業を作ったと聞いているのですが、そのような業者を使ったということでしょうか。

長谷川 ええ。そうですし、それからカフジ独自で育った業者もいます。本当にゴミみたいな業者も含めて、あそこは何の仕事をするにしても入札委員会というところを通さないといけないのですが、ビッドして、一番安いところに決まってしまうのですよ。すると業者の能力がなくても、安いがためにそこを使わないといけないということがあって、本当に能力がないところに決まったときは苦労します。そのようなことではまずいということで、いろいろこちらから条件を付けるようになりました。そのようなことから業者側にも競争意識というのが芽生えてきて、彼らなりにやはり努力をしたのだと思います。

現地の企業に競争意識が出てきたということですが、これは普通われわれ日本人の中小企業の人非常に熱心に仕事をされるという感覚で捉えていいのでしょうか。それとも日本人の感覚から見れば、まだ不十分ですけども、今まであまり競争意識がなかったところにそのような意識が出てきた。

長谷川 そうということです。決して満足していないのですが、かなり大目に見ながらいぶん我慢して……。

その期待に彼らは応えてくれましたか？

長谷川 今やそのような時代に入っているのではないかと思います。だからものすごく時間が掛かっているわけです。

その場合、やはり現在まで大きくなって生き延びている会社とそうでもない会社と両方あるのですかね。

長谷川 もちろんある。

応えてくれる中で大きくなっていったわけですね。

長谷川 そうです。

いまでも、日本に対して協力的とか、そのようなことがありますか？

長谷川 ああ、ありますよ、もちろん。

結構何社もありますか？

長谷川 ええ、ありますよ。

ダンマンあたりですか。クウェートにもありますか。

長谷川 クウェートにもある。

大きな財産ですね。やはり同族経営ですか、それとも、もうかなり違って会社的になっていますか？

長谷川 会社的になっています。

サウジの財閥企業というのは、いまおっしゃられたような企業には関わっていたのでしょうか。

長谷川 ええ、関わっているところもあります。それからたとえばザメールとか、ゴセイビとか、そういう人たちが株主になっている会社です。プリンスが株主に入っているのもありますし……。

株主はサウジの財閥、あるいは王族が押さえて、実際の仕事ではほかからきた方が取り仕切る、管理職は、ほかからきた方が取り仕切るというのですか？

長谷川 ええ。インド、パキスタンが多いですね。クウェートのスウェイニーというのはインドでしょう。アブドゥル・シュワイヤーのそこだってインドでしょ。インド系が強いですか。

日本人と関わった企業の中で、その後成長を遂げた企業はありますか？

ACMCなどは、ひところずいぶん仕事をしましたが、今はどうなっているんでしょう。

長谷川 今は仕事は少ないです。

アラ石からほとんど仕事がでていたところはそういう意味では大変ですね。

長谷川 ありますよそれは。私は最近のことは知らないのですが、具体的に名前は挙げられないのですけれども。たとえばタンク建設会社とか、それからパイプ工事とか、まずここなら間違いはないとか、そのような業者が増えてきたのです。増えているというか、数えられるくらいありますね。具体的には名前を言いませんが……。

そういう企業はカフジでいろいろ力をつけて、さらにサウジ国内で、営業を広げていったということが言えるのでしょうか？

長谷川 カフジだけで力を付けたというのはほとんどないですね。やはり数をこなさないと力がつかないので、だからむしろジュベール、あの辺を中心とした業者がやはり主流ではないでしょうか。ジュベール、ダンマン、あの周辺。

現地企業の育成は、こちらから改良の要求を出してそれに彼らが応えてくれ、その様子を見ながら、更にいろいろ要求を加える、というふうに、現場での仕事を通じて行われたとのことですが、やりにくいと思われた点がありますか？ たとえば相互のコミュニケーションとか。

長谷川 何の工事でもそうですが、こちらのリクワイアメントというのを出しますけれども、そのリクワイアメントの解釈の仕方というのに食い違いがある。それから完成してコミッショニングをするわけですが、そのコミッショニングの捉え方ですが、たとえばこの能力で24時間運転できないとダメだよということを言っても、この能力が出たからいいじゃないか、24時間継続させるという意味がわからないと言います。そのようなことで、中には訴訟問題になるようなこともたまに起こるわけです。

とにかくアラブ人のものの考え方は、ここまで努力したからそれでいいというのであって、最初から一定のレベルを要求する日本人の感覚からすると、仕事が大変だ、ということを知っているのですが、やはり彼らには、俺たちは

努力してこれだけのことができるようになったんだからそれでいいじゃないか、という感覚があるのでしょうか？

長谷川 ありますね。

今、「訴訟になる」とおっしゃいましたが、私たちなどはそれを聞くと、ではどこの裁判所でやるのだろうかとなります。イスラーム法の裁判所では、それを裁く力があるのかという疑問が湧いてきます。実際はどのようなところで裁判を行ったのでしょうか。

長谷川 いまは非常に国際的になっていますので、イスラーム法だけで裁判になるということはまず考えられない。それはもう契約書に書き込んでありますので、そのような心配はないです。

投資先として他にも候補の場所があったら、中東を選ばない可能性もありますか？

長谷川 それは十分ありますね。東南アジアのほうがよほどいい市場でしょう。サウダイゼーションはいま行き詰まっているのではないですか。いまサウジの人口が2,000万人で、そのうちサウジ人が1,400万人で、600万人が外国人です。その外国人をどんどん減らしたいのですが、ではサウジ人で置き換えられるかということ、置き換えられないのです。いま第7次の5カ年計画に入ったのですが、第5次あたりからすごく強烈にサウダイゼーションを進めていたのですが、けれども第5次も、第6次も目標には到底追いつかなくて、第7次についに入ってしまったわけですが、結局ここへきて、サウジには受け皿が少ないということがサウジもわかってきたんじゃないでしょうか。石油化学に関連した部門という産業はかなり充実しているけれども、それ以外の産業というのは伸びていない。だからそのようなところで外資を入れて欲しいという動きがにわかに持ち上がってきて、そして新外資法を2000年4月に発足させ、総合投資院、サギア(SAGIA)、が同時にできたのです。そのようなことで外資をどんどん入れたいということになっている。受け皿がないのに、雇用を強いるのは難しいということがやっと分かってきたようですね。失業率がいま20%以上でしょう。

ジュベールでシャルクに行きましたら日本人は2人だけなんですね。副社長と技師の人と。

長谷川 副社長の渡辺さんに会いました？

ええ。

長谷川 もう日本に帰られている。

あ、そうですか。代わりの方がいらしたんでしょうね。

長谷川 でしょう。

石化で2人という、じゃあカフジをどのように考えるかということがあると思うのですが……。

長谷川 そうですね。

あれは、どうあったら一番よかったのだろうかという……。

長谷川 私はアラビア石油の過ちだと思います。

もっとサウジ化できる。

長谷川 できますよ。アラビア石油のまずいところは、カフジ基地しかないですね。ほかに働き場がなかったでしょう。いまは辛うじてメキシコ湾とか、渤海湾とか、北海の一部に小さいのがあるけれども、いわゆる基地といわれるものを持っていないので、人間のローテーションが組めないのです。ですからカフジにすぎたというか、そのためにサウダイゼーションの計画というのはほとんどなかったのに等しいのです。あれはアラビア石油のポリシーの欠陥だと思います。あのオペレーションだったら、あそこなりにできますよ。数人でできますよ。

それは任せれば、できますね、それなりに。

長谷川 できます。

でも、そのためにやはりもうちょっと教育をしないといけない。

長谷川 そうそう、もちろん必要です。

何かあったら日本から駆けつけるというような……。

長谷川 そうそう、それをやればいいのです。最初の方針が間違っていたのです。

何年頃からだったら、それはできたのでしょうか。建設がピークを超えれば、どんどんとりかかれたのでしょうか。

長谷川 恒久施設ができたあの時点から、もうサウダイゼーションを考慮すべきだったのではないかと思っています。

75年ぐらいからでしょうか？

長谷川 もうちょっと前からですが、まあ、やる気になれば70年からできたのではないですか。だってその頃はペトミン大学の卒業生が出てきたでしょう。その頃から……。

次に内部の教育訓練、あるいは現地の雇用の流れについてですが、その教育プログラムというのは、どのようなものがあったのでしょうか？

長谷川 各部でそれぞれのカリキュラムを作って、彼らに仕事を任せられるようになるにはどうしたらいいかということで、日本人が知恵を絞って、そういうプランを作って教育をしていったわけですけど、現場だけではとても基礎教育までやっていられないというので、会社の中にトレーニング・センターをつくりまして、そこにパレスティン人、ヨルダン人、エジプト人などの先生を連れてきて、そこで基礎教育をやってもらった。最初は夜学で、仕事が終わってから夜学でやっていたのですが、だんだんにサウジ政府の圧力がかかってきて、勤務中にやるようになって、さらに進んで、ボケーショナル・トレーニング（職業訓練）をやって、その時には日本人が指導者になって、on the job training を含めて進めていった。

先ほども言いましたけれども、とくにメンテナンスというのは、経験がものをいうので、ほとんどマン・ツー・マンで、ずうっとエンジニアがそばに付いていないと力がついていかない。オペレーションよりはメンテナンスのほうが苦労するわけです。

日本国内に研修生を呼んでくるという制度と、いまおっしゃった現地での on the job training というのはうまく噛み合っていたのでしょうか？

長谷川 いや、日本へ連れてくるというのは別の話で、トレーニング・センターというのはカフジに作ったわけです。あれは1962、3年ごろにはつくったのだと思います。私が行ったのは1966年で、その時はもうすでにありました。何せ、1960年代というと、まだ中卒者が多い時代で、高卒はまだ珍しいぐらいの時代ですから、私なども数学とか、理科とか、そのようなところから教育したのですが、足し算とか分数の計算を教えた。それで1970年代にトレセン（トレーニング・センター）、それから技能訓練とは別に高卒の中から選別してアメリカとか、イギリスに留学をさせるような制度ができたわけです。

1980年代に入って、サウジとクウェートの大学が次第に整備されて、そして管理職の人材も満たされていったという感じですか。

話が前後しますけれども、最初の頃というのは、国連のパレスチナ難民救済機関というのがベイルートにあったのです。UNRWA という機関ですが、これは United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees ですけども、UNRWA、そこから AOC に、アラビア石油に、求職の申し込みがあって、その機関から、鉛管工とか、旋盤工とか、ラジオ、テレビ、電話、それから事務系だと簿記、会計、タイプですか、そのような職種の人たちを出してもらったいきさつがあります。とてもじゃないが当時サウジ、クウェイティにそういう人たちはいませんでしたから、これは非常にありがたかった。アラビア石油の初期にとって、そういう国連機関の存在は即戦力になる要員が採れるわけですから、こんなありがたいことはありませんでした。

これは、国連機関のほうからアラビア石油に雇ってくれというふうに来た、ということなのでしょうか？

長谷川 向こうから来たのです。われわれはそのようなものがあるということを知りませんでした。そしてそのような機関と連絡を取っているうちに、こちらもカイロとか、ベイルートとか、アンマンなどに出かけるようになって、そのようなところに結構優秀な地質の技師がいたりとか、施設の技師がいたりとか、あるいは経理担当の人がいたりとか、医者がいたりで、それらの人を採用できたのです。それで私が担当していた製油所、カフジ・リファイナリーの場合も、サウジ、クウェートに経験者がいなかったものですからヨルダン・リファイナリーから5人引っこ抜いて雇ってきた。そして彼等を各シフトの職長（フォアマン）にして、それにサウジ人を付けた。しばらくしてサウジ人が職長に入れ替わったのですけれども、そのような人がいなかったらできなかったですね。

彼らの、たとえばヨルダン人とサウジ人との間の関係というのは良かったのでしょうか、悪かったのでしょうか。

長谷川 いや、あまり良くないですね。あまり良くないですけども、ただ教えてもらわないと自分も昇格しない、昇進しないというのがサウジ人も分かっていたから、嫌々教えてもらったりしたのですが、ただパレスティン人

達は、トレーニング・センターの先生として雇われたパレスティン人は教えるのですが、各部で雇ったパレスティン人というのは、サウジ人に絶対に教えないのです。絶対ということはないけれども、教えたがらない。要するに代替者が出てきたら自分の首が飛んでしまうわけですから、教えたがらなかったですね。

だから決して現地人とそういう人たちとは関係は良くないです、お互いに。パレスティニアンとエジプシャンというのは、サウジ人とクウェート人を本当にバカにしますからね、それが態度に現れてしまう。ずいぶん喧嘩もみましたけれどもね。一番プライドが高いのはエジプト人です。パレスティン人は一番優秀でしたね。プライドの点ではエジプト人で、我々には歴史があるんだということですかね。

そのような揉め事ができるだけ起こらないよう、気配りをされた訳ですか？

それはそうですね。何か頼む時でも順番とか大事ですね。

長谷川 もちろんそうですよ。それからシフトを組むときに、誰と誰とは合わない、というのを知っておかないとダメですし、それから現地人の使用で一番気を使うのは、みんなのいる前で注意ができないのです。「侮辱した」ということになるのです。だから一人ひとりマン・ツー・マンで言わないといけません。個室に呼ぶとか、現場を歩きながら注意するとか.....。

誰と誰を合わせてはいけないというのは、たとえばその背後にある部族関係への配慮とかがあるわけですか？

長谷川 ええもちろんあります。私たちは、彼はシャンメリ族だとか、彼はガハタニ族だとかいうのはみんな知っていました。僕らが最初に行ったころ、1968～69年くらいまでは、サウジ人が便所掃除もしていたのです。信じられないでしょうけれども、そのような時代がありました。でも便所掃除をする部族は2つくらいしかない。

サウジの中で差別があったのですか？

長谷川 ええ、ありましたよ。トライブの間の差別。

今も何か残っているでしょうね。

長谷川 残っていますよ。そのようなものは根深いから。

次の項目ですが、初期の頃としては火災事故が非常に有名ですけれども、どのように対処されたのでしょうか。

長谷川 あれをご覧になりましたか。「プロジェクトX」を……。

拝見しました。

長谷川 1号井からあのような問題が起こったのですけれども、あれは1959年だったと思うのですけれども、1959年8月、450メートルまで掘進したときに、暴噴に遭って、ブロー・アウトした。ガスが出てきたところに、櫓というのは鉄製なので、それに地層の石などがぶつかって、そこで発火するわけです。あの時、世界でも有名なアメリカ人の火消しの専門家、レッドアデアという人をカフジに呼んだのです。彼はこれを10日間で消したのです。私はリザーバー・エンジニアに聞いたのですが、具体的にどうやって消したかというのは分からないというのです。けれども、井戸を掘っていくときには、井戸の中にBOPという、ブロー・アウト・プリベンターという、弁と考えたらいい、圧力変化があったときに自動的に閉まるのを必ず装備していなくてはいけません。おそらくこれを付けていたに違いないのですが、でもこれが閉まらなくて引火しているというわけです。そしてこれがだいたい……。(白板に図を記入)

ここにターンテーブルというのがあって、これにパイプをくっつけて、これを回して、ここにビットを付けて回転させて掘進していくわけです。このターンテーブルからだいたい30フィートぐらいのところはこのBOPを設定するのですが、そのレッドアデアは、このBOPを何らかの方法で止めたに違いないのです。ここにいま火が点いたわけですから、火を消してからこれを閉めに行ったのか、火が点いている状態でこれを閉めたのかというのは分からないのです。けれども、火が点いていてもこの10メートルぐらいの、これを閉めるパイプを降ろしてこれをマニュアルで閉めることができるようにはなっているのです。ですから防火服を着てそれをやったのか、あるいは火を何か爆風みたいなもので止めておいてやったのかというのがちょっと定かではないのですが、とにかくこのBOPを閉めたということだと思います。10日後には、彼は閉めて帰国したといひます。

カフジ油田にはラス層というガスの薄い層が所々にあるのです。連続してないのですけれども、それによく突き当たるのです、それで15号井の時も、実はこれに捕まって火災を起こしまして、これは、この時もやはりレッドアデアを呼んだのですが、来るなり、これは手に負えないとって、半日で帰ってしまった。契約金額の半額でいいとって金だけもらって帰ったのです。結局この15号の場合は、1年間燃えつづけた。そこはどれぐらいのガス・リザーバだったか分かりませんが、その圧力が下がるまで燃え続けたのです。1号井の時は、この上のほうだけが燃えていたので、このリグはまだ使えたのです。ですから一応いろいろな手直しなどで4ヶ月半掛かったのですが、4ヶ月半後にまた、このパイプは使えませんけれども、ちょっとずらしてまた掘削ができたのです、1号井の掘削の時は、15号井のときはもう完全に層は溶けて...、これはもう廃坑にしたのです。この15号井の火災は1961年4月のことです。

そのあとも158号井も同じようなことが起こったのです。これは火が点かなかったのですけれども、このラス層というのは、「サワー・ガス」といって、硫化水素の多いガスです。「サワー・ガス」というのは危ないので、むしろ火が点いたほうが安全なのです。このときは、このやぐらの上に煙突を立てて、それに人工的に火を点けた。これもずいぶん時間が掛かりました。具体的には私はドリリング・エンジニアでないんで分かりません。

この線は何かというと、これは海底です。カフジあたりは水深40メートルぐらいです。158号井の場合は、もう一本リリーフ・ウエルを掘りまして、これにぶつけて、それでここをセメンティングして、とめた。このビットのところにはMWDという装置が付いている。メジャメント・ホワイル・ドリリング（Measurement While Drilling）で、方向を定めながら掘進し、このような離れ業ができる。

陸上施設でも何かありましたね。事故とか、燃えたりとか、飛んだりとかがありましたか？

長谷川 陸上施設ではフレア・スタックに火がつきましたね。あれはフレア・スタックの前にはノックアウト・ドラム(Knockout Drum)というのがあって、液体が行かないようにガスだけ、フレア・スタックに行くように工夫され

ているのですが、その液体がオーバー・フローして、フレア・スタックに行ってしまうと、溢れ、先から燃えたことがありましたね。

陸上では事故が……。

長谷川 あまりないですね。イラクが攻めるときに、タンクが1基燃えたけれどもね。

あれに爆弾が落ちたと聞きました。

長谷川 ああそうです。

長谷川 先程の暴噴ですが、井戸を掘るときというのは、ここにマッドを循環させながら、このビットを冷やすという意味もあるのですが、このフラクチャー・プレッシャーというのですけれども、マッドの圧力がこれを超えないようにしながら掘らないといけないのです。だから微妙な圧バランスで実は掘っているのです。フラクチャー・プレッシャーというのは地層の強度です。マッドの圧力が高くなると、これが溢泥してしまうわけです。溢泥してしまうと、ガスがケーシングの外を流れる。中に入る場合もあるのですが、それでブロー・アウトが起こりやすくなるのです。とくに1号井は初めての井戸でしたから、このようなガス層があるということが分からない。それでこのようなことが当然起こったのだと思います。

サウジ側から、その事故に対して何か要求はありましたか？ あるいは、責任を厳しく問われる、ということがあったのでしょうか？

長谷川 そういのはまだ利権を取ったばかりで、そんなに強く言われていなかったと思いますよ。しかも報告しなかったかもしれないし、したのかな？ そのへんはよく分かりません。あまり強い要求はなかったと思います。当然何か報告書を出したりというようなことをしたでしょうけれども、この当時はまだ甘かったと思います。この頃はまだ石油省というのがなかったはずですから、サウジの大蔵省の管轄だったはずですが、158号ぐらいになると、もう石油省が何でそんなことやっているんだとガンガン言ってくる。

メンテナンスの仕方は初期の頃とは変わってきたんですか？ 井戸も含めた施設全体で……。

長谷川 そうですね。だって、プリベンティブ・メンテナンスに移行してきたでしょう。初期のころというのは、何か現象が起きてはじめて修理するの

ですが、それをあらかじめ事故を未然に防ぐという方向のメンテナンスにいまは変わってきています。

それはいつごろから変わったのですか？

長谷川 「プリベンティブ・メンテナンス」という言葉が出だしたのは、私が最初の9年いたときの後半にはもう出ていましたから。そのような考え方が出てきたのは1970年代の初めですね。

いまもそのやり方ですか？

長谷川 そうです。

世界的に見たらもっと新しいやり方があるのですか？

長谷川 もちろんもっと、名前は知らないけれども……。

もっと何か違うのでしょうか？

長谷川 違うでしょう。非破壊検査が発達しているから、運転しながら中の状態が分かる時代になってきていますから。機械類の疲労度というのが運転しながら分かるという時代になっていきますから……。

それには対応できていますか？

長谷川 だいぶ出来ていると思います。ちょっと怖いのは、やぐら(jacket)がいま200本ぐらいありますけれども、その腐食の度合いというのが、一応防食をやっているのですが、一部を除き実際に潜水夫を使って、肉眼で見ているわけではないから、ただ数値だけでやっているというところがちょっと怖いところがある。

あと中東の平均から見て、カフジでは投資が遅れているんじゃないか、というところがありますか？

長谷川 カフジの基地で？

ええ。施設全ての中で。

長谷川 ご存知でしょうが、あれは恥ずかしいです。

ジュベールから見るとちょっと違いますね。

建物はそうだとした場合、ユーティリティーとか全部見た場合、基地そのものが、古いものをだましまし使っているというところがありますか？

長谷川 やはり日本人できめ細かい対処はしているのですよ。だからこれがアラブ人だったらとっくに事故が起きている。だから日本人があれだけ、い

まだに 80 人いるということは、それなりのことはやはりあると思っています。目が行き届いている。ただ予算が付かなかったですね。利権が延長できるまで予算を抑えるという時代が何年も続いたではないですか。だからわれわれがお金をかけてメンテナンスをやりたいと思ってもできない時代がここ数年続いたので、その弊害が出ないかなという不安があります。それは先ほど言ったジャケットの問題もそうですが.....。

いくつもあるのですね。

長谷川 ええ、それはあります。それから海底ケーブルもそうです。いま一部取り替えているのですが。

通信とか構内のインフラは、かなり良くなっているのですか。

長谷川 一応整いつつあると思います。

かなり、アップ・グレードしたのですか。

長谷川 光ファイバーを今使っています。

ARAMCO 並とはいかない。

長谷川 いかないです。

クウェートに比べたらいかがですか。

カフジの設備が悪いということについては、その利権の内容から設備投資に回せる資金がなかなか手に入らなかったということもお聞きするのですけれども.....。

長谷川 設備が悪いというふうには捉えて欲しくないです。要する十分なメンテナンスができていないといわれると、そこが不安だということです。日本人のプランナーであればこれだけのメンテナンスをしたい、というところまで到達していないという意味です。それは予算の関係です。だから日本人は一応問題点というのを把握していると思うのです。その予算がつかないので、そこが心配なところ。それを現地人にいくら説明しても分からないのです。先の予測というのは、彼らはできないのです。だから予算書が彼らには作れない。日本人が入らないと。

将来のことは、それは神様が采配、支配することであって、人間が取り組むということではないから、あまり考えないのだ、という一般的な説明を聞いたことがあります。でも、こうなれば非常に高い確率でこうなるだろう

ということは、それはイスラム教徒であれ、誰であれ、一応予測を建てること
ができるように思うのですが、それがやはり難しいのでしょうか。

長谷川 難しいですね。私は、実際に教育していて分かったのは、このよ
うな家具とか、絵を描かせるのですが、自分の視覚に入っているところは分か
るんだけどその裏が全く予測できないのです。面白いなと思います。日本
人だったら、このテーブルがこのように存在しているのだから、当然この下
にも台があるだろうという予測ができますが、そのようなところからおかしいの
です。基礎教育が非常に大切だなというのを痛感しました。

on the job training もしたし、トレセンでも教えられたということ
ですか。

長谷川 そうです。

するとフルタイムで勉強しに来ている人がいたのですか、あとのほ
うでは.....。

長谷川 そう、そうですよ。

それは高卒ぐらいですか。

長谷川 中卒もいたし、高卒もいたし、いろいろなレベルがありましたか
らね。クラス分けをして.....。

皆それなりに英語はしゃべるのですか？

長谷川 英語は初期の頃はめちゃくちゃだったけれども、語学のセンスは
日本人よりあります。書かせると全然ダメですが、しゃべるのはみんな日本
人より、うまくなりますよ。

当初は英語がしゃべれる方を採用された？

長谷川 そのようなことを言っていられなかった。だからわれわれも作業
を命令できるぐらいのアラビア語はできないとまずかった。私もヨルダン人に
アラビア語を教えてもらいました。オフィス・ボーイとか、ラウスタバウト
(roustabout)とか、下級職というのは全然できない。オペレーターとして雇っ
た者でも、最初はそれはひどい英語でした。

アラビア語には、エとオの母音がないのです。それからピーの発音、ピーは
全部ブです。パンブなんていうのは、バンブになるのです。あらかじめこのよ
うなルールを覚えておかないと理解できないですね。パイブではなくてバイブ

です。これを知っていると分かることがあります。人の名前で、長谷川の「セ」が言えない。ハシガワになるし、「オ」がだいたい「ウ」になります。

では次の項目ですけれども、長谷川さんが赴任される以前に勤めておられた方から何かそのような話を長谷川さんがお聞きになったことで、何かもしあれば……。

長谷川 やはりイスラムのことを知らなかったということで、いろいろトラブリました。私が聞いていた中で、日本人は仕事中にラジオなどを聞くことは絶対に許されませんよね。彼らがラジオを聞いていたので、ものすごくしかったのです。そうしたらそれはコーランだったのです。宗教を侮辱したというので、その人は確か国外追放になったのではなかったかな。そのようなこととか、それから日本の国旗だけを揚げて、サウジの国旗を揚げなかったので、それでウォーニング・レターをもらったとか、それから私自身も実は国外追放にあったのです。最初の赴任は9年目に帰ったのですが、9年目に帰ったときというのは国外追放だったのです。

私がなぜ国外追放になったのかというと、ある日突然、休みの日でしたけれども、石油省の支部がカフジにあるのですが、そこの役人から電話が掛かってきて、「すぐに来てくれ」と言われ行ってみると、おまえはミリタリー風に行っているとか、部下を昇進させないと言われ、即刻国外退去だ、と言われた。私は、性格上悪いやつは昇格させたくなかったから、そういうところを厳しくやっていたのですが、各人これぐらいずつ、全部従業員のファイルを持っていましたけれども、ファイルを見せて、これだけ遅刻が多いではないかとか、病気を理由に職場をこれだけ離れているじゃないか、という資料を示して説明するのだけれども、納得してくれないのです。その時、呼ばれて人事部長も一緒に来てくれて、その人もいろいろ弁解してくれたりしたのだけれども、やっぱりダメで、それから1週間後ぐらいですか、帰国したのです。

これで二度とサウジへ行くことはないかなと思っていたのですが、2回目また呼ばれました。相手を信用するというのは日本人だけなのかもしれないと私は思うのですが、とくにサウジ人というのは、相手を信用しないですね。まず疑って掛かる民族だと思うのですが、そのようなことで一度信用されると、認

められるというか、向こうは気を許す。やはり新しい者を呼ぶよりは経験者がやったほうがいい、ということになったのだと思うのです。そのような国です。

サウダイゼーションということもあるので、日本人のビザ発給のときに、そのようなこともあるような気がしました。

今回向こうに行って、サウジ国内の日本人ビジネスマンとお話する機会があったのですが、皆さん、やはりいつ国外退去になるかもしれないとか、サウジの官憲というような人たちが突然やってくるのではないかということで、非常に緊張した感じでおられたのを実感したのですが、やっぱりそれはかなり厳しいものでしょうか。

長谷川 厳しいですね。サウジで生活しているだけで、何か緊張している感じがありますよ。だから飛行機に乗るとほっとするんです。あそこから離れる時。あれは何だろうといつも思うのですが、これだけ慣れていてもそうです。

たとえば私が交通事故を起こしたときというのは、十字路で、サウジ人の高校生が運転していた車が見切り発車して先に出たためにぶつかったのだけれども、警察というのは英語ができない人がほとんどです。それでサウジ人の供述しか聞かないので、全面的に私が悪者になって、留置所に入れられたのです。私も悔しいから、会社の力を出してもらったあと、パレスティン人を連れて5日間警察に通って、「絶対におかしい」と繰り返し言って、それで信号が、ではどちらからどういうふうに赤から緑に変わったのかを現場で説明して、やっとフィフティー・フィフティーということになった。自分の車を直す手間はあったのですが、それだけで済んだ。そのようなことで、やはり言葉の問題というのも一つにはありますね。今の時代でも英語が全部通じるわけではない。シャリア法に従わなければいけないという場面というのは絶えずあります。たとえば白い薬を麻薬と間違えられて捕まってその場で処刑されたらどうしようとか、そのようなことまで心配しますよね。それが知らず知らずのうちに募っているんじゃないかと思います。そういうのがストレスになっている。

あと、先ほどのラジオの事件ですけれども、国外追放になったとのことですが。

長谷川 ちょっと定かではないのですが、少なくともウォーニング・レターが出ているはず。あと、私の同僚であまりに部下が文句を言うので、お

まえ、そんなこと言っているとまたラクダの生活に戻るぞ、と言ったところ、サウジ国民を侮辱したとってウォーニング・レターをもらったことがありました。つかかるとなるとそのようなことが言いたくなるのですが……。

では何かあると必ず役所にそのサウジの人は届け出る……。

長谷川 そうですよ。もう簡単に直訴しますからね。だって一般市民が国王にも直訴する制度がある国ですから、直訴というのはものすごいですよ。あれは恐いです。5人に1人とか、6人に1人とか秘密警察、宗教警察がいるといわれていますから、いつ訴えられるか分からないのですよ。こんな民主化時代に王制がそのまま残っていること自体不思議ですから、それだけ王族というのは神経を使っているんだと思います。内務省に一番優秀な人間を集めてるといっていることの意味があるんじゃないでしょうか。

そのウォーニング・レターというのは、たとえば10枚貯まると国外退去とか。

長谷川 それは、3枚で解雇できるというのがあります。

たとえばサウジ人の従業員がいろいろなミスをやって3枚貯まると、そのサウジ人を解雇することができる……。

長谷川 会社はその者を解雇できる。しかしルールではそういうのがあるのですが、それは労働省で発行している、公示されたものがあるのですが、しかしそれで裁判に掛けると外国企業は弱い。その通りにいかない。製油部でも一度最高裁まで行って負けました。首切れなかった。本当にやはり外国企業は弱いですね。

それでサウジ企業だったら、もっと厳正にやるんでしょうね。

長谷川 そうです。絶対そう思う……。

外国人などはどうなのですか、やはり何枚か貯まると退去。

長谷川 それはそうです。外国人になるとそのまま通ってしまうのですから……、やっぱり自国民をかばいますよ。「ルールがあってないようなものだ」というのは、そのようなところから我々は言っているのです。

次の項目ですけれども、欧米の石油企業と日本の石油企業の力量の比較ということで、とくに技術面、管理運営の能力というところですが……。

長谷川 先ほども話しましたが初期の頃というのは、全部アメリカの技術でやったと思うのです。たとえばカフジの油田のレイアウトとか、フロー・ステーションの決定、そこからギャザリングに集めてリンクする、ああいうシステムというのは、スタンダード・オイルからウォーカーさんというコンサルタントをうちの会社で雇って、その人のアドバイスによるか、ノウハウだったと思います。それからリグだって、インターナショナル・ドリリング・カンパニーとの契約ですし、恒久搬出施設だってマクダーモントにやってもらった訳です。日本は海底油田というのがだいたい経験がなかったし、これだけ大規模な油田の開発もしたことがなかったのだから、そういう意味で、外国の技術に頼らざるを得なかったと思うのです。ただ日本人なりに、そのあとの工夫というのはしてきたと思う。たとえば井戸のデュアル・コンプリーション(Dual Completion)とって……、井戸はケーシングとチュービングからなって、ここはパッカーというので覆って、ダイナマイトを使って、ここにパーフォレーションして、穴を開けて、それでこの層の油を吸い出すわけですけども、これを、あそこはたとえばカフジだと3層とか、4層の油の層があるのですが、このケーシングのほうにも穴を開けて、ケーシングからも生産する。これをデュアル・コンプリーションというのですが、これは日本人が考えたことじゃないかと思います。それから具体的に、私は話せないけれども、いろいろ細かいところで改良というのが得意なのです。だからこの部分は腐食が多いから、この部分は材質をこのように変えようとか、そういう工夫というのは日本人らしいということで、アイデアを出してきたのではないかなと思います。

日本もこれだけいろんな体験、経験をしてきているので、日本の技術だけで新潟沖とか秋田沖なんかの油の生産ができるようになってきたものですから、もう捨てたものではないと思います。

現在の日本企業とそのメジャーを比較した場合、大きく違うのは、探査能力ということでしょうか。

長谷川 いや、彼らは、メジャーというのは複数の鉱区を持っているので、複数の鉱区を持っているから、リターンをいつも頭に置いて有利なところに力を注げるといふものすごく有利な選択肢を持っているわけです。日本というのはごく限られた、メジャーが捨てたような鉱区でもって、細々とやっているわ

けだから、その選択肢がなく、そういう苦しみがある、という感じはある。だから資金的な面とそれから技術面というのはやはりまだかなわないのではないかと思います。

だいたい北海のあのような技術というのは、日本ではとても太刀打ちできないと思います。あれは何しろ水深が 300 メーターとか、そのようなもので、カフジは高々 40 メーターでしょう。櫓ひとつとっても 40 メーターと、これの 10 倍までいかないけれども、その櫓と比べたって大変なことですよ。ここの 30 年ストーム、設計の時によく使いますけれども、過去 30 年に起きた一番大きな数値を設計に使うかどうか、30 年ストームとか 50 年ストームといいますけれども、たとえばここのアラビア湾の波の高さは、30 年ストームといっても 3 メートルですから。北海は波高が 30 メーターです。これだけを見ても、その水深 300 何十メータープラスこの波高だけでも 10 倍違うわけでしょう。そのような強度とか、やはり日本がまだまだかなわないところがあるのです。ただ日本人らしい工夫で、それに近づこうとしている。

技術交流というようなことは行われていたのでしょうか。

長谷川 やってます。

じゃ、日本はたとえば北海油田を作ろうとした場合、特許料や使用料を払いさえすれば、それはできるということでしょうか。

長谷川 できると思いますよ。日本だってドーバー・トンネルを作る技術がある訳で、ひけをとるものではないと思います。

これはちょっと話が飛んでしまうのですが、イランのガス田の開発の場合、日本の独自技術だけですむのかな、という点に関心があるのですが...
....

長谷川 イランの原油開発ですか？

はい。

長谷川 大丈夫です。

最後の質問として、いま長谷川さんが関わっておられるプロジェクトと比較して、初期のアラビア石油の操業はどのように評価できるのでしょうか。

長谷川 ちょっとこの意味がよく分からないのですが.....

初めに、現在関わっておられるのが耐火レンガのプロジェクトとおっしゃっておられましたが、その際の、サウジ側のビジネスの立ち上げ方と、それからアラビア石油の初期の仕事の立ち上げ方と比較して、サウジ側がとくに大きく違っている点、このような言い方は非常に失礼かもしれないのですが、彼らが事業家としてどのような成長を遂げたかという点について、何かお気づきの点があれば……。

長谷川 GCC の中では、サウジがまあ中ではまともかな。何がまともかという点で、一応石油以外の産業も育てないといけないなという意識があるという点で、GCC の中ではまともかなと思います。それ以外の国は、私の知る限り、全部回っていますけれども、要するに彼らの関心というのは、採算に乗るか乗らないかだけなのです。要するにそれに投資する価値があるかないかだけを判断しているという感じです。だから産業を育てるという意識があるのは、私が思うにその GCC の中でサウジだけです。彼らだってそのような意識になったのは最近だと思います。それはなぜかという点、いまサウジは 19 歳以下が 57% です。クウェートが 19 歳以下が 53% です。イランが 51% ぐらいですけれども、とくにサウジは教育制度もだいぶ発達してきて、学卒者も増えるし、留学帰りも増えてきていますが、一方、石油関連産業以外の産業が伸びていないので、失業者が増える一方です。そのようなことで受け皿が欲しいというところにたどり着いたんだと思います。やっとその意識が出てきたのではないかと思います。外資導入を急ぐというのは、産業を育てるというような悠長なことをいっておれない、という考えが先になったのかもしれない。だいたい今度の外資法で 100% 外資を認めるということになっていますから、いかに真剣かということなのです。

しかし、そうはいっても、ではどのプランも許可するかという点、そうではなくて、結構厳しい目で見ると、今回私のプロジェクトも SIDF ではねられてしまったのです。昨年 2 月の終わりですけれども、それでいったん手を引いて、再チャレンジしようとしているのです。それは、われわれが目論んでいる生産量はサウジでさばけるわけがないという判断を下された訳です。彼ら SIDF の中でも、われわれのプロジェクト用の審査グループが 5 人ですかね、

チームを組んでくれて、その人たちが彼らなりに調査をして、その結果そういう結論が出されてしまったのです。

SIDF というのは。

長谷川 SIDF というのは、サウジ・インダストリアル・ディベロップメント・ファンド、サウジの国の融資機関です。これは中東の中で一番有利な融資でして、まず融資はドルでいうとマックス1億ドルまで融資する。またはプロジェクト・コストの50%を融資する。返済期間がマックス15年、これも長いのでありがたいです。それから銀行だったら金利が、たとえばクウェートのIBKですと年率5%です。それからサウジのコマーシャル・バンクだって7%~8%ぐらいを取られてしまうのですが、このSIDFですと、金利はなくて、一応手数料という名前になっていますけれども、それを融資時に頭のところで融資金額の3%払えばいいということです。あとは1年半から2年ぐらいの据え置きがあって、そのあと、実際に掛かる人件費を払っていけばよいのです。それをフォロー・アップ費用といっているのですが、それはプロジェクトごと、その都度金額が違うのでフィックスされていないです。われわれが計画を立てる上では3年目から、その費用として1%ずつをみています。SIDFの融資条件というのはそのようなものです。

生産量はサウジ国内でさばけないということだったのですが、輸出はできないのですか？

長谷川 いえ、輸出も考えていました。そのへんも含めて、われわれのプランが甘いと彼らは判断したのです。われわれは一応自信を持っていたので、まだわれわれのセールス・キャンペーンをする前に、何でそのような判断ができるのかと言いたいのですけれども、確かに現状では値段を叩くために、各社とも耐火物のサプライヤーを1社に絞っていないですよ。エンド・ユーザーはサプライヤーを絞っていない。競争させて安いところから買うという習慣がついているので、おまえがいくらサウジで作ったって100%買ってくれないぞ、というのです。それは事実かもしれない。それは販売努力でわれわれはやっていけると思うのです。いまほとんど全部ドイツから買っているのです。そのために輸送期間というのがすごく掛かるので、1年分近い在庫をみんながいつも持っているのです。在庫をかかえなくとも電話1本でわれわれはサプライでき

る訳だから、ユーザーにとってはすごく有利になるので、そのようなことがちゃんと彼らが分かれば、買ってくれるのではないか。

あとわれわれが望むのは、サウジが保護関税を付けてくれることを望むのです。GCCの中で唯一サウジだけがWTOに入っていないくて、もうじき入ることになっていますが、聞くところによると、保護関税というのを、発展途上国の特殊品には特別に認めているらしい。これがあるのとないのとでは大違いですから。そうしたらもちろんドイツ勢もダンピングすると思います。けれども、保護関税がたとえば12%や20%が付いたら、ドイツ勢はそんなに長持ちしないと思うのですよ。いくらダンピングができたとしても2年以上続けるというのは至難の技だと思います。こちらに勝ち目があるんじゃないかなと思うのです。

国、その他からこのプロジェクトに対して何かサポートはないのですか？

長谷川 何もありません。

何かあってもよさそうなものですが。

長谷川 ええ。

調査費用などはありますか。JETROのほうから支援はありますか。

長谷川 それはもう大変お世話になっていますよ。中東センターとこの間はJETROの予算を使わせていただきました。

JICAはあまり関係ないのですか？

長谷川 JICAは無い。

国際協力銀行からの支援がないのですか？

長谷川 ないです。

長谷川 してもらえるとありがたいけれどもね。だからあのようところで有利な条件でお金を貸してもらえれば、そちらのほうがいいですよ。それは交渉の余地があるのではないかと思います。そうしてもらいたいね。というのは、全投資の最大50%しかSIDFは出してくれませんから、あとは自己資本とコマーシャル・バンクでしょう。コマーシャル・バンク分は、たとえば25%があるとすれば、その分だけでも、日本で有利な融資をしてくれればいいなと……。

この3月に行ったときはホーフでトープを作っている……。

長谷川 トープは、丸紅がやっています。

会社自身は結局ほとんど支援していない。想像以上に大きな工場でしたね。

長谷川 あれは鍬入れ式に行きました。

一応好調のように聞いています。

6月だったと思うのですが、熊井さんからお電話をいただきまして、内覧会を開くところまでこぎつけたとのこと。非常に好評だったのですが、まだ売り値が決まなくて、事業がどこまでペイするかは分からない、ということでした。

執念で立ち上げたという感じがしました。

やはりサウジでこのような事業をおこなう場合には、現地で長期間そこに留まってずうっとやっていくという方が必要だというふうにお考えになりますか。

長谷川 ええ。必要ですね。彼らは時間の観念というのはあまりないのでずるずるいっちゃうのです。締める人がいないといくらでも時間が延びてしまうのです。絶対に要ります。だって官庁は朝9時ごろ来て1時に終わってしまう。1日4時間ぐらいしか働かない。それで木・金休んで、ラマダンといたら、ほとんど来なくて、終わればお祭りで一週間ぐらい休むし、夏なんて2ヶ月ぐらいは仕事にならない。だから本当に日本人が頑張らないと前に進まない。

欧米企業の場合、やはりそのあたりははっきりとその国がバックに立って全面的に応援する、という体制を作っているのでしょうか。

長谷川 よく分からないですね。私は、サウジで一番成功しているのはドイツだと思って、ドイツのことを調べたいと思っているんだけど、未だはっきりと把握していません。サウジではアメリカ以上にドイツが成功している。私が知っている範囲では、ドイツはホーフの灌漑をやったのです。それは1960年代初めごろで、その時にドイツはまず病院と小学校を作って、それから工事に入ったのです。そのような姿勢、これがすごい。それからメルセデス・ベンツがいまサウジで一番人気があります。2番目が日本のトヨタのレクサスですが、

そのメルセデスの売り込みにしても、メンテナンス・ショップをまず作るのです。そのような環境整備が日本人と違うのではないかと思う。そこは見習う必要があると思います。ドイツ人はやはり堅実だという気がします。ドイツの政府の施策体制、もし分かったら教えてください。私も調べたいと思っています。

はい。

長谷川 サギア(SAGIA)ができたので、総合投資院ですが、あれを私はこれから期待しているのですよ。あそこのジャパン・テーブルができるのです。そこへセンターの田中さんがテーブルに就く。ジャーマン・テーブルというものもあるらしいのです。ジャパンが2番目です。だから日本にも期待しているというのは、それで分かるわけです。

昨年の12月、投資院に行って長官にまで会いましたが、とにかく、リストでこれだけはダメというものを限ってそれについては融資しない、ということになったんです。武器関係とか、宗教関係とかのいくつか以外全部やれ、と期待している。本当にどこまで進めるか分からないですけど、とにかく本気ですね。

長谷川 本気です。

職場がなかったら大変なことになってしまう。

長谷川 そうそう。サギアはワン・ストップ・ショップといわれていて、全部の省庁から代表者を集めているから、手続きも簡潔になって、すぐに許可を出そうというシステムになっています。

商工会議所の方が日本によく来ていますね。

長谷川 オマールさん。オマール・バハライワ。

自由化しろというのは、サウジのビジネスマンの総意なんだ、コミッションを取るなんてことを言ってられない、とにかく外資にどんどん来てもらって仕事をしてもらわないと、自分達がジリ貧になってしまう、という言い方をしていますね。

長谷川 活性化しようと。

そういうことです。クウェートみたいに外資をまだあまり入れないですね。コミッションを取ろうとしているところは中東の中で特別ですね。

長谷川 いまフリー・トレード・ゾーンが方々にできている。しかし結局あそこで作ったものというのは、たとえばクウェートのフリー・トレード・ゾーンで作ったものはクウェート製ではないのです。だから日本製とまったく変わらないのです。だからあそこからクウェートに出す時には輸入税が掛かるのです。原料とか、建設資材は無税で入る。だけれどもジュベールで作ったって、申請すれば無税で入るのですから。それでジュベールで作れば、税金が掛からずに販売できるわけでしょう。ところがフリー・トレード・ゾーンからサウジに入れるときには、そこで関税が掛かるでしょう。だからあのようなところは流通部門とか、特別な部門だけではないかな、有利なのは。サービス部門とか……。

政府からの要請はきついだけれども、ビジネスの相手先としては欧米の企業と同様にやり取りできる企業が、もうサウジの中にできつつあるというふうに考えてよろしいでしょうか。

仕事がやりにくい分チャンスというか……。

長谷川 そう。サウジの会社のベンダーズ・リストに載るまでが大変です。ベンダーズ・リストに載っていったん納入すると、納入品をずうっと続けて使ってもらえるというのがありますね。だから新参者はいくら製品が良くても大変な努力・苦労がいるわけです。えらく保守的になってる。だからサウジにこれから入るのは輸入代替品がいいと思うのです。その意味でもわれわれのプロジェクトはいいのではないかなと思って、頑張りたいと思っています。どこまで国がそういう保護政策を取ってくれるか見ものなんだけど。産業を育てる意志があるならそうしてくれるんじゃないかと、期待しているのです。

この前サウジのマスコミの人たちが日本に呼ばれまして、そこで無理やり頼んで入れてもらって、いろいろ話す機会があったのですが、将来どのような産業がいいと思っているのかと聞いたら、みんな、口をそろえてITというのです。

長谷川 あその国は、まだIT関連の法の整備ができていないでしょう。苦労すると思いますよね。ITは宗教上の問題もあるし、あそこはちょっと時間が掛かるんじゃないかな。どうだろう。ITは確かに絶対伸びなくちゃいけない産業なんだけど。

IT が宗教上の問題と関係があるというのは、どのようなことでしょうか。

長谷川 たとえばインターネットにしたってやっと認められた。この2年ぐらい前でしょうか。あそこは、パラボラ・アンテナはだいたい公には認めていない。みんなもぐりで買ってしまっているから、暗黙の了解という感じですが、宗教上は認めていないです。

有害というのですか？

長谷川 ええ。

.....それでは、どうも長い間ありがとうございました。

長谷川 何か取り留めのない話になりました。

<了>

筆者紹介



長谷川 捷一（はせがわ しょういち）

元アラビア石油株式会社社員

1961年 アラビア石油（株）入社。

1962年～1966年 カフジ製油所建設計画企業化調査、建設計画、詳細設計設計、カフジ製油所用塔槽類の検査に従事。

1966年～1975年 アラビア鉱業所、製油部で生産・管理・教育・改造に従事。

1983年～1988年 アラビア鉱業所で操業監理。

1988年～1991年 クウェート事務所。湾岸

戦争でイラク軍により拘束される。

1991年～1998年 教育マニュアル、アラビア
鉱業所操業改善マスター・プラン、
対サウジ投資計画の企業化調査に
従事。

1998年 アラビア石油退職後、日本・サウジ
合弁企業設立に従事。

資料
説明図
(長谷川 捷一氏
による)